
山岳
第一年
第三號
山岳會

山岳

第一年
第三號

本號目次

（明治三十九年十一月三日發行）

○圖版

○赤石山の絶巓　○地藏岳より鳳凰山を望む　○鳳凰山中御室の舊景　○梓川に臨める燒岳　○白馬尻より白馬岳を望む　○杓子中腹より白馬岳及乘鞍岳を望む　○八ヶ嶽の小天狗

○本欄

日本アルプスの卷

			頁
駿州田代山奥横斷記		荻野音松	三
甲州鳳凰山と地藏岳	工學士	辻本滿丸	一八
燕岳及大天井		志村烏嶺	二九
德本峠と槍ヶ岳		河郁白水	三六
笠ヶ岳燒岳穗高岳紀行		林並木	四六
白馬籠城記（承前）		河田默	六二
		武田久吉	
高山植物の學術的研究	理學博士	三好學	七一
湖沼研究の一例としての箱根蘆の湖		田中阿歌麿	七五
中越探山紀行		大平晟	八八
苗場山紀行		桑原源一	一〇六

新高山紀行　尾崎白水　一一二
初登山（岩鷲登山記）　野口幽香子　一二二

○雜　錄　自一三二 至一七一

○余の日本アルプス登山談（小島烏水）　○日本アルプスと其登路に就きて（高頭式）　○日本アルプスに一萬尺以上の高峰果して幾座かある（式）　○富士登山と明石女子師範學校職員の責任（城數馬）　○富士山表口新道案内（靄溪子）　○高天ヶ原の入浴（大平生）　○日本一の三大瀑布（大平）　○八ヶ嶽の登路（城）　○八ヶ岳小荒間口に就て（辻本）　○大江山登山記（佐武正一）　○高山植物研究の材料（U、K）　The alpine Journal（T、T、）　自一七二 至一七七

○雜　報

○富士登山の新道　○富士山下の本栖湖及白絲瀧乾涸せんとす　○新高山一部の大森林伐らる　○阿蘇の新噴火口　○五百城文哉氏の逝去　○雪先づ白し高山の一角　○白馬山通信　○本年の登山凍死者　○赤石登山會　○書東一則

○會　報　自一七八 至一八五

○山岳熱漸く高からんとす　○本會と文學家諸氏　○本會規則第四條　○會費と會員名簿　○會員の本年登山報　○本年の白馬山と佐藤工學士の厚意　○本號所載圖版　○お知らせ　○本會への寄贈書籍　○會員訃音　○會員氏名

○附　錄

日本山嶽志第一增補



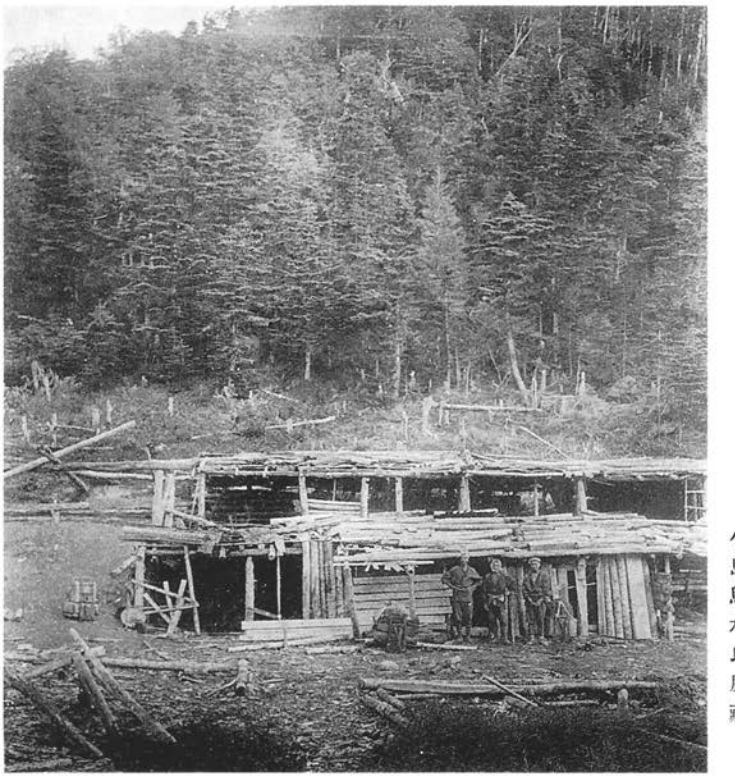
赤石山絶巓

河野齢藏氏撮影



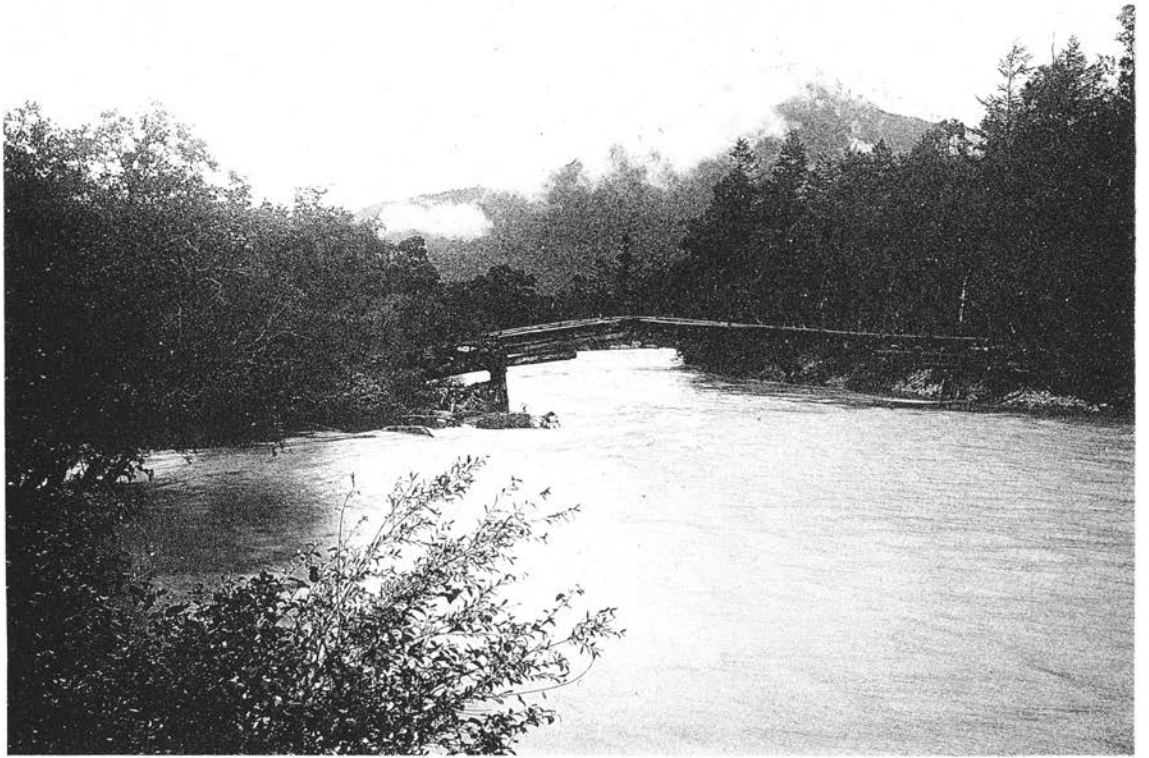
城數馬氏所藏

地藏岳より鳳凰山を望む



小島烏水氏所藏

鳳凰山中御室の舊景



河野齢蔵氏撮影

梓川に臨める焼岳



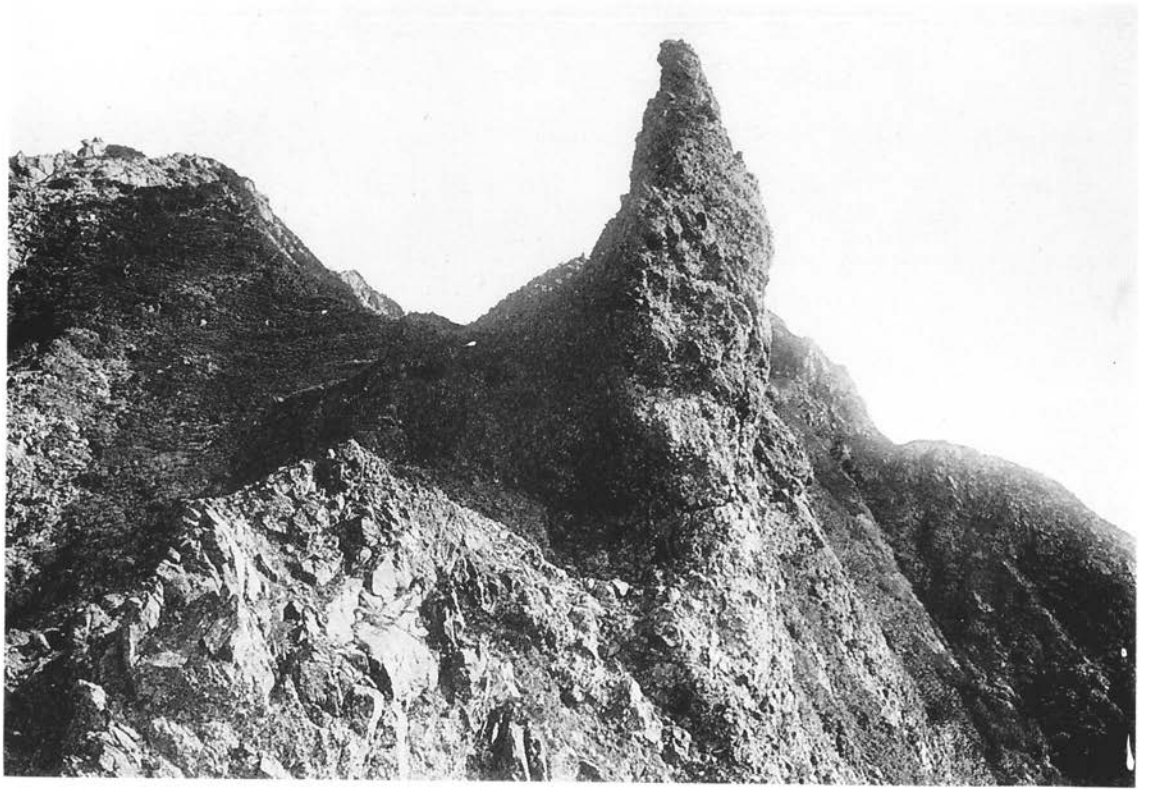
白馬尻より白馬岳を望む

工學士　佐藤通氏寄贈



河野齢蔵氏撮影

杓子中腹より白馬岳を望む

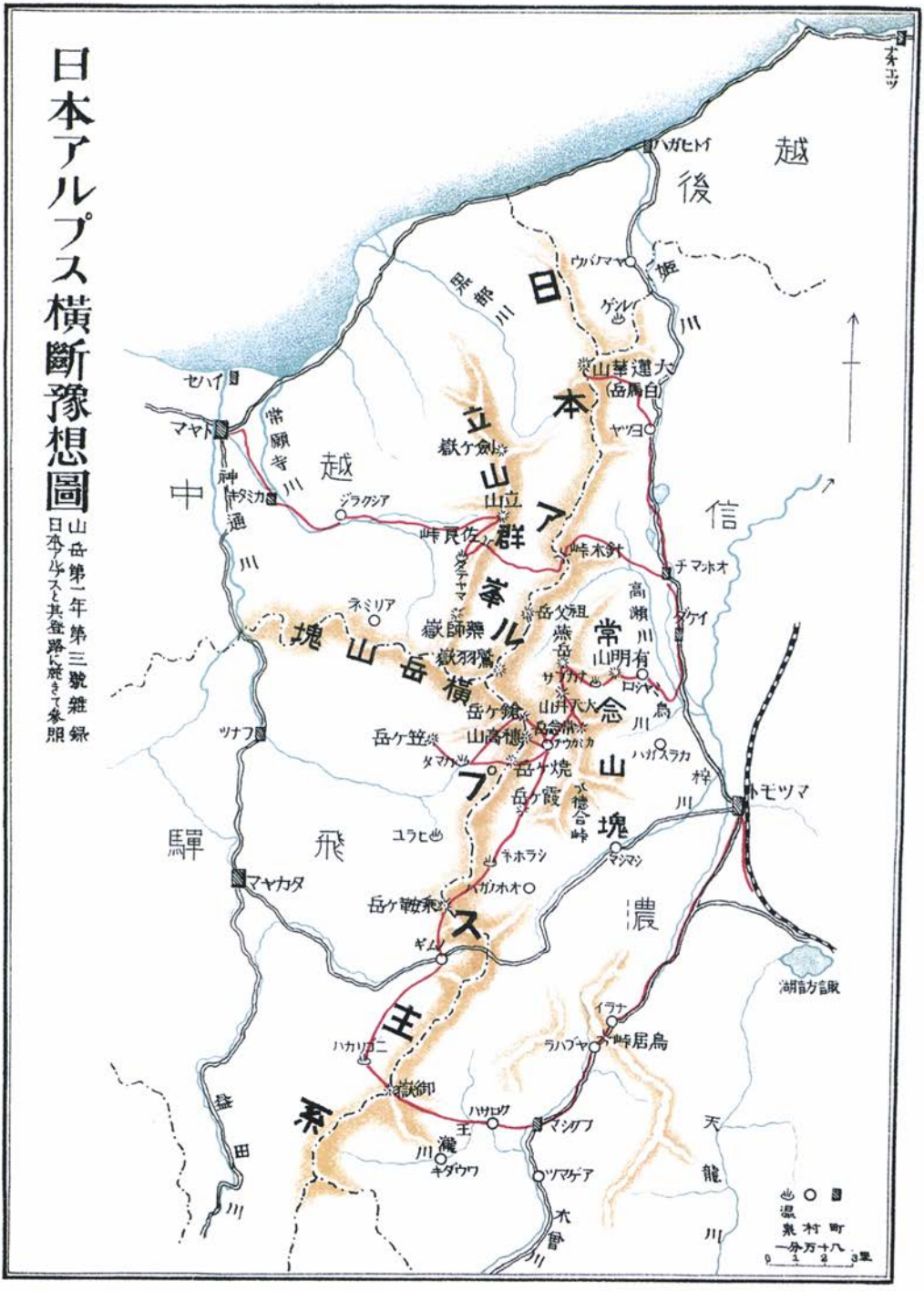


河野齢蔵氏撮影

八ヶ岳の小天狗

日本アルプス横斷豫想圖

山岳第一年第三號雜録
日本アルプスと其登路に就きて參照





日本アルプスの巻

（禁轉載）

日本アルプスの壯美

'These wild fastnesses have hitherto been "a charmed circle within a charmed circle" isolated by Nature almost as much as the whole country was formerly isolated by man. And yet nowhere within the whole bounds of the Empire can we find so great a variety of nature's beauties, for though the peaks bear no glaciers on their sides, nothing is wanted, from the richness of sub-tropical vegitation to almost Alpine snows. When the dark come of Fuji has laid aside its white mantle, many of these great granite giants of the "Hida Range" still retain the glittering slopes of snow upon their sides.'

Rev. W. Weston.

『「日本のアルプス山」は、越後越中の境上より、飛驒信濃の間に延緣せる、日本本島の中央に盤蜿せる、大山塊にして、南北三十五里、東西二十里、花崗岩帶と、片麻岩帶との間に、劈入せる火山岩帶を合せ、三岩帶の錯交する處、日本國中の眞成なる「深山幽谷」をなし、「石劍巖靑」の四字は、實に此の區域を代表せり、夏季の間には、山中温泉の沸する處に、人を見ることありと雖も、其他の季節には、遂に人間に會せず、夏間と雖も、人を見ざること時に半箇月に涉ることあり、……宛如たる彼のアルプスの景象なり、しかも彼の俗了せるアルプスが、到底此のアルプスに及ばざる所は、原人時代の景象なり。』

志賀矧川

駿州田代山奥横斷記

荻野音松

東海第一の險流たる大井川の祖をなせる田代川の水源發する所、駿州の地深く甲信兩國の間に突入し、信界赤石の雄峯と甲境白峯の峻嶺とが脊中合せに聳えし邊は、誠に山又山、谷又谷の奥深く、人寰遠く脫したる靈域にして、當に夫の信、飛、越境上崇嶽險山相萃まる間黒部川上流一帶の地と南北相對して、中央大山系の二大絶境と稱すべし。而も黒部川上流の地は東西十里南北二十里立山溫泉浴屋の外、人家を見ざる深山幽谷として夙に世に著はれ、之を横斷する針の木峠越えも亦帝國無二の險路として人口に膾炙せる所なるに係らず、此の駿州田代川上流一帶、余の所謂田代山奥に至りては、其の餘りに僻陬にして、而も附近に登客の足繁き名山を有せず(赤石、白峯漸く登山家の目標たらんとするも登者尙甚稀)隨て未だ多く世人の注意を惹く所とならず、余の鮮聞寡見なる、未だ曾て之を横絶したるものあるを聞かざるは勿論、之に關し何等記述せしものあるを知らざるなり。余も初め此の地の山谷其の餘りに深幽なるに所詮之を通過する道等あるべしとも思はず、之が横斷等未だ中々考へ及ばざりしに、曾て高頭式氏の日本山嶽志を繙き其の六百六十九頁、小島烏水氏が赤石山に就て增補せる記文中「上略、是より大河原よりの登山道を詳記せむ、村より小澁川の右岸に沿ふこと約二十町にして上藏(ウワゾ)に到る(こゝより峰傳ひにて、甲州切石を經、鰍澤方面に行く間道ありと云ふ)是より爪先上りとなり、下略」とあるを見るに及び駭目して以爲らく、此處に亦道ありしかと。嗚呼此の六號活字一行有餘の單簡なる注意こそ、余をして此の秘密藏を開くに至らしめし鍵鑰とはなりしなれ。即ち地圖を檢するに、農商務省地質調査所二十萬分一地形圖富士圖幅によるに、甲州南巨摩郡新倉の北方より一細逕の西北に分枝せるあり、道半ばにして富士圖幅は盡き即ち甲府圖幅を見るに、甲府圖幅には此の道の續き記載なし、されど恰も其の方向に當りて甲駿境上「デンック」嶺(一八四〇米突)なるもの〻記されしを見る。仍て按ずるに信州上藏より甲州に至る間道とは、即ち此のデンック嶺を越えて新倉に出づるにあらざるなきかと、玆に大體の道順を

想像する事を得て遊意鬱勃として湧き遂に本年(明治三十九年)夏期登山行の番組中に田代山奥横斷を加ふるには至りたり。

八月二十二日東京出發、余は先づ關東山系第一の高嶺たる國司嶽に志し、飯田町より瀧車にて甲州鹽山に至り、夫れより秩父往還に當れる川浦温泉に赴き、之れより國司嶽を征して目的を達す。國司嶽より峯傳ひに奥仙丈山を經て金峰山巓を窮め、二十七日御嶽に下山す。二十九日御嶽を發し新道を取り甲府に出で、馬車にて鰍澤に至る。余の最初の計畫は之れより白峯に上り、然る後田代山奥を横斷し、最後に赤石を窮めんとするにありて、先づ鰍澤より西七里を隔てたる西山村湯島温泉に赴かんと定めたり。

三十日、鰍澤の旅舍粉奈屋を發し湯島に向ふ。鰍澤より西一里にして日蓮宗の一名刹妙法寺(小室山と稱す)を過ぎ、之より峠にかゝり、森林を穿ちやがて矢川の部落を過ぐれば道愈上る。此の日鰍澤の出發遲かりし爲時正に亭午、樹林盡きて烈日直射し甚暑熱に苦しみつゝ、午後一時半漸く峠を上りつむれば一茶店あり、俚稱「デチョウ」の茶屋と云ひ、名物栗の水飴等を鬻げり。東望すれば甲府の平原遠く展開し、脚下鰍澤の人家櫛比するを俯瞰し、天半巍然たる富嶽を仰ぎ風景甚長閑なれども、西を望めば氣味惡き山々相重疊して境漸く幽ならんとす、余の客路は其の中にあり。鰍澤より此處迄三里位に過ぎざれ共、本日余は心身の疲憊極めて甚しく、之れより湯島温泉迄四里にして人家全くなしと云ふに、日沒迄に温泉迄行き得べきやを氣遣ひ、遂に茶店に賴みて此の日は此に一泊する事となりき。翌三十一日、午前七時半茶店を發す。山仕事の人夫や湯島温泉歸りの浴客に會ふ事多し。谷を巡り山を越え細逕足指尙仰ぎつゝ、茶店より二里許りにして一嶺上に達すれば、眼界稍開けて西南に危峰磊々たる一雄嶺を望み、風色漸く豪壯荒凉たり。此處にて道二に分れ何れを取るも可なる趣にて、余は左を取りしが之は元來下湯島道なれば温泉に行くには迂路なりしやも知れず。之れより路はひた下りに下る。溪聲漸く近づきて道又二に分れ左は下湯島に通ず、即ち右を取りて行けばやがて早川の流れを脚下千仞の谷底に望み、其の左岸下湯島一簇の人家を俯瞰す。之れより早川を左に見て進めばやがて川の對岸に上湯島の部落を望む。尙行く事暫らくにして午後一時半湯島温泉に達したり。

此の時余は白峯登山に意ありたれば温泉には立寄らず、更に北一里にして奈良田に至りぬ。然るに奈良田の思ひの外なる見るもいぶせき寒村にて、木賃宿の看板掲げし家は數軒あれども、之は木材切出し等の爲入込みし人夫等が普通の民家に止宿せる其の百姓家が、無鑑札にてはと申譯に看板掲げし迄にて所詮宿屋と稱し得べきものにあらざるに、余は先づ少なからず閉口せり。而も飜て考ふるに暑中休暇は最早十日許りを剩すのみ、此の間に白峰に上り田代山奥を横斷し赤石山迄を窮めんとは、餘りに欲深き希望到底不可能の事と悟り、遂に本年は白峰登山を放棄し之れより直ちに田代山奥横斷に向ふ事に決心するに至りたり。さらば奈良田等に用はなしと引返して湯島温泉に宿る。

九月一日、二日天氣定まらず時に雨降り、且余は頃日來元氣甚振はず暫時靜養を欲し、兩日温泉に滯留す。温泉場は早川に注ぐ一溪間にありて風色甚雅閑なり。新湯、舊湯の二浴舍と、浴客の需めに應じて蕎麥等を調進する店一あるのみ、浴舍は三階作りにして規模相當に大きく、風趣總て乘鞍嶽麓白骨温泉に似て稍劣る如し。余は新湯に湯せしが之は蓬萊湯と稱し舊湯より二町許りの上にあり、温泉は新舊各別の湯口を擁し、温度は少し低けれども火力を加ふる程にもあらず、此の地は甲州西部の名湯にて夏期浴客群集し、三四日前迄は浴客充滿室に溢れしも、今恰も舊盆に際し浴客多く家に歸り、余は一人にて悠々眺望に富める一室を占領する事を得甚幸福なりき。此の地郵便箱は舊湯の入口にあり(奈良田には郵便箱もなし)郵便局は南五里許なる保(ホウ)にありて、保に至る迄は又旅店なしと云ふ、旅店の設備少なきは此の邊の山谷に分け入るもの〻先づ苦しむ所ならん。

さて余は愈之れより田代山奥を横斷して信州へ出でんとしたれども、此の道を想像する唯一の根據として、余は只前記小島氏の一行餘りの記文と農商務省二十萬分一地圖とを有するのみ、果して之れが實際行き得るものなりや否や此れ迄人にも尋ねしも所詮知るもの絶てなく、更に探檢の手掛りを得ず茫然適く所を知らざりしが、會此の新湯の若主人に尋ねしに、此南一里の下湯島に大村晃中と云ふ獵夫あり、外人の白峰農鳥山等に來るものある時は彼を導き雇ふを例とす、信州越の行き得るや否やも此の男にてもなければ外に謀るべきものなしと云ふ。余は漸く暗中一點光を認め得し心地し、即ち二日の朝郵便脚夫の來りしを捕へ、宿屋より之に手紙

を托し大村晃平を呼び寄せたり。やがて午後晃平は來りぬ、即ち之を余の室に引きて尋ねしに果然彼は道を知り居り、早速導に任すべきを諾し成算此に確立せり。晃平の外下湯島には尚中村宗平と云へる獵夫あり、新倉には又望月萬右衛門とか云へるものありて、共に此の邊の山谷に詳委し、甲州より田代山奥横斷の導に任じ得るものは僅か此二三人に過ぎずと云ふ。晃平の語る所によれば、此の田代山奥を横斷する路は、明治七八年の頃、如何なる目的を以てしたるものか、信州大河原の澤戸龜作と云へるもの主唱となり開鑿したるものなりしが、後一回の修繕をも加へざりしより忽ち荒廢に歸し往來全く絶えしなりと云ふ。夫の針の木峠越えの道は明治九年の新開に係る、中央大山系二大絶境の横貫路が偶然殆ど同時に開かれたる、豈又奇ならずや。晃平又說明して、新開當時の道は即ちデンック峠を越て新倉（アラクラ）に出づるものなりしが、デンック峠は今荒廢甚しく通行すべからず、夫れよりは我下湯島より新澤峠（シンザハ）（當字）と云ふを過ぎ行くもの路甚よし、信州大河原迄は路程十六七里位ならんか、正に三日を要し途中二回も野臥せざるべからざれども共に小屋はありと語る。さて日當は幾許を望むやと云へば、歸村に要する日數をも加へ一日六十錢を賜りたし、但荷物は自分一人にて擔ふは甚難儀なれば荷持は別に一人雇はれたしと云ふ。仍て余は余の荷物汝の負ふべきもの只風呂敷包一個重量五六百匁のみ、之に野臥準備品を加ふるも總量四五貫目には上るまじ、汝一人にて持ち行かずやと交涉し、遂に一日一圓の日當を拂ひて晃平一人にて行く事に談判纏り、明日天氣よければ晃平より迎のものを寄越す事とし、晃平は歸りぬ。

三日、朝曇りしがやがて空模樣よく、大村晃平の悴迎に來りしより即ち出發に決し、食料其の他の必要品は温泉場にて買ひ求め、之れ等を晃平の悴に持たせ、八時半温泉を發す。余は黑飛白の單衣を着し雜嚢を肩に掛け、着莫産を纏ひ、麥稈帽子を戴き蝙蝠傘を携へたる等、登山旅行に似合しからぬ扮裝なり。斯くて温泉より曩日來りし道を少しく戻り、右に分れて早川の岸に下りやがて針金の釣橋を渡り川の右岸に沿ふて行く（左岸を行く道もあり）。之れより上湯島を經、村立尋常小學校の前を過ぎ、再び早川を渡れば即ち下湯島なり。人家中々多く家造りも一寸小奇麗なり。九時四十分大村晃平の家に至り、さて鍋、毛布等は晃平をして用意せしめ、

斯くて準備成りて十時十分出發、愈田代山奥横斷の途に上る。

下湯島より直ちに一危橋によりて早川を渡る。之れより西に當り屏風の如く連り立てる峯嶺の絶頂目かけてひた上りに上るなり。初めは粟畑等ありしがやがて樹林となる。恰も山上黑雲冥濛將に夕立の來らんとする狀を現したるに大に逡巡し、一旦下湯島へ引返さんとしたる程なりしも、幸にして空模樣は漸く恢復せり。斯くて早川に入る一小溪、澤河原（當字）と云へるを超て其の右岸に出で、之れより坂路甚急、曲折幾十回、幾度か路傍に休み徐かに行を續けしが、やがて山腹一帶蕎麥の花白く咲ける所を過ぎ、又樹林に入り、十一時一小祠のある所に達す、此の邊を蜻蛉尾根（當字）と稱す。晃平の悴荷物を負ひ之れ迄送り來りしが此處にて辭し別れて歸る。之れより晃平自ら荷物を背負ふて行く、彼は又小さけれども黑く逞しき一疋の獲犬を携えたり。已にして澤河原の溪の上方に出で又樹林を穿ちて上り行く、會南方に上部雲に蔽はれたる一高嶺を望みしが晃平は之れ七面山なりと云へり。斯くして午後一時半坂路を上りつめ、眼界濶然として北に開けし處に出づ、早川の上流蜿蜒として群巒相迫れる間を貫けるを望見し思はず快哉を叫ばしめたり。之れより木材運搬の爲に造られし道を取りて行く、道巾四五尺にして薪の如き木を二三尺措き位に鐵道の枕木の如く敷設せり、之は木馬とて橇の如く梯子の如き形したるものに木材を四尺程に切りたるを積み載せ、此の上を曳き下すなりと云ふ。此の道を行く事數町にしてカザハナと云へる所に達し、水もあるに即ち此處に辨當を喫す。此の地下湯島より一里半か二里位ならん、東方富嶽を望み風光稍佳なり。但し此の日天氣晴曇定まらず常に天を睨んで喜憂交々至る、蓋し日本内地の深山窮谷猛獸の害の如き殆ど之を度外視して可、恐るゝ所は只天候あるのみ。

此の邊は昨年中製紙原料の木材を切出す爲三四百人の人夫入り込み、其の宿泊用の爲數多の小屋建てられたり、されど今は已に工を已め小屋も荒廢に歸せり。但尙極めて少數の人夫は殘り居り本日舊盆の事とて湯島温泉等へ遊びに行くものと此れ迄二三回會したるが、之れより先は信州に出づる迄亦人間に遇はず。

二時二十分カザハナを發す、此の邊一帶の森林木の數が六萬本位ありとかにて六萬平と呼ぶに至りし由なるが、今は樹木已に多く伐採せられて滿目荒凉を極む。此の間を上る事二三十分にして嶺上に達す、さては白峯

山脈の絶頂に達せしかと喜びしが、白峰山脈は尚遙か彼方に連りて此處は其の前壁たるに過ぎざるに大に失望せり。之れより道南に轉じ右に早川の一支流たるナメラ河内とか云へる深谷を俯瞰しつゝ、所謂木馬(キウマ)道を取りて行く事暫時、新澤(シンサハ)(當字)と呼ぶ小溪の上に出づ、此處にも荒廢無人の小屋を見る。之れより斧鉞未だ入らざる森林に入り、急峻なる山側を上り遂に東西に通せる一山背に達す時に三時四十分なり。(此の東方の一高地に參謀本部の三角測量櫓ありて眺望よしと聞きしが、前途を急ぎ且恰も雲霧ありしより探らざりき)此處は白峰山脈より派出せる一支嶺にして新澤(シンサハ)尾根と呼ぶ。之れより尾根を傳ひ森林を穿ちて西行す、此の邊は即ち下湯島より田代川上流に超ゆる峠の絶頂にして即ち新澤峠なり、デンック峠の北に位し、デンック峠は地圖に千八百四十米突と記載せるが、此の新澤峠も大抵同じ位の高さなるべし。斯くて四時十五分尾根盡きて道は將に大に下らんとす、此處こそ即ち甲駿の國境にして白峰山脈の本嶺南北に貫通する所、カザハナを距る一里又は一里半位ならん。樹間より窺ふに脚下の谷底幽かに響をなせるは即ち田代川の上溪にして、谷の彼方天柱稜々として高く雲表に聳えしは即ち赤石山脈の一嶺(晃平は千枚澤の岳とか云へり)なり。寂莫太古の如き田代山奥一帶の非人寰區は即ち眼前に迫れるなり。今や余は足一歩を此の絶境に踏み入れて意氣大に昂れり。

之れより谷底目がけて道急峻削るが如し、膝の關節痛めつゝひた下りに下れば(途中水を得)やがて右に千仞の一深壑を俯瞰す、之をザカ澤と云ふ。前方赤石山脈の連峭は愈高く天を刺し、時は五時を過ぎたる許りなれども日は將に山の端に隱れんとす。斯くて大に道を急ぎ溪聲次第に近づき、遂に坂路下り盡して五時二十分ザカ澤を渡る、夫の新倉よりデンック峠を越ゆるの道は此處にて相合するなりと云ふ。此れより路甚荒廢し草木茂りて路を埋めしを押し分け掻き分け、又ザカ澤を渡る事二回にして其の右岸にある小屋に達す時に五時四十五分、今夜は此處に泊する事とす。此の小屋はザカ澤の小屋と稱し新澤峠より亦一里か一里半位ならん、湯島温泉より丁度一日程なり。新倉よりデンック峠を越ゆる道果して爾く荒廢せるや否やは知らざれども、兎に角此の新澤峠には立派に道あり、要するに本日の所は尚易々たり明日が最も難險を極むべしと戒心を怠らざりき。

ザカ澤は之れより半町許りにして、北方白峯の方に發源せる東股川(ヒガシマタカハ)(當字)に入り、東股川は更に南走する事

一里許にして、赤石山脈中の一峯、間ノ岳（アヒ）の南方に發源せる西股川（ニシマタガハ）（當字）と合し、此に田代川となり下流は遂に大井川となる。而して間ノ岳は此の東股、西股兩川の間に一山脈を派出し兩川合流點に盡く、當に間ノ（アヒ）山脈と稱すべし。此に疑問なるは東股、西股何れを田代川の本流となすべきかにあり（水量は西股の方大なり）。參謀本部二十萬分一圖は此の行始めより全然用をなさゞりしが、比較的最も精確なる農商務省二十萬分一圖も此に及んで亦爲す無きに至れり。

斯くて余等はザカ澤の小屋に宿泊の準備を始めしが、晃平は燃材を求むべく出で行き、其の間に余は其處等に殘れる木を集めて焚火をなすべく命ぜられぬ。從來野臥の經驗は幾度もありしも焚火の役等は常に人夫之に任し余は拱手傍觀したるのみ、今燐寸を握りて火を作らんとするに中々燃えつかず、好みて斯る深山の探檢を企つる程のものが、焚火一つ出來ぬとありては末代の恥辱と余は冷汗背を濕し、經營慘憺火の纔かに燃え上りし時晃平は歸り來り、危く油を取らるゝ所なりき。此の地峻嶺四圍に近く恰も甕の底にあるが如く、小屋は一間半四方許りにして屋根は板にて葺き、枯枝等を蔽ひて壁とせり、床は張りてなく藁等を敷く、晃平等が年々獵等に來りて泊するものにて多少の器物も具へあり、通り一遍の輩に荒らされ居らざれば居心甚よし。此の夜少しく雨ありしも忽ち已む、晃平をして携へしめし薄き一枚の毛布にくるまりて寢に就きしが、寒氣甚しくして殆と眠る能はざりき。

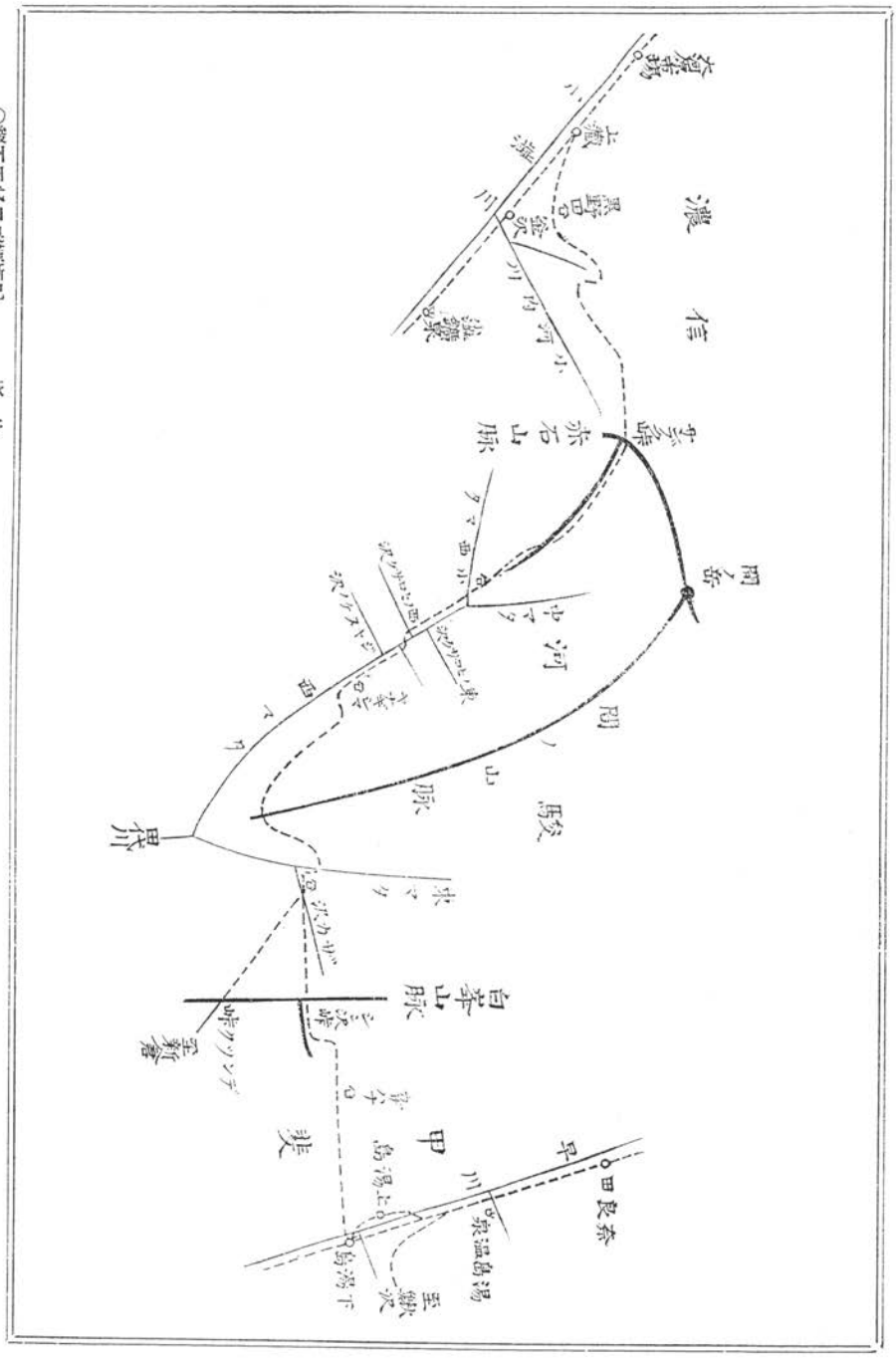
四日、纔かにまどろみし夢覺めて、頭を擡げ屋外を見れば月皎々と窓底を照し風光凄凉を極む。午前五時起き出でやがて朝餐を濟し、六時四十五分小屋を發す。一天拭ふが如く晴れたれども、昨日の空模樣に比し天氣餘り善過ぎて却て薄氣味惡かりき。

ザカ澤に沿ひて下る東股の河原連れる所に出で、川に沿ひて上る事町許にして東股を徒渉す、河巾七八間深さは膝の上に及ぶ許りなりしが、朝尚早ければ寒流氷の如く殆ど兩脚の感覺を失はんとする程なりき。晃平の携へたる獵犬は河岸を行きつ戻りつためらひしが、やがて河中に飛び入り流され流れて渡り來しは甚しほらしき見物なりき。更に河に沿うて上る事二町許、之れより河岸を離れて西なる間ノ山脈に分け上る。新澤峠を超

えてザカ澤の小屋に至る迄の道は、獵夫等の往來の爲古來存せし由なるが、ザカ澤以西は夫の明治七八年頃始めて新開せられ今荒廢に歸したるものなり。但し道は今只細く雜草の生ひ茂れる迄にして、熊笹や荊棘(イバラ)の道を埋むるものあるにあらざれば左程には苦しまず、只薊(アザミ)の葉端鋭鋒を尖らして要撃するに會ふ事甚多し、即ち着莫蓙を前に廻して楯に代用し之を押し退け進み行く。一帶樹林欝葱眺望なく、僅かに折々樹間より山高く連り、谷深く通せるを望むのみ。斯くて道は稍南に向ひ間ノ山脈の東腹を穿ちて上りしが、ザカ澤の小屋より一里許にして道上り盡し、山脈盡くる所を巡る、時に八時半。之れより路は間ノ山脈の西腹を穿ちて稍北に向ふ、左方千仞の脚下には即ち潺湲たる西股の溪聲を聞き、路は或は立派にある所もあれば又甚荒廢せる所もあり、已に上りはなきも路凸凸、徐かに歩を進めたり。會樹間より谷を越て赤石山脈中に赤く禿げたる一雄峯を望む、此の山何と云ふと晃平に問へば、此の山より出づる溪流の西股に注ぐもの甚險惡なれば之を惡澤(ワルサハ)と呼び、此の山即ち惡澤岳と云ふなりと答へしは、頗る口から出任せの言草に似たり。總て此の邊の山名、河名、地名等何等徽すべき圖書あるなく、之を知る人とても更になく、余は只大村晃平一人より聞くが儘に此に記したれど、或は誤謬もあるべく、又別に定まりたる稱呼なく各自勝手の名を附せるもあるべし。

九時十分一地點に休憩す。晃平曰く之れより暫らく行けば西股左岸にある柳島(ヤナギシマ)(當字)の小屋と云へる岩窟に出づるなるが、此處に至るに道二筋あり。一は之れより尚山腹を穿ちて進み柳島の二三町手前にて西股河岸に下るもの、一は之れより直ちに西股河岸に下り河原に沿うて行くものなり。山腹道を取らんか、之れより先は路荒廢甚しく荊棘茂れる等の難もあらん、而も河原道を取るとすれば、柳島迄に川を徒渉する事四回許、其の內二回程は兩岸迫り峙ち水亦頗る深き所を越えざるべからず、何れを取るべきかと余の選擇に一任せり。余は暫らく沈吟したりしが遂に山腹道を取るに決す、蓋し余は激流徒渉の初經驗、曾て針の木峠を越えし折、黑部川徒渉の際急湍に足奪はれて中流に顚倒したる事あり、爾來怖氣づきたりと云ふ譯にはあらざれども、常に激流徒渉の難を思へるなりき。

斯くて山腹道を取りて行を續けたりしが、果然之れよりは道荒廢甚しく(此の邊水を得)やがて山崩れ缺け大



○駿河田代山奥横斷記　荻野

岩小石磊々として所謂石の瀧とも云ふ樣なる所を横過す、之を大ナギと稱す。之れより路最も險惡を極め、即ち山、西股川に臨みて多く懸崖をなせるを穿ち行くものにて、前後幾回となく棧道を架す、而も其の棧道已に腐朽して用をなさゞるものあり、即ち危き崖腹木の根岩角に縋り纔かに之を横過するが如き所少なからず、且草木茂りて道を塞ぎ跋渉の難危云ふ可らず蓋し田代山奥横斷中第一の難所と稱すべし。思ふに此の邊道は年々荒廢に歸する事甚しく、昨年はありし棧道の本年は已に落ちて渡るべからざるが如きあり、後には遂に通行する能はざるに至る事あるべく然る時は危險なる激湍徒渉の難ありとも河原道を取らざるを得ざるに至るべし。斯くて十一時、此れより先は山腹道は到底進むべからずと云ふに至り、即ち山側を直下して西股川の河原に下る。

西股の流れは川巾七八間、河原は此の邊廣さ一町以上に連り、今迄陰鬱なる樹林のみを穿ちし身は、此に至り眼界濶然として心氣爽快を覺えたり。此の邊は即ち田代山奥絶境の中心にして、濶底にありては嵯峨天に冲する赤石山脈や白峯山脈は近き支峯に遮られて眼眸に入らず、來て見れば別段變りし風景と云ふにはあらざれども、流石に天地閑として何となく人間界を脱せる幽玄の氣象身に迫るを覺ゆ。思ふに雄大の眺望豪宕の景趣は之を高山の頂に求むべし、而も廓寥神代の如き幽靜の風象に至りては之を絶谷の濶底に求めざるべからず。

此の時晃平は携へたる釣竿を川に垂れ、余は分れて先に行き河原を辿る事二町許にして柳島の岩小屋に達す、時に十一時半、ザカ澤の小屋より三里位ならんか。此の小屋は西股川左岸にあり、一枚岩の自然に抉れて棚の如くなりしもの、口は枯枝等にて蔽ひ内には三疊敷許りの平地あり、完全なる岩窟にして如何なる大雨にも驚くまじく見えたるが、此處は進むにも退くにも難場あれば此の地に泊するは安心ならざるべし。やがて晃平は岩魚(イハナ)五尾を得て來着せり。余は復焚火の役に當りしが今度は忽ち燃しつけ、焚火學一年級は修業し得たりと誇る。斯くて獲たる岩魚を鹽燒とし米を炊ぎて晝餐す、山中の美味之に過ぐるものなし。

一時十分岩小屋を發す。之れより又河原の亂石を傳ふて進めば、やがて左に深刻なる一溪谷あり、口元暗く奥の方却て明るく、見るからに物凄しく名づけて蛇抜(ジヤヌク)の澤と云ふ、何さま大蛇等の抜け出でし跡が谷となりた

りと云ひそうなる所なり。又行けば右に一小溪あり、之をマサゴ澤と稱し、新開當時の道路は此處迄山腹を穿ちて來り此處にて河原に下りたるなりと云ふ。之れより少しく上流に於て西股川を渡りて其の右岸に出づ、水深膕に及びて稍徒渉に苦しみたり。尚河原を行けば左に又蛇抜の澤に似たる一深溪に會す、之を西の廣作澤（ヒロサク）（當字）と云ひ之れより北に見ゆる東の廣作澤と相對す。此の西の廣作澤は一昨年の事とか、溪水氾濫して夥しく土沙を押し出し來り、西股の河水を堰き止め此に長さ一町幅半町許りの池を瀦留し、荒蕩たる絶谷の裡時ならぬ一風景を作れり。晃平は又釣竿を垂れしも獲る所なし。二時五十分此處を發し、之れより河岸の密林中に入れば昨年發見せしと云ふ岩窟あり、之を過ぎて或は危き絶崖を越え、或は細逕例の薊事と戰ひ、遂に又河岸に出で河原を行く。谷の幅は半町位にして、山緣に水清く、余等は今や已に田代山奥の中心點を過ぎ、之れよりは漸次人間界に近づきつゝ行くなりと思へば甚心賑やかにて、行く手の山々も笑を含んで余等を迎ふるものゝ如く、今夜宿るべき小屋も遠からず、日は尚高く天氣もよきに悠々程を拾ひつゝ、晃平は又行々釣竿を川に垂れ、頗る暢氣の旅となりたりき。斯くて川は二つに分る、北より來るは中股川（ナカマタ）（當字）と稱し其の上流に當りて間（アヒ）の岳の尖頭を仰ぎ、西より來るは即ち西股川の本谷にして、之れより上流は小西股川と呼ぶと云ふ。此處にて小西股川を徒渉す水深膝の邊に及ぶ許なり、川を距る半町許り河原の一端に小屋あり、即ち今夜は此處に泊する事とす、時に四時を過ぐる事六分。此の地柳島の岩小屋より二里と稱すれど近かるべし、ザカ澤より一日程にして餘裕あり。

此の小屋は小西股の小屋と稱し、昨夜のザカ澤の小屋と同じ構造にして、只大さは一間四方位にて甚小さく余と晃平と二人丈なれば丁度よかりしも三人泊ればちと窮屈ならん。信州の岩魚釣りが來りしと見え、魚を刺す串等澤山ありき。此の夜月あり天氣だによければ野臥も亦甚愉快なるものなり。

蓋し信州人は此の小西股の小屋迄は來るものあれども、之れより以東を知れるもの殆ど稀に、甲州人は我大村晃平の此の邊の山谷に詳委すと稱するも、之より以東に精通する許りにて、小西股以西即ち明日行かんとする道は七年前に之を超えたる事あるのみなりと云ふ。されど小西股以西信州大河原に至る間は、一回も激流の徒

渉あるにあらず、河原を行く所あるにあらず、一筋道にて比較的分り易ければ、七年振りの晃平も尚誤なきを得たるも、小西股以東昨今兩日越え來し處は道頗る錯雜し居れば、充分此に精通せしものならざれば導に任ずる事危し。されば此の田代山奥横斷は、信州よりするに比較的不便なるの事實あらん、後に聞けば頃日も赤石山へ來りし一登山客にして、信州大河原より此の道を越て甲州に出でん事を企てし人ありしが、導を得る能はずして已みたりと云へり。

五日、半夜夢破れしに月朧ろに小屋を覗き、焚火亦漸く幽かなり、即ち火を盛にしたれども之れより又殆ど眠られず、遂に四時起き出づ。今日は愈人間界に出づるかと甚愉快なり。空も快く霽れたり、此の行天候の順なりしは代へ難き幸福なりき。

六時小屋を發す。晃平は本日大河原に至り明日又此の地に引返すなれば、毛布、鍋等は此處に殘し身輕になりて出で立つ。斯くて小屋より直ちに背後の山に分け上る、此の山は即ち赤石山脈より派出せる一支嶺にして中股と小西股とを分てるものなり。急峻なれども道は明らかにあり、相變らず樹林欝葱たる内を徐かに上り、七時半頃山脊に達し、之れより山脊に沿うて緩慢に上り行く。樹間より望むに、左は即ち小西股の深溪、之を超て赤石山脈中の一峯(晃平は西河内岳とか云へり)高く霄漢を摩して聳え、右は即ち中股の絶谷、之を隔てゝ間の岳巍峨として天空に躍らんとす。顧れば間の岳より派出したる所謂間の山脈は、山勢漸々東南に低下し、之を越て白峯山脈(白峯は見えず)相連り、窈冥なる一帶の深谷、纔かに圍を破つて南に逃れんとす。深山又深山、幽谷又幽谷、實に天下の絶境とこそ知られたれ。

晃平の携へたる獵犬は、後になり先になり馳せて行く。此の邊獵獲物は何が主なりやと晃平に問へば、青鹿なりと云ふ。如何にして獲るやと云へば、先づ犬を放つなり、犬はやがて鹿を驅り出し、之を逐ひかけ逐ひ廻して遂に岩窟に逐ひ詰め、さて此處にて兩者睨み合ひ犬は盛に吠え立てゝ時を移す、其内自分は鐵砲を擔ぎて犬の後を追ひ搜し索めて其の吠聲を聞きつけ、此に達して鹿を射止るなりと語りぬ。

斯くて路は最初は甚よかりしが漸く上ればやがて非常に荒廢し來り、榛莽茂れる間を押し分け掻分け進み行

く跋渉甚困難を極めたり(此邊水を得)而して右には常に間の岳を望み、山容上るに隨て愈雄大豪壯を極め、赤禿の圓顱、左右に兩肩を張り、近く谷の彼方に峙ちて呼べば應へん許り、當に沿道唯一の偉觀たり。恰も後方を顧みしに雲間富士の嶺頭を認め、思はず快哉を叫ばしめたり。路は已に稍よく、余等はひたすら前途を急ぎて次第に上り行きたりしが、行けども行けども容易に峠の頂上に達せず、意外に道の遠きを歎ちたり。蓋し此の田代山奥横斷は之を針の木峠越えに比すれば、路程長く困難なれども、道は却て比較的單調なるを覺えたりき。斯くて漸く山を上りつめ一山肩を越ゆ、此處が峠の絶頂ならんと一圖に思ひ詰めしに、來て見れば尚前方に山嶺連りて更に之を越えざるべからざるに、失望落膽殆と歩く勇氣を失ひたり。天亦大に雲霧を發し甚心細し。兎角して行を續けしが、半時間程にして漸く峠の頂上に辿り着く、時に十一時半、小西股の小屋を距る三四里ならんか。峠の頂上と云ふも山尖らず稍平地あり、何となく陰濕にして快からず、一帶森林なるが左方の高地樹木なき所あり、即ち此處に上り辨當を喫せしが、雲霧の爲矢張殆ど眺望を擅にすること能はざりき。

此の邊即ち信駿の國境にして赤石山脈の堰軸走る所なり。南方脚下より削りなしたる凄まじき深壑は信州小河内の上溪なるべく、間ノ岳は殆ど東に當りて濛霧の裡薄く其の豪容を望み、南方赤石山の方雲間時に重疊せる群嶺を隱見せり。抑此の峠は何と云ふやと尋ねしに晃平はサンブク峠と答へたり、余は假に三伏峠の字を充て置くべし。海拔高距は幾許なるべきや不明なれども、兎に角八千尺は確なるべしと思はる嗚呼飛騨山脈針の木峠豈獨り天下無比の險路たる稱を擅まにするを許さんや赤石山脈我三伏峠あり矣。余は今此嶺頭に立ち、冷々たる天風に嘯き田代山奥横斷の功程亦此に至りて窮まりぬ。

十二時三十分、三伏峠を發し愈信州大河原に向て下る。山は相變らず樹林森々、道は初め山脊に沿ひて甚急峻、左右に深溪あり、右は恐らく鹿鹽(カシホ)谷、左は即ち小河内谷なるべし。恰も雲霧稍はれ眼界遠く展開し、駒ケ岳山脈及天龍川一帶の平地を遠く望み、鹿鹽谷の方に當り、山脚遙かに一簇の人家を認めし時は、今こそ久し振りにて纔かに人間界に出でしなれと、覺えず雀躍歡呼を禁じ得ざりき。斯くて前途を急ぎて次第に下りしに、道は惡き所もあれども大抵立派に通じ、又左迄急にもあらざりしが、やがて一時四十分尾根を越えて小河内谷

の方に向て西南に下り行くに及び、路は漸く荒廢し、樹木多く路上に倒れ榛莽荊棘の茂れる間を分け進む。余は初め小西股、大河原間五里餘と聞きしより、大抵二時か三時頃迄には大河原に着し得べしと豫想せしに、中中七八里ある樣に思はれて道甚遠く、未だ容易に人家ある所へ出でそうもなきに余は少なからず氣を焦ちしも、道は中々捗らず、而も余は田代山奥の難境無事之を經過し、將に功を終らんとするに張り詰めし氣も弛みしか勢更になく、大村晃平も信州に入りてよりは地理に暗く亦詰るべからず、斯くて次第に下りしが、やがて路傍屋根板を切り出せるを積みあるを見、人里已に近づきぬと快を叫ぶ。此の邊より道亦漸くよく、二時四十分一大溪の行く手に横はるに會す、之れ即ち小河内谷の一溪にして、溪の口元に當り一簇の人家あるを見愈人里に出でぬと喜べり、之れ恐らくは釜澤ならん。而して之れより道は溪を隔てし彼方の山腹に通じ、即ち之れより溪の盡くる上方を迂廻し行くものにて(此の邊水あり)此れ實に非常の大迂廻、全速力一時間以上を費しぬ。

途中小屋ありしも人居らざりしが、やがて右の山腹に甲州以來始めて人影を見る。顧れば余等の今迄過ぎ來し所、山嶺重疊して見るからに物凄く能くも越えたりと思ふ許りなり。斯くて釜澤の人家を左の谷底に望みしが、此處には下らず直ちに上藏に向ふ。山は漸々開け、道は山腹を穿ち、四時十分黒野田(當字)と云ふ所に至る、山仕事の人夫等の宿るものにや數多の小屋ありしも恰も人は居らざりき。之れより道は愈よく、左には小澁の溪流遠く山又山の間より出で來るを望み、其の奥は即ち赤石山なるべきも雲は深く鎖したり。此に至りて余も晃平も疲弊困憊元氣沮喪、山も谷も目に入らず只道の下るに隨て茫然足を運ぶのみなりしが、漸く六時少し前、上藏に達し、此に再び俗界の人となれり。上藏は家造り頗るよく白壁相望み中々氣の利きたる部落なり。案内晃平は明日復引返して甲州に向ふなれば、遂に一民家を賴みて上藏に泊することゝなり、即ち勞を謝して分れ、余は更に進で大河原市場に至り今井旅店に投ず、時に六時四十五分なり。小西股、大河原間一日程には甚骨折れたり。大河原市場には、郵便局、尋常高等小學校、巡査駐在所、理髪店等もありて、大都會に出でたる思めりき。

天下の絶境田代山奥無事之を横斷し去り、余に取りては未曾有の成功なりき。大河原に來りて尋ぬるに、此

の道新開當時は暫らく措き、一旦荒廢に歸してより二十幾星霜、獵夫等は別とし、通常旅客の之を越えしもの未だ曾て之れあるを聞かず、余を以て其の嚆矢となすに於て一致し、余の得意は果して幾許なりしぞや。さりとては世の登山家も亦爲す無きかな等、萬丈の大氣燄を吐きたり。併し餘り威張り過ぎたる天罰にや、次で試みたる赤石登山には、今度は未曾有の大失敗をこそ招きけれ。

六日、微雨。七日、大雨。且心身休養の爲兩日大河原に滯留す。八日、一天快晴、即ち諸般の準備を整へ、一壯漢を導とし、午前五時大河原出發赤石山に向ふ。上藏、釜澤を過ぎ、九時小澁温泉に達す。之れより片道十八回と聞及ぶ小澁川の徒渉を始めしが、前日の雨にて增水尙八寸以上、深さ臍の邊に達したれば徒渉の困難殆ど名狀すべからず。黑部川以來激流徒渉を恐れし身にてありながら、左迄とは思はずして此の難流に對し何の準備する所なかりしこそ不覺なれ。流さるゝに垂んとして纔かに導者に支へられつゝ、殆ど命懸けの冒險を以て漸く五回の徒渉を終りしが、曾流れに臨める絶崖を橫過せんとして誤て足すべらし、忽ち河中に墜落せり。此處幸にして崖爾く高からず、流爾く深からざりしより、大怪我もなく流されもせざりしが、衣服、雜囊を濡れ鼠にしたるは云ふ迄もなく、左足を挫傷して步行を難んずるに至り、此に空しく碧瑠璃の如く晴れ渡りし天を仰ぎて、登山を中止せざるべからざるに至り、天晴器量の一段を下げたりき。斯くて踵を巡らして日沒大河原に歸る。翌九日、天候復不良に陷り、暑中休暇も將に盡きんとし、而も足痛甚しく殆ど跛曳かぬ許りの有樣にて、所詮登山再擧の望みも絶ゑ、即ち之より直ちに歸京する事と定めたり。

十日、雨天。されど高山登りにあらざる以上、雨中の旅も亦風流と、九時半大河原を發す、足痛昨日よりは快きも尙步行を難んじたれば、成べく早く車行の便ある地に出でん事を求め、伊那街道飯島に出づる事とす。大河原より小澁川に沿ふて下る事一里、桶谷（ヲケヤ）に至り之れより枝道に入り（本道は川を渡り飯田方面に至る）、尙川に沿ひて凸兀覺束なき岨路を辿り、桶谷より一里半許にして四德渡（シトクド）と云ふ所に至り、之れより小澁川を離れ峠にかゝり、暫時にして之を上りつむれば數戶の茶店あり、時に午後二時、即ち就て晝食す、之れより西に向て下り路となり、山漸々淺く、人家漸々多く遂に峠より一里許りにして大草と云へるに出づ、夫れより北して

南向村（ミナカタ）に入り、左折して坂戸橋と云へる釣橋によりて天龍川を渡る。暮色漸く蒼然、雨益激しく、流石に物悲しき旅となり、斯くて本郷を過ぎ與田切川を越え、六時過る頃飯島に着し扇屋と云へるに宿る。大河原より六里位なるべく、爾く分りよき道にあらず。

十一日、亦雨天。七時過馬車にて飯島を發し伊那街道を北行す。赤穗、宮田を經て坂下（サカシタ）に至る。坂下は即ち伊那町の內にして、參謀本部二十萬分一圖には伊那部と記せる樣なり。坂下の名最も人口に膾炙し附近の盛地なり。信州駒ヶ岳伊那方面より上るには宮田（又は赤穗）よりすれど、亦坂下よりも上り得べきが如し。

余は坂下より尙馬車に乘り、松島を經て天龍川を渡り、平出に至り再び天龍川を渡れば即ち辰野に達す。辰野は即ち中央東線の停車場ある所。伊那方面に來往する旅客多く吐呑せられ、宿驛甚賑へり。此に着せしは午後二時、例の田舍の乘合馬車にて而も雨の中を半日以上搖られたれば、頗る氣分を惡しくしたるのみならず、僅かの所にて一瀛車乘り遲れ、空しく二時間餘を待たされたり。之れより東京へ行くには甲府を經過し行くが當然なれども、來る時と同じ線路に歸るは面白からずと、長野を迂回する事となり、此の日は長野に一泊。翌十二日歸京す。連日雨天尙晴れず、返す〳〵田代山奥横斷中天候の順なりしを喜びしが、上藏より甲州へ引返したる大村晃平は、途中雨に遇ひて如何にせしやと氣遣はれ、問合せの端書を送りたるに、無事歸村したる旨の返事ありき。

甲州鳳凰山と地藏岳

工學士　辻本滿丸

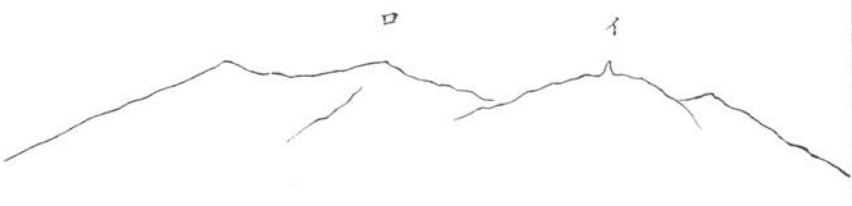
快晴の日、甲府の平原より西方を望めば、峻嶺高峰恰も雲の如く重疊せる中に、當面最も近く一大山岳が天半を閉障すること屏風を立てたる如きを看る、是れ鳳凰、地藏の連嶺にして、其雄偉なる山勢は、白峰、駒ヶ岳の二大傑間に介立して、殆んど遜色あるを認めざるべし。

本山は此の如く高邁にして、著明なる位置にあるに係らず、餘り世人の知る處とならざるは、想ふに此地の交通不便なりしと、附近に諸大名山の群立するとに依り、多少閑却されたること其主なる原因ならんか。若し夫れ其登山者に至ては、未だ甚だ少數なるもゝ如し、勿論山下の住民が山頂なる地藏佛禮拜の爲め登るもの無きに非らざれども、之を除き眞に登山を目的とせるものは寥々たること明なり。近年外人中には好んで之に登山する人あり、小島氏に依ればウエストン氏も之を窮めたるものゝ如く、又た余が現に去る七月、御岳(甲州)に於て邂逅せる英人某氏も、二回登山を行ひたることありと語れり、從來此好個靈山を放置して多く顧る處なかりしは、本邦登山家の爲めに遺憾なき能はず。

今や本會の設立に依り、登山の趣味漸次普及せられんとし、本山の如きも將に多數の登山者を見るに至るならん。余は本年八月駒ヶ岳、八ヶ岳二山に登れる序を以て鳳凰登山を試み、同十三日青木湯より地藏岳を經て之に達することを得たり、不幸にして不良の天候に遭遇し、甚だ疎漏なる觀察を行へるに過ぎざりしが、後遊人士の參考迄に鈍筆を呵して此處に其概況を記すも全く無用に非ざるべし。

余は先づ鳳凰山登山口を研究せんとし、『日本風景論』、『日本山岳志』等を檢して(一)中巨摩郡蘆倉(コム)より大室を經、地藏岳を越て達するもの、(二)北巨摩郡柳澤より直に鳳凰山頂に登るもの、(三)同郡小武川(コブ)上流なる青木湯より地藏岳を經て至るもの〻三路あるを知れり、『風景論』鳳凰山の條下にコム川の溪谷に下り、西南に登り、御坐石(ザイシ)を經、圓野村より五里、山の東麓に達すとあるは結局右の柳澤口と合するものならん、余は臺ヶ原より發程する豫定なりし故、蘆倉口は全然之を斷念せり。

駒ヶ岳登山を終れる後、余は鳳凰登山口を前記(二)(三)の孰にか決定せんと欲し、臺ヶ原にて之を尋ねたるに、柳澤口は知るもの更に無く、此附近の諸山を股にかけたる老獵夫も之を詳にせず、若し以前其路ありしとするも今は荊棘に埋れて到底行き難かるべしと云ふ、青木湯より登るは里程稍や遠けれども其利便なるには何人の言も一致せり。余は小武川沿岸と青木湯とに少なからざる好奇心を有せしを以て、即ち此路を取ることに定めぬ。但し柳澤口は實際同村に至りて取調べたるに非らざる故、果して臺ヶ原にて聞きし如く、通行に適せざるや否



日野春附近より望める山頂　(イ)鳳凰山頂　(ロ)地藏岳

やは、確言すること能はず。

余は此處に豫め鳳凰山と地藏岳の名稱及び位置に就き、一言する必要を覺ゆ。

鳳凰山と地藏岳とは、大底の地圖には明瞭に記載せられ、何等の疑問を存せざる如くなれども、甲州に至つて二山の處在を尋ぬれば其答辯の頗る曖昧なるを認むべし、而して鳳凰山の名が廣く吾人に知らるゝに反し、甲州にては此方面の山岳代表者として地藏岳なる名稱通用せられ、鳳凰山は却て其一部なる如き觀あるは意外なり。余は嘗て御岳(甲州)附近に於て鳳凰山の名を知らざる甲州人あるを見て奇こせしことありしが、今にして思へば怪むに足らず。本回經歷地に於て、余は屢〻鳳凰山と地藏岳との區別を問ひ尋ねたるに兩者同一なりと云ふものあり、或は鳳凰山は地藏岳の南に在るもの、之なりと云ひ、諸說紛々甚だ一致せざるに苦めり、然ども余が鳳凰山なるべしと思へる一峰を指示すれば皆な地藏岳―寧ろ地藏佛―なりと答ふ、此地藏佛と云ふは山其者よりも、山頂なる大岩に重きを置ける謂にして、實に余の指せる山の頂上には極めて著明なる岩石あり、瀧車笹子の隧道を過れば、甲府盆地を隔て、遙に西天に尖立するを見るべく、遠望すれば恰も人の直立する如くに思はる、甲州人は之を靈化して地藏佛と崇むるものなり。余は是に於て『甲斐國誌』の鳳凰山記事中の一節「絶頂に高數丈の岩あり、遠く望めば人物の狀の如、州人多くは誤認めて是を地藏岳なりと云ふは非也」(『日本山岳志』第二百十五頁)とあるが、良く上記の事實に適合するを認め、甲州人の地藏岳云々所謂誤認と見做せり。即余自身は此岩石ある山を鳳凰山とし、其左方(甲府方面より望みて)に連りて、稍や三角狀を成せる峰(此頂には三角標あり)を地藏岳と定め、普通地圖の順序に從へり。尤も余が二山に就き、確固たる觀念を得たるは登山後、快晴の山頂を望み、自ら踏査せる處と綜合したる時にして、其以前は山巓常に曇

りて視察するに由なく、登山の際に於ても兩者の位置に就きては猶ほ疑惑の裡にありき。歸京して後、余は甲府圖幅地質說明書に描ける二山の見取圖を檢したるに、全く右と符合せるを見たり。

此連嶺には藥師、觀音、地藏等の佛名を冠せる山多きは注目に値す、聽く處に依れば、禮拜登山者は地藏岳の頂より鳳凰山なる岩石(所謂地藏佛)を遙拜して歸るもの多く、更に足弱の者に至つては、藥師岳より踵を返すと云ふ、此等の習慣に依れば鳳凰山は他の諸山に例多き奥の院の感あり、其佛敎的名稱より推想するに、鳳凰は元と法王の意なりしやも知る可らず、法王大日也とあるは良く之に適へり(『日本山岳志』第二百十五頁參照)。此間唯だ余の不審に堪へざるは通常鳳凰山二千九百十二メートル、地藏岳二千七百九十七メートル(『日本風景論』に據る)にして前者遙に高きに係らず、余の實見せる處にては、地藏岳の方却て高きこと是なり。此點に就き余は同好諸君の示敎を待つ。

八月十二日午前七時、余は一名の人夫に二三の必需品を負はしめ、臺ヶ原を發して小武川上流なる靑木湯に向へり、鳳凰登山を終れば再び此地に戻り、八ヶ岳に至る豫定なる故、不用物は總て之を前日來、投宿せる旅店竹屋に託せり。(參謀本部二十萬分一地圖に、小武川を以て大武川の一上流となせるは、甚だしき誤謬なり、該圖に小武川とせるはイシウトロ川と稱するものにして、眞の小武川は御坐石一帶の山嶺にて、西方大武川と隔り、宮脇、圓井二村間にて、釜無川に入る別流之なり、猶ほ同圖には靑木湯なし、此邊の地形は地質調査所二十萬分一圖を以て略ぼ正しとす)

臺ヶ原より小武川溪谷の入口なる新奥(シンオク)に達するには、甲信街道を南下し、枚ノ原より右折するものと、下三吹(フク)より山高、黑澤を經て至る二路あり、前者は遠けれども道路概して平坦なる利あり、余は往路之を取り、歸途後者に依れり。臺ヶ原の人家を離るれば、左に釜無川と七里岩の峭壁を眺め、中山(臺ヶ原と駒城(コマキ)、柳澤間にある小山)を右にし、坦々たる大路を步みて尾白、大武の二川を渡る、大武川は橋落ち、多數の工夫正に架橋に從事せり。一里餘にして塑橋を渡り、枚ノ原に出で此處より街道に分れて右に切れ込み、武里小學校を右方に見て、桑畠ある小丘を越え去れば、小武川の溪谷前面に展開し來る、兩岸の山脈疊々起伏せる奥の奥は、我

が鳳凰地藏の連山にして、此日天晴れたれども、白雲厚く山頂を包みて、何處にあるやを知るに由なし。此處より青木湯まで里程凡そ四里、其間茅屋一二あるのみと云ふ。

午前八時三十分、初めて河岸に達せり、岸に沿ひ危橋を渡ること四回にして、山少しく開き、河畔に堤坊を築ける處あり。豫て此道路は、河を横ぎること甚だ多しと聞き、橋の有無を危みしが、十時十分斷崖の下を曲折する處に至り、果して橋無きに會したり、水ある幅は凡そ三間許に過ぎざれども、傾斜大なる山間の急流なる故、岩に激する水は瀑狀を成して、飛沫を散し、深き處は碧綠色を呈して見るからに氣味惡し、急湍徒渉に多く經驗無き余は、顛る躊躇せしも、勢止む可らざれば、人夫と手を組み合せ、相助けて渡れるに、中央に至りし時は水深殆んど腰部に達したり。夫より續け樣に猶ほ三回徒渉し、少時川に遠かりて右方の山下を巡る、此處は稍や廣き原野狀を爲し、枝振り面白き松の點在せる下には、種々の草花今を盛りと咲き亂れ、其美しさに河渉りの苦も忘れたり。草を敷て三十分許り横り、十一時三十五分御坐石湯との岐路に達す、湯は之より一里なりと云ふ、左を取りて又た河岸に出で、第五回の徒渉を行ひ、右岸に出でたり。此邊より雜草甚だしく茂生し、時として全身を沒することあり、草の中を游ぐ如くにして進む、行々注視すれば野イチゴ（ナワシロイチゴ、エビガライチゴ）の紅果簇々として正に成熟せり、余は雀躍して、片端より取集め、帽子を脫して之に投込み、山盛りと成し、歩み且つ食ふに、足元自ら疎かとなり、石に躓きて顚倒せんとせしこと幾回なりしを知らず、進むに從ひイチゴは益〻多く、流石の珍味も後には食ひ厭きて、見返りもせず、行過るに至りぬ。

零時三十分、路は祖母石（ウバイシ）より青木湯に至るものと合し、旅人三名に行き逢へり小武川は此處にて一大迂曲を成し、北方開けて遙かに八ヶ岳の峯頂を雲上に仰望す。之より以南、道路は手入れ屆きて橋落、草深の災難なく、一橋を渡りて又た左岸に出れば、道路の右側に一軒の農家あり、余は此家にて湯を貰ひ受け、休息せんと欲せしが、近づくに從ひ、其穢きを見て辟易し、猶ほ少しく歩める路傍に於て、携へ來れる書餉を喫せり、時に午後一時なりき、側に建てる木標を見れば青木湯まで四十町と記せり。是より兩岸の山漸く仄立し、道路の傾斜も次第に增加し、樹梢にサルヲガセの長く垂れたるは、已に深山の光景あり、小武川の水量は

著しく減少し、岩石のみ增加す女夫石と云ふを路に眺め、橋を渡ること四回にして、午後三時二十分青木湯に到着せり。

余が本日の行路は概して平易なるものなりしが、只だ橋無かりしには頗る閉口せり(今日、川を横きりしこと總計十四回なり)、然し初め徒渉せる四ヶ處は、西方山上なる間道、俗に八町横手と稱するを越れば、全く之を避け得たるものにて、余は人夫の不案内に因り餘儀なく之を横ぎれるものなりき、尤も落橋は去七月の出水後其儘放置せる爲めにして、平常は此の如きこと無く、今回の如きは異例なりと云ふ。

青木鑛泉は鳳凰山の東麓に當れる小武川の左岸にあり、海拔千六百〇二メートルの高距に位し、三方は急傾せる山に圍まれ、小武川流域なる東北面のみ稍や開けて、遙かに若神子、淺尾の方面の原野を下瞰す。浴舍は只だ一軒あり、四月中旬開始し、十月下旬に至て閉づ、建築は粗造なれども、盛時は百人以上を容るゝに足ると云ふ。鑛泉は山上數町より導き、薪火を以て溫む、褐色不透明にして、山梨縣病院の分析に依れば、主として酸化鐵及炭酸鐵を含有するものゝ如し、効能諸病としては貧血、胃病、脚氣、其他雜多の病名十六七を列記せるを見たり。

湯治客は大抵甲府若くは近鄉より來り、何れも永く滯在し、多くは自炊を行ふこと山間僻地の他鑛泉に於ける如し。余が到着せる當時は客數未だ少く、粗惡なれども八疊敷の一室を與へられたり、見るに堪なく、天井なく、三面板張りの有樣は山中の小屋の如く、板は隙間もなく落書にて汚されたり、其禁止と見へ禿筆にて「此處に樂を止」と記せる紙を貼り付しは滑稽なりき、湯は前記の如く濁れども、入りて見れば案外心地よし、此夕氣溫十五度に降下し、フランネルの襯衣を纏ても猶ほ膚寒きを覺へたり。

初め臺ヶ原より余を駒ヶ岳に案内せし男にて、通稱多重(タヂユウ)と呼ぶものあり、駒ヶ岳は掌を指す如く精通せるを誇言すれども、未だ鳳凰山に登れることなく、今回は是非共同行せんことを乞ひ、余も之を許しぬ、然るに前日東京より或講社の連中來り、同人は都合に依り、之が案内となりて本日御坐石湯まで來ることゝなりしかば今夕余の人夫と交代するの約を結べり、余は之を履行する爲め、本日同行し來れる人夫を解雇して御坐石湯に

向はしめ、夫より明日登山の案内者を得んと欲し、之を鐵泉の亭主に謀れり。亭主は二十六七の男にて妹と稱する女と二人此處に住し、今日は浴客數名の依頼に依り案内して地藏岳まで登山せる由なり、段々樣子を聽くに此地にあるもの彼と妹の外は、皆な入浴の客のみなれば、素より導者と成る可きものなく、彼は帳場の事務停滯すると、本日登山の疲勞もあり、御免蒙りたしと斷わる、余は甚だ困却したりしが、折角本登山を目的としして來りしに、案内なくては不便此上なく、迷惑なるべけれど、是非行き呉れよと強て依頼し數回押問答の末彼も遂に漸々承諾せり。最初青木湯まで至らば案内者は多々あるべしと思ひしに、此考全く齟齬し、頗る面白からず後に此處より登山する人は注意して、余と同一困難に陷らざらんことを望む。

夜に入りて雨さへ降り出し、多重も來らず、余は不愉快の裏に寢につきしが、疲勞の爲め何時しか夢境に入れり。

十三日午前四時、起き出れば天晴たり、今日は早朝出發する筈なりしが、昨夜の降雨に氣を阻まれ、明かに時間を亭主に約せざりし故、未だ起き出し樣子なし。余は先づ自身の仕度を成し居る內に、彼も漸く起き來りしかば準備出來次第至急出發せんことを命じ、朝餐など成すに、時は五時を過ぎ、折から出立せんとする客の勘定にて又た手間取れ、六時近くと成れり。余は心中甚だ燥つて、猶ほ愚圖つける亭主を促し、將に出發せんとする時、下手より獵犬を先立て登り來るものあり、能く見れば多重なり、余は疳癖の起れる際とて、近づく間も遲しと違約を叱り付しに、彼頻に陳謝し、前夜御座石湯に着せしは甚だ遲れ、且つ雨降り出して、夜行かなはず、天明を待ち、薄暗き內より出で來れりとて、手にせる提燈を示す、余は今更怒りても詮なければ、即時出發すべきを告げ、愈々登山に着けるは午前六時三十五分となれり。

先づ湯場の後より直に小武川に下りて之を涉り、西南を指し、前面に聳立せる山を目がけて、一文字に登る、ツガの森林天を蔽ひ、傾斜極めて急なり、初め暫しの程は右手の谷底に小武川の水聲を耳にせしが、十町許りも登りしと覺しき頃より、復た聽えずなりぬ。路は不完全ながら、其形を存したれば、案内者無くとも誤るに至らず、樹下にはセリバシホガマ、ゴゼンタチバナの花あり、其光景駒ケ岳なる堀立八丁を經てより黑戶山に

至る間に似たり。一時間程登れば傾斜は稍や緩となり、右方に向て少しく下る處あり、やがて谷を右にし、山腹を繞り登り行く、倒木路を塞ぎて自然の障害物を造り、之を潜り、或は跳り越すに、少なからざる勞力を費せり。途中全く水を得ず。

山腹に沿ひ、絶へず左方に曲り行きしが、終に草深の峽間を登り切り、八時四十五分、御室（オムロ）に達せり。連嶺の一凹處にして狹き平地を成し、左方蘆倉より來る道と合す、日本山岳誌「摘譯」に、大室と記せるものは是なるべし、余は青木湯より直接、地藏岳に攀ぢ登るものと思ひ御室に出ることは豫期せざりき。小屋は元と二三棟ありて繁盛せしもの〻如く、最大なるは幅三間位に長さ十間以上もありしなるべし、今は全部荒廢し、用材の累々として地に委したる遺跡を見るのみ、若し此處に一泊せんとせば、一通り野宿する準備を要す（小屋の西北隅に屋根の少しく殘れる處あり、其下に潜まば、辛うじて雨露を凌ぎ得べしと覺えたり、本號の第二圖版に見えたる御室は、勿論破壞以前の舊形と知るべし）。側に筧にて導ける水あり、一飲するに清冷にして能く渇を醫するに足る、是れ實に本山唯一の飲水なり。

此處は左右の山と樹木とに依て遠望を遮られたれども、海面上少くも二千二三百メートルあるべし、登山者稀なれば、附近にはタウヤクリンダウ、オヤマリンダウ、ヤマヲダマキ、コバノイチヤクサウ、トリカブト、スカシタゴバウ、アキノキリンサウ等の諸花、其蹂躙と掠奪とを免れて爛漫開發し、花畠の如き美しき景を呈せり。又たイハガリヤス繁茂せる處には、蠅の如き黑色の小蟲無數群集し、其中を追ひ立て横ざるに、甘き奇臭を感ず、多重に依れば駒ヶ岳にも此蟲を見ると云へり。

御室は鳳凰登山道の最要處にして、殊に蘆倉より登山するには、此處に一泊するを最も便とす、將來小屋を再興することは、極めて必要なるべし。

多重の犬は、此處にて何を認めしか、今來りし方を見返りて、二三聲吠るや、恐る〻如き唸を發しつ〻、主の傍に寄添へり、人か獸か、何者か御參なれと、一同彼方を打守り、余は手早く雙眼鏡にて草叢、木立の間を至細に點檢し、暫く待ちしが、目に觸る〻怪しきものも無し、其内犬も唸りを止めたれば、此原因遂に不明に終

れり、若し獸にて岩鹿などならば犬の方より進むべきに、恐れたるは多少手剛きものなりしやも知る可らず。

休憩三十分にして、九時十五分、御室を發し、西北に向ひ、針葉樹間を穿ちて、山背を登る、展望は樹林に妨げられ、充分ならざれども、傾斜は寧ろ緩にして困難ならず。余は此間にて、リンネソウを得、又た蝦墓の路に蹲居せるを見たり、斯る高距に生存することは珍らしと思はる。漸く登れば喬木減じて、偃松、石南多く現れ、午前十時に及んで開豁なる山巓に出でたり。

側に岩石の兀立せる凸處あり、案内の亭主は藥師岳なりと云へり（此藥師岳は餘程疑問なれども假に之に從ふ）、之より山背は稜々たる岩山より成り、連嶺の壯觀は此處を以て起點とす。余等は時猶ほ早かりしも、辨當を開きて又た三十分足を止めたり、今朝の晴天は御室邊より次第に曇りて、今は全く遠望なく、前面野呂川の深谷は雲漲り、群り起る雲霧は濛々身邊を掠めて飛ぶ、白峰見えず、仙丈ヶ岳見えず、失望すること甚し。

山稜の左面に沿ひ少しく行けば大岩の窪みに雨水を湛へたるあり、岩に俯して一掬し、偃松の中を押し分け行く、近く前方に尖立せる峰あり、之を右にして其左方に出づ、案内者は觀音岳なるものを知らざりしが、若し先の者を藥師とせば、之は觀音に非らざるか。路傍オホビランジ、ヤマウイキヤウ、キバナノシホガマ、タカネウスユキサウ、グンナイフウロ等ヲ採集せり。

觀音岳と思ひし峰の下にて、側射せる一山稜を横ぎれば行々皚々たる花崗岩の白砂を踏む、是より地藏岳に至る間は、巉岩稜々たる山背に沿ふものにして、殆んど一定の路なきも、山背より少しく左下の側面を辿るを便とす、晴天に山稜の頂を上下せば、左右の眺望を同時に看取して、壯觀なるべきも、本日の如き曇天には、不必要なるを以て、余は易路を取れり。山背の右側は偃松透間もなく繁茂し、左側は霉壞せる花崗岩砂より成り、奇石之に交る、翠松白砂相映ぜるは、駒ヶ岳頂下のハゲに似て、更に美なるものあり、惜哉白雲眼界を遮り、絶大の光景を擅にするを得ず。

藥師岳より一時間を費し、地藏岳に着せるは、十一時三十分なり、花崗岩塊の集まれる隆起にして、山頂狹く方二間に足らず、參謀本部陸地測量部の二等三角標を建てたり、祭祀せる神佛は見當らず、案内者は之を鳳

鳳山なりと云ひしが其誤謬なるべきは已に述たる如し。濛雲益〻多くして、近き鳳凰山頂の巨岩さへ全く見えず、案内者は之より先きには、來りしこと稀なりとて、天候を望み難色あり、余は鳳凰山に達せずんば勿論止まざる決心故、促して前進を續けしめ、頂上より少しく東北に下るに一凸處に石造の小さき地藏佛を多く安置せり、之れ鳳凰山遙拜者の持ち來りしものと覺ゆ、鳳凰山に至る路は其手前より左方の岩を傳ふて下り行くなりしに、雲の爲め知らずして行き過ぎ、此處に至て路の消失せるに困却せり。漸く誤を悟りて引き返し、北方を指して甚だしく下る、下り切りたる處に、岩石の露出せる個所あり、案内者は之を賽ノ河原なりと云へり、此處にて又た路を失ひしが、右方の灌木林中に路の形あるを尋ね出し、其入口に石を積み重ね、後に來らん人々の道しるべとなし、之を進む、樹下にはトリカブト、モミヂショウマ花あり、又たホタルブクロを見、ヒメシャジンの一種を採る、山背の右側に沿ひ、少しづゝ登り行き、午後一時鳳凰山頂なる大岩下に達したり。

時に西南の强風、雲を漲し來り、雨を交へて風物轉た跌岩を極む、白雲斷續の間より仰望するに所謂地藏佛は重疊せる岩壁の上に指を立てたる如く尖立し、下は太く、中頃より細くなり、頂の中央凹みて二尖に分れ見えたり、高さ十間餘もあるなるべし、其狀金峰山巓なる五丈石に似て、稍や趣を異にし、一層高く且つ鋭きものなり。案内者は此處にて終點なりとて行を止む、余は如何にもして岩下に至らんと欲し、花崗岩砂の壞れ落たる斜面を登り、左方より迂回して岩壁を登攀せしが、嵐雨と雲霧に妨られて方向明かならず、目的を達せずして引き返すの餘儀なきに至りぬ。

登山前、余は書物に依り、鳳凰山は此連山中の最高最壯なるものと深く記銘したるに、今親しく此地藏佛に來り見れば、如何にも岩石の壯觀はあれども、其位置は地藏岳よりも低くして、恰も其支峰の如く、豫想とは餘程相違せしかば、或は案内者が勞を惜みて鳳凰山まで導かざるに非ずやの疑も生じ、當時余の腦裏は「眞の鳳凰山は、猶ほ之より先にあるに非るか」、「夫れ共、書物に鳳凰山を最高點と記せるは誤謬なるか」等の疑惑に混亂され、目前の巨岩に對する崇敬と觀察の熱度を減殺したるは是非なかりき。

萬一雲霽れなば是等の疑問を解決し得べしと思ひしも、不良の天候は容易に回復すべくも見えず、且つ時間

も切迫せる故、久しく此處に止まるを得ず、遺憾を忍びて遂に歸途に着けり。

前路を引き返して、二時十分地藏岳に戻る、雲稍や霽れ、初めて本山脈と野呂川溪谷の一部及び白峰（北岳）を看望せり、白峰には殘雪少々あり、地藏佛は較や低く、北微西に位し、附近に之れ以上の奇拔なる峰も見えざる故、矢張り鳳凰山は此岩なるべしと思ひぬ、其左方には規模に於て地藏佛を壓倒する岩壁の連山あり、駒ヶ岳に連るものなれども其名を知らず、顧みれば砂白の山背は脚下より畝り、藥師岳は正しく東南に當りて是が先鋒を成せり、故に藥師より鳳凰に至る山嶺は地藏、鳳凰間にて著しく低下すれども、略ぼ鈍き「く」の字形を造り、地藏岳は中部に在て恰も其屈曲點に聳え、實に其主峰を成すものと思はれたり。

藥師岳に着しは三時、御室に至りしは同五十五分なり、天候又た惡く遂に大雨となる、急坂を全速力にて下り、午後五時二十分、青木湯に着せり、此日臺ヶ原に戻るか若くは御坐石湯に至る考なりしも、登山に手間取りしと、降雨の爲め之を放棄し、又た此地に一泊せり。

十四日雨止まず、午前九時四十五分強雨を冒し、再び小武川に沿ふて臺ヶ原に歸る、多重は此邊の道路を詳知せるもの故、前日第五回の徒渉を行ひし場所は其少しく下流に橋あるを知り、難なく之を横り、八町横手を登りて、橋無き處を避け、シモクロサワを下りて河畔の堤坊ある處に出で、橋四つを渡り、午後一時半、新奥に達して河を離れたり。小武川の水量は雨の爲め甚だしく增加し、徒渉は非常なる危險を免れざりしに、幸にして其難を逃れたり。

枚ノ原に出でず、山高に至り、實相寺域内なる神代櫻を見物せり、幹の周圍凡そ七尋半なりと云ふ、此附近にて有名なるを以て、一顧するに足るべし、大武川を渡り、下三吹に出で、午後三時三十分臺ヶ原竹屋方に歸着せり。

此登山に於て、寧ろ意外とするは、山路の比較的容易なりしことにして、湯より以上、御室までの間には、少しく急峻の處ありしも、概して危險なる個處は一も無く、殊に藥師、地藏間の如きは、山背に沿ふものにして最も樂なり。本山は一帶の連嶺を成すを以て、奥行長きは悦ぶべし、藥師岳より鳳凰山頂に至る約二里の間

は、恰も天外に激立せる大波濤を踏んで、上下するに異ならず、若し快晴の日、此處に登臨せば其豁大なる光景は想像以上なるべし。

東京より直接鳳凰登山を行はんには、韮崎にて汽車を下り、祖母石、青木を經て山越しを行ひ、青木湯に至るべし、東京を早發せば即日、湯に達するを得ん、只だ好案内者を得る能はざるは、此地の大なる缺點なり、余の伴へる鑛泉の亭主の如きは、素より案内者の資格なきものなりし。故に余は蔦倉口の之に優るべきを憶ふ、同地には獵夫多しと聞くを以て、山路に精通せるものを得ること容易なるべく、御室に一泊する準備を以て、出發せば充分なる觀察をなし得べし、余は他日此方面より必ず再度の登山を試みんと欲す。

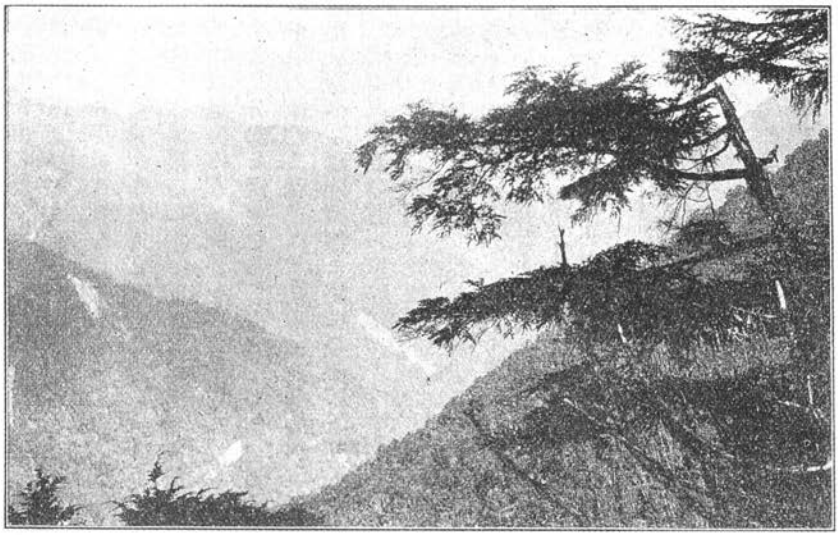
本山の植物に就ては、余の如き初心者の容喙すべき限に非らざれども、豐富ならざるは疑なし、然れども從來採集を行へる專門家無き故精査せば珍種を發見し得る見込無しと云ふ可らず、余の採集植物に就き、敎示せられし武田久吉君の言に依れば、リンネサウ、タカネウスユキサウの如きは、未だ甲州の他山に產せざるものなりと云ふ。同君は余の行に遲るゝこと僅に旬餘にして、特に鳳凰山植物研究の爲め出發せられたれば、本山植物は君に依り、初めて世上に紹介さるゝに至るべし。

(附記) 武田君歸來、余に語られたる處に依れば、君は余と全く同行路を採り、青木湯より登山せられたり、當日は快晴にて鳳凰山頂なる巨岩にも登攀することを得たる由、余は風雨の爲め功を一簣に缺きたる憾無き能はず、其他砂拂、藥師、觀音、賽ノ河原等の位置に就き所見を語られたり。又た其後御室の小蟲に就き、同君より報告あり、右は松村博士の檢定に依れば、メスアカケバヘ(Biobie japonica Motsch.)なるものなりと云ふ。余は君が詳細なる觀察を發表せられて、本山に關する余の誤謬と脫漏とを、指摘せられんことを切望す。

燕岳(ツバクラダケ)及大天井

志村鳥嶺

今夏日本アルプス三大横斷を決行す、即ち第一回の横斷は北越糸魚川より、蓮華温泉を經て、白馬山の絶頂



有明山の中腹より燕岳を望む（志村氏撮影）

を越え、信州北城村に達せし白馬山の裏山越えなり、第二回は信州大町を發し、チエンバーレン氏が、惡絶險絶、天下無比と叫びたる針木峠を越え、越中立山に登り、宇内の偉觀と稱せらるゝ山上の展望を恣にし、富山市に下りしもの、第三回は信州明科より、信濃富士の稱ある有明山、燕岳、大天井、常念岳を經て、人跡全く絶えたる深山幽谷を跋渉し、槍ヶ岳の頂を究め、信飛境上に達せるものなり、今余が筆を執らんとする燕岳及大天井は、乃ち此第三横斷記の一部と知るべし。

八月十九日、午前六時長野驛を發し、八時明科驛に着し、大町街道を進むこと一里半、路左折して宮城に至り、有明神社に謁す、明科より三里と稱す、中房川の谷に沿ふて上ること、又三里にして、中房溫泉に到る。

二十日、早朝中房溫泉を發し、信濃富士有明山を、裏山より登攀し、植物の分布を精探す、有明山は殆んど頂上に至るまで、針葉樹の喬木帶にして、珍奇なる高山植物少なし、其の喬木帶中より、始めて燕岳を仰ぐ、幾百千歳を經たる針葉樹の喬木枯れて、皮飛び肉落ち、中心木質のみ白色となり、鹿角の如きものを雜えたる老樹の間に、聳立せる燕岳の、頂に近く、猛鷲の翱翔せるを見る、盛暑猶ほ峰に殘雪あり、谷に堅氷を殘す、峻嶺の巓と猛鷲、何ぞ其の

對稱の妙なる、再び温泉に歸りしは、午後三時半、二十一日午前九時、中房温泉を發して、燕岳に向ふ。

燕岳、燕岳、何人の地理書か、燕岳の名を載せたる、本邦有數の地圖にも、此山を記さず、本誌の讀者中、此山の名を知れる人々は少數なるべし、燕岳は如何なる山ぞ、山麓の里人は燕岳高さ一萬尺と稱す、一萬尺に出入する高山は、本邦有數の高山なり、世人に識られざるは、燕岳の罪か、此靈山を知らざるは世人の愚か、夜光の璧も昆山にありては、誰か其の名玉たるを知るものぞ、假令世人に知られざるも、其の實質に於ては、連城の價値あり、余は燕岳が世人に知られざるが故に、却て其の偉なるを見る、東海の表に屹立する富嶽の秀峰其の名世界に遍く、九歳の少女これに登り、跛者これに登り、自轉車の客これに登る、斯くて余は益々富嶽の平凡を說かざる能はず、若し富嶽をして日本アルプス連峰の背後に聳えしめ、吾等をして、數日の野宿を重ねて、始めて須走に達し、吉田に至らしめ、三歳に一人、其の巓を究め五歳に一人、其の絶頂に達せしめば、富嶽の大は、益〻大に、偉は益〻偉ならん、天下に知られたるは、富嶽の不幸にして、世に聞えざるは、燕岳の幸福と云べし。

出發時刻の遲かりしは、此日の晴雨を判斷しかねて、躊躇せしが爲めなり、温泉より中房川の谷を上りしこと四十分間、濁澤に達す、此澤を上ること三丁許にして、右方の崖を登る、頗る急峻を極む、午後一時始めて喬木帶を脫し、燕岳の峰頭を見る、其の巓に近き露宿地に到着せしは、實に午後四時なりき、二人の人夫は、飯を炊くの雪を得んが爲めに、谷底に降れり、他の二人は、薪を得んが爲めに峰に登り、一人は雨露を凌ぐべきテントを張り、他の一人は高頭海峰兄と、余とに扈從して、燕岳の絶頂に向ふ、六人の人夫と、二人の同行之れ、日本アルプス第三回横斷の一行なり。

露宿地の上方より、四近の地勢を展望するに、東は中房川の谷にして、山勢頗る急峻を極め、大部分は鬱々たる喬木を以て蔽はる、谷を隔てゝ有明山の連峰あり、俗に餓鬼岳と稱するもの、雄俊群を拔けり、北方は脚下より連嶺起伏して、燕岳の絶頂に終る、西は即ち信越信飛の國境日本アルプスの連峰屏立し、槍ヶ岳、笠ヶ岳、鷲羽岳等今余が立てる燕連峰と高瀨川の谷を隔てゝ、相對峙す、南方は大天井、常念岳に連る展望の雄大、

壯嚴筆紙の盡すべきにあらざるなり、而して猶は爰に記すべき一事あり、そは燕岳が全山花崗岩よりなれることなり、中房川に面する方面は、前陳せる如く、喬木帶を以て蔽はるゝが故に、一の見るべきなしと雖も、高瀬川に面する斜面は、稍ゝ緩にして、木低く、草短く、山骨露出す、山骨の裸出せるところ、風化霉爛甚だしく、霉爛して生ぜるものは、雪をあざむく石英の砂、風化に抗して殘れる岩角其の神鑿鬼斧の痕、奇絶怪絶、余は未だ曾て如斯山の美なるを見ずと云へば、高頭氏は、之れ甲州駒ヶ岳の景に似たりと稱せり。

燕岳の頂上に達せしは、午後四時四十分なり、中房川の谷より吹き揚ぐる濃霧は、實に奔馬の勢にて、驀地に山頂目懸けて押し寄するさま、怒濤の如し、頂に達すれば、西方より來る烈風に吹き返され、寄せては返し、返しては再び寄する有樣の壯快なるに、恍惚として佇立せしに、余等の前面に、一大奇觀の現はれたるあり……。

一大奇觀……そも何事……

白蒙々たる濃霧の內、物あり、神か佛か、丈け三丈、腰下漠として定かならず、上體判然、七色の彩環、其の背をめぐり、頭部より陸離たる光芒の放射せらるゝを見る、これ所謂如來の御來迎か。

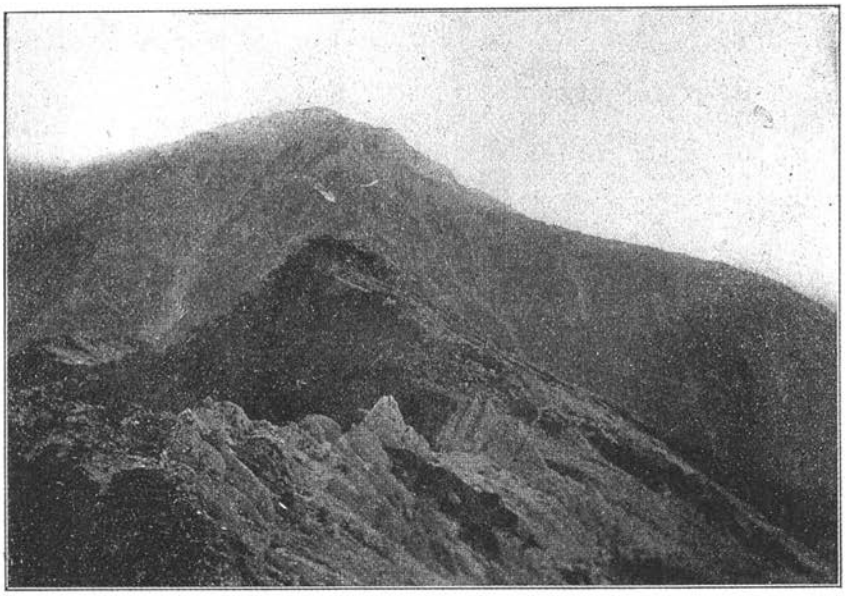
此秀麗なる山上、此異觀に接す、美と云はんか、麗と云はんか、快と呼ばんか、此際此時、余等の感情を表出形容すべき文字なく、言語なし、衆感極まつて涙下る、御來迎を說明するに光學を說く勿れ、山岳に對する熱誠、豈神佛の感應なからんや。

六時露宿地に歸る、雪は山の如く、薪も亦多數に運ばれたり、一同力を協せて、小舍を完成す、余は盛に燃ゆる焚火の側にて、此日採集せる標本の整理をなし、將さに了らんとせし頃、天候頗る險惡、濃霧は雨と化し、谷間より吹き上ぐる烈風と共に斜に面を打つ、倉皇として一同幕中に入る、夜に入るや、寒氣特に甚だしく、高頭氏の如きは、殆んど一睡もせられざりしが如し。

翌午前三時、高頭氏先づ起きて、火を焚く、衆次で悉く起き、各自分擔せる仕事に就けり。

七時出發、愈ゝ大天井に向ふ。

○燕岳及大天井　志村



北方より見たる大天井（志村氏撮影）

此日朝來天候よろしからず、屢〻濃霧の爲めに、困難せり、燕岳より大天井に到る途中は、昨夜の露宿地より、燕岳に到りし途中の地勢と同樣にして、明科附近の農民が、屏風岳と呼ぶ連嶂の頂上を渡るなれば、途中の有樣、稍〻千篇一律の觀なくんばあらず、即ち一方は急峻なる中房川の谷にして、他方は山勢稍緩なる高瀨川の谷なり、其の峰に近きところは、樹木草本尠くして、山骨露出、一面に花崗岩の風化より生じたる石英砂を以て、蔽はれ、其の間に、高山植物の絢爛たるを見る、其の美其の快云ふべからず。

一般に花崗岩の、山は跌岩豪爽の雄姿あり、其の色澤燦然其の質純潔なれば、溪間の流水も清澄に、太氣も亦清爽なるを覺ゆ、花崗岩の山は、之れを四季にたとふれば、春なり、駘蕩和順、萬物爲めに生きんとするの概あり、火山岩（新火山岩）の山は秋なり、荒涼蕭殺、萬物爲めに死んとするの趣あり、花崗岩の山には希望の色あり、火山岩の山には失意の觀あり、花崗岩の山には樂天家登るべく、火山岩の山には厭世家行くべし、江山の洵美は花崗岩の山に於て之れを見る、凄愴悲酸は、火山岩の山に於て之れ

を感ず、花崗岩の山に登らずんば、共に山岳の美を語るべからず、以上は之れ燕岳より大天井に至る途中の景色を見、油然として胸中に起りし余の感想なり。

屏風岳の連嶂渡りつくして、將さに大天井に移らんとするや、山勢全く一變、其の傾斜の急なる、實に驚くべきものあり、全山壞崩せる岩石の大塊、磊々落々、相重積し、一岩を蹈めば忽ち動搖し、一岩動けば重積せる他岩も動搖す、其の危、其の險、未だ曾て見ざるところ、前に進めるもの一石を轉ずれば、戞々として墜落し、後者の頭上を越えて、深谷中に落ち、其の行くところを知らず、落下の途中岩に激するの音響、谷にひゞき、峰にこたへ、暫時やまざる有樣には、一行の顏色土の如し、此行槍ヶ岳は實際豫想の大なりし如くならざりしに反して、大天井の雄渾は、何人も思ひばざりしところなり、十一時大天井の絕頂に達す。

四近の地勢を觀るに、北は屏風岳の連嶂によりて、燕岳に連なり、南は常念岳の雄偉を厭し、西は槍ヶ岳穗高に對し、東方有明を脚下に俯し、左手を伸ばして、高瀨梓の分水嶺をなせり、一萬尺內外に出入せんとする四近の山々をも、眼下に睥睨するの概あり、此山を大天井と呼べる、何ぞ其の名の適切なる、此山を駒と名けんか、不可なり、槍と呼ばんか、不可なり、立山白山鷲笠皆不可なり、大天井、大天井、實に奇想の天外よりおつるもの、此地勢の山にして、始めて此名あり。

槍ヶ岳の眺望の如き、大天井の頂上より見るを最とす、高瀨川の谷底より、將さんに天に達せんとする尖頭まで、一木一草の遮るものなし、特に此方面の半腹、萬古不滅の殘雪多し、峰傳へに常念に向ふ、進むこと一時間半、二ノ俣と稱するところに達す、此處に、參謀本部測量員の作れる石小舍あり、大さ十數人を容るべし。

余は徒らに、健脚を誇るにあらずと雖も、自ら測るに、早朝中房を發すれば、正午燕岳の露宿地に達し、夕刻此二ノ俣の小舍に達するを得べし、然るに人夫の遲きがため、一日の行程に、既に一日半を費せり、且つ前程を問ふに、槍ヶ岳の麓に達するに、猶ほ二日を費し、三日目にあらざれば、其の頂を極むべからずと、槍ヶ岳は大天井より、高瀨川の谷を隔てゝ、前面に聳え、呼べば將さに對へんとするものなり、余心中平なる能はず、而して槍ヶ岳は人の登りしもの、甚だ多く、廣く世人の知れるところなれば、必ずしも登山するを要せず、

故に斷然意を決して、衆に告ぐるに、之れより常念蝶ヶ岳を經て、歸途に就くべきを以てす、高頭氏切に其の不可を說かる、本邦の名山槍ヶ岳を、咫尺の間に眺め、踵を返すは、甚だ腑甲斐なし、よろしく其の頂に達し、日本アルプス第三横斷を完了すべしと、人夫も亦曰はく、吾等又一層勵奮努力、行を倍して進まん、客若し吾等の中より一人の案內者を率ゐ、之れより直に常念に向はれ、一ノ俣の露宿地に下られなば、他の者は、之れより一ノ俣に直下し、露宿の用意をなすべし、然るときは、明日の夕刻、槍の麓に達せん、而して其の通路は、全く之れ無人の境、何人も未だ蹈破せざる深山幽谷なりと、余は高頭氏の熱心なる勸誘と、人夫の言によりて、決心を飜せり、余が日本アルプス第三横斷完了することを得たるは、全く氏の賜と云ふべし。

高頭氏は、北越の富豪なれども、現代天下の富豪が、徒らに安逸遊惰に耽る者と、大に其の撰を異にし、特に山岳に對して趣味を有せらるゝこと、殆んど其の天性と云ふべし、曩には巨資を投じて、日本山嶽誌の篇著あり、近くは山岳會の柱礎となりて、献貢せらるゝところ多し、今夏日本アルプスの横斷旅行は、終始氏と寢食を共にし、其の起居を見るに、其の山岳に對する熱誠、實に吾人をして、敬服せしものあり、吾人の殆んど耐ゆる能はざる數日の露宿にも、晏如として曾つて一言も其の苦を言はず、克く其の困難に堪え、不足を忍び、危險を犯し、地質の研鑽、植物の觀察等に、深く其の意を留められ、高山植物の名稱、特性等、此旅行中に、其の一般に通せらるゝに至れり、嗚呼世に熱誠程恐ろしきもの無し。

午後二時、余は高頭氏と共に、二名の人夫のみを率ひて、常念岳に向ふ、常念の雄姿、目前に聳ゆるも、起伏連亘せる連嶺を渡ることなれば、心のみ急がれて、足進まず、且つ天候思はしからざるを以て、白露峰を蔽ひ、濃霧屢〻谷底より起り、咫尺を辨ぜざりしことあり、特に常念の頂に近く進みしときは、濃霧四方を鎖し、四圍を展望すること能はず、吾等は夕刻までに人跡絶えたる偃松中を下らざるべからざるが故に、遺憾ながらも、眞の絶頂を極めずして、一ノ俣の露宿地に向ふ、時に午後五時なりき。

德本峠と槍ヶ岳

河邨白水

去年は飛驒で雨に會つて、大しくじり、乘鞍も大暴れで中途から引返す、白山も白川村へ行つたら大雨で、平瀨御母衣あたり、びしよぬれになつて柳ヶ瀨峠から越中へ逃げるといふ有樣。今年は何でも、會稽の恥をすすがなくてはならぬと云ふ意氣込みで、東京を出て信州に向つた。西から征めて失敗したから、今度は東から征めやうと云ふ計畫。先づ淺間山に登つて足だめしをやり、それから今か引くらん望月の駒と云はれた望月の里を經、柘榴石の產地、和田峠から諏訪に出で、鹽尻峠を通り、松本へ行つた。幸にも連日晴天だつたので、氣もちもよく、夕照を帶びて松本の知己の家に着いたのは、八月五日であつた。

始めの計畫は、白骨から乘鞍へ上つて、野麥へ下り、日和田から御岳……と極めて置いたのだが、知己の家に元巡査をして、白骨からあの邊の山の中を歩いた人が居たので、種々話しをしてる內、急に上高地温泉の話が出た。僕は白骨以北、梓川の岸には人の住む樣な家はあるまい、よしあつたにしても豚小屋然たるものであらうと思つて居たのに、長野日報に廣告まで出して居るからは、せめて鹽原の元湯位の家はあるのだらう。元巡査の先生に聞いても、何しろ十年も前の事で、其の頃は小さな家が一軒あつたばかりと云ふ事だけで、今の樣子はわからぬ、多分去年あたり、建てたのであらうとの事であつた。考へて見ると烏水氏の紀行文に、神河內と書いてあつたのは、そこであらう。若しさうすると、そこからは槍ヶ岳は近い、と思ふと、急に行きたくなつて、乘鞍ナンカは跡まはし……ウナの電報から先に形付けよう。新聞には島々から上高地まで林道が出來て、婦人小兒も樂だと書いてある。してみると、其間にあると云ふ德本峠も何でも無いと、宇宙も飮んでしまつた意氣込み。八月六日は別に急ぎもせず、今日は樂に日の中に上高地へ行けると、笠一つ杖一つ、孤影飄然として出かける。

渚村測候所の前を通り、犀川を渡るころから、天氣があやしくなつて來て、風が吹き出す、莫座が背中で母

衣みたいになる。おさえて、西へ〳〵と進んで行くとポツリ降つて來る、畜生と思つても、切角出かけたのに今更戻るのもいやだ、行く所まで行けと平氣で歩き出す。却つて日が照らないで、涼しいなんて負け惜しみを云ふ。云つたつて聞いてくれる人は無い、道に生えてる桔梗が頭を下げて、御禮をしてるばかり。島立まで半里。そこから新村まで一里。所謂日本アルプスは段々と近づいて來る、唯雲が多くて、鉢盛とか大明神とか云ふファンドシかつぎばかりで、大鵬横綱はちつとも見えない。見えなくたつて、あるに違ひ無い。あると確信して疑はぬ。此の道を行けば必ず槍へ行ける。十里で見えなければ、十一里行く。十一里で見えなければ十二里行く。足は一歩一歩山に近づいてるに違ひない、萬歩の距離で槍が見え無なければ千歩で見えるだらう。若し千歩で見えなければ百歩。十歩。一歩で見えるだらう。遂に頂に上つて尚、槍が見えなかつたらどうする。それは見え無いのがあたり前だ、自分で自分の頭が見えるものか。そう成つたら、其時はもう槍に同化されたのだ、自ら槍の一部に成つたのだ。自分で見るにはあたらぬ。人に見せる位置になつたのだ。此れ程目出たい事は無い。

その内に雨が止む。官林の内に新道が付いてるが、何だか左の細い道を行きたくなつて、其方へ行く波多（ハタ）の村を抜けるとさきの道と一緒になる。梓川が見える。やがて其の岸を行く樣になる。川幅は割に廣うい。水が奇麗なのは、まだ俗塵をあびないからであらう。此れから此の水源へ行くのかと暫く川を眺める。向ふ岸には小さい道が、水から餘程上にある。この道も此んなに上の方にあるんだらうか。松本のうしろの山は段々低くなつて其代り、行く手の山は、追々高さが增す。赤松（アカマツ）をすぎ、少し行くと上等の木橋がある。けしきのいゝ所だ。渡つて左に折れると、大野田（オホノダ）。山はます〳〵せまつてくる。半里で島々。こゝまでは平凡な道で、別に坂も無ければ峠も無い。至つて樂な道だ。こゝから參謀本部の二十萬分一に無い道に這入る。腹も多少へつたから、こゝで晝食を食ふ。上高地までどんな道かと聞いても給仕に來た女は知らぬと云ふ。こゝから行く人があるかと聞いても知らぬと云ふ。温泉は勿論碌なものではあるまい。唯氣になるのはそこ迄の道だ。果して新聞の通りかしらん。地圖は相手にならず。兎に角出かけるに限ると十一時半頃玆を出て林務所郵便局を右にして突きあたると、其處に新らしい木に上高地温泉株式會社と書いて、下に五里十八丁とある。横の家には上高地行荷物運

搬所と云ふ札の懸つてる家がある。思つたより整頓してる樣だ。此の分ならと、又バロメーターが動き出す。同時に天氣が變つて來て、又候雨がポツツリ〳〵。そこを右に折れて(左は白骨道)村をぬけると行く先には、大きな製造所みたいなのがある、破產してしまつたといふ製紙場である。雨は休まずに降る。橋の上を番傘をさして渡つてる人がある。高い山深い水、そこに橋と雨と番傘、一寸不折流の畵でも書きたくなる。その橋を渡ると急に山かせまつて來て、木が深い、雨の故か、薄暗い寂しい道だと思つて、狹い〳〵崖道を行くと、岩魚捕りの歸つてくるのに逢ふ。二三丁したら、少し地が開けて小屋が二つある、主人は留守か主人が無いのか、內らには切れた草鞋が四つ五つ。山は胸を壓す。どうして此の間を行くのかと思ひながら、流に沿ふて行くと、知らぬ內に一つ宛廻つて行く。一つ過ぎると又向ふに代りの山が來る。然し谿の景色では飛驒白川村の方が善い。鳩谷椿原小白川五六里の間水と岩との大爭の結果山は水を通すまいとする水は通ると云ふ。山は右を防ぐと水は左を行く。かなはぬと左を防ぐと右へ廻る。加勢すると云つて大きな岩の山が二十丈三十丈行手に立つ。水は其腰をめぐる。更に防ぐ。よける。水も一生懸命。岩も負けぬ氣。何千年何萬年爭の結果で出來たあの崖とあの水。天下あれ程の景はあまりあるまい。此の所の川は何だか勢が無い樣だ。否勢があり過ぎて岩の方が負ける。花崗石は弱い。水はこゝぞと我が儘に流れる。其の水をあつちへ渡りこつちへ渡りして道が付いてる、幸にどこもりつぱな橋がある。これが林道の有難さであらう。怪しや白烟一條夢となく幻となく立つてるのを近づいて見ると山小家一つ。中には人は居らぬ。岩魚捕りが一夜を明かす假りの宿かとその前を通つて行く。左の方小高い所に上等の家がある。何かと見ると林務所出張所だ。雨にも椽は濡れて居らぬ。內は靜かで人の居る樣子も無いが下駄一足とマッチ一箱一は下に一は上に。主は晝寢の最中か。起すのも入らぬ事暫く椽を借りて休まう。萬山の懷にだかれて一水の行末を眺める。雨は沛然として降る。雲も遠慮無く山を隱す。若し此の家に人が居なかつたら前も後も數里の間我より外に人は居らぬ。よしこゝに人が居ても今寢てる。よし起きて居ても生きてるか死んでるか寂として聲も無い。居ても居ぬと同じ事だ。一人此幽谷に捨てられて一人此の谿谷を溯る。寂しいけれど面白い。隨所にすきな事する。休まうと思へば休む。歩かうと思へば歩む。走ら

うが跡から苦情いふ連も無い。止らうが不平を云ふ友も無い。草鞋に相談するとまだ十里位大丈夫と云ふ。去らば立たう。

ここは風呂平（フロダヒラ）と云ふ。ここから更に川を何度か渡つた。渡ると云ふも皆同じ川だ。崖に道が付けられなくなると川を渡つて向岸に付ける。向岸に岩があると此方に戻る。丁度白蛇と黒蛇ともつれ合つてる樣だ。我は黒い方を行く、水は白い方を行く。我は上り彼は下る、いつになつたら離れるであらう。道幅は廣く坂も緩んだ、林道といふ譯であらう。進んで行くと遂に少し廣い原に成つて白檜の森が見える。其下に木標が立てる。右北澤左上高地道。左の道を行くと南澤の岸になる。谷は餘程狹くなつて居る。道の上るより川の斜面の方が急なので今迄下の方に見て居た水と並んで行く。今迄は川。今は谷だ谷底だ。水は不規則に岩石の間を通る瀧になるかと思ふと淵になる。淺い所深い所。岩の凹みを〳〵と流れて行く。玉澤橋せと橋を過ぎ少し行くと岩魚留（イハナドメ）の官舍がある。八疊敷き位の座敷。疊は勿論無い。側の棒には距風呂平官舍一里十八丁廿七間、距島々二里三十五丁三十間、距峠上一里四丁十六間。

小降りにはなつたが全く晴れはせぬ。二時頃絃を出ると砂利道でもうそろ〳〵峠に近づいたが、谷は尙横に流れてる。獨鈷嵐橋などいふを渡つて道は遂に南澤から離れて、德本峠となる時、人氣の無い山道で、ごや〳〵と四五人連に會ふ。髯の生えた人、女の人、人足、温泉へ行つたのであらう。いよ〳〵峠だ。道は廣いが阪はあまり緩と云へ無い。雨は急に降り出す。いやでも登るごと〳〵と阪を上つては曲り、曲つては上る。頭の上に蔽ひかぶさつてる木からは雨の加勢に雫を落す。道の横の熊笹はどれもぬれてる。腰をかけて休む事も出來ぬ。もう一里程來たらうと思つて後ろを向くと谷は一面の雲。十回二十回までは曲りを數へたが跡は止める、數へても減りはせぬ。坂は少しだるみになつたが又一しきり大雨が降る。草鞋は片方切れる。この眺望の無い寒い峠を獨りで雨の降るのに行く物ずきと人は云ふだらう。物好だ我ながら物好にあきれる。歩きにくい足は一層重くなるが、そんな事を云つて留まつても居られぬ。又登る。休めと足の底から云ふ今少しと頭が答ふ。一曲したらば必ず休めと足が云ふよしと頭が云ふ。一曲りする足は進まぬ。暫くすると進めと頭が云ふ足が進

む。休め休まぬと問ひ答へる。遂に頂上へ來た。少し平地になつてるが小家も無いし景色も無い。是れでは天氣でも何も見えぬつまらぬ處だ。然し此れが新道―林道で舊道が別にあるのかも知れぬよしあつてもどんな坂かと思ふと行く氣は出來ない。捨草鞋をはいて下り坂にかゝる。下りは早い駈ける樣にして池見峠澤、落合、千々折など云ふ橋を渡つて瀨を左にして下つて行く。雨は止まぬ前より甚しい。山は何も見えぬ穗高も燒もだ雲の中だ。木かげに休んで着物をしぼる。しぼつてもしぼつても水が出る。冷い水が出る。黑澤橋へ行く少し平らだ。下黑澤橋からは森の中になる。小家を左に見ながら休みもせず雨の中を西へ〳〵と行く。木が立つてる右山道左上高地。川を渡り森の中に這入つた。這入つたがこれから上高地まで何町あるか分らぬ。道は急に惡くなつて小さくなる。雨の爲めか薄暗い今少しで夜になりそうだ。早く〳〵と道に順つて南へ行く。切角北へ來たものを南へ戻るとは氣がきかぬ梓川は木の間から見える。槍は其の川上、北の方だ方角が違ふ。兎にも角にも頂から二里餘と云ふ其二里餘はまう來たであらう村が見えてもよさそうだと木の間をすかしてもわからぬ。川もどこかへ隱れた。やがて人足に會つてもう二十丁と聞いた時の驚きと嬉しさ。それから牧場を左にして梓川の木橋を渡り笹の一杯生えてる道を下りて向ふに夕もやの間から人家の見えた時のうれしさ。飛ぶ樣にそこへ行く。山中の一軒家湯の中で足を伸して雨の音を聞く。あゝ明日も雨か。雨なら雨でよし天氣になるまでこゝに籠城する考へ。枕に聞えるのは梓川の音、雨の音、懷中時計の音。松本から島々まで四里半。島々からこゝまで五里半。計十里。

翌日雨と思つて起きると、奇妙に晴れる。これならば出かけたにと思つても六日の菖蒲。兎に角案内をたのまうと思つて聞くと裏で下駄を作つてるオヂさんに賴めと云ふ。會つて槍の事を賴むとオヂさんは島々から來てるのだが村で夏蠶が急がしいから歸つて來いと云つて來た。明日歸らうと思つてると云ふ。外に案内する人があるかと聞くと山でたがを作つてる男がすればすると云ふ。どうだ切角來たのだから案内してくれぬかと云ふと左樣切角御出になつたのだからしよう。が、明日は赤澤へ泊つて明後日上るんだと云ふ。日歸りには出來ぬかと聞くと、出來ぬ事も無いと云ふ。夫れから交涉の結果案内も早く歸へりたいし。此頃の天氣で赤澤に泊

る翌日雨といふ事になつてもつまらぬ。午前三時出發。日歸りにする事にして分れる。

此邊に池がある。南に田代池北に宮川池。田代の池には松島があると云ふからゆかた一枚で出かけたが梓川に橋が無い。淺い所をさがして渡る。其水の冷たさ。アイスクリームの中へ足を入れた樣だ。然し山の川は皆これだから別に驚きもせぬ向岸へ渡つて無茶苦茶に行つて遂に池へ來た。松島も何にも少しも景色はよく無い無駄骨折つて歸りに川で流に足をすくはれ着物も何もぐしよぬれ、下駄は流れて白骨の方へ。

こゝから白檜の一面に立つてる森を隔てゝ燒岳が見える。飛驒蒲田へ行くのは其横を通つて行くんだとか熊笹はひどいが松本島々あたりから船津蒲田へ行く近道なので、毎日一人か二人は通る其の人が大抵上高地に一泊する。溫泉客は無いが此んな連中やら人足やらで圍爐裏の周りはにぎやかだ。穗高山は日歸りに行ける奇岩やら怪石やら面白い所だと云ふ。夕方うす暗い風呂に入つて明日の天候を祈つた。

いよ〳〵八月九日。午前二時半目が覺める氣の故か奇體な事と思ひながら支度してると案内が起しに來た荷物は至つて少い望遠鏡に帳面位。朝食をすまし三時十五分案内と唯二人月明りで明るい道を北へ〳〵と取つて行く。道惡や獨木橋や何もかまはずに急いでゆく。今日は屹度晴天だと思つて居たのに月がはつきり顏を出さないのはチト氣にかゝる。然し大した事はあるまいと話しながら德本の澤へ來た。見ると槍岳連峰から近隣の山へかけて一面のもや。追々晴れて行くならいゝが散ずる模樣も無い。一所にじつとしてる。氣の加減か雨が一つ二つ來た樣だ。殘念だこゝから引き返したとあつては己れの名折れだも少し行かう。天氣にならぬとも限らぬ。あれ〳〵日光がさして來たにと案内を勵して溯つて行く。木賊澤迄は林道が付いてる。その間は所々平地もあつて牧場になつてる。放し飼の馬が人の來たにも平氣でゐる石をほうつたらやつと森の中へ逃げた。穗高の麓梓川の岸幾百頭の牧馬は人間と云ふものを知らぬのかしら。

林道を出ると梓川は左に流れてる。川原に下りて第一回の渡渉をやる。こゝは川幅も廣いし川原もあるし足がぬれたゞけで何の事も無い。今朝心配した空も晴れて來て靑空が見え出した。時は五時頃であろう。時計は昨日かけるのを忘れて止まつてしまつた。五時と直しておく。西岸を暫く行つて又川を渡る。今度は少し深い膝

までかくれる。長い杖を兩手で持つて潜いで行く此邊の人は川を渡るのを潜ぐと云ふ。實際潜ぐつもりで無くては行かれぬ。杖のみを便りに此の急流の冷たいのを渡るのは東京灣で嵐に遭つた時のボートより潜ぎにくい。こゝから川の中を行つたり、岩の上を行つたり、又いよ〳〵川が深くなると熊笹の中を行く。下は岩だ、笹は身よりも高い。案内の跡から道ともつかぬ所を杖と蓐座で立海ぎをして進む。案内の姿を見失なつたのが最後。道はさつぱり分らぬ。兎に角辛うじてそれがすむと又川だ。瀬が急で深い、股までビショぬれになつて陸へ上つてから寒い〳〵と云ふ。何しろ叢、川、岩、崖、此の四字が相次いで出て來る。此内のどれか一つが無くなればと思つても、意地惡く二つも三つも一緒に來る。川が來ると岩が必ず伴ふ。叢になつても下には岩がある。崖を上ると岩があつて苔が生えてる。草鞋は川のたび毎にいたむ。三足の大切なわらじを一足はきかへて少し行くと亦股までの川だ。赤澤までまだ一里餘もあると聞いた時のびつくり。さてこそ二日がけにするのだと知つた。が時間は早し辨當はあるし川渡りも笹くゞりもなれたから別に案じる事はない。一萬尺であらうと何であらうと朝めし前に踏破つてくれると進むと又川だ。こゝが一番こわい所だと云ふ。本當にこわい所だ石が凸凹してるので杖をつくのに大に閉口する。深さは股より少し上まである。

やがて本股と二の股の出會う所へ出て本股を渡り再叢の中へ這入る。石が餘程大きい。苔か水かひどく滑りやすい。足下も見ねばならぬ。案内も見ねばならぬ。上も見ねば木の枝に頭を打ちつける。足も動かす手も動かす。八日前に西洋人の來た時に作つた道と云ふのが素人の僕には差別が付かぬ。案内先生獨り得意になつて笹を分けて行く。上から二人來た。岩魚釣りだゆうべ赤澤に留つたと云ふ。どうだ山まで行かぬかと尋ねるとこゝまで來て又たかへるのもと云ふ。して見ると赤澤はまだ遠いのか知ら。笹の間から向岸の山を見て目的物は何處にあるのか知らずに行く。百歩か千歩か乃至一萬歩で行けるだらうか五六丁もつと來た頃やう〳〵其赤澤の岩小屋に着いて時計を見ると七時半さつきの男のたき捨てた白樺の燃えさしを燃して結飯を燒く。誰でも知つてるだらう、あの半分餅みたいにした飯だ一個で二合餘もあるやつだ。夫れを燒いて食ふ御かずはさけ。覆ひかぶさつてる大岩の横から空を見上げた時今迄晴れてた空は急に曇り出して來た。が萬更今にも降ると云ふ

様な氣の早い様子も無い。降ればその時こゝまで來て引き返すのもと云ふあとから案内も降るまで上ると云ふ。

八時出發。

笹が小さくなつたのは山に近いのであろ。少しで本股に出る。この上は槍ヶ岳だ。此の水は雪のとけて流れてくるのである。向ふの山の峽には雪が見える。槍にも雪はあるかと聞くとあるとも二三個所もあると答へる。本股の谿流の中を岩の上を飛び飛びいやと云ふ程行くと前には一面の雪の谷。銀沙をまいた盆景にしては沙のまき様が多すぎる。一周前にはまだ〳〵多かつたとか。所々割れて下に水の流れてるのが見える。今乘つてる雪の下は大きな石と早い冷い川が流れてると思ふと我知らずゾッとする。この雪は一二丁行くと減つて岩の上を行く方が歩きよい。赤や黄やの花の間を通つて雪の中へ出る。前より斜面が急だ。上側だけ融けて居るので滑りやすい上を杖と足踏みで登つて行く。こゝは二三丁ほどある。その上が坊主小屋の石室。中は六疊位。氷が張つてる。一周間前には雪で入口が塞つて居たと云ふか今は悉皆解けてが此の雪が殘らず解ける前には新らしい雪が降



近邊に冷い雪水が流れてる。割合に早く解けるものと見える。

つて來るであろ。この小屋は昔某坊主が此山を開いた時居た石室だと云ふので小屋の上に小さな石に仁王みたいなものを彫つたのが乘せてあつて開山蟠龍上人と書き付けてある。昔どうして此山に上つたらう。えらい坊主だ。九時更に進んで第三の雪の中を通り殺生小屋へ十時に着く。こゝから槍がよく見える。今迄霧にかくれてよく見えなかつたが茲で其の全形がわかつた。そんなに高くない。何の十間二十間多くて三十間。岩だらうが石だらうが三角標立てに上つた人もあるのに某洋人の樣に綱を腰につけて上から引つぱり上げてもらつたりしてたまるものか。雨はまだ降らぬ。サア〳〵と急ぎ立てゝ案内を歩ませる。ちよこ〳〵と歩いてるのは雷鳥のめすだ石を投げても中々あたらぬ。仕舞に岩の向ふへ行つて見えなくなる追ひかけるのもと思ひ切つて駒草長之助草(ゲ)等百花爛熳の大植物園の中を蝶と一緒にだん〳〵上つて行く。遂に信濃飛驒分け目の馬の背に立つて前と後と較べる。槍へ上る前に先づ南の方の小槍に上つて左梓川の谿谷、右蒲田谿谷の中央に立つて四方を眺める。川は見えない唯山と雲と雪と霧ばかり。乘鞍が折り〳〵雲から見えるが御嶽は見えぬ。笠は見える。名のわからぬ名の無い山は幾つも見える。東の方は霧でよく分らぬが案内は常念が見えると云ふ。どこにと云ふ内に霧がかぶさつて最早見えぬ。さて槍へ上らう。近づくと成る程急だ壁の樣だ、杖はすてゝ噛り上がる。踏むとガラ〳〵と石は何十丈何百丈の谷底に轉げ落ちる。其底には千古不消の雪が積つてる。一歩一歩足堅めをしながら登つて行つて一萬一千六百尺槍ヶ岳の頂三角標の下で休む。日本アルプスの一峯に登つて日本を大觀すると山と雪ばかりだ。人の住むけはひも無い。一切の汚物をかくしてたゞ清い山ばかり見せてる。これでも十里二十里三十里と出ると裁判所もある、警察もある、泥坊、强盜、巡査、探偵ナンて人種も居るのかと思ふと、いやになる。昔始めて出來た時の儘ならこんなであるであろ。風も無く雨も降らず、割合にあたゝかい。が霧が追々多くなつてくる。

一寸横に石の宮がある。中に木の箱があつて文珠菩薩やら何やら四五體あつた。三角標下の石の上に蟬が居たのを案内に見せると、珍らしい〳〵、こりや神樣だと云ふ。

十二時下山。蒲田へは下りず、元來た道をかへる。霧の中雪の上を磨り下りて、坊主小屋の近所へ來たら、

霧の中から二人連の旅人が現れる。鍋釜を負つてる。今夜殺生小屋へ泊つてあした蒲田へ行くと云ふ。全く人の通らぬ道でも無いらしい。雨になつてきたので雪の上、岩の上、一散に走り、本股を下りて赤澤へ歸つたのが二時、雨はます〳〵降つて來る。殘りの握めしを急いで食べる、明るい内に上高地へ行かうと云ふので、案内は急ぐが、川の中笹の中を、そんなに急がれるものか。幾度案内のかげを失つて、大聲で呼んだらう。幾度すべつて轉んだらう。莫座は木に引つかけて裂く。ズボンはかぎ裂きをやる。草鞋はきれても代りが無い。そこへ腹がへつて來た。足は無意識に上高地へ引かれて行く。一生懸命は早いもので木賊澤で、まだやつと五時。こゝから最早、川の中へも這入らず、雨も小降りになつたので、ゆつくり歩いて、丁度燈火の點いた七時頃、上高地へ歸る。山はてきないナと山語を使ひながら岩魚と茸の晩飯をかき込んで、始めて人心地がする。足より腹の方がまいつた。

一昨日は穗高へ登りかけて中途で雨で引つ返した人があつた、其人は昨日の朝早く歸つたと云ふ。神ならぬ身は大天井、常念、蝶ヶ岳の秀峯から轉げ込んだ烏水氏であつたとは知らなかつた。德本峠で會つた四五人連は烏水氏と同時に泊つてゐた郡長の一行であつたらう。これも後で聞いた話だ。

槍ヶ岳は上高地から六里ほどある。が山登りに里數を云つても不明だ。上高地から八九時間かゝると思へば樂だ。通常は赤澤へ一泊する、僕の連れた案内は二三十回上るが、日歸りは僕共で二回目だと云つた。日歸りは、ちと急行車的だが、そうかと云つて、叢の中や川の中をぐず〳〵行くのも、無用の事だから、急いだ方がいゝだらう。山頂の眺望は、何處でも朝の方が善いから、遲くも晝までには頂まで行かねばならぬ。出來なけりや赤澤泊りが良いと思ふ、岩魚、穗高茸、ふき、わらびは常に膳に上る。獸は歸りに木賊澤近邊で熊の糞を見たから居るのであらう。田代池には靑大將が居るとか、捕へて賣ると宿の人は云つた。

此行急に用が出來て松本へ歸り今年も亦乘鞍は行けなかつた。隴は得ぬが蜀を得たので嬉んでる。

笠ヶ岳燒岳穗高岳紀行

林　並木

(一)　鎗岳絶頂より蒲田温泉に至る

八月二十四日　前夜鎗ヶ岳頂下の岩窟に意外の奇遇を喜びしも束の間、我は此の朝八時「鎗」の麓にて志村、高頭氏等のにぎやかなる一行と別れて、案内者と唯二人、雲立ち迷ふ蒲田谷をさして下る、幾重の谷の彼方なる笠岳は我と相達して手を出さば届かんばかり近く、巍然として群嶺を抜き、其輪廓いと秀麗にして鎗ヶ岳の恐ろしきに似ず、明日は必ず其絶巓を極めんとせる我に多大の奨勵を與へたり、げに「日本案内記」の愉快なる記事に接してより以來、日夜心にかゝりたる鎗、笠、穗高の三嶺は、必ず此一夏に登攀すべきを決心して出でし我なれば、已に鎗ヶ岳の登臨を終りて、其山容の怪奇なる、其通路の險絶なる、其眺望の濶大なる、流石に我豫想に違はざりしを見て喜び限りなく、勇氣日頃に百倍して、此さき如何程の難路あるとも厭はじと誓ひしが、蒲田の谷の險惡無比なるは、殆ど此谷を過りたる最初の旅客なる烏水氏の爲に充分に嚇されたれば、我を案内する重任を負へる市作隱居の未だ一度も此道に經驗なしと聞きては、流石に心臆せざるに非ず、されど幸に烏水氏の紀行は出發前數回反讀して殆んど其要領を暗誦したる程なれば、此を唯一の案内者とせんには、彼方遙に山の端に白氣の見ゆる所をそこぞと聞くなる蒲田の村までは、四時を過ぎずして必ず達すべしと安心し、遙かの谷底まで綠草の美しく布き續きたる急なる山側を下るに、叢中に石ありて足を噛むこと一再ならず、苦難限なし、草本帶漸く盡くれば次には髑髏の如き大圓石の殆ど直線的に累々連續し、而も水少しも無き急峻なる谷底に入り、歩行(歩行に非ずして跳行なり)却て稍易きを覺ゆ、此を下ること良久しくして始めて水あり、少休、渴を醫して進めば水地下に潜入して一旦斷絶し、暫らく下れば復現はれ、現れては復絶え、遂に頂上より三千尺ばかり降りしと覺しき頃、河床全く平坦となりて、僅ながら不斷の水は緩く流れ、底には水垢着きたり、兩側にも少許の平地ありて、樹木繁茂し草花亂開せり、此の平坦なる河床を曲り降ると暫時にして、右方に樹枝木葉を以て屋根

を首げる甚だ脆弱粗末なる小屋あり、近頃測量員等の假設せしにや全く一時的のものなり、仰で前面を見れば、穗高續きの山脈の、中腹より以上は全く裸なるが、怪絶奇絶なる岩石の鎗を幾つとなく雲間に躍らせ、其襞多き屏風に我行手を押塞ぎたる有樣頗る物凄く、我はいつしか深山の重圍に陷りて、復逃るゝに道なきを思ふ、此より河床俄に急峻となり、險絶無比、岩石亦皆巨大にして象の如く駱駝の如く、一石より他石に移る每に概ね三四尺を下る、烏水氏が始めて河床を離れて岸上を過ぎ、密生せる樹林と鬪ひ、繁茂せる叢莽に苦しめられたるは蓋し此邊ならん、我は水少き時に逢ひたれば、幸に此崖上を渡るの苦難を免れたれど、絶えず奔流を徒涉し石階を跳び下るの衝動(ショック)も亦決して愉快なるものには非ざりき、かくして下るうちに、稀には朽ちかゝりたる倒木を橋とし、樹根岩角によりて崖上を過ぐることもありしが、其處々は微ながら人の足跡の如きものありて、困難は豫想よりは幾分か少かりき。されど之を以て鎗岳信州登山口の易々たるに比せば素より同日の談に非るなり、川は穗高支脈に觸れて急に右折し、勾配も亦漸次緩やかになりぬ、我等は此處にて河を左岸に渡り、猶絶えず磧に沿ひて下り、とある水邊にて午食を喫し、少休の後ひたすら程を續けしが、遂に兩岸迫りて赤禿をなし、到底通過し難き所に達す、此ぞ烏水氏の紀行に所謂「熊飛」なるものならんと心得て扨は小屋も遠からじと打喜び、磧窮りたる所より左岸をさして攀ぢ上る、少しく上れば熊笹小徑を埋めて困苦名狀すべからず、僅に脚に抵抗なき所を擦り足して探り進みしが、數丁にして藪を出づれば、果して此のあたり切開きて作れる、比較的立派なる板小屋を得たり、人居なば茶にても乞はんとて覗けば、食器など整然と並べあれど、主人は山深く入りたるにや在らざるに失望し、それより復深き熊笹莽むらの裡に沒し去りて目は殆ど其用をなさず、幾度か突起せる石に傷き倒れたる樹幹に躓き、折しもサツと落ち來れる夕立に逢ひて全身濡鼠の醜態を演じ、或は餘り草深きに辟易して態と路を避けて河原に出で、或は河原の苦しさに堪へで復路に出で交も亂石と惡草とに膏を取られて山川の景色いと佳きも今は目に入らず、斯くて小屋より漸く一里ばかり辿りしと思ふ頃、右方より一溪水の合流せるを見る、此れ所謂「左股」にして我が沿ひて下り來りし「右股」と共に源を鎗岳に發するもの、水量の多きは「右股」と伯仲の間にあり、此より先は草も少く道も稍可なり、猶一里にして漸く下方の對岸に古風なる蒲田

の人家を認め得る樣になり、其より河原の大硫氣を右に眺め、山側に沿ひ、釣橋を渡りて村に入り、昨年泊したる松下方に投ず、時に午後三時なりき。

（追記）鎗岳頂上より「右股」を經て蒲田温泉迄五里餘（頂上より板小屋まで三里、餘、小屋より温泉まで二里）と稱す、我を案内せし市作隱居は、斯かる難場（ナンバ）は二度と通らぬなどと弱音を吐きしも、平水ならば左程恐るゝに及ばず、若し蒲田より遡に鎗岳に向ふとも、朝早く温泉を辭せば、日沒前に絶頂近き「坊主小屋」又は「殺生小屋」に着することゝ易々たるを信ず、若し前夜板小屋に一泊して翌朝早く出發せば、健脚のものは半日にして能く絶頂に達することを得ん、小屋より「左股」出口迄は路あれども、嘗て苅り明けざるを以て、年を經るに從て歩行益困難を加ふべし、今にても、烏水氏旅行の時よりは、餘程惡くなり居るに似たり、我が蒲田にて聞く所によれば、鎗岳蒲田間は始終「左股」に沿ふて上下する方、道程も近く、難場も無しとなり、現に笠岳登山のせつ二水合流の所より入りて少しく「左股」に沿ひて溯りしに、比較的立派なる徑路の、其右岸に沿ひて猶上方に走るを見たり、案内者は此徑路殆んど岳の絶頂（ダケ）までつゞき居れりと言ひしも、こは稍疑ふべきに似たり、兎に角烏水氏及び我等の通りたる「右股」よりは「左股」の樂（ラク）なるは事實なるが如し、切に世の登山家の實地踏査を望む、「右股」の如きは少しく出水の時は危險甚し、決して通過すべからず、鎗岳絶頂より下瞰せば、殆ど並行せる「右股」「左股」が僅に一小丘によりて區別せられ居るを認むるを得べし。

（二）蒲田温泉

蒲田ほどをかしき温泉場は日本にても類少かるべし、地は山間に僻在して戸數凡て七軒、皆農業兼宿屋なりと稱すれども、少しも宿屋らしき所なく、客ありて至らばじろ〳〵と見渡すのみにて、暫らくは一語を發せず、歡迎の辭一つ述べず、客より賴まば諄々宿泊を許すといふ有樣、虚言の如しと雖も實際なり、之を熱海、鹽原、伊香保などに行きなれて、温泉とは斯るものぞと心得居る東京あたりの紳士などに見せしめば、定めて開いた口が塞がらぬ迄に驚くなるべし、飯も賴んで漸く炊いて貰ひ、菜も面倒がりて碌々に與へず、泊るなら泊れ、厭（イヤ）ならば止（ヨ）しやれと言はぬ計りのもてなしは、殺風景と言はんも愚にて、病人ならぬ者には一日も辛棒出來難し、こは昨年來泊の節、便所の木片と共に已に驚き終りたる所なれば此度は深く驚かず、尤我宿なる松下は流石に蒲田第一等と名を取れる丈ありて、副食物として菜葉（ナッパ）や里芋の味噌汁（時としては石の如き蚕豆も添て）を給するは（よしや幾回にても續けて同一のものを食はしむることはいへ）まだしも大に感謝すべき所なり、飯は流石に米の飯なれど、一度炊かば其盡くる迄櫃の儘突出され、我一人にて之を食はざるべからず、（土人は米を食

ふ事なし）待遇此の如く薄ければ、宿料も從て安く、我が三泊八食の價僅に七拾幾錢に過ぎざりき、室は清潔とは稱し難きも、松下の奥なる特別室は稍可なり、温泉は稍爽快なれども、噴出の量甚少くして清潔ならず、浴場の上なる藥師堂に、蒲田八景などいふものと共に當温泉の効能を掲ぐ、例によりて入浴中患者の禁忌すべき個條を列擧せるが中に「美食すべからず」の一條如何にも氣のきゝたる書き樣にて、面白く感じたり、げに蒲田にては美食は扨置き、一軒の駄菓子屋も無し、我聞く、或時郡役所より村民に向ひて、温泉繁昌の一策として雜貨食品販賣所を設けては如何にと勸めたるに、村民は、「小供が買ひ食ひをするから」との理由のもとに斷然之を拒絶せしといふ、此れにて當蒲田村民が温泉客に對する感情の一班を卜し得べし、又此地の名所としては五六丁ばかり上なる川べりに大なる硫氣噴出口あり、甚だ偉觀なり、（鎗岳頂上より見えし白氣は即ちこれ）鎗穗高の二山も晴天の日は亦見ることを得、最後に蒲田より諸所への里程をいへば、乘鞍山麓なる平湯温泉（此處は愉快なる温泉場にて、蒲田とは雲泥の差あり）まで二里半、上高地温泉（後に逃ぶ）まで三里半、今見を經て船津町まで八里（今見船津間七里は新道にして平坦なり）。

（三）笠岳登山

二十五日　半晴、翌二十五日は笠岳登山の積なりしも、前日の疲勞未だ全く退かず、且同日は蒲田區の草刈日（他村より壯者を傭ひて年中の草を刈り入るゝ日にして、年に二回あり、他區には無しとぞ）にて案内者を得る事能はず、已むなく一日休養することゝ定め、退屈紛れに或は入浴し、或は古風なる小説などを讀み、或は樹蔭に晝寢などして僅に日を暮すことを得たり。

二十六日　快晴、朝四時提燈を携へて出發し笠岳に向ふ、案内者は中尾の獵師にして名を松葉七之助といふ、釣橋を渡りて一昨日の路を後戻りすること一里、左右兩股合流の少し上にて左折し、藪を拔けて磧に出で、丸木橋にて右股川を渡り、河岸を四五間ばかり下れば無人の古小屋あり（長崎小屋）其より道は左股川に沿ひ（川は少しく路と離れ且つ樹木に遮られて見えず）疎林の間より時に笠岳の峰頂を眺めながら進む、徑路の缺損せる所には丸太を横へて棧道の如きものを作りあれど、已に朽ちかゝりて苔いと滑に、途上幾多の岩石の、相擁して洞穴を爲せるものも、亦一面に深き綠苔を以て封ぜらる、小屋より十丁ばかりにして道を離れて左折し、左股川を渡り、直ちに前面なる磧の

大石を踏みて攀ぢ上る、此谷兩側の斷崖に壓せられて幅頗る狹く、水は僅に細流を爲すに過ぎざれど、大小無數の圓石累々連續して遙に笠岳の絶頂に通じ、蜿蜒として白蛇の九天に上るに似たり、之を呼で「アナゲノ谷」といふ、上ること四十分(時に午前七時)にして險峻屛風を立てたる如き大巖石の谷を挾んで上方に走れるを見る、頗る壯觀を呈す、斯の如きもの十四五分間にして屛風岩(假稱なり)始めて絶え、六七十度の傾斜をなせる狹谷相次で左右に現はる、案内者一々之を指し「彼方の瀧(絶壁のこと)にては我昨年の春羚羊(シヽ)を擊留めたり」「此谷にては今年の春雪中に二疋の大羚羊(シヽ)を認め、峰まで追ひ上りて一頭擊留たり」「彼の急なる崖にて昨年我甥なるもの一疋を追ひまくりしが、足を滑らして雪と共に轉落し、大負傷をなせり」「一昨年五人組にて此等の谷々を狩りあるき、熊二頭と羚羊十頭を獲たり」等いと誇り顏に語る、土人は羚羊を單に「シヽ」とのみ呼べり、見るに雪なき時さへ、仲々人の攀ぢ得べき所とは見へず、扨も危うき商買かな。我れ即ち彼に向ひて「汝等獵師のうちには崖より落ちて死ぬるものもあるべし」と問へば「怪我せしはあれど死にしは未だ無し」といふ、猶上りに上りて、七時二十五分左方の空遙に恐ろしき白兀の峰頂、我等を睥睨するを眺む、それより谷一面の殘雪帶となり、步行稍易きを加ふ、七時四十分に至り、右方の崖に沿ひて高さ二十間ばかりの一大奇岩の、頂部に近く行拔けの大洞穴あるものを見る、「こは面白し、名は穴岩と呼ぶなるべし」と問へば「名などは無し」と無造作に答へたるもをかし、此より雪益深きを加へ、偶〻潰裂せる橫斷面に就て檢するに、厚さ時に四五間に及ぶ、傾斜も次第に急峻となり一步一步轉ばぬやうに凹所を踏みしめ踏みしめして辿る、七時五十七分雪帶の盡くる所に至れば、左方の崖に高十丈ばかりの美しき瀑布懸れり、こは意外のもうけ物よと石上に踞して賞觀すること六分間、これも名なしとの事なれば、假に白糸瀧と呼びて獨り自ら樂む、仰ぎ見れば、此より我が上るべき谷は半ば右に方向を轉じて五十度ばかりの急斜面をなし、圭角稜々たる無數の岩塊、亂堆狼藉して其上に布きたれば、登攀困難なるが上に頗る危險なるべきを思ひ、流石の我も稍閉口の氣味なりしが、遂に心を決して案内者と左右に別れ、石塊墜落の危險を防ぎながら登る、少しく足の踏み所惡ければ、ザク〳〵と音して上なる石まで一齊に動き出すに、幾回か身振ひしてそろ〳〵と攀ぢ行けば、我等はいつか瀑布を下に見て、雪帶も亦遙か遠かれり、八時二十分、左

方の矮樹疎々たる中に鉈もて少しく樹枝を切り明けたる形跡ある個所を認め、此の處にて漸く此の險惡なる難場（ナンバ）を離れて左折し（難場を眞直に上りつめて、其れより左折するも、後段に記せる平地に出づることを得唯遠くして勞多きのみ）、草生に印せる微なる足跡を便りに猶左に數十歩を上れば、早くも山の一稜角に達し、猶草地を踏んで斜に左方に行けば、彼の飛瀑の上流を形成せる二溪流の右なるものに出づ、こゝには水極めて少ければ、瀑の主源は左の雪多き溪谷より來るものならん、此のあたりより眼界次第に廣く、笠岳は西西北に其優秀なる尖頂を現はし、遙に低き穉迦岳は、山容險怪にして、惡魔の如く其左肩に蹲れり、其より此溪谷に沿ひて上ること約半時間にして（此溪谷以上には水なし其覺悟すべし）綠草一面に敷ける中に百花亂開せる稍廣き平地に出づ（九時五分）此處は可なり打開きたる所なれば、穗高、燒岳、乘鞍、御嶽の諸高山も始めて見參に入り、近くには笠岳の絶頂莞爾として我を迎ふるが如きあり、即ち始めて長時の休息を爲すことに定め、荷物を解かしめて一手に團飯を握り持ち、一手に雙眼鏡を把り、且食ひ且眺め休憩多時、愉快言ふべからず、唯遺憾なるは朝來殆んど拭ふが如くなりし青空に、此頃より漸次雲塊の多きを加へ來り、遠近の山岳やゝもすれば之に遮られんとするの恐あるを以て、悠々として久しく留ることを得ず、遂に九時二十五分此處を出發し（此あたりに狩人の小屋の遺跡あり）、頭上の一峯頂をさして急峻なる草原を攀づ、足滑ること甚しく、下方の谷底を上りしよりも幾倍の勞を覺えたり、途中休息すること二回、豫想よりも二倍の時を費して、十時十二分漸く頂に達す、此れ實に笠岳支脈の絶頂に當り、眼を放てば北方には一深谷を隔て、越中界以北の高山大岳、白雲と相交錯して雜然群居し、絶えて平地を見ず、我が上り來りし方面を見れば、雲霧驀然として飛揚し、近き穗高岳さへ時々隙間に其山腹を現はすのみ、鎗岳の如きは全く雲中に被はれて未だ一瞥をすら許さゞるなり、乃ち左折して進む、此處より笠岳絶頂までは殆ど一直線に凹凸少き山脊を傳ひ行くものなれば、勞少しと雖も猶一里程なれども、左（アナグノ谷方面）は地皮白く剝げて一木をも着けず、恰も橡の實の如き境界線を劃せり、從て右方双六谷へは何處より下るも比較的容易なれど、左方アナグ谷には、我等が上りたる唯一箇所を除くの外は、至る所土石のボロ〳〵と落つる瀧の如き絶壁のみなれば、人間の力にて到底下り得べくもあらず、實際笠岳登山道の

比較的に遠きは、全く此の一里の大迂回を爲すの已むを得ざるによれり、（案内者の説によれば、他に今一つ深林を穿つの近道あれど、却て困難なりと、ウヰストン氏の笠ヶ岳登山はこの路を取られたるが如し、）それより突起せる丘瘤幾つかを越えて、雲霧活動の大舞臺を左右に眺めながら進めば、最後の大隆起たる笠岳絶巓は漸次目睫の間に迫り來り、白雲の去來する毎に或は見え或は隱るゝ光景又なく面白し、十一時過ぎ頂下に達し、稜角ある巨石の起伏堆疊せる所を踏みて測量部員露營地のあとに至る、其構造唯石を積みて正方形の高き障壁を作り、一方に出入口を設けたるのみ、テントを用ゐし爲にや屋根の設備なし、登山者にして若し此處に宿泊せんと欲せば、廣き油紙を携ふるを要す、薪は下方偃松中に求め、水は附近の殘雪を溶かして用うるを得べし、我も渴したれば案内者をして雪塊の一片を碎かしめ、稍急峻となりし亂石帶を踏みて上り行けば、遂に十一時二十五分絶頂なる二等三角標に到着し、いひしらぬ大愉快の油然として、胸裏に湧くを覺えたり。

笠岳は東方鎗、穗高の連峯に遮られたれば眺望の大遙に此れ等二岳に及ばずとはいへど、猶北方には信越國境の群山は更なり、富山附近の海岸より掛けて能登までも望み得べく、西南には加賀の白山を始め、飛驒全國の山岳平原一々指點すべしと聞きしものを、此日我れ白雲の嫉みに逢ひて、遠き山々は更なり、下方にて見し乘鞍、御嶽の姿さへいつか白被の裡に包まれて見えず遺憾やる方なかりしが、詮方なければ亂石の上に足踏み延ばし、團飯ビスケット等囓りつゝ暫し休む、かくするうち、此時まで蒲田谷を蔽ひし雲の帳は漸次に北方に向ひて吹き捲らるゝが如く見えしかば、こは嬉しと思ふ間もなく、壯嚴無限なる我穗高の峻嶺は、忽然として我前に其深藍色の姿を現はしぬ、喜びに胸躍りて心も空に其方を眺むるうち、穗高岳より北方にかけて波形なせる幾多の峯々は、雲の退くと共に一つ〳〵現はれ來り、遂に二三分の後、我は其の奇なること天下一品ともいふべき鎗岳の絶頂、遙に南方の穗高に對立して天空を摩するを見つ、嬉しとも喜ばしとも口に言ふべき詞を知らず、恍惚我を忘れて暫時は唯茫然たるばかり、疲勞一時に退くを覺えたり、げに年頃慕ひ來し此兩峻嶺を、斯く迄に鮮明に斯く迄に近く而も一目に見たる喜びは、所謂手の舞ひ足の蹈む所を知らざるばかりといひつべく、此の印象世を終るまで決して消えざるべしと思ひたり、天も長くは此靈妙の活畫を我に惜むにやあらん、須臾

にして雲また四合し、此偉大なる英靈漢等は再び我眼前より奪はれぬ、即ち眼を轉じて北方を望めば、折しも雲やゝ薄らぎ、越中領なる幾多の秀峯朦朧として我眼に入る、されど我が最見んことを願ひし立山大蓮華の二山は遂に辨識する能はず、眼を西方に轉ずれば、簇々たる白雲の上、黒鯨の浮ぶが如きものは白山の絶頂なり、其他には山更に見えず、猶近き所には直ぐ眼下なる双六谷の峽谷、笠谷の峽谷を始めとし、高原川の大溪谷、有峰附近の連山、船津町の南方に起伏せる丘陵などは、略明に見えたれども、其他の遠山近岳は遂に終りまで姿を現はさず、我も穂高、鎗の二峯を見て已に充分の滿足を得たれば、餘り油斷して歸りの夜に入るも得策ならずと、十二時二十五分頂上を出發し、舊路をとりて歸途に就く、案内者は峯背に於て頻りに偃松の若樹と所謂「御嶽の御百草」を堀り取りしが、我は携帶の不便を慮りて途々見たる奇草珍木一も土産にせざりしは殘念なりき、かくて甚しき困難を經て復「アナゲノ谷」を下り、左股より右股に出で、疲れ〳〵て體綿の如く、無事温泉に辿り着きしは、暮色蒼然たる七時のころなりき。

（附記）笠岳は又笹島より笠谷に沿ふて上り得、双六谷は遠くして且困難なりといふ。

(四) 中尾峠（燒岳）

二十七日　目的の峻岳二つまでは已に終へつ、殘るは穂高岳のみ、されば今日は國境の中尾峠を越えて穂高の麓なる上高地温泉まで行かんに、其間僅に三里半、道もよく人通りも多しと聞けば、さほど急ぐにも及ばじとて、遲く起き出でゆる〳〵と身支度して、八時四十分立出づ、毛布冬シャツなど重きものは小包にとて昨夜主人に頼み置きたれば、脊に負ふ荷物のいと輕きに、此朝始めて降り出でたる小雨を、幾回の山上りに伴ひて最早破れかゝりたる着呉座に防ぎつゝ、愈此の眠れる如き山中の孤村を辭し、噴氣孔の附近より右に小坂を上れば、忽ち狹き平原に出でぬ、其れより野花咲き亂れたる小徑を進むこと七八丁にして、古風なる藁家點々として路の左右に横はれるが見ゆ、此れ中尾の村なりとぞ、村を貫ける一條の用水に沿ひて、額を壓する前面の山に向ひて進み行けば、やがて平地窮りて道稍險峻となり、幾許もなくして大樹生ひ茂りて晝猶暗きばかりの森林のう

ちに入る、道の崩れたるは所々修繕し、熊笹も丁寧に刈りあげたれば少しも困難を感せず、唯電光的に折れ曲りたる道の果てしなく長きに、折から雨中とて途中に腰卸すべき所もなきには閉口一方ならざりき、最早村より一里半も來りしと覺しき頃、漸う大樹の斜に道に突出でたるものありしかば、莫座打ひろげ、樹幹を背に負ふやうにして暫し休みつ、腹飢えたれば殘りのビスケットなど食ふ、それより少し上れば路傍に大石覆ひかゝりて其下空洞を爲せるがあり、此處にて復た一休し、充分元氣を恢復して再び程を續く、此時雨殆ど已みて林中稍明るみを增し、午後には晴天となるべき徵見ゆ、上ること半里許にして路の右四五坪程の間に薄き白氣の噴出するもの見え、微かに硫臭を感ず、其より猶進むこと一丁ばかりにして遂に國境なる中尾峠の頂上に達したり。

中尾峠は燒岳の絕巓に當り、其南には急峻なる硫黃岳の、猶千餘尺を拔いて頭上に聳ゆるあり（此山頂は一面の硫黃にて沸騰の狀壯觀を呈すといふ）、北方の小隆起は絕えず上昇せる一面の薄烟に包まれて、附近なる松の立木の唯朦朧と透きて見ゆるのみ、いと荒凉たる光景なり、こは聞きしに違はぬ奇觀よと、熊笹刈り明けたる路を踏みて、數十步にして其の頂に至る、見渡せば絕頂より少しく東に下りたる數箇所の岩隙より、盛に白色の硫氣を噴出し、濛々として立昇る有樣、雲の如く砲烟の如く、折しも吹き上ぐる風に逢ひて蓬々乎として飛揚し、あたりの樹々の間を潛りて四方に散亂す、その噴出の勢立山地獄谷のそれの如く猛烈ならず、何等の爆音なく、惡臭の甚だしきなく、噴出の分量も亦山頂を全然白化する程に多からず、要するに此光景たる決して前者の如く人の恐怖を起すものに非ずして、幾分悲哀寂寞の感を抱かしむるのみ、我は二三の噴出口を撿したる後、稍久しく此處に休憩して飽く程四方の壯觀を味はゞやと、絕頂なる蘚苔の上に莫座敷きて身を横たへつ、先づ東に眼を轉せば、山側は一面の深林にして直ちに綠葱々たる上高地（カミカウチ）平原に接續し、梓川の淸流はそが白き磧と共に眼下に横はり、其前には霞澤の峻嶺半腹以上怪雲を帶びて獨り傲然として峙立し、其の兩側には白雲隙間なく群りて遠山の面影一も見ることを得ず、北方には穗高山其險怪窮れる峯頂幾個を我身邊の矮樹の上に躍らして、今にも飛びかゝらんとするが如く、天下此れに比すべき豪宕の山唯越中の劒岳あるを思はしむ、


鎗岳、穗高山
附近臆測圖
鎗岳
大天井岳
常念岳
蝶岳
笠岳
ホタカ岳
ヒエ谷
ヒエ谷ノ頭
ヒエ谷ノ岩
ヒエ谷ノ池
ヒエ谷ノ小屋
ヒエ谷ノ水
ヒエ谷ノ出合
ヒエ谷ノ出合ノ小屋
ヒエ谷ノ出合ノ水
ヒエ谷ノ出合ノ池
ヒエ谷ノ出合ノ岩
ヒエ谷ノ出合ノ谷
ヒエ谷ノ出合ノ峠
ヒエ谷ノ出合ノ山
ヒエ谷ノ出合ノ川
ヒエ谷ノ出合ノ橋
ヒエ谷ノ出合ノ道
ヒエ谷ノ出合ノ村
ヒエ谷ノ出合ノ町
ヒエ谷ノ出合ノ市
ヒエ谷ノ出合ノ郡
ヒエ谷ノ出合ノ県
ヒエ谷ノ出合ノ国
ヒエ谷ノ出合ノ州
ヒエ谷ノ出合ノ島
ヒエ谷ノ出合ノ海
ヒエ谷ノ出合ノ湾
ヒエ谷ノ出合ノ港
ヒエ谷ノ出合ノ船
ヒエ谷ノ出合ノ人
ヒエ谷ノ出合ノ家
ヒエ谷ノ出合ノ店
ヒエ谷ノ出合ノ学校
ヒエ谷ノ出合ノ病院
ヒエ谷ノ出合ノ銀行
ヒエ谷ノ出合ノ郵便局
ヒエ谷ノ出合ノ警察署
ヒエ谷ノ出合ノ消防署
ヒエ谷ノ出合ノ役所
ヒエ谷ノ出合ノ裁判所
ヒエ谷ノ出合ノ刑務所
ヒエ谷ノ出合ノ墓地
ヒエ谷ノ出合ノ公園
ヒエ谷ノ出合ノ運動場
ヒエ谷ノ出合ノ劇場
ヒエ谷ノ出合ノ映画館
ヒエ谷ノ出合ノ博物館
ヒエ谷ノ出合ノ図書館
ヒエ谷ノ出合ノ美術館
ヒエ谷ノ出合ノ動物園
ヒエ谷ノ出合ノ植物園
ヒエ谷ノ出合ノ水族館
ヒエ谷ノ出合ノ遊園地
ヒエ谷ノ出合ノ温泉
ヒエ谷ノ出合ノ旅館
ヒエ谷ノ出合ノ料理店
ヒエ谷ノ出合ノ喫茶店
ヒエ谷ノ出合ノ酒場
ヒエ谷ノ出合ノ食堂
ヒエ谷ノ出合ノ売店
ヒエ谷ノ出合ノ市場
ヒエ谷ノ出合ノ商店
ヒエ谷ノ出合ノ会社
ヒエ谷ノ出合ノ工場
ヒエ谷ノ出合ノ農場
ヒエ谷ノ出合ノ牧場
ヒエ谷ノ出合ノ森林

あり、驚き立ち上りて莫座の下に手を入るれば熱きこと甚しく、更に試に苔をむしりて其下なる小石に觸るれは愈熱くして半分間も保ち難し、されば此邊には一面に火熱あること明なるに拘らず、色は褐色ながら厚さ一寸に及ぶべき苔を生じ、發育不良ながら唐松などの附近に簇生せるを見るは、頗る不思議の感に堪へざりき、此等の樹のうちには已に枯れたるも多くあり、思ふに熱度及び硫氣の年々少づゝ增加し來りしに依るならん（此夜溫泉にて人々に實したるに皆我と同感にて、中には、此山近々に噴火すべし等いふものもありき）、我は聊か氣味惡く感せざるを得ざりしも、さりとて此好風景を見捨るに忍びず、殆ど一時間ばかりも休息して遂に峠頂に下り、それより險阻なる密林を潛り行くこと約二十丁ばかりにして道漸く平坦となり、更に疎林の中に黃白赤紫樣々の花咲き滿ちたる美しき草原道を北に進むこと十二三丁にして、遂に數日前投宿せし上高地溫泉場に達したり、時一時を過ぐること正に十分。

(五) 上高地溫泉

上高地（カミカウチ）溫泉場（上高地溫泉株式會社）は長さ五里幅半里に亘れる上高地平原の中央、穗高山の麓、梓川の西岸にあり、深山の中なる溫泉場としては比較的立派にして、昨年開湯の始めは頑丈なる平屋一棟のみなりしが、今年浴客の增加と共に、更に一棟の二階作を新築し、猶追々諸設備を擴張せんとするの計畫あり、溫泉は頗る多量に湧出し、無色透明溫度體に適し、浴場亦淸潔廣大にして蒲田の比に非す、地は海面を拔くこと五千餘尺なれば、盛夏と雖も暑熱の何物なるやを知らず、前には僅に數丁を隔てゝ、海拔八千尺以上なる霞澤山巍然として天空に聳え、其山側の急峻なる一見人を驚絕せしむるものあり、後ろには天下の名山たる穗高岳、一畫直ちに天を指して這個高原を拔くこと殆ど五千尺に及び、隆夏の候猶殘雪の皚々たるあり、川に沿うて北方を見れば、錦、常念、大天井附近の高山大岳七重八重に折重なり、更に南方を見れば梓川溪谷の一障壁をなせる燒岳硫黃岳の山脈は延いて阿房山（阿房峠を通せる山）に連り、信飛境上の大岳乘鞍岳は其背面より僅に頭を現はし、人をして畏敬の念を起さしむ、實際我邦溫泉の所在地にして斯の如き豪壯偉大なる山岳の觀に富めるもの我未だ之を知らず、高尙なる避暑地として、精神の保養地として、最好適の地なるを信ず、又遊觀の場所にては前記諸山

岳の外に宮川池（上流一里にあり）田代池（六丁餘）あり、穂高の壯嚴と對照して、其艶美なる看者を驚倒せしむ、里程は島々より六里（徳五峠を越ゆ）、蒲田より三里半（中尾峠を越ゆ）、平湯まで三里？（上高地より山腹に沿ひて阿房峠に接續す。此新道は昨月上旬平湯村民開鑿せし筈なり）にして孰れも道路の修繕能く行はれ意外に廣濶なり、我が温泉にて折から來り合せたる社長より聞く所によれば、來年よりは温泉島々間に二箇所の茶店を設くべく、又郵便の集配を受くる事に就ては、島々郵便局と交渉の上、殆んど内定せる由なり、若し左る曉には、鎗岳、穂高岳等に登らんとするものは、小包を温泉に發送し置き、空手にて茲まで來るを得べく、非常の便利を加ふべし、案内者は大概温泉場にて傭ひ得べきも、念の爲島々村の同温泉株式會社出張所（荷物運送をも取扱ふ）又は清水屋（ウエストン氏以來年々洋人の登山者皆我家に宿泊すと主婦はいへり）に問ひ合すべし、我は島々より市作隱居なるものを一日一圓の割にて伴ひたり、（温泉の宿泊料は一日參拾五錢より七拾錢迄）

（六）穂高岳登山

二十八日　五時頃起き出づれば朝霧深く中天を蔽ひ、四圍の山々僅に腰より以下を現はせるのみ、我は失望して登山を斷念し、今日一日間此處に休養の積なりしに、時立つにつれて天氣次第によくなるもの〻如く、日輪霧を透してボンヤリと見ゆるばかりになりしかば、兎に角登ることに定め、支度そこ〳〵に七時半出發す、案内者は大野川より岩魚釣に來り居りし平田兼之助といふ男なり、温泉の前なる梓川に沿ひて上ること七八丁にして橋あり、そを渡りて進むこと一二丁ばかりにて島々道と離れ、左折して林中に入る、此あたり草生ひ茂りて更に道のあとかたなし、やがて梓川を西に渡りて熊笹叢生せる薄暗き喬木林に侵入し、陰濕の氣體を襲ふて稍不快を感ず、行くこと少許にして岳（ダケ）より流れ來れる一溪流を得、度々之を徒渉しながら、其兩側に沿て溯る、此あたりより、注意すれば稍人の足跡の如きもの現はれ、或は樹枝を切拔ひ、或は鉈もて大樹の皮を剝りなどして以て通路を示す、暫くにして溪流を離る〻や始めて少しく爪先上りとなり、道も稍分明なり、登ること猶五六丁にして、半左りに方向を轉じて進み行けば、突然陰暗なる樹林を出で〻、廣漠急峻なる磧の、上下に延長せるものに出づ（九時着）、此れ嘗て大水の時山中の土石の押出されたる痕跡にして、下方は中途に留りて梓

川までは接續せず、故を以て登山のもの始めより此磧に沿ふて上るの便なしといふ、此長き磧は穗高の南側にては唯一の大谷にして、温泉附近よりも明瞭に看取し得べきを以て、一度其所在を確認し置く時は、萬一下方の深林中に迷ふことあるも、若し旅客にして溪流附近より左斜に登ることをさへ忘れざる以上は必ず此磧の或る箇所に出づるを得べく、一度此磧に出づる時は、穗高山々頂までは最早殆ど道に迷ふの恐なきに似たり、此谷名を「岳川（タケカワ）」と稱すれども、平時は水涸れて滿目唯磊々たる大石のみ、而も其石たる皆堅く地中に定着せるを以て、之を笠岳下の「アナグ谷」に比すれば登攀甚容易なり、九時四十五分殘雪帶に達し、雪魂を碎て渴を醫し暫時休憩す、此時頭上雲晴れて、前穗高の絶頂は直ぐ前面に現はれたれど、我が上らんとする奥穗高は他峯に遮られて未だ姿を現はさず、下方には温泉附近の平原梓川の清流と共に畵の如く横はり、霞澤山は絶頂に白被を纏ひて其前面に高聳せり、九時五十七分此處を去りて復登り始め、やがて雪帶の半に至りて右轉し（此あたりより谷三岐す、若し右折せず雪帶に沿ふて直進せば、其雪の盡くる所小なる絶壁をなし、俄に急峻なる狹谷となりて上方に向へるを見る此れ歸途我が通過して具に困苦を嘗めしものなり、猶其左に一谷あり、前穗高に至るには之に沿ふて上るならん歟）非常に險惡なるザク〳〵石の急坂を上る、其の登攀の困難なる我が一昨日惱みたる「アナグ谷」瀑側のそれに比して猶遙に勝れるを感じたり、十時三十分ザク〳〵石帶を通過し、こたびは殆んど平滑にして而も急峻瀧の如き岩壁の上を攀ぢ登る、幸に岩質堅牢なるを以て、僅に手足の指のかゝるばかりなる小凸起に身を託して、戰々競々として上る、若し一度足を失して此大絶壁の途中より墜落せば急轉直下して底止する所なかるべく、萬に一も生命を保つ能はざるなり、十一時二分稍安全なる所に達して少休し、心臟の皷動靜まるを俟て復出發す、此より上は、猶絶えず突兀たる巉岩を踏んで急峻なる山側を攀づれども、足がゝりよきを以て、眩暈の癖あるもの〻外は毛頭危險の恐なし、途中眼を下方に轉せば、險絶比類なき幾條の深壑が、削るが如き兩岸の峭壁に壓せられて、さながら藥研の底の如く、果もなく下底に走れるを見る、それより猶上れば兀々たる岩塊の一面に點在せる間に丈低き偃松や、しほらしき高山植物の交錯亂生せる所あり、こゝを過ぎて暫らく登れば偃松全く絶えて岩石狼藉たる惡絶の場所となり遂に十一時五十六分奥穗高群峰中の最

高點たる一等三角標の下に達したり。

一昨日笠岳の頂に我を苦めしたる亂雲は、此日執念くもまた我が四邊に跋扈して、折角多大の望を抱て、此天下無敵の名山に登りたる我に、非常の悲を與へたり、しかも笠岳にては、我をして穗高、鎗二喬嶽の威容に接せしめながら、今其穗高岳に於ては、我に笠岳の美貌を拜せしめず、否獨り笠岳のみならず、御嶽も乘鞍岳も大天井岳も常念岳も、其他此山頂より見ゆると聞きし本州中部の高山大岳、彼は一として我に見せしめず、僅になつかしき鎗岳の峰頂を一度電光の如く我前に示したるのみ、無情の待遇如何にも口惜しけれど、此れも登山者には有りがちの事、今更嘆くべからずとあきらめ、乃ち案內者と共に櫓の上に攀ぢ上り、荷物を解きて晝飯を喫し、我に隣れる奧穗高、前穗高の諸尖頂が磊砢たる岩石より成れる奇觀を賞し、時に雲の切れ間を伺ひて橫尾谷、岳川谷の、遙に千仞の底に通ずるを眺め、或は「トクサ澤」霞澤の諸山が唯朦朧と雲の白被を逸して現はるゝを望みたるが、流石に一萬尺近く登りたる事とて、四周復俗臭の紛々たるなく、我は遠く塵界を離れて、雲外の仙境に移されたるが如く、心神爽快を極め、豪壯の氣胸を衝て起るを覺ふ、かくて殆ど一時間ばかりもたちて、充分偉大なる自然の印象を銘せられたれば、最早下山せんとて相共に櫓を下りつ、其附近に測量員等が宿したる二つの小屋の相並べるを檢し終り、（共に甚狹少にして不完全なれども雨露を防ぐには充分なり）午後一時十五分愈頂上を辭して舊路を下る、此時我を距る右方數丁の峰にあたりて頻りに小石の落下する音あるを怪み、あれは如何にと案內者に問へば、そは熊羚羊などの彼處を通行する爲なりといふ、我其方を眺めたるも何物の姿も見えざりき、少しく降りて偃松帶の處に至りたるに、我が下方の石上に、太さ鳩より稍〻大なる灰色の鳥二羽相並びてとまれるを見る、案內者喜びて「雷鳥あり雷鳥あり、取りて土產にせん」と叫び、いきなり石を拾ひて其の後に忍びよる、高山の鳥とて人を恐れざれば、彼れ一間ばかり迄近づきて、二度迄石を投げしも中らず、第三回目に我が金剛杖もて遂に一羽を搏殺しつ、大得意になりて、そを我がもとに携へ來る、斯かる靈山の頂に在りても、猶人間の殘酷なる手を免れ能はざりし鳥の運命には、我も轉た憐愍の情なきを得ざりしが、其夜溫泉にて其肉を饗せらるゝに及びては、生來始めての珍味とて、うま〳〵と舌打して食ひぬ、誠に人は矛盾の動物なる哉、か

くて雷鳥捕りの爲彼れ此れ十分餘を費したれば、いざとて降らんとするに、此時脚底には白霧滿ち渡りて、もと登りしは何れの谷なりしやを辨せず、心細きこと限なし、案內者も數日前僅に一回上りし經驗あるのみなれば、我と同じく困じ果て、上りし時標（シルシ）の石を積み置かざりし不覺を今更悔めども詮なし、我等は唯足の向ふ儘にとある谷に沿ひて下りしが、暫くして其の舊路と異るを覺りしも遂に如何ともすべからず、されど此等いづれの谷を下るも、彼の雪帶に至りて皆一に合すること明なれば、兎も角も道の窮る迄下り行くことに決し、心の中には、此末如何なる絕壁に逢ひて身體維谷の窮境に逢はん、今日は準備なきに雨にぬれて澗底に露營するの苦なきを保し難しと、各恐を抱きながら、表面には大言壯語して下る、下るにつれて谷の幅愈狹きを加へ來り、遂に兩岸は峨々たる絕壁高さ各數十間、長さは果もなく下方に連れるものとなり、細小、蟲の如き我等は今や其の間に挾まれて最早右にも左にも逃るゝの道なく、唯下らるゝ丈け下り行きて窮すれば引返すより外の策なきに至りぬ、げに我等は、先刻登る時見下して驚きたる、彼の藥研の底の如き深谷の一に陷りたるなり、見渡す限り草木一もなければ、唯石をつかみ、石を踏み、絕壁稍高くして足がゝり惡き所は、案內者の手を踏臺として辛うじて下る、今にもあれ羚羊などの兩側なる懸崖の上に來りて其が上より石塊を落しなば、我等は立ろに粉碎さるべしと恐るゝこと甚し、稍下り行けば、厚二間ばかりなる巨大なる雪塊滿谷を埋め、上下兩端に崩れて底に空洞を穿ち、乘るにも乘られず、潛るにも潛られざる難所に會す、此處にては我等殆ど爲すべき策を知らざりしが、案內者は漸く雪塊と一方の崖側との間に僅に身を橫にして通ずべき空隙あるを發見し、辛うじて過ぐるを得たり、最早餘程下りしと覺しく、我等の左右より落ち來りて我が谷に會する同樣の險谷も、其數二を算するに至りぬ、復暫らく降れば、こたびは九十度をなせるいと高き岩崖兩側より迫り來りて殆んど相摩せんばかりに狹窄となり、其底部の下方は、必ず渡るべからざる絕壁を爲なせるならんと思はるゝ所我行手に現はる、今度こそは後戻りの外あらじと、我は上に殘りて案內者をして探らしめしに、暫らくありて「心配なし、大丈夫なり」と叫ぶ、天惠の厚きを喜びてやがて其處に至り見るに、岩塊程よく相重りて踏み越え行くに難からず、即ち少しく下りて、何心なく其狹口の兩側なる絕壁を仰視し、我は思はずアッと絕叫しぬ、見よ此の

驚くべく巨大なる一雙の障壁は、至巧至妙なる天工によりて總て堅緻なる玄武岩を以て築かれたるものにして、其の木材の如き整齊比類なき八角柱が無數に累積したる壯觀は、身親しく其境に臨みたるものに非ずんば到底想像するを得ず、我れ未だ芥屋の大門(筑前)、渡瀬(磐城)、双六(飛騨)の材石岩を見たることなければ、それと比較することは能はずと雖も、有名なる但馬の玄武洞の如きは、此れに比せば甚だ平凡の感なき能はず、登山家にして畫癖、寫眞癖あるものは必ず之を探討せられんことを望む、我は身の苦境にあるをも忘れ、暫時石上に踞して頸痛くなるまで仰視を續けつゝ、此勝景を見るを得たるも全く誤て谷を取違へし爲なりと思へば、道に迷ひしも今は却て嬉しかりき、嬉しきは猶これに留らず、我等此處を辭して出れる谷に沿ふて未だ一丁にもならざるに、視界忽ち開けて、折しも霧の薄らぎたる中より、彼の渇望せし殘雪帶は白布をのべたる如く我眼前に展開せられ、岳川附近一帶の綠草青々たる山腹亦殘りなく現はれ出でぬ、實に此時の喜び筆紙の傳ふべき所に非るなり、乃ち最後に會したる絶壁を避けて、左側に生ひ茂れる矮樹雜草の間を通過し、遂に雪帶の上に下りて、二人共ホッと息をつきぬ、時に三時十五分なりき。

此處まで來らば最早安心なり、急がずに下るべしと先程の困苦を語り合ひ、ゆる〳〵と雪上を降り行く中、頭上に密集せる雲塊より、忽大粒の雨ハラ〳〵と落ち來る、されど莫座を携へたれば狼狽することもなく、長き積を下りて左折して林中に入り、舊路を下りて溪水の畔に達すれば、雨もいつしか小降りとなりぬ、熊笹をくゞる時のみは莫座も其の用を爲さず、全身濡れひたりて心持あしかりしが、程なく梓川の磧に出て、こたびは川傳ひに下る、途にて一群の若者等川を堰きて魚捕る仕掛するをも見つ、河畔の平野に放養せる牛馬の、牛は牛連れ馬は馬連れとなりて、いと樂しげに遊ぶをも見つ、橋のほとりにて本道に出て、温泉に着したるは五時三十分の頃にして、折しも空やゝ晴れかゝり、穗高のいたゞきに龍の如き怪雲頻に奔馳するを見たり。

(附記) 穗高は我登りたる三山のうち最險阻なれども又最も近く、少しく山登りの經驗あるものは、温泉より四時間半にして輕ち至り得我が上りし岳川の外、横尾谷よりも登るを得れども(日本案内記には)温泉より出發するものには非常の迂回なり、若し此の道を取らんとせば「古池の下駄小屋に泊するを便とす、頂上の觀望を恣にせんと欲せば成るべく早朝薄暗き時を以て出發するか、或は絶頂小屋にて一泊するを可とす、風雨の時は決して山中を彷徨すべからず、不測の禍を招くべし。

(七)梓川を下る

二十九日　昨日我を穗高に案內せし男は、極めて篤實親切のものなりしかば、我は其男の今日德五峠越えて大野川に歸らんとするを聞き、昨夜無理に說きて我が爲に梓川より阿房峠に出づる間道の案內をなすべきことを約せしめ置きたれば、今日其男の用事終るを待ちて九時頃なつかしき温泉を出發す、此道は始終梓川の西岸に沿ひて下るものにして其距離僅に二里半に過ぎざれども、岩魚釣が稀に往來する外は、通行人殆んどなく、而も日ならずして阿房峠上高地を連結する坦道の山腹に開かるゝに至らば、殆んど一人も此惡路を通過するものなかるべく、我は恐くは最後の通行人なるべしと兼之助は語りぬ、道は熊笹帶と河側の石上と森林中とを絕えず交代して通じ、中に一箇所山側の大崩壞を爲せる所は、其の稍危險なる崩壞面を傳ひながら、遙かに上方なる其左肩に渡り行き、此處にて分明となれる細徑に沿ひて一小丘を越え、再び川の下流に出づれば温泉の飛瀑あり、其より少しく河畔を下りて後河に沿うて崖上に攀ぢ上り、暫らくにして復河畔に下れば、薪を切りて規則正しく積み重ねたる所に出づ、此より少しく下れば硫黄質なる熱泉の多量に湧出する所あり、大野川の者此處に温泉場を開かんとの計畫を立て、我が行きし時は石垣など築きたるを見しが、地餘り僻なれば成功疑はし、其より非常に急峻なる山側を、殆ど一直線に上ること十町ばかりにして始めて阿房峠道に合す、我が見る所に據れば此梓川沿岸の景は意外に單調平凡にして越中の庄川(及び其上流なる飛驒の白川)黒部川、飛驒の高原川、益田川などの如き奔湍深淵に乏しく、境の幽邃なるより外、人の感興を惹くこと少し、必ずしも踏査せずして可なり。

白馬籠城記(承前)

河田默
武田久吉

はひまつの枝の上にて結びし夢も、薪火は消え、隙もる風の身にしみたので、ふと目をさませば、夜はなごりなく明けはなれて、空はよく晴れてゐた、腰をかゞめて小屋の口を這ひ出で、楊子喞へて小屋の後なる水の湧き出る處へ行けば、ちよろ〳〵と漣立てゝ流れ行く清き水の邊には、可憐なる、むかごゆきのしたなど生じてゐて、口をすゝぎ、顔を拭ふ間にも、自づと「ふむはおし、ふまでは行かんかたもなし」と、昔し口すさみし人の、やさしき心を思ひ浮べた。

小屋にかへれば、人足どもは火を焚き、米をとぎて、いま朝飯を調へる用意の最中であるから盧生の昔を忍びて、寢てまつも心なき仕業と思ひ、此間に、頂上の朝の大觀を、賞して來やうと、二人とも毛布に身をかため寫眞器を手にして、小屋を出かけた。

頂上は、小屋から北の方、約七八丁登ッた處で、上には、一等三角測量臺が一基ある、こゝに登ッて眼を四方に放てば、西南には近く立山の連脈と、遠く加州の白山とを望み、東北には戸隱、妙高、燒山の諸山が、頭を雲海の上にもたぐるを認め、南には鑓ヶ岳、杓子ヶ岳の二弟と、南安槍ヶ岳の鋒頭を望み、北には一望日本海を下瞰し、天下の名山、大岳鐵岩の如くに、其四方を繞ると雖、たゞ我と談笑し得るものに至りては東南遙かなる、八面玲瓏の佳人と、南安の天に、劍及を閃かす勇士あるのみ、と思ッたときの心中の愉快さ、蠢々たる人間に生れ、われ何の幸福あつてか、この宇宙の大觀壯嚴を恣にすることを得たるかと、神の恩惠を感謝せざるを得なかつた、しばし呆然とたゝずんでゐたが、ふと我にかへりてやがて小屋に戻れば、朝飯の用意も、すつかり調つてゐた。

さて朝飯後小屋のまはりを見るとき、全體もとこゝには、三つ小屋があつたらしく、其の一つは、昨夜我々の



（河田默氏撮影）

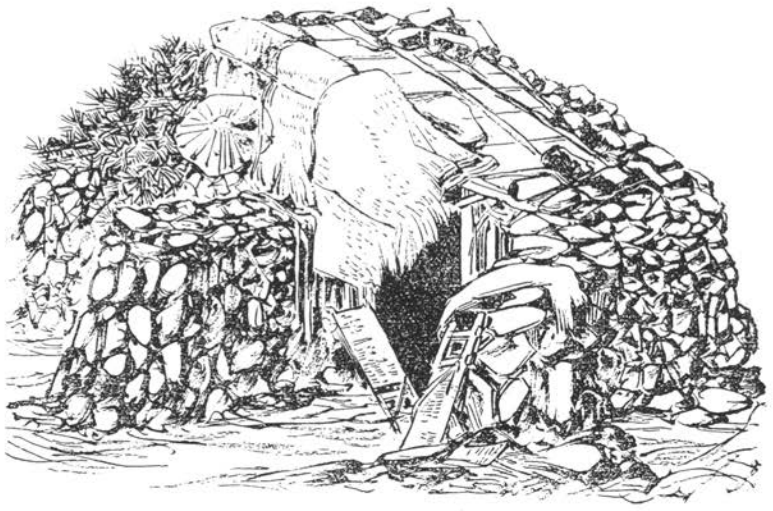
泊つたもので、あとの二つは、其のすぐ前にあッて、すッかり破壊してしまひ、たゞ石垣がのこッて居るのみである、昨夜は疲れてゐたのと、暗かッたので、それほどにも思はなかッたが、今あかるい處で見ると、この殘ッた處の唯一の小屋も、非常に破損して、屋根の如きも、中心の柱がはづれた爲め、周圍より中央部の方が低くなり、丁度これを物に譬ふれば、恰漏斗の樣で、これでは成程小川氏の云はれた如く、雨が瀧の如くに流れ込むであらうと思はれた、又周圍の石垣の如きも、大分傷んでゐて、已に昨夜の如きも、石が一ッ墜落して來て一人の人足の背にあたッたので、しかし幸ひにも大事に至らなかッたが、何しろかう云ふ風ではしかたがないから、まづ小屋を修繕することに決した、しかし六人の人足を要する程のこともないから、四人だけとめて、あとの二人は此の朝下山せしめた。

小屋

此處で一寸、も少し此小屋に就いて述べて置かう、位置は、白馬山巓より、七八丁、南微に西に下つた、稍平坦の地をなした處で、東南西の三面は開けて、一望際涯なく、踏む足もとには珍草奇花が寸隙もなく生じて居る、我々の籠城した小屋は其處の西に偏つた一つで、四壁は石をつみ、東面の一部を開いて、出入口としてある、家根は板を並べて、上に石を載せてある、小屋の廣さは、或は十疊も敷くことが出來ると云ひ、或は八疊許りとも聞いて來たが、我々の見た處では精密に測つたのではないが、凡そ六疊敷と思ふ中央には火

を焚く樣にしつらへ、自在が一つあるのみである、石壁は可なり厚いが、氷の如き風が、石の隙間から吹き込んで來て、冷藏庫へでも入つた樣な氣がする。一昨三十七年の夏、日光植物園の望月氏が登山された時には、家根が大半破壞されて、露を凌ぐことも出來ないで、止むことを得ず、頂上の測量臺の下へ、四方をはいまつで圍つて、野營したと云ふ直話を聞いて居たので、我々は出發前、細野へ照會して、家根の有無を尋ね、なければ天幕でも持つて行く考へであつたが、前年の秋とかに修繕したと云ふ返事なので、安心して來て見ると、實は修繕の爲めに僅の板を山上まで運びあげたと云ふにすぎないので、少しも修繕は施されて居らなかつた、故に此の修繕の爲に板が不足して、又道具も携帶しなかつたので頗る不便を感せざるを得なかつた。

人足等が石垣をつみなほしたり木を切つたり、小屋の修繕をしてゐる間、吾々は小屋の前の石垣の側へ、茣蓙を敷いて、前日採集した植物の壓搾にとりかゝつたが、天氣はよいし、風はあまりなくて、ぽか〳〵暖く、座つて居る周圍には、種々の草花が艶を競ひ、麗を爭つて、咲き亂れ、八月の十六日だと云ふに、金をも熔かす三伏の熱などは、どこの天地にあるものかと、疑ふ程であつた。晝には麥、白すぼし、葱、いはぶすまのすまし汁を手造して賞翫した、このいはぶすまと云ふのは Gyrophora cylindrica と云ふ地衣の一種で、山中の岩石に着いて生じてゐるので、之を煮るとべろ〳〵に柔くなつて、中々だしが出て、味のよいものである、元來この地方では、山中に生ずる種々の植物を食用に供してゐる、例へば、たけわらび、あざみ、うとぶき等である、たけわらびといふのは、羊齒の一種で、白馬尻附近邊に澤山ある、これはゆでゝ食するものであるが、どうかすると中毒することがあるといふことである、この羊齒は何であらうかと思つて、人足達に問ひ糺して見たが、彼等は、その葉が開かぬ中に食するので、老熟したものは見てもわからぬと云つて、まだ開かぬのをもつて來て見せたが、その葉柄上の鱗片の具合などから察するに、おそらくみやまめしだであらうと思ふ、誰やらがこれをべにしだであると云ひ小川氏であつたか、りやうめんしだと謂つたとも聞いたが、我々は是等の人とは不幸にして說を異にせざるを得ない、又うとぶきと云ふのは、何であるかと云ふに、これも芽の出たばかりで判然しないが、多分かはほりさうであらうと思ふ、さて壓搾を終つてから、午後二時頃に出發して、白馬の西



改築後の小屋

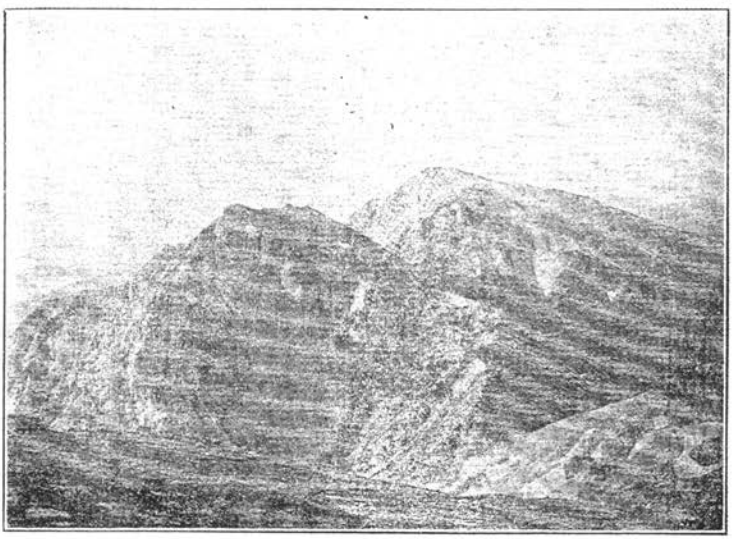
腹を廻つて、頂上に登つた、元來白馬の山つゞきは、一般に東面は斷崖をなしてゐるが、西側は傾斜がやゝゆるいから、脈に沿ふてどこまでも行かれるのである、頂上の附近には、所々にしこたんさうが、可憐な花を着け又つくもぐさが髮をふり亂してゐる、よつはしほがま、ゆきわりしほがまの紅花は殊に美しい、苦心してちしまあまなを掘り、こまくさの花を尋ねながら歸途につき、途で手捕りにした、小兎を一頭さげて、小屋にかへつたのは午後五時頃であつた。かへつて見ると小屋の改築は已にすんで、前には風よけの石垣が出來るし、屋根は高くなつて、中でどうやら立つことも出來るし、見違へるばかり立派になつてゐた、中へ這入つて焚火に手足をあたゝめ、兎汁に舌つゞみをうつて晩食をすまし、採集品の壓搾を終へて、午後の十一時過寢についたが、昨夜に比して何だか寢心地がよいやうな氣がした。

おい大變だ〳〵と云ふ聲に目をさますと、時は正に十七日の午前一時頃、小屋の外は大風吹き荒んで、ポツリポツリと雨が降つて來た、晝間の工合ではこんな約束ではなかつたがと、愚痴を云つても追つゝかず、あはてゝ、外に出してあつた荷物を中へ入れると、まもなく大雨沛然として降つて來た、たゞ幸にも、晝の中に小屋を修繕して置いたので、幾分かよかつたが、何しろ屋根の板とても、豐富ではないから、多少

の雨漏は免れないで、節穴、板の割目などより、雨は漏り込み、又上から流れて來た水は、うしろの石垣のすきまから、用捨なくちやぶ〳〵流れこんで、小屋の中にあるものは何もかも濕つてしまひ、その心地惡さと云つては、とても筆や口ではつくせない、やがて夜が明けたが、風雨はやまず依然として烈しく、雨漏はます〳〵甚だしい、何しろひどく吹きつけるので、小屋の外へは尾籠なことだが、便をたしにも出られない位で、とう〳〵十七日は暮れてしまつた。

あくれば十八日、朝起き出でゝ見れば、風は依然として烈しいが、雨は幾分か其量を減じて居る、十時頃から、風も勢をゆるめ、雨は霧となつて、飛んで來る許り、正午頃からは時々太陽が雲の切間から顏を出したが、夕方に至つてすつかり晴天になつた。夜の景があまりよいので、毛布をかぶつて月を賞しに、頂上附近に出かけた、四方の山は模糊として、遠く小さく谷をうづむる白雲は、月光に映じて白銀の如く、天は高く澄みわたり、萬籟寂として聲なく、宇宙の一大神秘は、恰此中に含まるゝかの如く、一昨の曉景と今の晩景、相對比して又一種の感なんばあらずであつた。此の夜器物へ入れて置いた水が、結氷した。

翌十九日午前四時起き出でゝ天を窺へば豫期に違はず晴天、日出の頃山の端に出でゝ之を觀じ、午前六時四十五分小屋を出發して、鑓ヶ岳に向つた、左に大雪田を望



白馬小屋前より鑓岳及杓子岳を望む　（河田默氏撮影）

み、右に越中鹽頭（シホヅ）ヶ岳（當字）を見て、小屋より南へ尾根をつたつて、國界の棒杭に沿ひ、或は信州に入り、或は越中に踏み込んで、離山の少し手前から右手に下り、杓子ヶ岳の西側、所謂杓子裏に出た、此邊一體は傾斜もあまり急ではなく、はひまつは此處彼處に伏し、あをのつががくらは地に敷き、なんきんこざくらの紅花は實に美しい、こゝからなほ少し下ると、鑓ヶ岳の西北麓の小さい流に出る、此の邊にて屢々硫黄の氣を嗅いだ、この流は鑓ヶ岳と杓子ヶ岳の間の殘雪の邊に、其の源を發するので、この流の附近には、じんえふすゐば、みやまはたざほ、みやきおだまき、えぞあづまぎく、いははたざほ等が紅紫相競ふて咲き亂れて其のさまは奇麗と云はんよりも、むしろ美麗であつた、この流を横ぎつて行くと、又だん〳〵登りで、鑓ヶ岳と杓子ヶ岳の間に盆地の様な處がある、小川氏が來た時分にはまだこの處は一面に殘雪であつたさうだが、吾々の行つた時には、大半は溶けてしまつて居た、しかしまだ溶けて幾日もたゝぬと見えて、前の美しさに引かへ、こゝには花があまりなく、多くは草がやつと芽を出したばかりであつた、吾々はこの盆地で、暫時休憩して中食をした、武田生は此處で一種の蝶を得た、これが後にくもまべにひかげの名を得たもので其の詳細は博物之友第六年第三十一號に、高野鷹藏氏の説が出て居る、こゝを出ると山は急に勾配がついて、また殘雪の側を通行した、この邊ではうるぶッさうが花を開いてゐて、中々見事なものもあつた、いはべんけいだのゆきわりしほがまだのを採りながら登ると、山はます〳〵急峻となつて、鑓ヶ岳の鋒尖は一躍して達せんばかりに見える、何かあつたと云つては、折角登つた處を戻つたり、岩角へつかまつて登らうとすれば、胴籃がつかへて引きもどされなどしつゝ、遲々として進み、やうやくにして午後一時鑓ヶ岳の絶點に達した、こゝにも亦三角測量臺が建てゝある、此の山は、北城邊からのぞむと、鋭鋒をひらめかして、南安の槍ヶ岳にも劣らず尖つて見ゆるが、之を側方、即ち白馬の小屋邊から見れば、その頂は左程尖つてゐないから、元來ヤリと云ふよりもむしろ出刀庖丁に似て居て、其の頂の如きも東西に長く南北に薄いのである。この頂から眺めると、北に白馬ヶ岳は伯兄の如く、西南に立山は親友の如く、南々西に槍ヶ岳は嚴師の如くに峙つて居て、たゞ雲霧の閉すところとなつて、慈母富士山を仰ぐことを得なかつたのは、頗る遺憾であつた、又首をめぐらして下瞰すれば、西北には北海洋々として其際涯

を知らず、七尾通ひの汽船が、一條の煤煙をのこして航走するのを見た、伏木の港は西に當り、加賀の白山（ハクサン）は西々南に泰然と座し、木曾の御岳は南に聳え、東には善光寺平を隔てゝ、四阿山の連脈が起伏し、越後の燒山は北々東に峙つて見ゆる。こゝに一時間程休憩して、午後二時に出發して、下山の途についた、前と道をかへて杓子の北腹をめぐつて、離山の東に出で、離岩の附近を過ぎて尾根に登り又信越の界を歩して、午後五時二十分小屋に歸着した、薪を集め、水を汲み火をおこして、飯を炊ぎ、食事を濟してから壓搾に取りかゝり、全く其の業を了つて、體をはひまつの褥に横へたのは、翌日午前二時半であつた。

日本アルプスの巻 終

○白馬籠城記　河田、武田

高山植物の學術的研究

理學博士　三好學

近來我國で、高山植物に對する趣味が世の中に段々に擴がつて來たやうに見へる、是れは學術的でなくとも、一種の高尙なる娛樂としても、誠に結構なことであつて、益〻斯樣な高尙なる樂が一般に擴がることは、望むところである。

高山植物が何故に賞觀されるかと云ふと、第一に其種類の珍らしいと云ふ點に於て、人が之を愛するのである、總べて高山に生へて居るものは、平野に生へて居るものとは、其種類が違つて居て、例令へば菫の如きものでも、高山にあるものは、平地のとは異つて居ると同じ譯で、高山には色々珍らしい種類がある、其次には高山植物の形色、發生の有樣などが、平地にあるものとは著るしく變つて居て、一見して其珍奇なることが分る、之を盆栽としても、又石や岩の間に植えて、庭の一隅に置て見ても、珍らしく見へるから、此點に於ても賞觀する價値がある、モウ一つ高山植物の賞觀に關して大切なることは是等の植物を實地に搜しに行くところの樂である、實際高山に登つて壯大なる景色を眺め、又深い森や嶮しい岩に生えて居る珍らしい草木を搜すことが、既に頗る愉快なる仕事である。

近年富士を始め其他の高山へ多く人が登るやうになつて來たのを見ても、如何に高山に登る面白味が世の中に分つて來たことが知られるが、全體此登山旅行は、外國では最も盛であつて、學術上計りでなく、單に慰みの爲めに登山する人が澤山ある、年々「アルプス」山旅客の夥しいのを見ても此趣味が彼國々では一般に普及して居る事が知られる、從つて高山に登る爲めの便宜は、道路を始め、「ホテル」其の外の準備が遺憾なく行き届いて居る、我國では未だ中々斯樣なる贅澤的高山旅行は望む譯にはいかぬが、併し登山の趣味は同じことである。

我邦に高山植物賞觀の傾向が段々に盛になつて來ると共に、亦一方には是等の植物を保護する必要が生じて

來る、深山幽谷から珍らしい種類を採つて來て、之を培養するは宜しいが、併し猥りに之を採つて其場處に根絶しになるやうでは、甚だ殘念であるから、之は充分に制裁を設けて置かなければならぬことゝ思ふ。

茲で少し述べやうと思ふのは、是等の高山植物の賞觀と、又之を保護することでなくして、別に之を學術的に研究するところの必要と趣味とである、總べて研究と言へば多少學術的にすることではあるが、併し今日では研究と云ふ言葉が甚だ廣く用ひられるやうになつて來て、實用的や娯樂的の方面にも研究と云ふことが流行して來たのであるから、それで之を區別する爲めに特に學術的研究と云ふのである。

高山植物は前にも述べた如く、形態上に奇異なる特徴があつて園藝的に賞觀せられるが、學問上から見ても之に就て面白い研究が出來る、併し高山植物の植物學上の研究は固より其形態の點ばかりではない、各種の方面から觀察する必要がある、先づ第一は其分類學と分布學の方面から研究するのである、即ち高山に生えて居る植物の種類を一々分類して、其所屬の自然分科を明にし、それから其山の高度又は外圍の狀態に由れる分布學上の特徴を調らべ、更に進で其山附近の平野に於ける植物分布の有樣に對照すること、それから亦一の山と他の山に於ける分布の狀態を比較して、其間の關係を審にするのが必要である、例へば木曾、飛驒、越中邊の高山植物と、日光、會津邊の高山植物とを、比較的に調べて見ると、分類、分布の點が何れも好く似て居る、又我中央山脈の諸高山に於けるものと、北海道の山々又は樺太、西比利亞等の平地の植物とも類似の點が少くないのみならず、遠くは「ヒマラヤ」、「アルプス」の高山植物とさへも較べられる所がある、斯樣に各地の高山植物が互に關係のある譯は畢竟其分布の根原が遠く地質學時代に在ることが知られるので其淵源に遡つて研究するには勿論化石の調査も必要である、我邦の高山植物の分布を根本的に調べることは中々一朝一夕の仕事でない、永い月日を費して段々に統計的に調べて行つて、其結果を比較しなければならぬ、さうして又それが分つて來れば我邦全體の植物區系成立の原因が知れて來て非常に面白いことである、今日我邦各地の高山植物を採集して其種類を調べ、又其分布を觀察して置くのは、是れがツマリ後になつてから、總括すべき貴重なる材料になるのである。

次は高山植物を形態構造、生理、生態等の點から觀察して又研究することで、即ち前の分類や分布とは違つて其植物の個體に就ての外形、組立、生活の有樣又は生理作用等を研究するのである、總べて高山にあるものは、平地にあるものとは是等の點が著るしく變つて居ることは、專門の學者でなくとも分つて居る、其原因は如何なる譯かと言へば始ど全く周圍の狀態に適應した結果である、周圍の狀態とは即ち高山固有の有樣であつて、先づ第一には温度であるが、玆で温度と云ふのは單に空氣の温度計りでなく、地面の温度又高山植物の體の受取る熱度をも云ふのである、高山の空氣の温度は無論低いが、併し地面は比較的温かい場合がある、又日光が好く照らす時には葉や根が可なり多量の熱を受取ることが出來る、是等の有樣に就て一々實地に調べて見なければならぬ。



うさけすのうやち　（河野齢藏氏撮影）

次は水の分量である、是れは高山植物の生態を調べることに就ては、殊に大切なる點であつて、先づ第一に知るべきは其の土地の濕度即ち地面に含まれて居る水の比較的分量である、同じく高山の中でも比較的に地面の濕つた場所もあり、又岩土の如く乾いて居る處もある、從つて所生の種類を異にして居る、次には雨、霧、雪等の多少も調べる必要がある。

其次は風であつて、第一に風の方向、風の速度、風の吹く時期等を知るのであるが、是れも高山植物の形態、生態上に大なる影響を與へるものである、富士御嶽などの

高山へ登つて見ると樹木の枝振が風の方向に伴ふて居る、さうして亦樹木ばかりでなく、丈の低い灌木、或は草本などでも其影響を受けて居る。

次は地質である、地質と高山植物との關係は、餘り人が注意しないやうであるが、能く調べて見ると、色々の關係のあることが分る、現に「アルプス」山脈中でも地質の異なるによつて植物分布上に多少の異同があることは從前から知れて居るので、彼の「ドロマイド」地方と片麻岩地方の如きは最も著るしい、我國の高山でも安山岩と花崗岩との場合では自ら違があらう、尤も是等の點に就ては未だ殆ど研究されて居ないから、玆に詳論することは出來ない、將來の觀察を待たねばならぬ。

斯やうに高山の狀態を調べて、それに適應して生活して居る植物の形態、生態等に照らして見ると一々其特徵が理解されて來るであらうが、併し唯有りの儘の觀察ばかりで滿足せずに一步進む實驗的證明をしなければならぬ、實驗の方法は色々あるが、先づ平地の植物を高山に培養して見たり、或は高山の種類を平地に下して培養したり、又は平地の植物を平地に於て高山の有樣を眞似て培養したりして、種々の方面から實驗上の證據を出さねばならぬ、現に「アルプス」山中には斯樣な實驗をする爲めに設けた高山植物栽培園があつて、數千尺の高いところで、平地の植物を培養して外圍適應上の試驗をして居る、又瑞典、那威邊の高緯度の地方では、平地でも既に氣候が寒くて高山植物の生活に適して居るからして、斯う云ふ實驗や觀察を施すには甚だ容易である、彼の千八百九十年に出版されたキールマン氏の「ラプランド」地方の植物に關する著述を見ても如何に寒地の氣候が植物に影響を與へて居るかと云ふことが分る、瑞典、那威等では斯樣な研究が今も續々成されつゝある。

我國でも近年日光に大學の植物分園が出來て、日光の諸山を始め他の諸高山の植物を採つて來て、之を培養して、學術研究の資料となし、又一方に於ては高山植物の種類の保存を圖つて居るは最も適切なることゝ思ふ、尙は斯樣なる高山植物園が我邦に於て益〻發達して研究の便宜を與へるやうになることが望ましい。

近來歐洲でも、高山植物の研究が一層學術的になつて來て、單に珍奇の種類の採集を力めるのでなく、種々の植物學分科の方面殊に生態學上から研究することが行はれて居る、彼のシユレーテル氏の先年來著述しつゝ

ある「アルプス」植物の生態に關する論、文を見ても分る、我國でも段々に高山植物の趣味が世の中に分つて來たと共に亦是等の植物を學術的に研究することの必要も亦一般に認められるやうになつて、矢鱈に高山植物を採つて根絶やしにすることのないやうにして、其或る部分は天然の有樣に、之を保存して置いて分類上、分布上又は生態上等の研究が十分に出來るやうにしたいものである、前に述べた通り、我邦の高山植物の分布の根源を究めるのは容易の事ではないが、併し此方面に對する學術的貢獻は縱令鎖細のものでも必要であらう、況んや、亦他の形態、解剖、生理、生態等の方面に於ても、面白い研究が出來るから、將來に於ては高山植物の愛觀、培養等の倍〻盛になると共に、亦之に就ての學術的研究の一層盛にならんことを希望するのである。（完）

湖沼研究の一例としての箱根芦ノ湖

田中阿歌麻呂

本誌創刊に當り、先づ湖沼研究の有趣なることを介し、次號を以て其研究法を載することを讀者に約したり。然りと雖も湖沼研究法及機械使用法等を紹介し、本邦湖沼調査に助力あらんことを希望するに當りては、豫め一例を引きて研究範圍を承了せらるべきの必要を認むるなり。故に余が多年研究中に係る箱根芦ノ湖の調査の一般を載し以て、未來の湖沼探見者の參考に供せんとす。

第一章　調査の目的

本湖は箱根火山中の一小湖にして、其面積甚だ大ならず。風景も亦山間の湖沼として絶佳なりと云ふを得ざれども、古來京都より江戸に通ぜし、東海道の其南岸を沿へるが爲め、江戸に通勤せし諸侯を始め、其從者幷に其他旅人此地を過ぐるもの多かりしを以て、本湖の名は彼の有名なる箱根關と共に蘇我兄弟の史蹟あるを以て衆人に知られ。又現今鐵道開通の時代に於ても、其位置が首府より遠からず、僅に半日程にて達し得ると、其近傍に有名なる温泉場の多きが、故に夏月は浴客其他内外人の湖上に舟を棹す者少からず。實に本邦湖沼中

琵琶湖と共に、最も善く衆人に知られたるものと謂ふべし。余が他に湖多きにも拘らず、特に本湖を撰て調査せしは、又實に其交通の至便なるに促されしものにして、又之れが爲め少なからざる便宜を得たり。余が調査の目的は該湖の湖沼學上諸性質を研究し、各學術上研究の資料に供し、又水產家が湖を一養魚場とし使用し、若くは他の實業家が農業工業上凡て此の湖を利用し起業をなさんとするに當りて、其參考に資せんとするにあり。去る明治三二年四月之れが調査に着手し其後三九年八月まで前後十八回此地に往來し、以て實地踏査をなし、一般の調査研究を終れり。左に載する所は、湖沼の研究として、一般の人士に有趣なる事項に基き記述する所あるべし。

第二章　湖面の地理上研究

(一)　湖面の位置、面積、形狀、名稱

芦湖は箱根火山の火口原の一部を占め、其湖尻は大湧谷爆裂の際押出せし泥流の爲めに水を堰められて成形せるものにして、參謀本部二萬分の一の帝國圖によれば、湖面の高度は約七二六米なり。面積は明治四年地租改正の時の調査に依れば、二二七四〇〇〇坪(七四八、四二頃)なり。又其調査年代は不明なれども、神奈川縣廳の調査として神奈川縣統計書に揭ぐるものは、七五二町八四二三歩(七四六、六二頃)とせり。其後明治二一年宮內省御料局は特に調査の必要を認め、湖の平面測量をなし、比例尺三千分の一の地圖を調製せしが、此圖に據れる當事者の計算せし面積は實に二一四五、五二一坪八合八勺(七〇九、二六頃)にして、之れを前兩者に比すれば著しく其面積に差ありて、測量當時の水位と關係あるものなれば、何れが適良に近きか容易に決定し難きも、余は暫く後者が測量精密なりと信じ、後日他に信を措くべき數字を得るまでは此數字を用ゆる事とせり。湖の形狀は稍〻瓢形をなし、湖岸は周圍五里、四(約二〇〇〇〇米)を有し、南東より北西に向て長く、箱根町と湖尻早川口との長さ即ち湖面の最大中央線は六六〇〇米に達す。其帶は湖尻湖域にして稍〻正方形をなせる水面を作り、南に回つて漸く狹く、松尾に於ては東西の幅員僅かに三〇〇米に過ぎざれども、又其以南に

於ては再び膨大し、最廣部なる瓢底に至れば平石東方の灣底と元箱根との間にては、實に二五〇〇米に達す。而して前に述べたる面積に最大中央線の長さを除し得たる平均幅は、一〇七二米なれば最大幅は即ち平均幅の二分の一に過ぎず、芦湖は一名を鑁字ヶ池と云ふ、芦湖の名稱は不明なれども、此地方に萩蘆の多く叢生するを以て其名ある故ならんか。箱根町を流るゝ水流に芦川の稱あり。今の箱根町に亦芦川宿と云ひしことあり然れども現今其名の存するは本湖と芦湯のみなりとす。或説によれば現今の蘆ノ湖は古の蘆ノ湖にあらず、元の蘆ノ湖は蘆ノ湯附近に在りし一小池塘にして今は全く埋まりたりと傳へ、又は今の阿字ヶ池なりとも云ひ、或は今の蘆ノ湖は即ち權現御手洗の池なれば寧ろ箱根湖と稱する方適當ならんと云ふものあり、其眞僞を知らずと雖も記して以て參考に供す。

(二)　湖　岸　線

湖の西岸には外輪山の急斜して水に臨むあり。而して其あるものは嶄然突兀水中に岩體を顯すありと雖も、一面の萩蘆地平を掩ふて水際を畫し、地の凹入せる灣底には魚族相戲るゝを見る。若し夫れ一陣の寒風湖上を掃ふの季に際せんか、其邊多數の水鳥浮游す。歩を轉じて箱根町方面より三島地方に降らんとせば、巉々礫々幾百千の石上を駄馬篠笹を負へるの馬子に逢ふ。八里の山道史を回顧して、懐舊の念に堪へざらしむるものあり。

湖の東岸には火口丘の緩斜して水に臨むあり。其水と山と相接する所には稍石礫の堆積せるあり、樹少くして篠笹一帶を掩ふ。

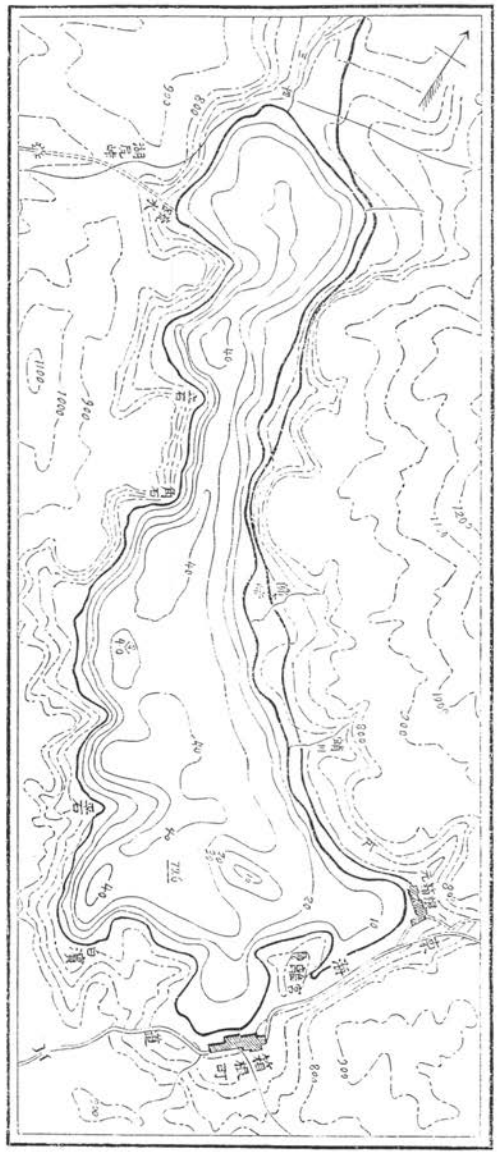
湖の北端即ち湖尻附近は土地稍〻平坦にして沙濱を作る。他なし大湧谷の噴出物あるを以てなり、湖岸より程遠からざる所に圓錐形をなせる二個の丘瘤あり、平野の裡に立ち遙かに湖上より望見するを得、是れ爆裂の際岩塊の陷落堆積せしものにして猶ほ磐梯山破裂の際に於ける檜原湖のそれの如し。平野の南端より姥子温泉に至る一小徑あり、徑側には嘗て温泉場たりし遺跡を存す。所謂新湯と稱するもの、湖上に棹すもの〻上陸地なり。

湖の南岸は出入稍多く、其中央に當り方形をなせる塔ヶ島半島の突出せるあり。史の傳ふる所に依れば此地一の島なり齊明天皇の時、玄利老人一寺を此島に建て爾來吉備大臣、玄昉等亦此島に寺を建つ、之れよりして一に堂ヶ島の名あり。塔ヶ島の名之れより變ず。島の圓頂離宮を冠し、蔭に隱れて舊箱根の關の遺跡を存せり。史に名高き箱根の宿其左に位す。半島の右は水深く灣入し、其水際石礫の濱をなし、東海道之れに沿ふ。こゝに多くの佛像を安置せる所あり、磧の河原と稱す。此の所より湖岸を廻り、古松老杉の間を通りて箱根權現に續く。灣底に元箱根の人家水に臨て連れるあり。

筥を曳きて離宮の畔、湖岸山色に映せんとする那の湖畔を逍遙せんか。仰げば二子山の噴火口雙眼に映じ、俯せば白扇懸倒富岳の絶景湖面に落つ眞に是れ一幅の活畫なり。古來文人墨客の此所を咏したる詩歌尠なからず、避暑の客の逐年數を增すもの、亦た實に據つて來る所なきに非るなり。

(三)　湖を涵養する水流及び湖の排水

夫より尙は湖面の地理上研究に附帶し一言しをくべきは、此湖は他の火口原湖又は火口湖に見ると一般にして其受水區域の極めて狹少なる事なり。受水區域の面積は一九方粁八七一にして、湖の面積の二倍弱に過ぎず。從て其受水區域内に於て湖に注入する水流は殆ど皆唯僅かに箱根町の近傍火口丘より來る二、三の細流あるのみ。就中稍〻大なるは大湧谷より湖尻の一部に來る△△△あるのみ。而して排水口は二箇あり、其一は天然の排水口にして湖尻の北端に位す。之れを倒川（さかさがは）と名け、平常は水の流出する事なし。其北方に當りて「タウゴ」淵と云ふ所に倒川の川床中に神代杉の埋沒せるあり少許の清水は此所より湧出す。蓋し湖の水が地下流となりて、此所に來るものにして、之れを早川の源とす。早川は夫れより仙石原、湖尻の二火口原を流れて、左に大湧川（流程二粁七二七）、蛇骨川（流程三粁六七五）を合せ、湯本に來りて須雲川（流程一三粁四三六）の水を入れ、始めて稍見るべきの水流となり、下流は一部湯本堰（流程一四粁八一四）を分岐し、小田原の飮用水として供給せられ、本川は早川村に至り海に朝す。流程二四粁二六七とす。他の排水口は人工に係るものにして、湖尻湖域の西端より流出す、湖岸より西に向ひ長さ一一二米の所より隧道をなす、其流出口には水門あり、隧道は長さ一二〇



I : 50000.

○米ありて、湖尻峠の山下を穿ち、其西口より八粁程急流をなして、駿河の保良村に至り、新田五三〇町歩に灌水し、遂に黄瀬川に入り、駿河灣に入る。此の工事は今を去る殆と二三〇年前即ち寛文六年（西紀一六六六年）に着手し、同十年に成就せしものにして、實に一庶人の開掘に係るなり。此水門より流出せる水量は、田邊工學博士の計算によれば、水門に於ける水の深度四尺（平均水位は六尺〇二分）の時に流速一秒時に凡三尺にして、夏季田地灌水の時は一秒時間に一〇〇立方尺に達すと云ふ。此湖は相模洋の斜面區域にありと雖も、人工によりては駿河灣の斜面區域に屬し、水理上實に兩斜面區域に屬するものなり。

フォレル教授は排水狀況の如何により湖沼を左の如く分類せり、

湖、
- 一時の湖、排水口なきもの、
- 永久の湖、排水口を有するもの、
  - 間歇性排水口を有するもの、
  - 永久性排水口を有するもの、

故に芦湖は正に永久性排水口を有する永久湖なり。

第三章　湖盆の形態

(一)　湖盆の形態

本湖の深度に就き從來漁夫は此の湖上にて漁業をなすに網を用ゆるを常とせり、而して其網は概して湖底に達せしむるが故に、大略湖の深度を知れりと雖も、精密なる深度錘測をなせしは曾に御料局に於て湖尻湖域の一部に於て或目的を以てなせしことあるのみにて、其他には更に深度錘測をなせしことなし、故に全湖域に於ける深度錘測は全く余が自ら調査せる所なりとす。余が本湖錘測中時恰も明治三五年本多博士桑木、吉田二學士夏季本湖に於ける定常振動（後章參照）觀測の際にも深度錘測を施行せられたり、然れども其結果は未だ公にせられざれば、余が深度圖（第一圖）を調製するに當り、之れを參照し又諸學士の指導を仰ぐ能はざりしは余の最も遺憾とする所なり。

爰に載せる芦湖の深度圖は、余が六五四回の錘測に基き調製せるものにして深度毎一〇米に等深線を畫せり。

湖岸線は御料局の三千分の一圖より縮尺し、陸上の曲線は參謀本部の帝國圖より取り、毎一〇〇米に等高線を設くるものなり。

今此の圖を見るに本湖は比較的淺けれども湖底の地貌は凸凹に富み、等深線の形態は頗る複雜せり、本湖が形狀の狹長なるにも拘らず、單獨なる湖床を作り、湖床の大部分に擴張せる三〇米等深線は湖尻湖域に於ては、中央線に沿て連るも、其南に曳て湖の最狹部に至れば著く中央線以西に偏し、中央湖域に於ては湖の大部分に廣がり、箱根町と蛸川を一線に望む位置の中央に於て沖ノ島と稱する湖底隆起區域(潛島)の爲めに著く、等深線は西方に遶曲し、再び箱根灣口に達す。而して四〇米等深線により限らるゝ區域は、都合五箇所ありて、皆著く西岸に近接せり。其最も大なる區域を占むるものは、中央湖域の中部平石の前沖に於て奇形をなせる深部(面積五三二方米)を作り、其最深點は平石灣内にて距岸數十米の所にて四五米あり。其他の深部中前者の南にあるものは、最深四六米にして楕圓形の地積を作る。尙は其他には眞田の沖に於て極て小なる楕圓形の四〇米等深線に限られ、其内に四八米の深度あり。是れを以て本湖の最大深度とす。此の最大深度は漁夫が從來謂ひ傳ふる深度三八伊に比し大差なく。從て其の最大深點の位置も漁夫が從來最大深度として考ふる位置に良く符合せり。然れども平林理學士が箱根、熱海兩火山調査報文に載せたる一五〇米餘の數字は、餘りに差多きが故、何か土人より聞取りたる誤りならんと信ず。而して他の一は角石の前沖にあり、深度四七米、殆と前者と同じく又著く北方に狹く突出す尙ほ他の一は湖尻區域に近く、立石灣内にありと雖も、僅に四二米の最深度を有するに過ぎず。

又二〇米等深線以淺の區域は湖尻の大部分を占め、其他は箱根灣と元箱根灣を領す。而して前に述べたる沖ノ島と稱する淺瀨は、三〇米等深線と二〇米等深線との中間にありて、一〇米等深線にて限られ、狹長なる扁桃形の淺洲をなす其長さ約一六〇米幅四〇米にして其最も淺き所即ち潛島の頂點は、僅に水面下二米に過ぎずして、風波の靜なるときは水面より窺ひ見る事を得るなり。其他には湖底更に凸所あるを認めず。

今本湖の大體に就きて云へば湖の深部は中央線より西方に偏し、西岸に陸地に沿て等深線の密接して走れる

を見、東岸は概して淺く、等深線も又亦相互接近せず。之れ全く外輪山に沿へる湖底に於て深きを示し、火口丘の麓に於て淺きを意味し、明かに火口原湖固有の標式を示せるものにて沖の島淺洲の存在は、離宮を戴ける塔ヶ島半島と共に、駒岳熔岩流の末端が水波の爲め破壞し去られ、其一部が尙ほ水底に存在せるものならん。此半島及淺洲は其規模に於て大小の差あれども、彼の日光湯の湖に於ける兎島半島及び、其南方なる湖底淺瀨に酷似せる所以は其成因の同きが爲め同一の現象を生ぜしものなるべし。

以上、其形態を述べたる湖盆に涵養せる水量即ち容積に就き、紙積秤量法を以て計算せる所に據れば、一六一七八九二九九立方米なり。之れをツーレ敎授が未だ精密なる深度圖なき湖の容積を計る方法に依り、面積を基邊とし最大深度四八米を高さとせる圓錐體と認めて計算せる容積一一三四二八八〇〇立方米に比すれば、漸やく大なりとす。又此の面積を除し得たる平均深度は四三米八四なり。此の平均淺度は嘗つて前記三學士が、定常振動の振動期により計算せられたるものと略ぼ一致せり。故に淺度錘測結果が確實に近きを證し得べし。（第一圖參照）

湖盆の面積容積等の計算法は別章湖沼研究法に讓り玆に記述を略せり。

第四章　水體の物理上諸性質

（一）　水温、水温四季の變化、水温局部の異常

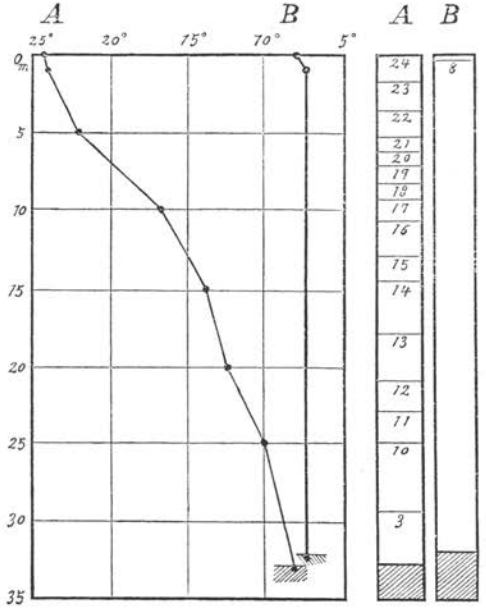
淡水湖に於ける水温成層に關する法則に就きては、余屢々地學雜誌其他二三の學術雜誌に記載せしことあるを以て、今爰には其說明を略し直に本湖に於ける水温の一年中變化の狀態及び局部に於ける水温分布の異常とに就き、說明を試むることゝせり。

イ、表層に於ける水温の年變化、毎日一回づゝ水温を觀測し、之れを一年以上繼續するに非らざれば、一年中變化の狀態を知る能はずと雖も、余が觀測せる數回の觀測中表面水温の最も低かりしは、明治三五年二月二四日の攝氏五度にして、其最も高かりしは三四年九月十日の二四度なり。故に此の數字を以て假に一年中の最高低とすれば其變化の差は十九度なりとす。

フォレル教授の湖の分類法によれば、表層水温の最大密度に達するや又其以上なるか其以下にあるかにより分類せり。

	最高水温	最低水温
熱帯湖	V 4°	IV 4°
温帯湖	V 4°	Λ 4°
寒帯湖	IV 4°	Λ 4°

第二圖



Aは明治三四年九月十日(順列成層)
Bは明治三四年十二月二八日(混乱)
表中左側の數字は深度を米を以て表し上段の數字は水温を攝氏度にて示せり

芦湖は正に熱帯湖なり。

ロ、水温成層及湖底水温の年變化　深層の水温を觀測するには、特種の構造裝置を有する水温計を用ひざるべからず。故にネクレチ、サンフラ式深水用木枠附水底水温計を使用せり。此器機に付ては更に後章に於て記述すべし。水温成層の狀態は明治三五年十二月二四日に觀測せるものは五度にして、殆ど垂直の曲線を呈し、水層は上下混亂を示せり。明治三四年四月五日のものは既に水温漸く高く、表面より熱せられて表面下五米までは成層を始め、其下層は尚ほ混亂せり。同年六月二四日のものは春季の如く成層の狀態をなし、表層は二〇度に達し、深底は七度前後なり。同年九月十日には表層に二四度を示し、深底に九度乃至十度を計れり、曲線は著く斜狀を呈し、成層別明し夏季に於ける一

日中水温變化の下限を示す所の水温急變層は、十米より一五米の間にありて、殆ど深度一米の間に水温二度半の遞減あり。又一二月二八日のものは殆ど八度にして全層混亂し、只僅かに表面より一米の間にて夏季成層の殘姿を存するなり（第二圖參照）

然らば本湖の水温成層は一年中何の時と雖も、殆ど順列成層（表層に於て水温最も高く深度を增すに從ひ水温を次第に減ずるもの）をなし、只に最寒候に於て漸時に四度以上の水温に混亂す。故に純然たる熱帶湖なり。次ぎに何れの季節と雖も。湖底の水温に比較的著き差あるは、一年の中の氣温變化の影響にして、其差は四度なり。斯の如き差は毎年又均しからず。故にフォレル敎授の分類法は尙ほ此の點に於て在の如く分類せり。

深底水温	普通ニ	稀ニ	例
熱帶湖 標式	V 4°	——	箱根芦ノ湖
熱帶湖 亞温帶式	V 4°	4°	猪苗代湖
熱帶湖 亞熱帶式	= 4°	V 4°	西湖（甲斐）
溫帶湖 標式	= 4°	——	日光中宮祠湖
溫帶湖 亞寒帶式	= 4°	Λ 4°	——
寒帶湖 亞温帶式	Λ 4°	4°	——
寒帶湖 標式	Λ 4°	——	——

芦湖は前に述べたるが如く、逆列成層（表層に於て水温最も低く深度を增すに從ひ水温を次第に增すもの）を見ること絕へてなき熱帶湖にして、又深底の水温は常に四度以上にして決して何れの場合と雖も四度となることなしとせば、純然たる熱帶湖の標式を備ふるものなり。若し今後觀測の數を重ねるに從ひ、或は本年より一層嚴寒なる年に際し、或は五度より一度下て四度となることありて、亞温帶式に偶然屬する事ありとするも、其熱帶湖たる事實を失はず。

ハ、結氷、水温門、本湖の水温は前述の如く最低五度なれば、結氷を見る事なしと雖も、湖岸附近にして水

の對流作用の不充分なる部にては、陸地の爲め冷却せらるゝの甚だしきと風波を受くることなきを以て、特に寒冷なる年を限り箱根灣及び元箱根灣内にて岸より一尺又は二尺程の所に薄氷を結ぶ事ありと雖も甚だ稀にして又た數時間を經過して全く消失するを常とす近年にありて結氷ありたるは明治十七八年の頃に一回ありしと云ふ、水温が湖畔に於て結氷するに至れば其局部は逆列の成層をなすことあり、然るときは沖部は水温混亂するか若くは順列の狀態を存するも其水層と湖畔の逆列水層との中間に四度の水温よりなる水温門ありしや疑なし然らば本湖は前に述べたる如く熱帶湖なれども例外には湖岸に限り温帶湖の性質を示すことあるなり。

湖は結氷狀況により左の如く分類することを得るもの〻如し。

例

湖
- 薄片式結氷
  - 數日若くは數月に亘り存在するもの　諏訪湖
  - 數時間にして融解するもの（一夜氷）　芦湖
- 餅盤式結氷

備考　薄片式は湖面風靜に水波なく又天氣晴朗にして湖面より放射する熱量極て多き夜に當り湖の全面若くは大部分を閉塞して結氷するものを云ふ、餅盤式は氷の斜狀片が風波の爲め集凝し塊狀をなし浮游するものを云ふ。

又其薄片式結氷の場合に於て結氷の有無及び湖面の全部に亘るや否やにより更に左の如く分類することを得るなり。

例

湖
- 結氷するもの
  - 毎年同右、時として一部に止ることあるもの　諏訪湖、赤城大沼等
  - 特に寒き年のみ
    - 湖の全面を鎖すもの　山中湖、精進湖等
    - 湖の一部に止るもの　牛久沼？
- 決して結氷することなきもの　芦湖

本湖は特に寒冷なる冬季に限り湖岸のみに結氷を見る湖に屬す。

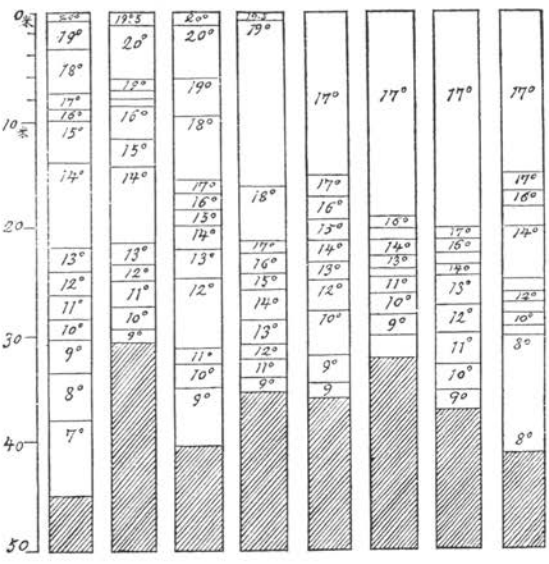
二、局部に於ける水温成層の異常、一湖盆に於ける水温垂直分布は、到る處必ずしも一樣ならず、又其成層

も決して規則正しきものに非らず。今假に一湖盆の斷面を造り、之れに等温線を記入する時は、其等温線は決して、相互並行せる水平線を畫かず。或は湖の一端より他の一端に向ひ傾斜し、又波狀線を畫くことあり。其原因に就きては種々ありと雖も、其等温線を傾斜せしむる場合は、一般に湖の一端に於て湖に注ぐ水流が、多量の土砂を輸送し來るが爲めにして、此濁水は同温度を有する清澄なる湖水より比重大なれば、湖の深層に沈下するが爲なりとす。又之れと同一の現象は、湖面を吹く風の作用により、表水層の水温を變化せしむるが爲め、機械的に比較的深層に迄で、水温を混亂せしむるにより生ずるものなり、次に湖盆の水層に等温線が波狀を呈するは、主として湖底に於ける湧泉の存在を示すものにして、石灰岩地又は本湖の如き火山岩地の湖盆に於て見るを普通とす。

本湖には河川の注入するもの殆ど無きを以て、河水により水層の等温線に異常を呈せしむる場合を認め得ずと雖も、風力により水温を混亂し、等温深度線をして傾斜せしむる場合は、屢〻之を實驗し得たり。

イ、第一例、明治三四年六月二一日午後二時より五時に亘り本湖の最大中央線上に於て施行せし數回の水温錘測の結果によれば此日表層の水温は湖面の全部を通じて二〇度なりき而して湖の南東岸なる塔ヶ島半島の前

第三圖



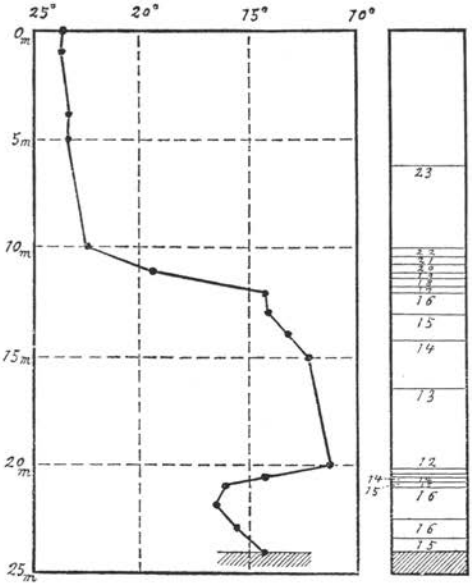
甲　明治三四年六月二一日　從午後二時至五時

乙　明治三六年十月一七日　從午後二時至六時

A及びA′は湖の南部塔ヶ島の沖にして
D及びD′は湖尻湖域の中央部なり
B、B′及びC、C′は前兩者の中間にて等距離の所にあり

沖に於ては一八度の等温線は深度三米五、又一五度の等温線は深度九米五の處にあり然るに湖の中央に至れば一八度の等温線は深度九米五、一五度の等温線は一八米の深度にあり又更に北西に進み湖尻湖域に近くときは一八度の水温は深度一六米二、一五度は二三米の深層に達せり、故に同深度に於ける水温は箱根町附近より湖尻湖域に於て高温たる事明にして湖盆の縦断面圖上に於ける等温線は南東部より北西部に向て傾斜せるを認む此現象は數日前より湖面を吹きたる南東の軟若くは和風の爲めに生せしものとす(第三圖甲參照)

第四圖



ロ、第二例、又明治三六年一〇月一七日午後二時より六時に至る間にも、精細なる水温錘測を施したるが。此の日の天候は前日來の降雨暫く霽れ、二箇の方向相反せる和風(沼津にては南東若くは東の和風又は疾風吹なり)は、湖の中央線の兩端より中央部に向て湖面を吹き、二風の相合する所は、自ら無風帶を作れり。故に湖上の帆舟は湖の兩半に於て相反せる方向に快走せるの奇觀を呈したり。此時表層は到る處一七度にして、深層も亦一般に九度の水温を有したり。而して湖の兩端附近の沖部即ち風上に於ては、共に深度一五米に於て一七度の同温層の下限をなすと雖も、中央部の無風帶に近ければ、其下限は實に深度二〇米の處に達せり。之を以て見れば等温線は湖の兩端より中央部に向て傾斜すること明かにして、此の稍複雜せる現象も亦風の作用たることを發見せり。(第三圖乙參照)

ハ、第三例、明治三四年六月二一日午後一時頃元箱根灣口深度二四米の水層に於て、異樣の水温成層を發見

せり。此水層は表層にて二三度強を示し、深度增加するに伴ひ水温を次第に減じ、深度二〇米に於て最低一二度に達す。夫れより約二米の間に水温を增加し十六度強となり、更に減じつゝ二四米の湖底に至れば、一四度五となれり。故に此水層は二個の順列成層の中間に逆列成層を挿み、曲線を以て示すときは一のS字狀を造れり。斯の如き現象の成因は、之れを容易に判定する事能はず。然りと雖も僅かに二四米に過ぎざる淺水層内に於て、二個の水温急變層を有するより考察するに、數日前より湖面を掃へる風は、深度二〇米の處に迄で水温を混亂せしめ、此の處に一の急變層を作れり。而して其上層の水は一時殆ど混亂の狀態にありしも、前日來水面よりの受熱の爲め更に第二次の急變層を作るに至りたるものならん。（第四圖參照）、（水温の部終、未完）

中越探山紀行

大平晟

廣瀨谷

廣瀨谷は北魚沼郡小出（コイデ）を關門とし、破間川に沿ひ、右は權現堂左は守門の餘脈連り、東々北に遡ること約七里にして大白川驛に極まり、圓錐形の頂上噐穴口を存せる朝草山（五三五〇尺）の北腹を超え、岩代の國只見に出づる所謂六十里越（四三〇〇）あり、八十里越（二八〇〇）は南蒲原都吉ヶ平より守門、鞍掛の間を過ぎ、岩代國叶（カナヅ）津に出づるものにして、兩還は是れ守門岳を挾めるもの、而して六十里といひ、八十里といふ、其實驛間六里、八里なりといへば所謂「其兵十萬、號百萬」的の誇稱なりけり。

破間川は守門、朝草等の溪流を合せ、奔湍急下、小出の北に於て魚野川に會し、古來富士川、鬼怒（キヌ）川と共に本邦三鮎の名を得たる鮎の産地にして、其水の淸く、其崖の奇なる、實に皇天溪谷の美を廣瀨の谷にあつめたるものと稱すべく、彼の大平、戰場ヶ原の大觀、華嚴、湯瀧の莊觀は無しと雖、其溪流の淸覩、斷崖の奇觀に至りては正に日光の溪谷を凌駕すと謂ふべし。

十五日午後二時大白川を出發し六時三十分須原に着し、丸屋（平井虎吉）に投宿す、大白川を距る四里とす、此旅舍鮎の福漬といふを製す。

水晶坂の東一町許に大淵と云ふがあり、破間の奔流急落盤渦、深潭をなせるものにて、幅十間、長數十間に亘り、兩崖巉嵓削立數十丈、頂空を突き、根水底に入り、頗る凄壯を極む、鱒多く産す、鱒は此落湍以上に溯ること能はざればとて、鱒止の瀧の稱あり。

水晶坂の西、五葉松の大樹亭々河岸に聳するあり、稍下れば鮎止ノ瀧ありて、鮎の溯るを許さず、凡そ魚屬が奔湍急瀑を溯るの力、岩魚、山鯢最強く、鱒之に次ぎ、鮎又之に次ぐと云ふ。

大栃山の西に鏡池あり、周回十數町、守門の影を映じて、其名空しからず、池畔に茶亭あり。

破間沿岸の岩石は、不規律なる裂理を呈し、其内部を檢すれば、佐渡赤玉石流の堅緻なる赤褐色石英岩多く、銅鐵の鑛脈所々に露出し、白、黃、淡紅等の水晶及瑪瑙散在す、岩石既に豐富、懸崖既に奇譎、加ふるに清流激湍屏風なせる丘陵と共に屈曲し、銀蛇の怒れるが如く、巖を嚙み、石を呑み、時に深碧鏡なせる泓潭を作りて、少休し、又蹶然奮起、瀉然流れ去る、其止まるや大膽動ぜざるが如く其奔るや猛然として萬艱を排す、況や楓樹は拳曲危崖に臨み、松樹は勁節、峻丘に聳ゆるをや、處世の教訓盡くせりと謂ふべし。

予が須原に入るや、巢守神社の祭典にあたり、角力あり、夜に入りて盆踊賑かなり、神社に近き丸屋に陣取れる山人、卿か困却せざるを得ず、偶予が到れりとの注進に接せりとて、風間むつ子來訪す、子は曾ては予の教へ兒たりしもの、今此地の醫師風間策一氏に嫁せるなり。

此夜澄空、十五夜の明月を廣瀨谷の客舍に觀、九時三十分眠に就く。

十五日　快晴　朝　大白川　六二度　晝　同　七六度　夕　須原　七七度

十六日午前七時起床、吉澤與三松君に發信す。

朝むつ子の案内を以て、當地の學校に至り、校長五十嵐篤一氏に面會す、守門探山前其參考材料の報告を受けしを謝せんとてなり、偶當校卒業生同窓會を開くの前日なりとて八海山下の東校長風間松雄君も居合せたるを幸に、彼地村役場助役たる上村清右衛門氏は、山麓大倉の住人なるを聞き、直ちに郵書もて、登山準備品及案内者雇入の件を依頼せり。

須原は戸數約四百、廣瀨谷村落の巨擘とす。

午飯は風間夫妻の叮嚀なる饗にあつかり、午後一時同氏を辭し素封家目黑氏の門前に至れば、守門の山容歷然として畫けるが如し、門前の石段に踞し、手帳取出し紀念寫生に筆執れば、出入の人々予が洋服姿に菅笠、莫産、太き米山紀念杖に、双眼鏡鞄の左右に臚列せるを見、頻りに怪訝に堪へざるものゝ如きも、一切無頓着の山人こそ氣樂なれ。

此日海暑行人を惱ます、郊外路傍に清泉の落下せるところを卜し、沐浴大休憩をなす、三時三十分並（ナミヤナギ）柳に至り、銀山地方の探檢談を聞かんとて關矢橋太郎氏を訪ふ、氏は當地方の素封家有力者にして、佐藤貞太郎氏の姻戚なり、かねて佐藤氏より來信ありしとて座敷に導かる、偶萬歲連の一隊數旒の旗を押立て、田舍式速成樂隊に天の岩戸も碎けんばかりの氣勢もて門内に入り來り、帝國の萬歲、陸海軍の萬歲、次で關矢氏の萬歲を唱へしは氏の德望想ふべし、山人山に入りて數日、頗る世況に遠ざかりければ、其何の故たるを知らず、之を主人に質せば樽太占領の祝賀萬歲なりとぞ、山間に入りて社會の耳目と杜絕したるは是非もなし。

浴後爽かなる借り衣に、山人が開闢以來始めてといふ縮緬の三尺を捲き附けしは勿體なし、やがて主人の厚慮により、八海、銀山、駒ヶ岳を巡れ

る行者、馬場久作なるもの來りて、種々の參考材料を陳ぶ、夜に入り主人の弟賢象君、及び令母の款話に接す、九時大なる熊皮の上に布きたる蒲團に横はり、安眠に就きぬ、實木より大白川、大白川より布引瀧、布引瀧より須原まで二日間、熊の獵夫を案内とし、行々熊狩の實況を聞したる余が、今又無類の熊皮を夢とするは、奇縁なるかな。

十六日　晴陰　朝　須原　晝　同　夕　並柳
七五度　八六度　七九度

明くれば十七日、夜來の細雨は絲より細し、八時三十分關矢氏を辭し南行すれば、八海の峻峰は透綾の霧を隔てゝ予を招き、破間の激流は廣瀬の關橋を撤して予を扼するに似たり、渡船にて川を越し、十一時小出高等小學校に至り、校長矢島茂八郎教員川越友吉二君を訪ふ、予大白川淺井旅舍の宿帳によりて矢島君及女子師範學校教員小林君の布引を探り、小林君は雨の爲に、矢島君は脚疲の爲に、守門の登山を廢せるを聞き知りければ、一面會早々讀辭を呈しぬ、此日教育點呼なりとて諸教員皆在校し予と同行を冀ふものありしも、三岳の跋渉といふに辟易して、事止みぬ、君の周旋もて、郡の印刷にかゝる銀山平探檢記を役場より借覽す。

午後二葉屋(小島與吉)に投宿し夜川越氏に遊ぶ、二葉屋主人は曾て小學校教員たりしもの、又銀山の探檢者なれば種々の參考材料を得たり。

此地に谷内新作といへる信者あり、御岳(信州)に於て百五十回登山紀念の碑を建てしものなりと聞き、訪問せんと欲せしが、折しも御岳參詣中にて面會するを得ず唯その土産として川越君に贈れる、詳密なる御嶽の圖面に拜謁を遂げしのみ。

小出は戸數約一千、須原を距る三里五町、並柳を距る一里十一町とす、宏大なる製絲場あり、蠶卵紙を產すること郡内第一たり。

十時眠につく。

十七日　雨　朝　並柳　晝　小出　夕　同
七六度　七五度　七五度

八色ノ原

予が守門行は、實に多興多味の望を屬せしなり、而かも頗る失望に終れる、予豈空しく歸鄉するに忍びんや、突貫の命令は大腦總司令部より下れり、勇健無比の鐵脚將軍は起てり、忠實無雙の金剛杖は前衛となり、銳明なる雙眼鏡は斥候となり、兵站部亦備はる、是に於てか八海、中、駒三岳を踏破すべく、前進せり。

荷物の量を減ぜんとて、紀念岩石類を川越氏に託し、十八日午前十時、細雨を冒して小出を出發し、佐梨川に架せる作り立ての新橋を渡り、十一時三十分、澍雨を蠻野の諏訪神社に避け、遠く魚野川を右に見て南行すれば、小草多き原野に出で、田あり、畑ありて散在すれど、地概して磽确の感あり、駒ヶ岳の嶽野にして、之を八色ノ原と稱す、草原中小逕錯雜せる所には小石標ありて、八海道を指示せるは、其參詣者の多きを知らる。

烟雨のため其姿は見えざれど、八海山に程近き水無川の橋畔に到れば、白雨盆を覆すが如し、路傍なる赤石小學校の玄關に佇立すること數十分、昨日は一天平等淨雲を以て鎖しゝが、今日は切雲屢々青空を現はし、唯團々たる黑雲時に白雨を灑せり、三時三十分八海山下の大倉に着し、上村清右衛門氏を訪ふ、主人は公用多忙のため前日來歸宅なき由なれど、予が依頼の件は家人に通じ置きしことゝて、主婦快く宿泊を承諾せり、夜九時頃

主人歸り來ければ、翌日天候佳ならば登山すべく、諸般の準備を整へぬ、主人年齢四十五許、其細君の外、老母あり、本年入營すといへる男子あり、其前後の年頃なる二人の娘あり、主人を除けば皆「オマヘ」、「アー」、「ノンシ」的の山間古風語の外知らざれど、淳朴却て愛すべきあり。

上村氏は當地の資産家にして、家屋廣大、殊に用材の偉強なるは冬季積雪に堪へんが爲なり、圍爐裡四五尺大にして、一間餘の薪を其儘に焚けるは、燃料に豐かに、且つ嚴冬防寒の餘習によるならん、此地小出をさる約三里とす。

偶富山の賣藥商同宿し、立山登山の物語をなしゝが、其健啖感ずるに堪へたり。

時に明月地を照して、屋外晝の如し、「お連がよろしうあります」との相客の御世辭も憎からず、快眠につきしは十時なりき。

十八日　雨　朝　小出　七二度　晝　虫野　七六度　夕　大倉　七四度

水勢滔々石を轉ばし幅約十間を有する水無川は、下流いつしか八色の草野砂礫の中に滲入して、其姿を留めず、水無川の名此より起ると云ふ、而して其潛流は、小出の南に於て、魚野河岸に現はるとぞ、かく殆ど無口河なるに拘はらず、岩魚の大物を産するは奇と謂ふべし。

八海山

八海山は南魚沼郡の北東に位し浦佐を距る東南二里強とす、舊曆八朔を以て參詣の定日とし、此日は山上龍燈を見得ると稱し、行者連の聚る者數百千人、五十戸許の大倉村落は、宿客を以て充たさると云ふ。

本山には天池、男池、女池、臭水池、漕池、日の池、月の池、五龍王池の八湖あれば、八海と名けしなりと。

十九日午前六時起床、七時四十分、導者上村五郎(四十六歳)と共に出發し、十數町にして萩川を渡り、坂本神社所謂里宮に詣づ、社前に不動の泉あり、備附の柄杓にて一杯戴き、水筒に汲み取り、やがて歩を移さんとすれば、年の頃二十五六の男あり、色青白く窶れけるが、相貌卑しからず恭く予に會釋し「私は願ありて此宮に籠ること既に一週間程なるが今日は珍らしき快晴なれば御頂上へ參詣せんと思ひ立ちし所、只今案内者に承れば、あなた樣は御頂上へお泊りとのこと、御迷惑ながら御一緒に願ひます」と言ふ、其住所を尋ぬれば小千谷上ノ山の鍛冶職平澤由六といひ、數度本山に登りし由にて持病全癒祈願の爲め、參籠には常に穀斷をなすと云へり、所謂穀斷とは米穀を絶つことにて、蕎麥粉若くば麥粉を湯水に攪き、以て飢を凌ぐなり、近鄉の情懇かしく、共に語りつゝ里宮を出發せり、里宮は八海山麓即ち一合目にして、これより俄然急遽となり、毎合高三尺許の石柱を立てゝ程標となす。

例によりて強附會の緣起を有せる押分(オシワク)岩、爪研(ツメトギ)岩を經、高地には珍らしく、幹徑四尺に餘れる赤松の大木、所謂萬左衞門松なるものを見、程なく二合目に着きしは、八時二十五分なりき、同五十五分一の鳥居に達す、椋の古木の傍に、緣結岩あり、大さ三間許、上に石祠あり、不動明王を祀る又伊奘那岐伊奘那美命と刻せる石標あり。

九時二十五分、三合目に達す、路傍に風穴あり、深約五間、略平に通じ、奥に石像を見る、此穴口に立たば、炎暑の苦を知らずと云ひ傳ふれど、富士、戸隱の風穴の如く較著ならず。

四合目の天池に達せしは、十時五分なり、檜の古木あり、天池は徑約一間許の小窪地にして、大雨を待たずんば、滴水を見ること能はず、天池とは、蓋し雨池の雅號なりけり、附近は圭角なき蠻岩とす。

同四十五分、五合目を經、路左一町許にして臭水池（又油池）あり、稍進めば男池（又浦戸池）、女池（又瓢箪池）あり、尚進むこと一町餘、路右に降ること二十間許にして漕池あり、男池は長方形、女池は瓢形をなし、各周回二三町、八湖中最大にして深亦最も優れりと雖、水草猶岸遠く生ひ亘れるを見れば、餘り深からざるが如し、油池は舊と石腦油の湛へたるより名けし由なれど、今は唯沮洳の窪地のみ、漕油は以前詣客池中を渉りしより名けしも、近年深を增し渉るべからず、徑三十間許、是亦苗場山頂の苗草の類蒴蔓せり。

漕池より進むこと五町許にして、路右に下ること數十間、胎内窟あり、巨巖屹立すること五六丈、其嶂障、所謂胎内の長、約五間頗る急勾配とす。

十一時十五分六合目に達す、石標に「六合目明治十七年甲申秋九月」と刻せり、五六合の間は小平地、小窪地散在し、地概ね沮洳、雜木繁茂して溝暗ければ、猿棲めりとのことなれど、遂に見當らず、又大蛇も棲めりと云ひ傳ふれど、暗しもの無さが如し。

六合目には九尺二間の女人堂あり、大永姫命を祀る、昔時賽詣女人の宿泊は、此を限りとせしも、今は頂上まで巡り、九合目の籠堂に宿するに至れり、傍の石碑には「心空靈神明治二十四年七月」、「心覺行者靈明治十五年八月」と刻せり。

山麓より六合目までは、展望概ね蔽塞せしが、此に至りて樹木短縮、黄蓮散在し、頂上亦手に取るばかり、近く見ゆ、七合目以上頗る急勾配となり、零時二十分八合に達す、此處幅約十間、長數十町に亘りて、馬の脊の如く矮樹短草の裡、怪杉二三點、石塔幾十連立す、稍下りて再び登ること少許、同三十分九合目の籠堂に達す、所謂千本檜（センボンヒノキ）の籠堂是なり、千本檜とは名のみにて其實檜の片影をも認めず、唯五六尺の虎杖が密生せると石塔の陳列を見るのみ、石塔は三十六童子の碑なりとは、平澤君の説明なり、例によりて何神、何行者等の石碑數し、こゝは今夜の宿泊所とす。

千本檜の籠堂は、二間四間大の板葺二棟あり、予が前遊の際は九尺二間大のもの一棟のみにて、番人などは居らざりしが、今は一人の番爺さへあり、客の需に應じて飯、汁等を供給せしも、頗る麁朴、且つ新參者と見え、予等に現時の米價などを質問せる後、飯一碗三錢五厘、汁は二錢、湯は一錢と定めしぞ可笑しき、堂の西方を下ること數町にして、多量の泉ありと云ふ。

我等が里宮を發してより、間もなく婦人を交へたる十數の白衣一隊鈴打ち鳴らして來れるあり、平澤君は頗る律義の信心家と見え「御山は快晴の日でも、女人が登ると霧がかゝつたり荒れたりしますから、彼等が里宮に詣り、時を費す間に早めに登りませう」と、己の憔悴をも打ち忘れ、急進せしも可笑けれど、角々しく説破するの必要も感ぜざれば、其意に任せて千本檜に達し、少憩喫飯する程に、亦も平澤君の催促にあつかり、零時四十五分八海頂上即ち八劔（ヤツルギ）巡りをなすべく、輕裝出發せり、導者五郎は荷物と共に堂に殘れり。

籠堂より稍登れば、表土漸く絶えて、稜々たる山骨を露はし、山骨は一見蠻岩狀をなせども、仔細に之を檢すれば、古成の閃綠岩に屬し、表面龜裂龜裂して、頗る剝離し易く、裂片は暗綠色を呈するが多く、其質甚だ堅し、山麓には銀銅の鑛脈を見ると云ふ。

籠堂より程なく立石（タチ）といふあり、高二丈餘、扁平にして將に折れんばかりの危狀を呈し、手岩瘤を攀ぢ、爪先岩瘤を踏み、一人づゝ辛うじて登り

得べし、平澤君は先づ登り、恭しく拍手呪文を誦しぬ、予次いで登り、拍手呪文に代ふるに直立展望を以てす、これより峰傳ひに南東に進み、登れば逕益峻峭嵯峨、一上一下、左紆右回、或は樹の根に頼り、或は岩角を攀ぢ、或は鐵鎖に縋ること猿の如く、或は岩より岩に飛び移ること栗鼠の如し、古來邪慳のもの、茲に至りて天狗にさらはれ、墜落失命せるものありなど言ひ傳ふ、さなきだに鐵鎖は往々十數間の長きに及び、脚下は直ちに絶壁數百千仞の幽谷を瞰下す、内憂外患交々至り、戰慄畏縮退却するもの、十の六七なりと云ふは宜なり。

立石より少許にして、一突起の岩上に松尾神社あり、俗に疱瘡（イモ）石と稱し、痘瘡豫防の神とす、附近の岩面悉く疱瘡然たるも可笑し、其北に稍高く崔嵬たる廣塲あり、賽河原と稱す。

午後一時、不動明王を祀れる不動岳、同三十分大日岳に達す、是れ本山の最高點にして、海拔六千八百尺とす、石廓の中に大日如來を祀れり、高尺五寸許の帶劔銅像神あり、天御中主命、國常立命、天照大神、高皇産靈神、神皇産靈神、瓊々杵尊、神武天皇、桓武天皇、何神、何命、何如來等一々叩頭せば維頭も擧らざる程、石標を攢立せるは、聊恐縮せざるを得ず、斯く神佛混淆緊昌の餘、本山の祭神所謂八海大明神なるものは其本體何なるやを知るに苦むべきも、主として國常立命を祀れるものなりと云ふ。

本山頂上は嚴然たる八大突起あり、故に之を八劔、又は八峰と稱し、峰頭は皆維石巖々、其面積狹くして長く亘り、比較的廣き不動、大日岳頂の如き、亦數十歩に過ぎず、其兩崖直ちに薙ぎて、深谷に達する有樣なれば、歩々油斷あるべからず、斷崖絶壁の間、矮縮せる檜、姫小松の怪しく立てるあり、危く垂るゝあり、石楠、熊笹は其根を封じ「六角ズミ」、「丸ズミ」、犬躑躅、岩躑躅、「ヤドメ」、「ナヽカマド」（又山南天）、檜、錦木、榛、楡、「ガツシン」等之を縫ひ、劇毒草たる鳥頭（トリカブト）、解熱止痢劑たる黃蓮、其他麒麟艸、岩石菖、蟲取石菖散點す、予諸山を巡り岩躑躅を見しこと屢なりしも、未だ其開花に接せざりしが、本山に於て始めて其高潔楚々たる花容を拜す、花冠梅花より稍小に、雄蕋黃褐を呈し、純白なる四瓣は、頗る瘠せ、枝梢に簇生す、天岩に占居し、天風に呼吸し、枝條既に神骨を帶び、花容亦仙姿あり、一株を掘り採りて、佐藤氏に贈れり。

千本檜に於て蟻を見、大日岳頂に於て薄羽白蝶を見る、嗚呼翩々たる蝴蝶、吾人をして汝と共に羽化登仙の感を起さしむ。

不動、大日の間に於て崎王（サキオー）と稱する突起あり、其北角に二嶂屹立し、檜、松其頭を飾りて頗る奇とす、崎王に立たば東の谷間には幾條の白雪を瞰下すべく、西側脚下には、近く日の池、月の池を見る、日の池は崎王より降ること一町餘、月の池は日の池より降る更に三十間許、其形一は圓形、一は弦月形をなし、長徑約二三間、是れ本山の靈池として、最も崇敬する所、彼の雨乞連が「御水貰ひ」と稱して、拜領するは即ち此日の池の水にして、靈驗ありし後「御水返し」をなさゞれば、必ず神罰ありと云へり、就いて之を檢するに、深は皆二尺に過ぎず、池底凹き盤岩たること苗塲、守門山上の池と同じ、日の池の水は潔く見ゆれど月の池は稍褐色不純を呈するも、信徒は一向無頓着、否拜み飲むこそ可笑しけれ、兩池の附近數町歩は高一尺内外の深山菅、一面に繁茂せり。

「タウメ、タウメ呼ばれや、八海山の山へ、龍（タツ）が三匹さがつた」とは當地方の雨乞歌なり。

頂上十二條の鐵鎖あり、長二三間、乃至十間餘、其上端は徑寸許の鐵條を鉛直的に岩中に挿入せり、環節或は單に圓環の連續なるあり、或は轡形

のものありと雖、概ね啞鈴形をなして、其中央部の括れ(クビ)を握るに倣す、攀登の際豫め鎖が中間にて岩角に引きかゝりて紆曲し居らざるやを檢するを要す、中途にて俄然外づれ反るあらば、墮力のため不測の奇禍に陷ることあらん、鐵鎖は、比較的登るに易くして、降るに心地悪しきものなり。

大日岳頂に踞座展望すれば、北々東の當面に最近く聳ゆるは駒岳にして、其間深谷を隔て、相距ること二里に過ぎず、雙眼鏡によれば、其絶巓の三角點を明に認め得べく、懸崖の飛瀑は縦皺の殘雪と、其潔を競ひ、其白を爭ふ、東には中ノ岳ありて、峰頭穩陡なる饅頭狀をなし、高度一段を加ふ、其幣ノ瀧(ヘイノ)の壯觀は、八合目より望み得べし、三岳鼎立峰巒さを以て紆回參差、八海より中、中より駒に連り、其間馬蹄形の一大幽谷を作り、北西に向て開く、溪水の聚合せるものを水無川とす、北東方面は此屏風なせる峰巒を以て閉塞せらると雖、眸子を北西に轉ぜんか、魚野川は長蛇の勢を以て上田平を貫き、千隈ノ川に會し、遂に蒲原の平野に朝する所、一望濶然、胸襟爲に開く、西々北に米山あり、西南に苗場ありて信毛諸山に連る。

本山の登路は、大倉より頂上まで五里と稱すれど、其實約三里、五時餘を費す、之を北口又表道と稱し、裏道は笈(オヒガ)根、又は屏風ヶ岩を經て、西々南、城内(ジョーナイ)に通ずるもの、之を南口と稱す、屏風ヶ岩は巍嵓峭立屏風の如く、姫小松之を點綴し、山中の美觀とす、されど本山の偉觀壯觀は、必ず之を北東の深谷に推さゞるを得ず、本山は實に中、駒の二岳を得て大に其價値を高むるものと謂ふべし。

二時四十分九合目の籠堂に歸着す、平澤君は「此衰弱の身を以て無事八劔巡りを果せるは是れ自力にあらずして單に八海大明神の御力によれり」とて痛く打ち喜び、里宮に祈願參籠すべく下山せり、此時信者連の一隊も登り着きぬ、一隊は樣尾鄉のものにて總數十二人中、四人の婦人あり、青年學生あり、小若連あり、烏帽子直垂の道士之を率う、道士年齡五十左右、八字髯を貯へ、莊重自ら持す、やがて彼等は頂上を巡りて歸り、仔細ありて籠堂に殘りし四十餘歳の一婦人に對し、道士の託宣に曰く「御山の三葉黄蓮の根と、白櫻の皮と、鄉(サト)の屋敷の桑の根との三品を煎じて飲ますれば、夫の病必ず全快せん、但信心怠りあらば効なし」と、御山とは八海山にして、白櫻とは白棒なり、右三品は草根木皮式の處方書中に發見するを得べく、末段の「信心怠りあらば効なし」とは如才なき哉、さるにても夫の重病平癒を祈り、遙々此險山に詣づる婦人の志や憐むべく又感ずべし。

籠堂の東崖に踞して、例により對山連峰の眞景を手帳に收むべく熱中せる予を見し彼道士は、予が三岳跋渉の豫定を聞き、頻りに感歎し、且つ予が「只今八海山頂を巡り見るに、前遊に比すれば餘りに險難を感ぜざりしは妙なり」といふに對し「氣根益强健なるの證なり」とて、大々的讃辭を呈するに至りては愈以て如才なき男哉、彼は本山の東に當りて數度御來迎に接せる、否拜せる由を語りしが、予は遂に見るに及ばざりし、當時對山方面には、幾段の靄去來せしことなれば、夕陽之に映じて一種の虹霓を顯ぜしものならん。

予は導者と共に、番爺の居れる西の小屋に宿し、信者の一隊は道士と共に、東の籠堂に宿せしが、餘り雜沓せりとて、婦人連は遂に我等の小屋に來りて宿しぬ。番爺は予が片貝なりといふを聞き「名物の片貝花火を生涯に一度見たきものなり」など語りぬ、夜間屢〻堂外に逍遙して、半月を賞せしも、山氣冷風身に泌みて久しきに堪へず、立ち籠れる榾火の烟に、喉と眼とを苦め、半睡半覺曉に及びぬ。

十九日　晴　朝　大倉　六六度　夕　八海山上　七〇度

二十日朝四時起き出づれば、空模樣稍怪しく見え、氣溫亦割合に高く、風力如何にも靜かに過ぐれど、昨日始めて昇りし天氣なれば、後刻必ず霽れ渡らんとは、籠堂社會の天氣豫報なりけり、導者は昨夕荷物を開き始めて山鉈を上村氏の玄關に忘れ來しを知り、耳の遠きこと比類なき籠堂番爺が、所持せる鉈を借るべく頻る懇請せしも、彼疑惑の心ありて、應ずべくも見えず、予傍より借用料十錢を給し、且今假りに鉈の半金を渡し置き、後日實物を返すとき、引換となさんなどいへど、彼言を左右に託して遂に要領を得ざりければ、コシ〳〵造り附けの腕鉈もて代用せんと、やがて道士より「御機嫌宜しう」との送辭を受け、籠堂を出發せしは、五時三十分なりき。

六時十五分大日岳頂に少憩す、時に太陽は薄雲を衣て微かに其光を顯はし、西南に苗場の長峰を認むることいと明なり、大日岳を下り、峰續きを以て近く東南に隣れる入道岳を超えしは、七時にして、同三十分五龍王の池に達す、入道岳は峰頭半圓形をなし、入道の頭に似たればとて、此名を得、又一に圓山（マルヤマ）の稱あり、八海山頂の岩石は、龜裂累瘤、外見皆蠻岩狀を呈すれども、入道岳頂に至りては、俄然岩態を變じて、安山岩を露出せるは、奇と謂ふべし。

五龍王の池は、入道岳を下り、更に東南の峰續きより右側に下る一町許にあり、長六間幅四間、是亦日の池流の溜水にして、水頗る淸し、雨乞するもの、若し日の池の水を貰ひて、祈禱するも、効驗なきに於ては、更に此池水を貰はゞ、靈驗あるよし、導者眞面目に物語りければ、予戲れに「八海大明神も入道樣には叶はぬにや」といへば、彼は苦笑せり、其實五龍王池の位置は、日の池より稍低きも、遥遠くして人到ること稀なれば、自然靈視せしものなるべく、且つ日の池に祈りて、効なく、次ぎに此池に及ぼすに於ては、既に日數を經過し、偶々降雨に際會するものならん、所謂他所の境遇を羨むもの、拜還主義の罹一願して可なり。

五龍王池より右手即ち南西に當りて、稍低く延び亘れる峰あり、峰頭平に青草美し、之を御田ノ原と稱し、原中小池あり、池中巨大の赤石あれば、赤石ノ池と稱すといへり。

五龍王池より更に東南行すれば、一上一下、或は斷岩絕壁あり、或は檜、「カッシン」、岩躑躅等の花叢あり、一進一低九時三十分三岳連鎖の峰脈に於ける、最低部に達し、少食少憩す、大倉より八海山頂までは、路甚だ宜しく、初めて登るものと雖、毫も迷ふべき患なく、八海山頂より五龍王池までは、前者の如くならずといへ、猶ほ逕の形を存すれど、五龍王池以東は、逕形全く絕え、紛糾せる矮樹の中を押し分け、踏み越え行くものなれば、捗どらざること夥し、此間左手の溪谷を瞰まんかゝ中の岳の胸腹には高四十丈と稱せる幣（ヌイ）ノ瀧ありて、雪を欺くばかりに白く、潔く懸りて、幽谷遙裡に落ち、倒屬なせる千稜萬皺は、矮樹短草を以て飾り、翠色滴らんばかりに、見る眼涼しき感あり、近くは肩を掠め、脚を劫して巉嵓突兀、松は其頭を翳し、檜其腹を纏ふ、況んや花卉は其芬芳を逸り、溪雪其冷精を呈するに於てをや、谷の幽、谷の遥、谷の美、谷の潔、亦極まれりと謂ふべし。

中の嶽

二十日午前六時三十分八海の最高點大日岳を出發し御月山頂に着きしは午後の一時なりき、御月山は嵓屹巉立し頂上は栂、偃松の老樹之を蔽へり、二十分間にして其北側の、頗る急勾配なる禿場を降り盡し、祓川に達す、幅六尺に滿たず、右方中の岳の皺溪より落ち來れるものにて、冷味驚くべし、下流は幣瀧をなし、水無川の水源となる、祓川の溪域には、優美鮮綠の矮草蔓延し、紫紅花の雪割櫻草あり、白花の「イハグルマ」草あり、其他名も知れぬが黃花あり、黃綠花あり、青白花あり、淡紅花あり、深紫花あり、葉の鮮は、花の艷と相映發して、高山の谷を飾れり。

二時三十分、中の岳の絕巓に達す、八海山頂を距る五里餘と稱す、祓川より中の岳頂までは、矮林の紛密に苦めらるゝこと以前の如くならねど、登るに從ひ、勾配漸く急に、上より下に薙ぎ、擴がれる皺溪には、暗綠色を呈せる岩石の磊々、碎片の稜々たるありて、往々立脚點を失はしむ、八九合目邊より、以上は、唯矮草のみ蔓ひ亘り、四五寸位の熊笹之を點綴せり、頂上既に樹木と云ふべき程のものなく、又八海山頂の如く巖々たる山骨を露さず、實に優緩穩健の感あり、峰脈は八海及び駒の方面に亘れるものゝ外、東方に高く突出せる一脈ありて、其形恰も本峰を中心とせる、三出輻狀を呈し、本山は自ら峰巒の盟主たる觀あり。

本山は南北魚沼の郡界にありて、海拔約七千尺、三岳中最も高く、峯頭地積亦最も廣く、其最高點に靈池あり、略凸字形をなし、徑約三間、深尺餘、是亦苗場御田の流にして、池畔に例の肉食草毛氈苔あり、附近尙二三の小池を見る、これ皆導者及び曾て予が質問に對せしものゝ語らざりし所、想ふに經路困難のため、能く之を探りしものなく、且つ信者の輩は、徒らに駈け廻るを以てこれ能事とし、着眼の他に麁なるによるならん、凸字形靈池の畔に劔を手にせる高尺餘の銅像神あり「開上行者」、「神覺行者」など刻せる石碑あり。

八海、銀山、駒ケ岳は、所謂魚沼の靈山として、行者の崇拜する所、昔時は此三岳を巡る者ありて、之を「三岳巡り（サンタケ）」或は「三岳駈ける」と稱し、首尾能く巡り終るを以て、無上の名譽とせるが如く、當時は麁末ながら、樹枝を切りて、開道の栞とせし由なるも爾後經路の餘りに困難なる爲め、漸く衰微し、近時は三四年に一二回の巡拜者を見る程なれば、道の栞も其形蹟を失ひ、矮樹叢草蟠蜿紛錯譬ふるに物なく、行進の困難は守門の頂上に讓らざるなり、現今三岳の案內をなし得るもの、大倉に於て僅かに三四人に止まると云ふ、又昔時三岳を巡るもの、概ね御月と中の岳の間なる祓川の窪地、三方山脈屏風を繞らせるを撰び、野宿所と定め、二日間に巡り終るものなりと云へば「駈ける」の名空しからずと謂ふべし。

中の岳は銀山の俗稱あれど銀山の本體なるもの元來甚だ曖昧にして其實本山の支脈東南只見川（阿賀の上流）まで波及し其間所々昔時盛に銀鑛を採掘せしことあれば其主峰たる中の岳に冠するに銀山の名を以てせしものゝ如く今は只見川と北の又川との間に於て銀山と名くるものあり、抑銀山の採掘は元祿時代に發達し川村瑞軒、三井元助相次で之を經營し其盛なりし頃は鑛坑數百、住民數千を以て數ふる程なりしが其後大饑饉に加ふるに淫雨浸水のため坑夫の溺死三百人に及び鑛坑崩壞せし等の災厄により遂に廢坑に歸せり、近年其殘滓を集めて僅かに製錬に從事するものあれど規模極小觀るに足らず、但夏秋の交、養蠶を營むもの漸次多きを加ふれど冬季は撤回して常住者なしと云ふ、先年、官郡吏有志者の銀山[illegible]探檢なるものありて稍世の注意を惹きしことあれど其地積約六方里就中地味の開墾に適すべきは餘り多大ならざるが如し。

中の岳即ち御月山なりと稱するものあるは其頂上之を遠望するに頗る正しき半圓形をなせばなり、されど土人は祓川の南に屹立せる岩山を以て

御月と稱し全然中の岳と區別せり、土人の所謂御月山は恰も中の岳胸部の一疣ともいふべく其規模甚小、標高中の岳に及ばざること遠くこれを八海方面より眺むれば全く中の岳の懷中兒となりて認むること能はず若し夫れ頂上に立て俯瞰せんか中、御月共に饅頭狀をなすことなし、名實の紛錯は密樹の紛錯と相待つこと僻地の深山此類多からん。

駒ケ岳を訪ふべく中の岳頂を辭し北西に降ること半里許朝來の濕雲は益濃厚となり時に細雨を送りしが茲に至り一陣の怪風は身邊を掠めて駒ケ岳を襲ひ二陣三陣四陣五陣、一陣は一陣より強く、一風は一風より急なり「三岳第一の難場はこれより始まる」との導者の注進もあれば危險を冒すの不可なるを以て駒ケ岳頂露營の豫定を變更し風を避くべき窪地を撰び露宿を斷行せしは午後三時三十分とす。

雨の跡切(トギレ)を伺ひ導者と協力し豫定の晩飯もて生木を裂き採り例の白樺の皮熊笹の枯枝を集めて焚附けとし暖を執りつゝ握飯を炙り滯幕漸く晩餐を濟ませり、握飯は後刻或は飯を炊ぐべき用水の有無如何を案じ今朝八海の籠堂に於て即席炊ぎて作りしもの米は殆ど支來に近く且つ漸ぎ立てゝ水の不足なりしにや强飯以上の硬度を呈し之に觸るればボロ〳〵と鉄け落つる有樣なれど所謂飢者廐食なしの諺に洩れず噛み締むれば却て甘味(ツト)ありなど賞讃せしも面白し、導者は予が分配せし鑵詰の牛肉は始めて喫することゝて甚だ珍らしくや感じけん其大部を殘して家内への苞とせしは亦仁ならずや、新野氏より贈られし蕃椒(トンバン)の甘煮は山上の副食として甚だ佳なるを感ぜり、此窪地幸に徑寸許の雜木枯枝などありて燃料の採集には意外の便を得たり生木の裂き易きは「イタヤ楓」、山南天を最とし、樺、檜は裂き難きも火力は甚だ盛なり。要するに生木は折り採るには難く、裂き採るに便なるものなり、身長以上の熊笹の生ひ繁れる中に茣蓙を敷き油紙を側面に張り毛布に包まれ笠を家根として導者と相擁し半睡半覺復一夜を明しぬ、横臥のため熊笹を刈り除くは其切先の槍攻に逢ふの禍あり唯伏し倒して其梢頭を他の根際に結び附くべし。

此夜幸に風漸次靜かに小雨の襲ひ來りしこと二三回而かも毎回三四十分時にして止み雲間よりは屢清き涼しき月影を洩らし、何鳥にや時々鳴きつゝ崖より崖に移り、或は藪より藪にガサ〳〵と駈け込むは兎か鼬の類なるべく、遙かの谷にキャキャの聲するは猿丸なるべし、鳥や獸の音絶えて風伯偶袋を括り雨師亦盆を閉づるの時、天地漠々夜沈々宇内の至靜高山の上を措いて復之を何處に求めんや嗚呼至靜人や或は汝を好まざるものあらんも予は實に汝を愛するものなり。

二十日　陰雨　朝　八海山上　六〇度

駒　ケ　岳

明くれば二十一日雲は大に漲らざて東天微に曉色を呈し霧は深く遠く谷より谷に彌りて白絮の海をなし幾十百の峰頭は黑き島嶼をなして點々絮海の上に顯はる、白き海、黑き島這般の風色下界の到底夢想し能はざる所なり、遙かに眸子を放たんか東北には磐梯、東に那須、東南には近く男體、白根の諸山を見るべく唯南西方面は中ノ岳峰體の遮る所となる、脚下の風色既に彼の如く、展望の鮮明亦此の如し、天候の恢復に望を屬しつゝ時間の經濟を圖り燃料の採集焚火を略し、冷かなる握飯に腹を忍ばせ五時三十分臨時露營地たる中の岳頭を出發し峰巒さを辿りつゝ北々西に進みぬ、或は巨岩突兀として深谷に臨める根を巡り或は山骨稜々たる馬の脊の如きを 渡る此間始終崎嶇參差一上一下を免れざれど八海、中の間に於ける

が如き甚だしき阪りなし、但幅狭き峠の上、右も左も薙ぎたる危崖相連り僅かに餘せる上部には偃蹇たる檜、栂、松にあらざれば紛密たる樺、楢、石楠、熊笹等を以て閉塞し宛然鹿柴、鐵條網に逢へりし如く屢々呆然自失僅かに血路を開いて一歩一息、或は松の上を渡りては「復た鵲の巣籠り」、或は薄暗き密枝の下を潜りては「復た熊の冬籠り」と言へりし導者の戯言以て此間の消息を知るに足れり、斯く馬の脊なせる峰の上部を行進するの餘りに困難なれば勉めて右手の崖縁を傳へて前進せしが命の親と恃めるは往々一枝の榛、一株の熊笹なりけり、偶稍緩斜の崖側を得て進路を取れば密草の裡より「ヨウコソ御參なれ」と言はぬばかりに蚊兵蚋卒襲ひ來り、眼の先を廻り、鼻の孔に入り、頸を螫し、手を噛み、馳すれば背後より追ひ來り、止まれば前後左右に群り附く一萬餘噸の戰艦も幾百千の水雷にはあはれ防がんすべもなし、「人間の氣も無き此深山に汝等常に何の望ありて棲めるにや」とは當時の苦言、實に此深山高峰の上彼等は常に如何にして餌食の道を講じ又如何にして生々繁殖するや頗る不可思議の至りなり。

雜草の裡深山翫の開花を見る多し其葉甚だ強く剌毛亦硬く偶之れに觸れては蜂に螫されしかと驚くことさへありぬ。

段一段漸く高く駒ヶ岳に近ければ偃松（ハヒマツ）影く相連り山骨屢露はれ姫石楠（ヒメシャクナゲ）、岩鏡、熊笹は益短縮して行歩を妨ぐるに及ばず、岩梨（コケモヽ）は赤き實を結びて山人の渇を慰む此間徑一間許の小池即ち磐岩上の溜水一二を見る。

駒ヶ岳の支峰たる兎ヶ岳に至れば上部始ど數十町歩の平地をなし身長許の熊笹は盛く繁茂し名に負ふ兎を見ること多し、偶荒き太き物音立てゝ笹藪の裡に潜り入りしは青鹿（アヲジシ）なりと導者はいへり。

午時駒ヶ岳の絶巓に達す、中ノ岳頂を距る三里強とす此間左の崖側は概ね雜木紛密し右の崖側は多く矮草を見る　殊に兎ヶ岳邊より駒ヶ岳頂上に至るの間右方頸側には黃、白、紫花などの草、「イハグルマ」、深山人參等の短小なる鮮草蔓延し殊に雪割櫻草の如き或は往々數町歩に亘り其深綠色にして光澤ある長二三寸の葉が彌が上にも密生して地表をなせるの裡、紫紅色艶麗なる櫻形花は一面に散布し檸黃色なせる山萱草の花之を點綴せるに至りては宛然一大絨氈を延べたるの觀あり、これ予が深山矮草に於ける空前の美觀、偉觀とす。

絶巓に近く東北面せる崖側には幅二三十間長數町に亘れる殘雪あり其中央部の厚は丈餘もあるべく白皚々冷氣人を襲ひ盛夏猶冬の思あらしむ是れ予が深山殘雪に於ける空前の潔觀白觀とす以て駒ヶ岳の雪田と稱すべきか、融けたる雪水は溪流をなし滾々瀉下すこれ佐梨川水源の一ならん。

本山は南北魚沼の郡界に跨り其標高中ノ岳と伯仲の間にあり頂上の平地幅一町長十數町に亘り其絶巓の一段高き所方約十間餘竝に本春建設せる二等三角點あり基脚方四間高八間餘構造の宏大堅牢なること多く其比を見ず側に高一尺餘の鋼條神あり東面して立てり、兎ヶ岳以來月夜見命、素盞嗚命、大山祇命など刻せる石標の淋しく草裡に埋沒せるを見る、頂上は矮小なる熊笹のみなれど西南に至れば漸く矮樹の密生を見る、兎ヶ岳より本山頂上に至るの間八海山頂の連凸は恰も支那城壁の觀をなして歴然指すべく其左方中ノ岳との間よりは遙に苗場の平峰を見其山麓は一抹の霞をもて淡く床しく之を葬り頂上小突起の餘りに明瞭なるに曾遊を追懷し佇立凝望神逝き魂飛ぶや久し、歸郷後佐藤氏の一行此時偶之を探れりと聞く豈奇ならずや。

三角臺下に筵坐して午餉をしたゝむ、時に八海山頂の北角を髣髴る靄は見る見る其全峰を呑み盡し、谷に降り谷を埋め候忽として本山を包めり靄は霧となり雨となり、軟風は强風となり烈風となり颯々人を吹き倒さんとす唯見る一望白濛々山もなく川もなく溪谷なく草木纔かに立脚の小圈を殘して身は雲霧の重圍に陷りぬ乾坤既に白盡し萬物既に白化し茫々夢の如く杖を立てゝ佇立し愴然たること多時、ヤガテ導者を勵まし大湯に降るべく豫定の進路を取らんとすれば怪なる哉導者は却て予に大湯道の指示を乞ひぬ、彼は予が出發前大倉上村氏に於てかねて蒐集せる參考材料につき駒ヶ岳より大湯に降るの概程を語りしにより予を以て該方面に經驗ある者と速斷せしなり、彼は從前三岳の案内をなし駒ヶ岳より溪谷を辿り再び大倉に歸りしものにて大湯に降るべき經路を知らざりしなり、予は本山に三角點を建つるに大湯方面より昇降せしを聞き又同方面より本山に昇るの路は比較的易きを聞き居ければ魔末ながらも人跡の認むべきあらんを想ひ導者と手分けをなし普く四方を搜索し漸く人跡を認めて之を進めば忽ち數條に岐れ或は草叢に沒し或は禿げたる砂礫に入りて消滅し更に又手がかりを得ず彷徨趑趄の間或は導者と相失するの不可なるを思ひ再び導者を三角標下に呼び地圖を開き磁石を安し大湯は本山の北々東に方り其間約三里なりといへば日沒までには人間の居る所に出づるを得んなど予が臆測によりて更に降ること數町忽ち密林急崖に接して復疑惑の淵に沈みぬ、時計を探れば將に三時に垂んとす是に於て導者が經驗に從ひ大倉に歸るの安全なるを以て斷然大湯に降るの方針を變更し歩を西南に取りて進むこと十數町再び紛密たる雜木林の裡に入り此方ならん彼方ならんと右往左往更に復要領を得ず時を費す又一時、「かくて大倉に到着するの見込あるや」と問へば、「とても駄目だ」と力なげに導者は答へぬ、さらば危險を冒すべきにあらずとて再び三角標下に戻りしも此時朝の天氣豫報は全く齟齬し西南の風は益激しく雨は横吹きと云はんより寧ろ脚下より吹き上がり笠も蓑も油紙も何等の効をなさず濡れに濡れたる衣服は之を絞らば一升以上の水をも得べく毛髪を傳ほる點滴は之を凝らさば礦製盧鳥も生ぜんばかりなり。

三角標は尖頭形なせる四本柱の中央部以上を疎らに板もて圍み內部には水平線的に張れる一段の板あれどこれ亦疎にして漏雨を免れず且つ其位置本山の最高凸部なれば風の衝點に當り到底臺下に露營すべくもあらずよりて臺下を距る北の方約二十間なる窪地を撰定し天候の急變は或は亦急變の快復を見んなど一縷の望を屬しつゝ晩食炊事の準備に取かゝり風雨の中を冒して一夜を支ふべく燃料を集めぬ、此窪地身長以上の熊笹密生し且つ山頂には珍らしく幹徑一尺高一丈許の白樺ありければそが枝より繩を取りて鍋鉤まで下げ水は例の雪田下流の溜を用ふべく諸般の計畫既に成り只管空のみ眺め居れど風は雲霧を追ひて雲霧に追はれ、雲霧は風に追はれて風を追ひ、髮より稠き雨は面を撲ち眼に入り咽を塞ぎ天地は遂に闇の裏より闇の夜に入り唯颼々滂々の聲を聞くのみ。

此日午餉には殘れる握飯の小なるが唯二個ありしを全部導者に讓り予は食麵包の二小塊を喫せるのみなりしに今又晩餐をもなし得ず予が風呂敷包には繩、鑢節、牛肉鑵詰等の應變食糧の備あれど導者が編叺の奥底にありて之を開くの餘裕を得ず、空腹猶忍ぶべし唯最も困却なるは濡れたる衣服にあり防寒用の襯衣及び單衣、腹卷等は風呂敷包の裡にあれど之を着換ふるも亦直ちに濡れて元の雨漬となりぬること必然なれば先づ體力の續かん限り無爲徹夜すべく決心せり。

予山を探ること茲に年ありと雖も未だ曾て此の如き混沌慘憺たる境遇に接せしことあらず此に至りては普通の油紙は以て防雨の寸効なきを悟れり山頂にて烈風暴雨を防がんには必ず頭部より接續して膝の上部まで蔽ふべき所水布製の外套にして其前部の合せ目は特に緻密を要す普通外套の如く帽子蔽と下部とを釦にて繋ぐは合せ目より雨の侵入を免れず外套の下部膝よりも長きは行動を妨ぐるの患あり、又糧食は天候の異變に逢はゞ必ず速かに小出しをなして何時如何なる所にても直ちに用ひ得べく備へざるべからず然らずんば所謂寶を抱いて飢餓に陷るの奇禍あらん。

導者は簑を着け頭上より赤毛布を被りしことゝて唯顏面の赤達磨然となりしのみにて比較的濡れざる所ありし、されど猶腹内燃料の消耗に加ふるに更け行く高山の夜寒に攻められ身體震ひて齒音さへ聞えぬ況んや斗酒ならぬ雨水を藏せる予が衣、尚ほも餘滴は胸より臍を潤ひ、項より脊に小川をなせる其心地何と譬へん言なし、足は踏み締むるも戰々地に躍り、口は咬み締むるも戞々齒音止まず、檢溫器は之を視るべき餘力も無かりしが想ふに五十度以下なりしならん、若しも寒威にして尚一段を加ふるに於てはあはれ我等は駒ノ岳嶺三角臺下を辭し更に白玉樓上の客となりしならん「日一兩ドコロカ日十兩でも、もーいやだ、三岳の案内は生涯止めた」とは導者が當時の述懷以て其苦況を察するに足れり。

嗚呼義に守門の山上焚火の暖を取らんとて火熄莫産に移りしは水火風雷の四難にかゝれりと謂ふべく、中頃中ノ岳項帽火を擁して意外の回風に逢ひ山人は鬚髯の半部、導者は眉の全部火舌の嘗むる所となりしは火攻の不意撃と謂ふべきか、さはあれ火の災難に罹る程の天候ならば寧ろ歡迎すべきも今駒ノ岳項に至りては燧人氏も遂に其術を施すに由なけん。

佇立の苦しさに燃料となすべく集めたる積枝に腰を掛くれば雨水は下腹部に停溜して不快言はん方なし、既に十時ならん十二時ならん二時ならん四時ならんと數へ盡して更に東天の白むべくも見えず想ふに我等が四時と臆測せしは尚十二時頃なりしならん「一刻千秋の思あり」といひけんもかくや、唯夜の更け行くまゝに仰いで樺の枝椏を辨じ顧みて屡三角標頭を認め得しは月の雲上より照せばならん樺の葉面時に淡く微かに一種の燐光を放つが如く葉々分明の感ありしは餘りに眸を凝らし心を注ぎし幻覺にや。

所謂御山の荒れなるものを嘗め盡し究め盡して明けぬ、而して風雨は猶止まず、唯風は漸次緩に雨亦漸く細く、一陣の風は去りて霧行くの後忽焉微かに山ノ稜、谷の隈を顯はすも一陣の風霧は來りて忽焉復之を封じぬ、隱見出沒瞬間の奇變、疲餘の心眼を慰むるの値なしとせず。

二十一日　陰風雨　朝　中ノ岳頭　五八度　晝　駒ノ岳項　六五度

二十二日昧爽風雨の稍緩むを伺ひ我等は體と油紙、茣蓙、管笠を以て屋根とを作り、油紙に包める燧寸取出し火を焚くべく試みしこと多時燧寸は有効なりしも流石至眞燃料の專賣特許を博せる樺皮も枯笹も雨滴猶ほ流れ傳はることゝて更に應ずる氣色なければ惜しや燃料の山積せるを放棄し、叺の上部にありて取り易き米入の布袋を探り生米を噛むこと三握多少の力を得て本山頂上を出發せしは朝の六時三十分なりき、此朝大湯に降らんか大倉に歸らんか頗る思案を凝らしゝが乾坤の一白は前日に比し稍薄らぎしといふのみにて生路五里霧中に彷徨するの虞あれば直ちに大倉に向ふべく歩を移すこと十數町にして崖頭に出づれば恰もよし雲霧去來の間本山と八海との谷底なる水無川は皎々として百錬の刀新たに硎を發して霜を帶ぶるが如く其一水源たる中ノ岳川と駒ケ岳川の會所は即ち我等が降り着くべき目標點なりとて方針始めて定まりぬ、されど此崖側運の

形さては素より無く例の斷巖絶壁にあらざれば則ち雜木熊笹の紛密、幾百千年積み重りし朽葉を踏みては辷りて尻を衝き延び伏せる樹幹を渡りては撥ね飛ばされ、數丈の斷崖に臨みては側面紆回をなし、皺襞を辿りつゝ降れば餘濕漸く集りて溪流生ず而かも溪流は急湍と云はんよりは寧ろ飛瀑往々直下數丈、十數丈に及び其紆回縋下の困難は守門、中ノ岳の最難部を凌駕する正に數等なり此間予も導者も前後左右に倒れしこと、墜落せしこと枚擧すべくもあらず、予が携帶せる「アルミニユーム」の水筒には幾個の突撃窪傷を負ひ、時計は定めし破碎の致命傷を受け居るならんと諦らめしに後之を探りて其無事なるに喫驚せる程なり、予は此時服中に縫ひ込みし紙幣の捩切れ落つるも、時計の碎くるも、總ての物を失ふも既に顧みるの氣なく唯維れ命さへあれば足りと決心せしは眞に人情の究極とぞ謂ふべき。

斷崖を降るに方り其取縋る材料は實に命の繩なれば最注意を要す岩石の瘤は時に裂け易きあり、笹の若芽、石楠の新幹は切斷し易き處あり、笹の成莖、楢、槭等は甚強きも猶同時に其數株を握るを安全となす。

陰濕の地往々一種異樣の臭草に接す莖徑寸許、外部滑液を帶び中空にして脆く、葉は山蕗葛に似たり若し之に觸れんか當歸の香に「アンモニア」を調合せし如き一種激烈の惡臭に染み身體衣服之を洗ふも尚數日其餘香を拜せざるを得ず導者は之を「サーキ」と云ふものなりと言へり。

溪流の始源地に於ては口徑往々一二尺の竇穴より非常の勢もて忽焉冷泉を噴出するあり、地積宏大なる急崖とはいへ集積せる水道の發現勇ましく奇なり。

西北面せる半腹の溪皺には所々幅數十間長數町に亘れる殘雪あり凝結して氷丘をなし其紋落斷層を測るに厚三丈以上に及べり想ふに消え果てぬに復降雪に接せん融けたる水の點々滴る氷丘斷層の下を巡るの際冷氣は懼心を助け慄然小走りをなさゞるを得ず、雪を踏み雪河を渉れる足跡は殆ど感覺を失へぬ。

氷丘の附近融雪を待ちて時を得顏に發生せる虎杖あり莖徑寸以上高一二尺嫩葉未だ綻びず之を折るに脆快之を嘗むるに酸味稍淡さが如し氷丘を遠ざかるに從ひ漸く成長し莖徑二寸高二丈許のもの叢生し宛然竹藪の觀あり其葉の長往々二尺に達せり。

此附近巨石磊砢其質堅緻にして或は暗青色(所謂八海石)或は灰白色、或は黑色或は白色に黑色もて櫛の條輪的環紋なせるありて頗る美なり、本山は頂上に於て石英の分泌白條を有せる暗黑或は暗綠色古成岩を見る。

午後五時中ノ岳川、駒ケ岳川の會所に達す巨岩に據りて立てたる小屋あり內部四疊敷許、外容驚の巢の如し是れ薇採が不意の淫雨に逢ひ溪流漲溢歸鄉を得ざるとき避難宿泊する所なりと云ふ。

朝本山頂上の崖頭より二川の會所を俯瞰せしとき其距離餘りに近く見え一氣呵成一二時間にして辨ずべしと想へりしが分秒の少憩をもなさず有らん限りの努力もて且つ十時を費せるに至りては我ながら驚かざるを得ず時に風全く歇み雨は蜘蛛の糸より細し。

此より漸く山頂の俓かに認むべきありされど大倉までは尚ほ三里に餘り內一里強は沿岸急崖を經るの難場なりといへば兎に角夜に入らぬ中に之を通過すべきを感じ巨岩上にて風呂敷包を出し「ビスケット」及橘の少量を至急立食し直ちに駒ケ岳川を渉り二川の合流即ち水無川の右岸に沿ひ再

び一上一下匍匐縋攀の技術を盡し辛くも輕業の關所を通過し既に全く夜に入りて川を横ぎりしこと三回、川幅十間に餘り奔湍岩を嚙み石を超ゆるの凄さは闇中猶辨ずべく頗る危險の感ありけれど既に導者が熟路なりしを聊か便りとし相携へて之を渉れば氷の如き冷水は股間に達し惡寒戰栗殆ど倒れんとす大倉までは尚二里許此時飢疲極まりて絶對絶命に陷らんばかりなり路傍に無人の炭焚小屋二つ三つあり導者は此に宿せんことを提議せしも濡れに濡れたる服裝もて燃料夜具の備なき小屋に宿せんこと或は却て不測の禍に陷るべきを諭し心身の有らん限り氣力の續かん限り突貫して人家を求むべく斷行せり中の岳、駒ケ岳二川の會所より此に至るの間右方の嵩崖には日光白雲式の潟瀑ありて高往々數十丈に達し奇岩譎水杖を留むるの價値なきにはあらねど分陰を爭ふべき我等唯一瞥を拂ふに過ぎざりしは惜し。

此より逕稍平なりとはいへ尚水無川の岸に沿ひ淙々鞺々の聲は絶ゑず我等に戒嚴令を布くものに似たりされど氣の稍弛みにしや困憊睡魔交々襲ひ來り歩みながら我心既に我身を忘れ、我脚既に我命に隨はず、トロ〳〵と睡りては導者に突き當り、よろ〳〵と斜きては巨岩に額を打ち黄金あらぬに數々膝を突き、糞便なきに數々足を辷らす金剛杖もて始終前程を探りつゝ歩を移すは宛然瞽者の道行に似たり眞にこれ夢中旅行と謂ふべし。

かくて大倉上村氏に歸着せしは夜の十一時過ぎなりき、戸を敲けば主人と主婦とは出で來り予を見るや大に驚き迷路の概程を聞き再驚を喫し早速着換をなすべく縋入を出し爐邊に導きて火を焚き煖を取らしむ娘は据風呂の火を焚き主婦は予が注文によりて雜炊の料理に取かゝり、主人は鰹節を削り老母は茶を出すといふ家内總掛りの厚き待遇にあづかりしは快感譬へんに物なし光武が滹沱河の麥飯、蕪蔞亭の豆粥もかくやと想ひ出でぬ。

入浴を終り蓐に就くや否、我は既に我を知らざりしが翌朝眼を開けば覺ゑもなき後掛けの蒲團のありしは家人の厚意ゆかし。

二十二日　雨陰　溫度不檢

嗚呼體力

嗚呼我が體力は意外の試金石によりて始めて之を知りぬ、距離は我れ度を以て之を測るを知り、穀は我れ桝を以て之を量るを知り、重さは我れ衡を以て之を計るを知る、唯我が體力に至りては曾て之を料るべき器なし之を料るは究極を要す而して究極は絶對絶命の域に陷るの時にあり、嗚呼絶對絶命これ體力の唯一實驗場と謂ふべきか。

予大倉を發し第一日には八海、第二日には中の岳を超ゑて駒の頂上に露營し第三日には大湯溫泉場に降りて休養すべき豫定なりしに天候の爲め山頂の露營三夜に亘り八海、中の二岳に於ては兎に角半睡を得しが駒に到りては分秒の睡眠をも得ず、加ふるに第三日は午餉半量に充たず晩餐は全廢し第四日の朝生米三握を以て朝餐に代へ午後五時極少の糒、數個の「ビスケット」により僅かに口腹を慰めしのみ、即ち全く三飯以上を缺き第四日は朝の六時半より夜の十一時過ぎまで少憩をも取らず突貫を繼續せしは我ながら驚かざるを得ず殊に一夜一日二十四時間着衣其まゝ天水天風に全身冷浴をなして斃れず事後亦疾病にかゝらざりしは是れ予が數年來冷水摩擦と鐵啞鈴體操とを以て心身を鍛錬せし餘慶ならんか、將た山人の山人たる所以か。

三嶽餘談

二十三日睡覺むれば赫々たる日光は既に東の障子戸を暖め枕許の時計は既に九時を示しぬ、臥蓐を離れんとして肱といはず膝といはず胴となく腰となく全身の痛みを覺ゆ笹や雜木を握りつゝ縋攀せしため掌裡は擦り傷、切り傷を以て殆ど完膚なく濡れし袴下のため内股より膝までは一面に摩擦傷を負ひて赤肌となり左足の拇指は其爪の半を裂き失ひ右足の指根は挫傷のため炎衝を起して俵の如し今之を發見するに及怪しむばかり人間は氣張り疲憊極まりしとき甚だ苦痛を感ぜざるを悟りぬ、据風呂も既に整へりとの家人の案内により朝湯に入り「アルボース石鹸」にて傷部を洗ひぬ、騎兵の志願せりといへる當家の長男は先日來乘馬練習に勉強せしため是亦尻に擦傷を負へりとのことなれば石鹸の殘部及即効布を寄附せり。

三岳を一巡するもの概ね衣服は破れて襤褸然となるを通例とするも予は唯脚絆に二個の突き穴、袴下に一個の掻き穴を受けしのみなれば主人は大に驚讃せり。

此日朝餐後一碗の茶を喫するや暫時にして俄然漲感を催し三碗、五碗、十碗飲み盡して尚ほ際限なし、思へば白雪を吸ひ天雨を飲みしとはいへ二十一日午餉後二十二日の深夜まで一掬の水をも口にせざりし而して此暴飲後忽焉口舌の荒れたるは奇なり殊に駒ヶ岳の雪水を充てたる水筒を携へながら忘れたらん如く毫も要求の念の起らざりしは妙なり。

予が毎夕の憲法たる雪隱義務も絶食佇立突貫等の影響により二十一、二十二の兩日は全く之を廢せり所謂事變に際しての除外例なりけり。

八海山は其峻を以て東北地方に鳴り頂上八個の劍峯は殆ど鉛直的に峭立し其鐵鎖を攀づるの際、兩手鎖を握り爪先岩角を探りつゝ歩を移すは實に蒼毫の油斷あるべからずと雖唯周到なる注意を要するのみにして其區域廣からず其他は大道易々たるものなり、中の岳に至りては必ず八海よりするか若くば駒ヶ岳よりするか二途を措き他に昇降すべきなく二途各々樹紛密の煩苦あれば探撿最も難し、駒ヶ岳は大湯よりするときは比較的易く且つ本山より中の岳に至るの峯續きに於ける偃松其間の高山植物及左側面に於ける鮮艸美花の偉觀あり。

地圖によれば三岳は唯單純なる峯續きの如くなれど實地之を踏むに及んでは支峰紛錯を極め雲霧之を鎖さんか、到底迷誤を免れず予が導者は從前三回の經驗を有せるものなるにも拘らず駒ヶ岳より大倉に降るに當り稜角を取らんか皺襞に依らんか予が裁案を仰ぎし程にて所詮確乎たる經路のある筈なし、山中道を失して人鄉を索めんと欲せば溪流によるべしとは普通の見解なれど嶮山峻峰に至りては溪流時に垂直的の高瀑を呈し却て危險の處なきにあらねば杓子定規は何處にも嘸むべきことなり、されど予は駒ヶ岳降路の迷誤によりて發明する所多大なりしを思はゞ失敗は實に成功の母とや云はん。

守門を經て三岳に向へる長岡中學の中村氏は比較的迷誤に陷らざるの進路として大湯より駒ヶ岳に登り中の岳、八海山を經て大倉に降るべく試みしも是亦迷誤要領を得ずして駒ヶ岳より遂に大倉に出でたりといへば其紛錯察するに足れり。

予は夏の三岳に於て四季の景を四日間の縮圖に收め得たりしを喜ぶものなり躑躅、雪割櫻艸は春花を代表し、深綠滴る千稜萬巒は夏を代表し、烏頭（トリカブト）、龍膽（リンダウ）、桔梗、麒麟草は秋花を代表し、雪田氷丘は冬を代表し、嫩芽の春を呈せる虎杖、紅葉の秋を呈せる犬躑躅、錦木（ニシキギ）、栂（ツガ）、山南天、山

櫻あり況んや高山植物の奇草珍木艷花鮮葉は古成岩、火成岩、水成岩の千態萬狀と相映發するに於てをや、要するに夏の深山高峰に於ける植物は積雪寒威によりて春を夏に延期し、秋を夏に繰り上げ全年の百花諸を一時に展開せりと謂ふべし。

一車十里

雨に濡れ土に汚れし予が衣服物品は予が起床前より既に家人の好意によりて洗濯を經二十三日の晴嵐に翻りつゝあり、予が荷物は油紙にて包み導者の叺に入れ置きしに跋渉の際、油紙は天界の鹿柴にに破れ、後溪流に浴みして内部まで悉く濕れぬ、これ等は火鉢の周圍に陳列し或は椽側に展開して日光乾燥を施しゝは宛然雜貨店の觀あり。

迷誤によりて銀山平に緣を失へりし予、脚傷によりて勇氣を運ぶこと能はざりし予は他日を期して斷然歸途の準備に着手せり。

三岳の案内料は予が前遊の際一日六十錢なりしが今は一日一圓の定めなれば大湯に至るまでの三日間三圓の約束にて導者を雇入れしに事實四日に亘りしも元是れ已が不行屆の結果なればとて導者五郎より別に增額の請求もなさゝれど非常の苦辛只視るに忍びず慰勞金五十錢に品物をも添へて遣はしけるに彼れ大に感謝の意を表し自らは室内の行動すら不自由なること予に讓らざる程なれば午後の四時妻をして其飼養せる馬もて予を乘せて無賃にて浦佐まで送らしめぬ、此間一里半餘とす。

馬上郵便局に至り佐藤貞太郎君、新野トシ子に發信す。

五時二十分學友關鎭平君を訪ふ八海登山の際來遊せよとの通信ありしによれり、予が馬より降り足を引き摺りつゝ玄關に入るを早くも認めし關君は直ちに出迎へ「乘鞍では死んだものもあるのに君は生きて來たゝけ萬歲さ、まあ上り給へ」との挨拶、此月九日信飛境上の乘鞍岳(一一五〇〇)に登りし中學生等の團體十三人中貴族院議員某の息子小牧厚彦君外四名の凍死者ありし慘事を始めて聞ける山人愁豈深からざるを得んや。

乘鞍に於ては程なく又京都美術學校學生の凍死あり、甲信界上の八ヶ岳(九五〇〇)に於ては大學生十四人の迷路不明者ありしも皆無事なりしは幸なりき、本年の天候は實に登山者に取りては大凶年たりしなり、唯用意輕忽にして奇禍を招くあるは甚だ戒むべきことなり。

關君は須原目黒氏より當家に養子となりしものなり、夜に入り「目黒門前に於て望む」と題せる守門岳の手帳圖を開き先づ守門の准成佛の一件より三岳に於ける苦絕快絕の眞相を語れり、養父與三兵衛氏親戚某等曾す某は山河跋渉を好み銀山平より日光に至る山間の實檢談は頓る山人の意を得たるものなり、養父氏刀劍を好み名刀數口を示さる。

十時就寢す。

二十三日　晴　朝　大倉　七二度　晝　同　七四度　夕　浦佐　七六度

午前六時起床、關君の注意により予が足部の炎衝は酒精塗抹の療法を施しゝも到底徒歩歸鄉の見込なければ流石自稱天爵山人も白龍魚服の例には漏れず已むを得ず腕車を倩ひぬ。

關君よりは滯留休養せよとの好意勸告ありしも彌久不可の事情ありて午前九時同氏を辭し小出にて川越君に託せし岩石包を受取り堀之内、川口

を經小千谷(オヂヤ)旭橋に至れば翌日の洪水により橋梁十間許陷落流失せりとて船渡あり、橋詰より更めて腕車を雇ひ午後三時鄉里片貝に歸着す、浦佐よりの車行延長約十里、一渦千里の語にあやかりて題目となす。

二十四日　晴　朝　涙佐　七六度　夕　片貝　七六度

尾言

幾度か辛酸を經て志益堅し、予や以て處世の箴となさん今回の登山旅行は天候の不可なるありと雖素と是れ人跡多く到らざるの地、困難は山人の豫期せし所なり、されど苦中に樂あり、大苦觀の境に出沒せずんば大樂觀の眞味亦解すべからず予は特に鄉國の峻山幽谷を探り得しを喜ぶものなり。

予が富士に登るの前は如何に嶮に如何に苦しきやを想へり既に之れに登るに及び大道坦々とは言ひ得べからざるも道幅割合に廣くして緩斜登ること極めて易し、本年樺山大將の孫女泰子の九歲なるが登り得しといふにあらずや、唯山頂拂曉前は概ね氷點以下の低溫度なるを以て持續的の行歩と防寒の用意周到なれば足れり、予が淺間を探るの前は如何に危險に如何に畏るべきやを想へり、既に之を探るに及び危險なしとは言ひ得べからざるも唯大膽にして小心、風向を測り噴氣に噎(ムセ)ばざる樣注意すれば足れり、自ら求めて噴火口に投ずるものは山人の關せざる所なり、予が戸隱、八海を跋涉するの前は如何に峭絕に如何に畏縮すべきやを想へり既に之を跋涉するに及び峭絕ならずとは言ひ得べからざるも所謂其峭絕の局部區域甚だ狹きものなれば少時の注意警戒にて足れり。

蓋し高山峻峰も登客多き所は經路劃然迷謬の患なく諸般の設備ありて利便少からず、要するに山岳跋涉の難易は標高地積によらず、峻峭緩斜にあらず人跡未到樹林紛密峰巒錯雜の境これ最至困、最至難となすものなり、予此行に於て得る所尠からず、後の登山者に對し聊か他山の石を呈する所以なり。

經費

通常經費

円、二二	來迎寺まで俥賃慰勞及入場券共	
二八	來迎寺、見附間滊車賃	
三〇	見附、栃尾間俥賃	
計 八〇	八月十日	
一〇	栃尾、栃堀間人夫料	
一〇	八月十一日	
計 三〇	守門山上用米一升五合及小使へ謝儀	
計 三〇	八月十二日	
一、〇〇	守門案內料二日間	
五〇	右慰勞金	
五〇	仝人宿料及酒代	
三〇	貫木一宿料	
一〇	右謝儀	
三〇	貫木、大白川間荷揚案內料	
計 二、七〇	十三日、十四日	
三〇	大白川一宿料	
一〇	右茶代	
〇六九	途中茶代及渡賃二回	
五〇	布引瀧及須原まで案內料	
計 九六九	十五日	
四〇	須原一宿料	
一〇	右茶代	
計 五〇	十五日、十六日	
五七	小出一宿料	
〇九	菓子	

、一五	洗濯物謝儀及茶代	、一〇	途中茶代
計　、八一	十七日、十八日	計　一、二五	二十四日
、三〇	六倉上村氏へ謝儀	小計金十二圓二十二錢九厘	
、三〇	米一升五合、草鞋三足及	特別經費	
	借具料	円、一八	食麵麭三斤即一本
計　、六〇	十九日	、二〇	鰹節一本
三、〇〇	三岳案内料四日間	、五〇	牛肉小鑵五個
、五〇	右慰勞金外に物品添ふ	、〇六	食鹽一瓶
、五〇	上村氏へ宿泊謝儀外に物	、六〇	郵便税
、二〇	品を添ふ	、〇八	鉛筆二本
	浦佐まで乘馬謝儀	、一五	手帳
計　四、二〇	二十、廿一、廿二、廿三日	、〇三	蠟燭、燐寸
一、一五	浦佐、片貝間俥賃	二、二五	アルミニユーム水筒一個
		、六〇	寶丹、清心丹、即効紙、
			固腸丸
		、〇七五	アルボース石鹸一個
		、二八	甲掛一足
		、一五	草鞋一足
		、三六	油紙三枚
		小計金五圓五十一錢五厘	
		總計金十七圓七十四錢四厘	

苗場山紀行

越後　桑原源一

第一出發

越後、信濃の境上に高山あり、苗場山と云ふ、高さ七千尺、名山の稱あり、登山する者頗る多し。予此奇勝を聞くこと久し。一たび登りて之れを觀んと欲し、而して其意を果たさゞる茲に年あり。明治丙午八月越佐新聞記者井口越南、苗場登山隊組織の擧あり。時や夏季休業中に屬す、予其宿志を遂ぐべきの期を得たるを喜び、進んで募に應ず。

八月二十五日朝五時務めて身輕に結束して浦村の家を出發す。天曇れども幸に雨を降さず。行くこと一里強にして信濃川の西岸、即ち古志郡妙見村の此方に達す。此處の河原に北越水力電氣會社電線中に於ける鐵柱あり、天牛に聳ゆ、高さ百十尺、二百十間を距てゝ、對岸の木電柱に電線を架す。此鐵柱と柱間の違距離とは共に日本一なるとは技師の語る處なり、なか〳〵の大工事、是れ此行最初の觀物なりき。渡船に賃して彼岸に上れば、所謂妙見の白岩是れなり。嶮峠が數百尺の斷崖をなして信濃川に沒する其中腹に國道を開鑿する處、山川の景色甚だ佳なり。路傍の一茶店に憩ひ、一行に參加せんと欲し、待つこと稍〻久し。偶〻情報を得、一行の遲刻を知り、徐に歩を起して、川口驛に至り、旗亭に入り、一行を待つ。

待つ暫くにして漸く一行九人來り會す。晝食を認め午後一時こゝを發し、和南津橋を渡りて、魚野川の西岸に移り、舟路の難所を以て聞ゆる八郎波を彼岸に望み、堀の内町を經て、戸倉山上なる、古城趾を東方に眺め、再び魚野川を渡橋して東岸に移り、所定の旅宿、須田屋に入る、こゝに參加する者數名、本邦三鮎の一なる破間川の鮎を賞味す。小出町は小町なりと雖も要衝の地、生糸集散の爲め、市況繁盛なり。此日午前は曇り午後より漸く晴れ暑さ加はる。

第二上田

小出町出發は午前四時の豫定なりしが、遲れて六時となる、加隊する者、また五六名、町の西端、魚野川に橋を架すること僅か三四町の間に三、亦偉觀なり。行くこと二里多聞天に參詣す。普光寺は眞言宗別格準本山にして、巨刹なり。多聞天は其境内にあり、縣下有數の堂宇にして善男善女の參詣絡繹として絶たず、山門は左甚五郎の作なりと稱す。浦佐の押合と云ふ奇習あり、是れ毎年三月三日夜に行ふものにして、遠近より名物の雪をも厭はず、集まりし無數の善男等が裸體となり、堂内に入りて、サンヨー〳〵と唱へて、押合ふては御手洗の水中に飛び込み、飛び込みては、又押合ふなり、奇習と云ふべし。而して其數千百人の參衆も、差して廣からざる堂内に收容さらざることなきは、不思議の至りなりとて、御幣かづきの常に不思議がる處なり。浦佐より三里にして六日町に至る、此處にて越南新報社の同志者と合し茶亭に入り晝食を喫す、店前忽ち大評議は開かれぬ、今夜の止宿を三股にせんと欲する者と湯澤にせんと欲するものとの二派に分る。三股は苗場山麓の宿驛にして、案内者、强力の雇入れ、露宿の用意等、登山準備に便あり、加之ならず、早朝新鋭の足を以て山に登るの利あり、之れを主張するものを硬派と稱す。硬派の主張は軟派の服する處、去れども、軟派の足は三股に至るの餘力なしと云ふにあり。遂に自由行動を取ることに決す。

六日町の南端より、國道と岐れて縣道三國線に入り金城山の城趾を東方に望み、鹽澤驛に至り二名の參加あり。此日晴天にして暑さ甚だしく行歩易からず、而て前途遠し、遂に腕車を買ふもの數名に至る、余亦其一人なり。關村を經て湯澤に下車したるは、午後四時なり。此邊の途中にて小川の河床、平地より數尺高きもの數多見たり。湯澤より三股へ二里、宜しく到るべきなり、然れども、大勢は湯澤にあり、余を除くの外、幾名の乘車連は皆湯澤の温泉場に向へり、僻陬の地三股に泊らんよりは、賑やかなる湯澤に泊りて途中の快樂を貪らんと欲するものと知らる、余や主要の目的たる登山に最も重きを置き、途中の快樂は多く願みざる處、後續連中には余の輿者もあるべしと一人三股に向ふて發す、小出町より湯澤に至る、一帶の地を上田と稱す。魚野川之れを貫流す。八海、銀山、駒ヶ岳等の高山東方に聳ひ、家々養蠶、製糸をなす、湯澤より峠道となる神立村と三股驛間なる芝峠に至り、樵夫に聞けば、親切に苗場山を指示す、芝峠より下り道となり、三股驛に至りしは黄昏時なり。所定の旅宿、池田屋に投ずれば、一行に參加せんとて待ち合せ居る先着者二名、同時に着宿せしもの三名あり。池田屋は元の本陣にして寒驛には不似合なる大旅宿なり、其場示せられし室内の木札に依り、曾て止宿せし貴賓の姓名を知りても之を察すべし。岩魚(イハナ)を味ひ夕食を濟ませ、後續部隊の來驛を待つ久しくして遂に來らず、十時に至り來信あり、後隊は一同湯澤の温泉場に止宿し、明朝は湯澤より、仕度して登山し、三股へは寄らずと、去らば我等六名は後隊に關せず思ひの儘に仕度して、登山すべしとなし、强力の雇入れ、山上露宿の準備等を宿主に命じて寢に就く、人口に膾炙する俗歌「三宿淺貝者ち、

米のなる木は私しや知らぬ」と淺貝と二居とを合せて其三宿の一なる三股、山間僻陬の地たるを推知すべし。夜蚊帳に用なく、ゴー〳〵と音する山川の流れを耳にしながら此寒驛に眠る。

第三　苗塲山

明くれば二十七日、朝四時起床、今日こそは愈々本望の登山と甲斐々々しく仕度をなし、强力を連れ六人連れにて發足す。淸津川に架けたる怪しき橋を渡り、西岸に移り、山道に掛る。入るに隨ひ漸く森林深く、古代より未だ曾て斧鉞の入らざる處、唯稀に木質の最も佳良なる椈の大木が倒れあるは、三股名物なる杓子製造の材料に供せらるゝ者なり。途中に杓子製造小屋一個あり、登り口より下り果てるまで七里の間に於ける唯一個の此小屋、しかも人有り烟上ぼる、何すれぞ立寄らざるを得んや、即ち小憩し携帶せし三個結飯の一個を喫し、杓子打職人の熟練を賞し、一兩本を特製せしめ道々に於ける飲水用に供す。既にして椈帶は忽ち變じて、ブサ松帶となり、ネヅコ、裏白、虎ノ尾等を交ふ。椈帶の中は眼界唯數歩の內に限られしが、ブサ松帶となるに及んで漸く廣し。下の芝にて、結飯第二個を食す。陰霧奔馬の如く强襲すること頻々冷氣加はる。尙ほ行くこと幾町中ノ芝に達す。中ノ芝は廣き芝原にして遠望の稍〻佳なる處なり。恰も善し、雲霧霽れて日光暖を送る、則ち莫蓙を敷きて、疲勞を休め、三國峠、淸水越、北越方面に眸を放ち、快哉を連呼し、結飯第三個を平げ盡す。四方の眺め未だ盡きざるに、案內者に促され、思を後に殘して、こゝを出立し、上ノ芝を經て尙ほ登ること數町、忽然として、一高岳の頂端に出づれば、突兀たる、一大高嶽は一谷を隔てゝ、前面の雲表に聳立す、山容壯嚴にして險峻、頂上に測量三角點を認む。案內者指示して曰く、これぞ苗塲本山なりと、既に山路に飽く而して高峻如此、一同其攀登の難儀を思ふて、避易の色あり、思はず歎聲を發す。余や苗塲山頂の廣袤三四里なりと聞く、今其山容に接して然るを認むる能はざるなり。啻に三四里ならざるのみならず、數頃の平地さへ如何と疑はる、時に十一時を過ぐる數分、案內者は二時間の辛抱すべきを宣言す。扨て人の登る山、我等とて登り得ぬ道理やあると、互に勵まして進む、下ること數町にして所謂お花畑に出づ、此邊少し廻り道して行者の塔あるなれど、前山に怖ぢて、そを探ぐるの勇氣なく、只管に本道を急げば、愈々本山の登り口に達す。道は胸突く急坂岩路、手を岩角に掛け足岩角を踏み、息を殺して登る、今までの道とは全く趣きを異にす。斯ばかりの急坂、險路も、幸に倭樹路傍に密生するあり、爲めに險を和ぐこと幾ばく。惡道（ワルドー）の難所目眩むばかり。時を經ること、一時餘と思ふころ、忽然耳を劈ざき來る案內者の聲、さあ登りあげましたと、それに和してやあ登りたり、やあ頂上なりと皆々喜び叫ぶ、時正に一時なり。今朝早々我宿を訪ひし日歸り登山の連中は山廻りをなしつゝありき。これも我隊と氣脈を通じつゝあるものにて鐘掛の溫泉に滯留しあるもの、彼等は間もなく下山す。

見廻して驚く山上の廣さ、見廻して喜ぶ山上の景色、見渡す限りに於ける、ブサ松の樹容、芝原、笹原、池水、岩石の配置、人工の庭園も及ばざる鹽梅なり。越山、信嶺の朝する趣き筆舌の盡す能はざる處なり。予高山に登ること多からず、されど思ふ苗塲の如き秀麗は亦他に求めて得ざるべしと。氣宇正に莊嚴雄大なり。古聖の所謂浩然の氣を養ふは、巨山高嶽の上にあるなからんか。頂上ブサ松の密林中を相して夜營の準備をなし、四五組に分れ相隣接して陣を布き案內者を連れて山巡りをなす。山上兎甚だ多し、熊笹の中にがさ〳〵と驚かさるゝこと屢々なり。植物、岩石の採集

をなすものあり。

特別二三個用意せし結飯は山腹中に於て既に平げ空腹なれば、忙がて飯を炊ぎ、夕食を濟ませたるは、午後四時なり。後隊は午後四時山上に登る。夕刻より霧風と共に來りて寒し。薪木を拾ひ集め火を盛んにし防寒布を纏ふて之を凌ぐ。夕陽西山に傾くの時、飛び來る、靄霧其面に流れ、陽光の明滅するの狀最と面白かりき。夜に入りて、風和ぎ寒氣去り安眠するを得たり。一行中に謠曲を能くする者あり、山上にて呻らんとは初日より聲言する處なり。山上に於ての高聲は案内者の戒むる處なれども、三十幾名の優勢なる連中何んの恐るゝ處かあるべき、高らかに謠ひ出す。續て詩吟あり、俗歌あり。余や性來の惡聲、唄、詩吟は不得意なり、されど無爲にして止むべきに非らず、此七千尺の高山に於て演說をなすべく立てり。「諸君我等が今味ひつゝあるは、これ南鐵の砂糖漬にあらざるか、辛きものである南蠻を正反對の甘きものである砂糖にて鹽梅す、また妙な配合と云ふべし。同好の諸君よ我等が今爲しつゝある登山なるものは、夫れ南蠻の砂糖煮なるか、請ふ其然る所以を述べしめよ、其時々刻々に耳目を新にするは、登山行の愉快にあらざるか、只疲れて前程遠し、其苦み若干ぞ。旅宿に着きて美酒肴佳の膳に向ふの時は夫れ如何ん。本日中ノ芝に於ける見晴らしの時に、更に一歩を進めて、こゝ頂上に登り着きたるの時諸君の快感果して如何なりしか、極の極たる愉快には非らざりしか、然れども諸君、炎熱蒸すが如く、風死して流汗拭ふに遑あらざるの時は如何ん。更に甚だしきは胸突くばかりの險阪を攀登するのとき、炎威若しくは風雨の容捨なく、頭背に迫まり、恰も險阪と炎威若しくは風雨の夾擊に遭ふの際に於ける、苦痛に至りては、苦の極にあらざるか、登山は實に苦の極と快の極との絡まり合ふの業なり。世に辛酸を嘗めると云ふことあり、我等一行は正に辛甘を嘗めつゝあるなり、諸君の懷感果して如何」と衆拍手す。

夜半夢驚く、見れば猛火天を衝き、火花四隣に散亂す、莫座に毛布に將た顏に、處を擇ばず之れを燒く、之れ血氣の一隊が薪を山積して燒きたるにてありけり。蓋し山上の薪は凡てプサ松、其葉燃え易くプ！〳〵と音して能く火の子を飛散せしむ。既にして火收まり、人靜まるの時、復讐の計畫成る、一倍の大火は再び天を焦し、火花あたりを襲ふ、衆周章狼狽行李を掻浚ふて之を避く、頗る滑稽なりき。

何れ劣らぬ朝寢坊の一行も此朝は未明に眼を覺し、池水に顏を洗ひ、高根の上に於ける日の出を眺め、朝食を認め、道すがら探勝しつゝ秋山下山口に出づ、快晴ならば、上の赤城、信の淺間、駿の富士さへ見ゆるとの事なれど遂に見えざりき。下り道は勾配甚だ急にして而し遠し、其路の心（シン）は總て稜角ある岩石、其岩角に足を掛け、雜木に攀まりて下る、多人數連續して下るときは、上なるもの石を轉落して下なるものを傷くの憂あり。下ることと暫くにして谷川に會す、左岸となり右岸となりつゝ進む。此谷川もなか〳〵の急傾斜で、そして奇岩怪石中を奔流するので頗る壯觀なり。山を下り盡した所が信州地で、通稱秋山と云ふ處、村名が堺で大字名が小赤澤、時に九時少し過ぎなり。

第四　中津川畔

秋山と云へば、越後人は山奥の代名詞の如く思ふて居る。今や其處へ出づ、此處も苗場の降口なれば、旅舍一軒ある、先づこゝに腰を掛けた、去れど山奥の代名詞と思はるゝ程の秋山の地、腹を捧ふべき出來合の食物のあらふ筈なく、客を見て飯を炊き、汁を煮るなり。もと本日の晝食米は三股宿にて用意したりしが、山上にて意外に多食して之れを餘さず、大赤澤に飮食に用足る家のあることを案内者から聞て居たから、時刻の早きが故

に先づ其處までと、先着者八名はこゝを出發す。小赤澤と大赤澤の中間に流るゝ溪流の地盤が赤いので、一同期せずして村名の由來此にあると云ふた、是れを村嫗に質せば左樣でもないとの事なり。大赤澤に着いて、案内者に敎へられた如くに聞くと、さあ驚いた、障子の煤ぶれた穢ならしい家されども此家の外には、求めて得可からず。已むなく炊飯を命ず、待つ一時許、鍋飯と一汁一菜は出來たり、牛馬の惡臭を喚ぎつゝ口腹を充たしぬ。人情の朴直は愛すべきものありき。此處を立ちて行くこと四五町、路傍目の付き易き處に道札あり、就て見れば、曰く苗場登山の壯擧を歡迎して云云の冒頭を書き、我等が爲めに通路や勝地を書くこと詳細なり。其文意に依りて要所々々に案内札の建てあるを知るを得、即ち此篇志家は誰ぞ、記して苗場老人と云ふ其實を知るに由なし。是より其案内札の敎ふる方を辿つて道を進む。平家の武士が胄を掛け干したる樹と稱する、美しく大なる赤松を觀、比較的樂なる新道を背さて上り下りの煩はしき舊道を取り、谷底に下りて中津川を渡り、また上りて結束に出で、村童に道を尋ねて鱒取場に向ふ。

鱒取場は、奇絶怪絶壯觀の處なり。地は中津川の流域中にあり、細徑を下る數町の處、斷岩聳え川の底川の壁、凡て凸凹屈曲せる一大磐岩より成れり。一景を成すの處約二町許、深潭と奔湍とを爲す、中央なる最も狹き處に飛瀑あり間餘に過ぎずと雖も水勢強大にして目覺むる許りなり。其眞上巖角に危橋を架す、其危橋より木皮を以て編みたる粗網を下ぐ、鱒のこの飛瀑を飛び上らんとして網に罹るを捕ふる仕掛なり。試に危橋を渡ふて中間に至らんか、奔湍耳を聾せんと欲し、飛沫眼を眩せんとす。戰慄誰か能く腰を伸ばし得る者ぞ、實に天下の壯觀なり。一同前程の遠きを忘れて止まり賞すること時を過ぐ。時に鱒魚一尾網に罹り居れり。此鱒取場の景勝、人之れを知る者多からず、苗場山に登る者は、必ず須く之れを併せ見るを要す。此邊中津河畔は凡て巖岩にして峭壁天に沖するの處多く、水白く、湍碧く、甚だ景勝に富めり。見倉には風穴數個あると聞けど探らず。これも中津川の流域にして逆卷と云ふ處あり。大岩あり川の兩岸より突出し、猿ならば飛び越し得べきかと思はるゝ處に、架するはこれも危橋、名けて猿飛橋と云ふ、一奇景なり。この狹き處を奔出するの水は、大なる渦卷をなす。逆卷の地名は其渦卷の逆なるより起れりとぞ。通路より二三町を距てゝ温泉場あり浴舍、浴舍らしからず、聞けば交通不便の山間、浴客なき故なりと、猿飛橋を渡りて東岸に移り上り下りの甚だしき川傍の小路を行くこと里許り、見玉に至り、大同年間小松内府の末孫が刻みしとやら言ひ傳ふる不動尊に詣す。馬龍の石穴、藤松の瀑聞いて探らず。見玉の不動に着いたのが午後四時、先づ一服と腰を下ろす、足は休めて益々重く、腹空くしてこゝを去すの飮食店なし、ヤウ〳〵菓子屋に菓子を得たり。こゝより道くだ〳〵しとのこと一婦人を雇ふて道案内となす。

第五　七つ釜

見玉より一里強にして七つ釜の入り口處平に至る、こゝにて案内者に賃を給して之れを歸す。七つ釜は先年一たび探りしことあるもの、日西山に舂づかんとするの頃之れに入る、ゆつくりと其勝を賞するに遑あらず、歸路は既に暮れて、やつと釜中を出づるを得たり。七つ釜は誠後奇勝の隨一、谷の長さ三四町、西岸の高き斷岩絶壁は柱を縱に幷べたらん如き岩、之れを縱小箱（タテオゴー）と稱ひ、東岸の岩は柱を横積したるに異ならず、之を横小箱（ヨコオゴー）と稱す。苗場山脈より流れ來れる釜川なるもの飛瀑となりて、こゝに懸る。瀑の下流三四町の谿谷を奔騰し、深潭を成す七つ、七つ釜の稱蓋し之れに基

づく。志賀矧川の日本景勝論、其他によりて既に天下に紹介せらる、今多言せず。月は九日の月なれども雲に隠れて明ならず。路は不案内なる山道ヤウ〳〵辿りて田代に出づ、稍て定めし今夜の止宿は小出の温泉場、之を里人に問へば坂路一里半、案内者を要す、寧ろ清津に至るに如かず、道程二里なると雖も平坦なる真道と。是に於て豫定を變じて清津に決す。元と此日は腹を拵ふること充分ならず、茲に至りて腹丹び空し、物賣る家を尋ねて、饂飩を煮さしめて之れを食し、提灯を借りて立ち出づ、住持を過ぎ橋なき河を渉り倉又(クラマタ)を經て夜行二里、清津に至り清風館に投ず。

第六 妻有(ツマアリ)

清風館は、清津川と信濃川の合流點に臨み、縣道の傍ち高燥なる地にあり、土地不似合に壯大なる建築にして眺望絶佳なり。到着せしは十一時過なり。本日の通路は、苗場山上より田代に至るまで凡そ十里の間は皆これ山道阪路、之れに加ふるに二里の夜行を以てす、疲勞せざるを得んや旅宿の梯子を上下するの狀甚だ見苦し。

茲に不思議なるは、三名の先着者ありしことなり。我等八名は紛ふ方なき第一の先發隊なり、我等に先つもの有らふ筈なし、而して三名あり、彼等既に晩餐を了りて以て憩ふ、抑〻飛んで來るなるか羽あらず、之れを質せば曰く、余等衆と共に見玉に至るの時、日足既に短し、衆曰く松明を照して七つ釜の勝を探り田代に宿せんと、田代には旅宿のなき所なり、これ余等の與みする能はざる處、且つ余等曾て七つ釜に遊べり、是を以て衆と袂を別ち近道して此に在ると。彼の路傍に案内札を建てし篤志家は秋成村駐在巡査中村剛雄君なること此三名のものに依りて知られたり、謹て謝意を表せざるを得ざるなり。後にて聞けば後隊は處平に至り、農家に就きて宿を乞ひ、翌日七つ釜に入りて解隊し、思ひ〳〵に歸路に就けりと。

旅舍の湯に入り汗を洗ひ食を了りしは翌午前一時なり、明日は帰本日は歸路を異にするもの多ければ、一同語り合ふも本夜限りと流石に名殘りの惜しまれて、華胥に入りしは二時頃にてやありなん。此處より吾が村までは平坦砥の如き縣道十二里強、常ならば、一日の行程として左まで難儀に非らず、去れど疲勞讀梅にては慥に無理と認め、之を二日の行程に充つ、二日に十二里、如何に疲れたりとは云ひ實に易き行程なれば、日三竿にして起床、朝餐を濟ませ信濃川に沿へる縣道を緩々と十日町指して進む、道連れは次第に散じて遂に獨り旅となる、途中老若の善男善女が絡繹として來るに逢ふは伊勢平治の觀音參詣の下降と知られたり。十日町に至り晝食を喫すべく旅店に入れば親友に邂逅す。互に奇遇を語り、玉露の饗應を受け晝寢を共にして二時半こゝを出で、行くこと四里岩澤村鑛泉場和泉屋に投宿す。

本日の路筋は所謂妻有の鄉なり。縱走の山脈を境に上田の鄉と併行す、養蠶製糸のこと上田の夫れに同じく、信濃川の縱貫、東西狹く南北に長き地勢又相似たり。

第七 歸宅

昨日來の疲勞にて足痛甚だし、明くれば三十日午前五時和泉屋出發、渡船に乘りて信濃川の南岸に移る、此渡船場は縣道線に當り、交通の繁き所なり、去れど水勢急激にして橋を架け難しと云ふ。兩岸より纜索を張る一條、河水漲溢して船便を缺くの時、依りて以て郵便物を運搬するの用に供するなり。眞人村に至り北越水力電氣會社の水取入口を見、鹽殿(シホドン)に至りて同發電所を見物す、增築工事の最中にて、なか〳〵の大工事なり。技師

の語る處に依れば水道中に於ける竿の長さ千五百間、之れにコンクリート工事を施し、供給馬力は六百九十本邦第一の水力電氣なりと。夫れより小千谷町に出で左甚五郎の作なりと稱する蛇堂、船岡の觀世音、内務省特別保護の土川の阿彌陀堂等に詣し、正十二時便船に乘り込み船路して家に歸り、子女喜びてカドに迎ふ、途中の困苦全く念頭を去りて、快感のみ深く印象す。簑笠を解き脚胖を脫し、目出度登山の事を了す。時に午後二時なり。

新高山紀行（二）

尾崎白水

▲楠仔脚萬社

新高登山の途中に於て、陳有蘭溪の流域に於て、最も平地に近く、最も開化したる蕃社は楠仔脚萬なり、海拔二千九百尺、牛轡轆より七里と云へど近し、東は直ちに涼溪を隔てゝ白銀山の障壁に對し、西は一帶の連山を負うて烏松坑に至り、北は蘆竹楠溪より南楠仔脚萬溪に亙れる緩傾斜の高原を爲し、群山重疊たる中には珍らしき平地なり、其面積を計りたらんには二方里もまるべし、蕃社は其中央に位置し、山に傍ひたる森林の間に集團部落を爲せり。

派出所は蕃社の森を離れて二丁ばかりなる、最も形勝を占めたる平野の中に在り。本年六月開設したるばかりにて、國友、藤井兩巡査と巡査補一人此に在勤し、十八重溪、郡溪等の隘警と聯絡して牛轡轆派出所に交通を取り、和社、東埔等の蕃會を管轄せり、派出所の建築は木造にて稍や完備し中央の一室を事務所に充て、左右に各二室を割し左方の二室を巡査の宿舍と爲し、右方の二室を巡査補の宿舍と、物置とに區別せり、夏期數ヶ月間は涼溪の水嵩增して、牛轡轆との交通全く絶ゆる爲め、其間此に籠城すべき糧食を準備するの必要あり、蕃社にては絶て米を收穫せざるのみならず野菜も芋と蕃薯との外は何物も無ければ、副食物も總べて平地に仰ぎ、多くは罐詰類のみにて、夏は半年分冬も一ヶ月分位づゝ蓄へ置くなりと云ふ斯る不便の上に管内を巡視すると云へば、和社へは二里、東埔へは五里、十八重溪へは二里半の山坂かけて、加ふるに管内の蕃社が涼溪を境に、種族を異にせるより、絶えず軋轢して何事も一致せざる夫れのみか、山一つ越へたる檜大社の蕃人と云ふは、絶えず管内に出草して人さへ見れば首を取り去り、又管内の背後に境を接したる獅武勳蕃も阿里山蕃とは仇敵の間として一寸の隙もならず、斯る危險なる斯る不便なる土地に勤務せらるゝ人の、如何に獻身的なるかを思へば、吾人は轉た愧死せん思に禁へ得ず。

派出所には新高登山の歸途、川上一行に分れて東埔社の溫泉を調査すべく、福留技師の滯留し居らるゝ筈なりしが、此朝既に國友巡査を伴ふて和社に向ひたる由、我等は派出所に着きて尙は時間の早ければとて、藤井巡査の案内を請ひ、蕃社の狀況を視察す。

蕃社は阿里山の達邦社知母勝社等と同じく、ツオオ種族に屬し和社、楠仔脚萬の二小社と蘆竹楠、嶺尾の二内社とを合せて鹿株大社と稱せり、楠仔

脚萬は戸數十四を有し、人口は男五十九、女五十なりと云ふ、蘆竹楠は此を距ること十丁許に在り、蕃屋僅かに三戸の小社にて、楠仔脚萬土目の支配の下に立ち、嶺尾は和社に行くべき途中なる、楠仔脚溪の上流に在り、是も僅かに二戸の小社にて和社頭目の支配する所なりと云ふ。

ツオ、族は阿里山を中心とせる一種の蕃族にして嘉義、斗六、蕃薯寮の三廳管内に蟠居し、漢人は之を阿里山蕃と稱し、蕃人等はツオオと自稱せり而して之を知母勝、達邦、公仔、鹿株、簡仔霧の五大社及び悖仔、藤橋雁、敗剪、美壠、塔螺裕の諸社に區別し、總べて三十九小社より成り、人口約三千を有せり、其中現に斗六廳の管内に屬するものを鹿株大社と爲し、陳有蘭溪の左岸に沿うて延長十餘里に亙れる地域に占據せり、和社は鹿株大社中の首位を占め、今日に於ける戸數人口等よりすれば楠仔脚萬と大差無きも、和社の名は古來蕃人間に、之を稱して大社の鹿株と爲したるに起原し、楠仔脚萬をば小社の楠仔脚萬と云へる由なれば、蕃社の組織上、楠仔脚萬は寧ろ和社の支配下に屬する一小社とも見るを得べし少しく予が見聞せる蕃社の狀況に就いて語らん。

▲蕃社の狀況

一社十餘戸の蕃屋は、老樹の鬱蒼たる方約二丁許の區域に集團部落を爲し、土地の高低、家屋双互の間隔、方角等は極めて不整位に建造せられ、其構造は總べて木を以て柱と爲し、蕨葉を壁と爲し、藤にて結び、屋根は茅葺にて四方に傾斜し、大さは一定せざれども概して間口二三間奥行四五間にて、高さは棟の中央一丈以上に及び、四檐は低く垂れて高さ四尺位なり、入口は必ず長方形なる幅員の狹き一方の正面中央と、其正反面なる中央との二ヶ所に在り、厚き板にて造りたる開き戸を附し、明かに表口と裏口との區別を爲し家屋の周圍には短籬を結びて庭を設け、室内の構造は正面入口の左右に棚を置き、其前方入口の正面に爐を築き、爐の一方より室の中央に大なる長方形の棚を吊り、右手の壁に傍うて穀類を容るべき倉庫を構へ、他の一方には寢室を設くること殆んど一致せり、而して内部に於ける一切の造作は、藤を以て葭若くは竹を編みたる極めて簡單なるものなり之を圖に示せば略ぼ左の如し。



而して寢室の數は家族の多少に由て一定せざるも總べて分房にして一房長さ五尺、幅四尺位なり、棚は器具を置くべき窠にして、衣類其他の貴重品は藤にて編みたる籠に容れ、之を梁上に吊れり、穀物貯藏所は彼等が終年の生命を托すべき最も貴重の寶庫なるを以て、常に之を神聖的否寧ろ迷信的に保護し、平素は全く其四壁を嚴鎖して開くこと無く、如何なる場合と雖も吉夢を見たる翌日あらざれば開かざる例なれば、偶ゝ吉夢を見たる時は其翌日始めて倉庫を開き、穀物を多量に取出して萬一の準備に供せり、若し久しく吉夢を見ざる時は、穀物を取出すこと能はざるを以て、終には一家擧つて饑餓に瀕するに至るも尚ほ彼等は其迷信を破ること能はず、僅かに甘藷其他の輔食物を以て饑餓を支へ以て吉夢を結ぶを俟つと云ふ、亦以て彼等の迷信が如何に吾人の想像外なるか

を知るべきなり。

而して彼等は別に家屋の附近に於て必ず一架の骨棚と家畜舍とを有せり、骨棚は木造茅葺の方約一二間の小屋にて、高く床を張り其左右後の三面に棚を設け、棚上には彼等が狩獵にて得たる、多數の獸骨を排置せり、或は野猪、或は鹿、若くは羌仔猿の類何れも其頭骨のみにて、數々幾百と云ふ數を知らず、戸々其多少を以て狩獵の巧拙を誇り、頭目の家の如きは最も多數にして少なくとも千を以て數ふべし、家畜舍は豚を飼養する爲めに構ふる所にして、一面に傾斜せる低き茅屋なり、彼等は豚を飼養すれども其任務は絶對的に婦人の手に歸し、男子は決して之に關係せず、單に之に關係せざるのみならず、其豚舍に近づくことすら敢てせじ、若し誤て豚舍に近づきたる時は其身體を穢したりとて、其二三日間は嚴戒謹愼を旨とし、狩獵等に出づること無きに至る、又非常に豚の住家に近づくことを忌み、若し豚が庭前の垣を越て家屋に近づくことあれば、狩獵に不利なる凶兆なりとて、終に之を撲殺するを常とすと云ふ。

以上の建物の外頭目の家に於て、骨棚の後方に更に極めて小さき三面葺下しの茅屋あるを見たれば、之を藤井氏に問ひたるに、开は蕃人の習慣として家内に病人ある時は、病氣は神の祟りなれば、是と同居すれば、他の家人も皆神の祟を受くとて、屋外に一茅屋を結び以て其中へ患者を移し、家人は之に近づかざるの風あり、茅屋は即ち其隔離舍なりと云へり。

頭目の家を訪ふに、折柄頭目は狩に行きて未だ歸らず、一人の年老いたる蕃婦は湯暖き圍爐裡の邊に蹲まりて、火上に吊したる猪の肉を燻べ居たり、臘乾を製するなり、更に副頭目の家を訪ふに是も男は居らず、十八九歳なる女二人、我等の無遠慮に家の中へ入りたるに、驚きて逃げ惑ふ體なりしが、藤井巡査が蕃語にて何か話したるに、彼等は恥らひたる體にて出で來りぬ。

▲公廨と蕃丁の養成

ツォオ族の蕃社には以上の建物の外、必ず一社共同の公廨と稱する合宿所あり、青年倶樂部とも云ふべき所にて、平素は未婚男子の宿泊所に充て、又有事の日に於ける會議所と爲せり往古は此所にて首祭りの式を擧げ、今も尚幾個の古頭顱を此に飾りて、最も神聖なる場所とせり、粟祭りの式も此にて催すなり。

楠仔脚萬の公廨は蕃社入口に在り、五間六間許りなる方形の建物にて、床の高さ四尺以上もあるべく、總べて太き籐を編みて敷き詰め、中央に大なる爐を設け、茅葺の屋根は低く垂れて四面全く壁を張らず、正面の一方には幅一間餘も掛出したる露臺を設け、梯子にて昇降せり、而して社中未婚の青年は夜々悉く來つて此に集まり、火を焚き爐を圍んで相擁して眠るを例とせり、籐を荒編たる高き床の上に、一領の衾をも襲ねず、四壁全く開放せられたる露臺の裏に、風を支ふべき設けも無ければ、是れ實に却て彼等の武士道を鍛錬すべき倔強なる道場なりとす、彼等の習慣として男子生れて十二三に及ぶや、如何なる事情あるも決して家人と同宿するを許さず、皆追うて此公廨中に投じ、風宿露臥幾年の間、其體力を養ひ其心膽を煉つて成人の後始めて妻を娶り自家に歸るを常とす、故に公廨の中には決して婦人の入るを准さず、又公廨の中に在りては何人にも女子の所有品を携帶せしめず、彼等の武士道は斯くして此神聖なる武德殿中に養成鍛練せらるゝなり、又蕃社に一の制度ありて、凡そ一社中に傳告を要する事件の生じたる時は、彼等未婚の男子は鐵片を笠狀に屈し、鐵舌を附したる鈴を鳴らして社内を疾行し、以て一般に警告傳達するの任務を有せり。

公廨の中には籐にて編みたる闊饅牀を設けて、彼等祖先が馘首の紀念たる頭顱を飾れり、ツオオ族の蕃社は何れも同じく、知母勝社の如きは其頭顱の數最も多く幾百を以つて數ふる程なるが、楠仔脚萬には意外に少なく、完全なる頭顱は唯一個のみ此に飾られてより幾百年を經たりけん、煤煙に塗れて古色蒼然たる憐れの殊に深きを覺えぬ。

▲撫蕃と通事

彼等が馘首の惡弊を絶ちたる因緣は、予が昨年阿里山に赴きたる時達邦社に之を聞きて、本年一月一日の新紙に記載し、又先頃水澤教授の談話中にもありしが、通事吳鳳の一身を犧牲に供し、遂に彼等をして再び馘首の罪惡を犯さしめざるに至りたる事蹟は楠仔脚萬にも長へに其德を遺して、現に我等の一行が蕃社の中に安らかなる一夜の夢を結び得たるも失れなり、而して知母勝社の公廨には、吳鳳石とて黑色圓形の直徑八寸許りなる石あり、彼等は其石を吳鳳の靈として尊奉し居れり、楠仔脚萬には其石見えず。

吳鳳の事蹟は世人の記臆に新たなる所、其傳說に多少異なる所ありとするも、要するに彼れが一身を犧牲にして、其遺德を後世に傳へたるの一事は沒すべからず、唯此に一の彼と共に傳ふべき人あり、時は康熙六十一年、吳鳳は既に殺害せられたり、諸羅の知縣孫魯と云へる人、百方力を撫蕃に盡し、蕃人を諭して歸化を勸め、一方には兵力を以て打擊を加へ、一方には其歸化せる者に布帛を與へ、酒肉を給して恩威並びに至る、蕃人の爲めに撫に就くと云ふ、是れ即ち臺灣府誌の記する所にして、蓋し吳鳳の死と相伴ひ、當局者に於ける撫蕃の策其機宜に投じたるものありしを知るべし、而して更に誌の傳ふる所によれば、其後乾隆年間に於て、鄭及び黃の兩通事が深く力を撫蕃に致し、終に今日の如くツオオ族の全部をして馘首の惡弊を絶たしむるに至れるなりと、嗚呼上に名知縣あり下に良通事ありと云ふべし。

今日に於ける蕃通事なるもの、多くは自己の利益に汲々として、偶々彼等蕃人が化外の域に在るを利用し、陽に政府の命令を遵守するも、陰に蕃人と結托して寧ろ其罪惡を幇助しつゝあるもの比々皆然り、蓋し蕃通事は蕃人に對しては殆んど全能の利器を有し、蕃人の生命を擧げて其掌裡に把握し居れる者、若し其利器を善用したらんには、理蕃の策亦行はれ難しとせず、秋風一日來つて楠社の公廨を過ぎ、視今懷舊一片の感慨且らく禁ずる能はざりき。

▲沿革及風俗

梅院兄の蕃人事情は既に彼等の風俗に就いて、少なくとも予等の見聞以上を語れり今亦之を繰返すの要なしと雖も、新高途上の蕃社が嘗て如何なる歷史を有し、其風俗が如何に吾人の耳目に新奇なる感覺を與へしかは、紀行の順序として少しく之を記するに妨げ無からんか。

「阿里山雕縣治十里許、山深而深峻、番剽悍諸羅山咯咯嘓諸蕃畏之、遇轍引避」、是嘗て諸羅志の記する所、今や彼等は全く馘首の習慣を脫し、其公廨に飾れる髑髏は、單に彼等の祖先が罪惡の紀念に過ぎずと雖も、其昔彼等の一族が此深山大嶽の間に蟠居して、如何に慄悍に如何に殺伐なる氣風の旺盛なりしかは今尙ほ彼等の蕃社が其仇敵たるヴヌム族、卽ち現に馘首の風盛に行はれ殊に彼等の種族に比して少なくとも五倍以上の大部族を有する蕃社に對し、常に其威風を示し、決して一步も他の部族をして其邊境を犯さしめざるの意氣あり、此一片稜々の意氣、卽ち彼等の武士道として長へに衰退とざるもの、蓋し彼等が祖先の祭典に於て節面白く歌ひなさるゝ蕃歌の中に自然に發揮せられ自然に涵養せられつゝあるを見る。

我等が祖先は其昔。勇敢無双の威を揮ひ。他社の種族と戰ひて。百戰百捷せざるなく。敵の頭顱を屠ること。
溪の沙の數知らず。楯も重しと積載せて。凱歌揚つゝ歸りたり。勇士凱旋するやいな。我等が友の婦女子らは。
悦び勇み戸に迎へ。功を稱へ勞ひて。形相凄き獲物をば。先を爭ひ取り出でて。溪に下立血を洗ひ。
肉を臠鱠に喰したり。

此恐ろしき蕃獣は彼等が祖先の靈に捧ぐる唯一の祝詞として、又彼等が子孫に傳ふる唯一の教訓として、聖書の文字よりも讃美歌の祈禱よりも、更に神聖なる意味に於て彼等に歌はれつゝあるを見れば、亦以て彼等の一族が單に男子の夫れのみならず、婦女子までも先天的殺伐の氣象に富みたりし、其當年を想像するに難からざるなり。

然れども漢人種に對しては、二百年前一たび歸順の實を表してより以來、絶えて敵對行爲を聞かざるのみならず、却て彼の乾隆末年に於ける林爽文の亂に、官軍を援助して賊魁を捕獲し、功に依て北京朝廷の恩賞を受けたるが如き、近くは光緒十年知母勝社の土目が、匪魁陳文英以下十人を殺して、嘉義縣官邱峻南の恩賞に預りしが如き、歷史上に特書すべき事蹟少なしとせず。

二百年來支那政府に歸順し、彼等の祖先は曾て海山萬里遙々北京朝廷に赴きて、破格の謁見をさへ賜ひたる光明の歷史を有するにも拘らず、今日に至るまで其風俗慣習一も漢人化するに至らざりし所以のものは、蓋し亦彼等の武士道的氣風が牢乎として奪ふべからざるものあるに因るべしと雖も一は地理的關係にして其交通の甚だしく不便なりしに由らずんばあらず、稗海紀遊の所謂「野蕃在深山中、疊嶂如屏、連峰插漢、深林密箐、仰不見天、棘刺藤纏、擧足觸礙、蓋自洪荒以來斧斤所未入」にして其交通の如何に不便なりしかは諸羅縣志の「各社夏秋划蟒甲、載鹿脯、通草、赤藤諸物、順流出社、近與漢人互市、漢人亦用蟒甲載貨以入、灘流迅急、船多覆溺破碎、雖利可倍蓰、必通事熟於地理乃敢孤注一擲」と云へるにも見るべく、最近二十年前までは彼等が漢人との交通は非常に困難なりしなり。

光緒の初年吳光亮が八通關を越えて臺東に通ずる道路を開鑿するに至つて、楠仔脚萬は其要衝に當りしを以て、初めて漢人との接觸交通漸く頻繁を加ふるに至れり、其後光緒十二年撫墾施設の擴張に伴ひ、林圯埔に撫墾局を置くに當り、雲林の知縣陳世烈は主として蕃人撫化の必要を唱へ、楠仔脚萬に於て一の生蕃學堂を設立し、廣東人陳國安を招きて教官と爲し、就學を勸誘したる爲め開學の當初は蕃童來り學ぶもの二十餘名に上りしが教ふる所の科目全く支那風の讀書習字にして、其自己の生齢さへも記することを能はざる蕃童に對し、三字經の素讀より直ちに入らしめんと企て且嚴に叱責鞭撻を加へたるより、未だ一年ならざるに蕃童全く其迹を絶ち、已むを得ずして之を中止したりといふ、聞く該學堂の創設と共に、直ちに支那的文明の感化を蕃社に及ぼさん爲め、其建築の如きも支那書院に擬し、規模宏壯を極めたりしが、教官一たび去るや彼等は悉く之を破壞し去りて、今日其遺迹をも知ること能はず、現に公廨に用ゆる所の梯子は實に當年學堂の遺物なりと云ふ蕃人の教へ難きこと大概此類なり、夕陽影裡俯仰感慨また深し。

▲蕃社風俗

巡臺御史楊二酉の詩に「問俗來蕃社、青葱曲逕長、家々茅蓋屋、處々竹編牆、牽手葭笙細、噴花春酒香、知能但耕鑿、眞可擬義皇」と云ふあり、彼等の風俗に極めて切實なるを覺ゆ、彼等の主なる生業は狩獵と農業とにて、傍ら漁魚、家畜、手工等を營めり、農業は陸稻

と粟とを主産物とし、落花生、蕃薯等を副産せり、其耕作法は極めて簡單にて、山野に火を放ち畬田を作りて種子を下し總べて肥料を施すことを無く、自然の收穫を俟ち若し天然の肥料既に竭きて、畬田全く荒蕪するに至れば、又新たに土地を擇んで、或は三年或は四年毎に其耕地を轉換するを例とせり、而して農業は多く婦女子の職務に屬し、男子は寧ろ之を補助するのみ、男子の職業としては狩獵を主とし秋より春にかけて、日毎に遠近の山を狩り暮して、鹿、羌仔、山猪、山羊、山猫、猴、石豹、熊其他の鳥類を獵し、肉を臘乾として蓄へ、農産物と併せて彼等が終年の食料に供せり、狩獵には主に銃器を用ゐ、又蹄係、鏢、弓矢等をも用ゐることあり、漁業は漢人と同じく擋網、魚筌を用ゐ、又稍にて突き弓矢にて射殺することあり、九月より十月の初旬にかけて、大さ五六寸にて形狀恰も鰭尾魚に似たる一種の魚族、夥たゞしく上り來りて溪流の激湍を爲せる所へ集合するを彼等は長き竿の先に擋網を結び、懸崕の上に足場を架し激湍に臨んで之を汲む由、內地の飛驒川上流等にて下り鮎を掬むと同じ式なるべし、其獲る所尠からずと云へり、家畜は豚の外に家鴨をも飼へり、手工は極めて單純なる木造の器具と藤細工の籠等なり、籠の類は何れの蕃社も同じく意外に精工なれど、近頃は土人部落より種々便利なる容器類の入り込む樣になれる爲めにや、巧妙なる細工は追々頽れて造る術さへ知る者少なくなれる由、郁永河が「耕田鑿井自艱辛、緩急何曾叩比隣、構屋斲輪還結網、百工俱備一人身」「夫携弓矢婦勤耘、無褐無衣不解愁、番婦一園剛蔽體、雨來還有鹿皮兜」と云へる鄭霄が「灌溉無類土脈饒。幾經播種不耘苗、登場一歲支三歲、誰上屯田十二條」「蓬頭跣足露睢尻、尺布纏腰結束豪、結髮眞嫌藤草陋、燒妖全在捕鷄毛」と云へる抔共に能く彼等が風俗を盡したりと云ふべし。

彼等の相貌はアタイヤル族に比すれば、寧ろ尋常にて甚だしく俘惡ならず、女子の如きは全く刺墨を施さず、多くは二重瞼にて一種の愛嬌あり、服裝は男子は無袖開襟の鞣皮又は毛織物にて製りたるを着し、前には布巾四邊に紐を付したる袋樣のものを垂れて腹掛と褌とに代用せり、女子は支那服の上着に似たる筒袖を着し、脚部には黑色の長き布巾を纏へり、材料は多く支那人より得たるなり、帽は鞣皮にて造れる半圓形の頭巾にて、前庇なく長き後垂あり、女子は帽を用ゐず、黑布を纏へり、而して男子の帽を戴くは、丁年に達したる時にて、古來の習慣上一定の法則あり、即ち祖先の粟祭の日に於て、彼等の酋長は丁年に達すべき男子を公解に集め、棍棒にて其男子の臀部を撲ち、更に詢々として訓戒を垂れ、纔て酋長は帽を取て之を授け、爾後一人前の男子として帽を戴くことを許すなり、又女子も結婚を許すべき年頃に達すれば、酋長の家に於いて其頭部に烏布を纏ふことを許され、斯くて男子は公解を去り、女子を求めて結婚するなり。

食物は陸稻と粟と蕃薯と芋仔との外、何物をも多くを有せず米と粟とは一日一回朝之を用ゆるのみにて、他は蕃薯の類に落花生、獸肉等を副へ食せり、箸又は匙を用ゆること少なく、多くは手攫みなり、酒の原料は粟と黍の實にて、其釀造法は蕃婦の口中に嚙みて唾液を混じ、吐き出して瓶の中に詰め置き、自然に醱酵を起さしむるなりと云ふ、其酒を飲んで見んとの說起りしが、偖て蕃婦の唾液を嘗めるとありては何となく氣味惡るく、此男元來酒に向つては命知らずの猛者なれど、終に之を試みん勇氣無かりき、下戶なる烏僊が僕に酒を飲む口あらば美事飲んで見せんと力味たるこそ可笑けれ。

▲蕃社風俗

彼等の酋長即ち土目は、總ゆる權能者として社中一切のことを主宰せり、然れども重大問題に逢着したる時は、社內の長老

と協議するを常とせり、又副土目なるものありて酋長を輔佐せり、社衆の犯罪の如きも土目之を斷ずれども、犯罪行爲の種類は極めて單純にて、姦罪と理非の爭論との外殆んど問ふもの無く、盜に就きては別に制裁あらずと云ふ、姦罪は有夫と無夫とを問はず皆罪あり、爭論は土目の認定にて斷じ、有罪者は總べて笞杖刑に處せり、有夫姦に在りては其本夫自ら犯罪者を擲つなりと云ふ、楠仔脚萬の土目は名をルロランウオンと呼び、副土目はテンノワナパスラと云へり、共に四十以上と思しき年輩なり。

結婚は任意結婚にて、吳廷華の「尙賸親磨鹿角釵」と云ひけん如く、鹿角を刻みて作りたる釵を意中の女子に贈り。女子之を受くれば則ち結婚は成立するなり、結婚の儀式は往古は其新夫數名の社衆を伴うて女子の家に赴き、强奪する狀に擬して新婦を拐出し、翌朝新婦は逃走して一旦自家に歸り三日の後ち更に新夫の家に伴ひ來り、社衆を會して盛んなる宴を開くの習慣なりしが、近來は殆んど其儀式無しと云ふ。

▲習慣と口碑

何れの蕃社に於ても吾人が先づ喜んで聞かんと欲する所のものは、其創世的口碑と彼等の迷信的奇習なりとす、彼等の創世的口碑に就いては蕃人事情にも記せる如く、最初嘉義平原に在りしもの、漸次漢人の移住と共に其領域を壓迫略奪せられて、遂に溪流に沿ひ山中に入り現在の位置に蟠居するに至りしことを傳へ居れり、而して彼等の口碑中に最も面白く感ずる一事あり。

我等の祖先は嘗て諸羅の平原に在りて、極めて安全なる生活を營み、マーヤと稱する一種族と境界を交へ、共に畝を分つて農耕に從事せしが漢人種の移住と共に殘酷なる迫害を受けて、我等は其土地を守ること能はず、終にマーヤは海を越て遠く東方の國に去り、我等は山中に入れり。而して彼等は今日に於て左の如き感念を懷けり。

我等の祖先が數百年の昔、漢人に追はれて諸羅の平地に手を分ちたるマーヤは、今また來つて漢人を征服し、再び我等と畝を分つて耕作し得るに至れり、マーヤは我等の恩人なりと。

マーヤと云へる親族の果して如何なるものなりしかは、今日に於て到底知ること能はずと雖も、彼等は確かに我が日本人を以て當年東方に去りたる、マーヤと爲し、領臺の後ち再び其土地を回復し得たるものなりと信じつゝあるものゝ如し、此傳說は昨年達邦社に於て石田警部に聞き居たるを以て今回も亦楠社に於て之を確めんと試みしが、通話の充分ならざりし爲め、其要領を得るに至らざりしは、甚だ遺憾とする所なり。

彼等の慣習には大概一種の迷信を伴へり疾病の如きも之を以て亡魂の崇靡と爲し巫覡に依りて其苦痛を得るものと信ぜり、隨て彼等は死に向ても深く之を怪まざるものゝ如し、然れども死者ある時は慟哭し、家人は身體の裝飾を除去し、食を廢すること一日、外出せざること數日に及ぶと云ふ、死屍は鹿皮に包んで之を家屋內の出入口に埋葬すと云ふ、祭祖の式は彼等が終年の大事として行ふ所にして、稻の種子を下す時及び收穫の時に於て之を行へり、其儀式は種々の法則ありて一々記し難きも、彼等は祭祖の時に當りては、初日より七日間全く食鹽、蕉實、魚肉、蕃薯、薑等を食はず、又粟祭りの際には全く他人と言語を交へざる儀式ありと云ふ。

楠仔脚萬には其蕃社の入口にて、小高き丘の上に上りたる所に一株の老樹あり、是れ彼等が祖先の神の留まれる靈地なりとし、祭日には社衆皆來つて此に會し、新酒を樹根に灌ぎて其靈を祭れり、此靈樹はワオオ族の部落には何れの蕃社にもあり樹下には必ず數株の石斛を種うるを例とせる由

なれども、我等は心づかずして過ぎたり、實は淡海子例の如く楠社の全景を寫眞に撮るとて、一行暫し其樹下に憩ひたれど、然る尊き樹とも覺えざりしこそ淺ましけれ、木の名は何と云ふやらん是も松龍子ならでやは。

▲慣習と迷　彼等の迷信、彼等の慣習、聞くもの見るもの、皆面白く感じたる中に尚ほ一二の記すべきことあり、十三、七つの數さへ知らぬ彼等なれど、夜な〳〵山より出でゝ山に入れる月は、彼等の目にも一種の想像を與へたり、昨年知母勝社にて月中の黒點に就き、彼等の傳説を聞きしに彼等は「月中の黒き影は我等の祖先が月を射たることありしより其血痕の殘留せるなり」と云へり、楠仔脚萬も同種族なれど不思議にも彼等は其傳説を異にせり曰く「月中の黒き所は兄弟二人の兒童の遊戯し居れる影にて其大なるは兄名をリシュシーと呼び小なるは弟にてオポシーと云へり」兎の餅を搗くなりと云ふ夫れよりも興味深からずや。

鳥の啼聲、鳥の飛び方等にて吉凶を判斷する習慣は何れの蕃社にても似寄りたることなるが、彼等は外出せんとする時は必ず之に注意せり、テーテー、ヒーヒーなど云へる啼聲は吉兆を示し、キーキー、チウチウなど云へるは惡聲なりとせり、又朝戸出に放屁、嚔などし躓きたる時も凶兆となせり、前夜惡夢を結びたる時も外出を忌めり、太陽の光りが目に入たる時は詑ゆく、鼻に入たる時は嚔を催すなど、當然のことなれども智識の程度低き彼等は是をも神的作用として痛く恐るゝものゝ如し。

彼等は屋内の穀倉の前にて、魚類を調理し又は蕃薯の皮を取りなどすることを忌み、之を犯す時は穀物皆腐敗すと云へり、又粟を煮るべき鍋にて汁を煮る時も同じ理由にて之を忌めり。

又彼等は狩獵に赴く時は最も其身邊に注意し、豫め潔齋して苟くも不吉の兆ある時は、決して寸歩も外出せざるものゝ如し、又彼等の捕獲せる淡水魚の中に、フングと稱する一種の魚類あり、其の魚を食する時は出獵の際獸類を擊つとも、獸類は出血せず且つ死することなしとて、之を食ふことを忌めり、而して獵場より歸りて家に入る時は、如何なる場合と雖も決して裏口より入らず、銃を携へて裏口より入るは甚だ不吉なりとせり。

婦人は鹿の胸部の肉及び心臟を食せず、之を食ふ時は生兒の生長後呼吸困難の疾病に罹ると云へり其他一般に此種の迷信尠なからず。

彼等の迷信は斯の如く甚だ愚なり、然れども此迷信はやがて彼等の武士道にして、此間時にまた一種の眞理を發見することなしとせず、予は蕃社に於て最も感じたる一事あり、請ふ之を語らん。

素問空傳肘後經、山中無復劉奏苓、河流滴々楊枝水、洗盡番兒骨髓腥、彼等は最も自然に近き人類なり、其衣食住一切のこと殆んど天然的にて、決して、吾々文明人の如く複雑ならず、繁劇ならず、極めて簡約に、極めて單純に、其境涯は寧ろ動物的なり野獸的なり、飢えたる時一掬の粟と些の食鹽との外に何物をも求むる所なく、寒き時唯一枝の槽を爐邊に添ふるのみ、病みたりとて醫療の術あるを知らず、死に垂れて尚ほ一滴の藥水を求むるに由なし。然れども天はまた彼等をして自然の生命を保たしむべき好箇の配劑を與へて、所謂自然の間に一種の保健衛生的感念は行はれつゝあり。

彼等は最も平地に出でゝ漢人種と接近することを恐る、其恐るゝや銃器にもあらず、文明的設備の完全せる爲にもあらず、唯病魔の傳染なり、彼等

は屢々平地より悪疫を輸入することあるを知れるが故に、自然に之を恐れ之を警戒するなり。

彼等の住居は茅屋なれども、其室内は云ふまでも無く家屋の周圍も極めて清淨にして、一點の塵芥をも留めず、些しの臭氣をも聞かざるなり。

彼等の屋頭を繞れる極めて清冽なる溪水は、筧に依りて軒端の剜船井に湛へられ、土地の傾斜は自然に排水の利を得て、飲用水も下水の夫れも下界の吾々が住家にては夢にも見られず。

殊に彼等が室内にて食物の調理を爲さゞる、患者あれば直ちに屋外の隔離室に移す抔、自然に文明的衛生の法に叶ひたるもの尠なからず、而して予は詳細なる調査を爲すの機會を得ざりしも、彼等が疾病の種類も之を下界の人類に比すれば極めて少なきものゝ如し、病氣の中にて最も恐るゝは麻剌里亞なりとか、例の甲狀線腫も見えたり。

尚ほ蕃社の狀況に就きて、調査せんと思うこと多かりしが、時間の許さゞりしは返すゞ〳〵も遺憾の極みなり、他年また此青山彩裡に天使に似たる自然の兒と相會するの機會ありや無しや、頭を回らせば白雲一片飛んで萬峰の西に落つ。

▲派出所の一夜

日の昏るゝをも打忘れて蕃社の中を漫り歩き、聽て派出所に歸れば巡査補は夕餐の膳を整へて待てり、疊の上に眠らるゝは今宵限りなれば打寛がんとて、酒酌み交はす折しも土目が今日の獲物なりとて猪の肉澤多贈り越したれば卽座に調理して意外の珍味に暫し晝の疲れを忘れぬ、此夜膳に上れる山村の佳肴を數ふれば、鷄、猪、芋、フング魚、蕃菜何れも蕃社にて整へたるもの、松蕈、福神漬是は鑵詰なり。

我等の伴ひたる東埔社の蕃人は、ツオオ族とは仇敵の間柄なれば、此地を通過する時は必ず道を溪底に取りて潜行するを常とし、決して蕃社に立寄ること無ければ、此日も我等と共に此に宿することを快しとせざる模樣なりしも、警察にて保護すべしと強いて伴ひしに、彼等は尚ほ何となく不快の氣色にて、派出所に入ることをさへ避けて萱藪の中に露臥せり、夜の更けたる頃行きて見るに、彼等は枯枝を集めて火を焚き、其周圍に折重なりて臥したれど、露を凌がんに木葉一枚の掩ひも無く蘆の葉末を吹き鳴らす風のみいと寒げなり。

淡海は寫眞の種板を入れ替へるとて、押入の中へ潜り込み、烏龍は日記を認むるとて頻りに首を捻る、歌の浮びたるなるべし、我も最後の通信を書く、明日よりは娑婆への音信暫し途なし。

此夜蕃社の土目、副土目と連れ立ちて派出所に來る、警察より招きたるなり、我等一行の贈り物なりとて、烏布一反と毛糸煙草等を與ふるに彼等は滿足なる體にて歸り去れり、總べて下界より彼等の領地に入るには、何等か相當の挨拶無くては叶はず、況して他社の蕃人を連れて彼等が繩張内へ踏込まんには、厚く賂はざれば其怨恨を招くこと無しとも限らずとて、警官の注意にて斯くせり、後の登山者も注意すべきことなり。

寢に就かんとて窓を推せば、夜山夢の如く屋頭に横はつて、滿天の月氣霜よりも白し、眠らんと欲する時覓聲枕を繞つて夢魂端無く、千山の雨に入る。

▲麻剌里亞の研究

瘴癘の二字は予が本島に於て多年の宿題として研究しつゝある文字なり、臺灣は果して瘴癘の地なるか、然り麻

刺里亞の如き百斯篤の如き、其患者數の比例は之を母國に比すれば著しく多數なり然れども百斯篤は決して本島固有の病疫にあらず、麻刺里亞も亦一たび彼の蚊媒說の行はれてより以來、防蚊的裝置に依りて容易に之を防禦し得るに至れり、若し百斯篤と麻刺里亞とを本島より驅逐し得るとすれば本島は決して瘴癘の地にあらざるなり、如何にして麻刺里亞を豫防し得べきや、予は實に此の問題の爲めに久しき希望を有せり、卽ち防蚊法は今日に於て旣に略ぼ其効果の果實なるを示せり、然れども幷は實際に於て到底一般に施行し得べからざる問題なり故に若し他の方法に依りて之れを豫防し得るあらば、吾人の幸福は之より大なるもの無かるべし。而して予は此研究の爲めに本島に於て最も瘴癘の地と稱せらるゝ蕃界を跋涉し得るは甚だ喜ぶ所なりとす、予は昨年阿里山に赴きたる時も又南部地方より恒春の蕃界に入りたる時も、共に此研究問題を唯一の希望としたりしが、幸にして極めて滿足なる結果を得たり、今回の新高探檢も亦此問題は實に予が主なる希望の一なり、然るに幸にして此に最も愉快なる試驗的好機會に遭遇せり、何となれば楠仔脚萬は麻刺里亞の巢窟なり、麻刺里亞を媒介すべきアノフェレスは盛んに予等が投宿せる室内に棲息せり、而して麻刺里亞患者は派出所内に在り、予等は何等の防蚊裝置無くして此に眠らざるべからず、若し現代に於ける學說にして違ふ所無くんば予等は必ず其病毒媒介を免れざるなり故に予は信ぜり、予等一行が若し登山の後までも全く麻刺里亞に冒さゝること無くすれば、幷は必ず現代學說の謬謬か、然らずんば予等が服用しつゝある豫防藥卽ちエスアーアレス丸の効力なりと。

此夜蟆蚊軍の襲撃を被むり、夢覺め足を曳ぐれば刺痕點々痒きこと燃ゆるが如し、拂曉室の四壁を檢して蚊十數匹を捕獲す、皆恐るべきアノフェレスなり、月殘風曉悚然として肌の寒きを覺えぬ。

初登山（岩鷲登山記）

野口幽香子

思ひ立

去年の夏なりき、われ暑を避けて播州鹽屋にあり。一夕妹の病に侍して、夜深くるがまゝ、日本園藝雜誌第十八年八月號白馬登山の紀行を讀み、餘りの面白さにわれも亦いつかは此味をなめでは止まじと其夜心に決しぬ。

世の煩なる、果して我望の達せらるゝや、われながらあやぶめど、輕々しう言葉に現はして、幾歲月を繰返す其間、人に語り自ら考ふるのみにても吾には樂しきなり。爾來吾はたゞ來年こそは岩手山にと人に語るが面白くて、定めたるともなくたゞ語りき。

一年過ぎ去りていよ〳〵夏休も近うなりぬ。岩手山岩手山と繰返したる吾心は、いつの間にやらんほんとうに岩手登山を決したるなりき。われはかく空想の如くに語り興ずる事を、終には實行するを又吾自ら面白く思ふなりけり。

準備

われ未だ草鞋はさたる事なし。況んや登山の用意に老案のあらう筈もなし。人細かにわが爲に語りて、先づ脚絆、足袋、帽子、ゴザ、手袋、杖、雜詰、ドロップス、など用意せよといふ。

足袋は紺がよかるべし。縫目の裏返したるがよしといふ。町に行きて左る足袋をと求むれど、應ずる店更になし。新宿たびなるものよからんと敎へられ、さる店に問へば、新宿足袋何にし給ふとまづきく。われしかくの山登りに用ひんと思ふといへば、然らば草鞋掛こそよかるべければと一人のいふに、實はわれ草鞋掛といふもの知らず。白馬紀行に記されて、面白く讀みたる草鞋掛なるもの、一つ見ばやと、ともかくもと見れば、こはそも如何にかたきものなるかな。足袋の破るゝよりまづ足の皮むけもやせんと、驚きつゝ興じつゝ、ともかく常の足袋よりは稍大きなるをと、一つ求めぬ。歸りてよりはき試て、人に示すなど、おもちやにさるゝ事久し。脚絆も出來上りぬ。手袋は冬物の稍薄きを入る。扨考ふべきは衣服なり。袖は勿論邪魔なり。袴も高きに登るには工合わるし。端折り高く細き帶、大原女の姿などゝも考へしが、さる人の勸めにより、瑞典式體操服と定めぬ。物はためし、此行もしこれにて成効せば、年々諸高山を跋渉せんとのわが望（空望ヅ）に對し新調すべきも、まづ當年は友に語りて借る事と定めぬ。衣服定まりぬ。ドロップス一斤、氷砂糖半斤、味付海苔、つくだに、鯛味噌に田麩、まづこれにて用意調へり。

天候

天氣よくばさしたる事なし、雨降らば大變なりと人毎にいふ。如何にもして其雨さけんものをと、天候稍回復といふ見込にて、七月二十九日東京を發し、相馬の中村に一泊。それより仙臺、鹽竈、松島等の見物に一兩日を費し、盛岡に着きたる翌朝。起き出づれば雨しきりに降るなり。雨の翌日は登山叶はずとの定めなりければ、空しく日を過さんもと思ひ直に弘前に向ひたり。此地方始めての事なれば、盛岡弘前左程へだゝらんとも思はず。滊車の不便にも心付かず。飛び出せば途中九時間もかゝりたりき。されど滊車中亦樂多く、沿道にハマナスの自生せるなど珍らしく、八月一日を弘前に過し、今一日滯在せんと思ひし其夜、盛岡より三日登山の電報ありければ、蒼皇又九時間を費して、二日の夕刻盛岡に着けば、雨盛んに降れり。何たる事ぞと思へど、せんすべもなくとう〳〵三、四、五の三日を空しく過しぬ。如何に徒然なりしぞ。幾度か雨間には出でゝ山を望めど、姿更に現はさず、五日の午後なりき稍回復の望いでたれば、あすはとていよ〳〵本準備にかゝる。まづ麥藁帽子求めて海水浴にてかぶる樣に作り、ゴザも地の濕さが輕かるべしとて尋ね求め、部よりもたらせし品々に加へ、用意調ひ眠に就く。五日の夜半起されていづれば雨は又降り居れり。如何にせんと評議まち〳〵なりしも、雨降りてはとて又お止めとなりぬ。六日の午後になり空全く晴れて久しぶりの日光を仰ぎ、嬉しさ限りもなく、あすは降りても行かん、午後は又けふのごと晴るべければと勇み眠につく。

同行者及服裝

案内者監督者として此行に主たるは、わが宿れる家のあるじなる老人なり。中老にして矍鑠たり。次に師範學校女子部に舍監を務むる老婦人、同校卒業生二人、高等女學校卒業生一人、あるじの親戚なる若き男子、及此家の娘にて部より同伴せし人及我、凡て八人それに人足三人。老婦人はネ

ルの單衣に袴ばき、おはぐろつけたるに帽子かぶれる、なか〳〵の異樣なり。他は皆筒袖に袴短かく、甲斐〳〵し。男の部はかきたつる程もあらずわれは縮のシヤツに毛の中滑のシヤツ（勿論冬物）ネルの腹卷を二つ重ね、上に毛織の黒の體操服、帽子にゴザ、草鞋脚絆はいふ迄もなく。揃ふて列びたる狀は、假裝行列にても始まらんかと思ふばかりなりき。

携帶品

試みに記し見ん。

灰燼、蠟燭、マッチ、提灯、毛布一枚宛、懷爐灰、鑢切、コテ、時計、はさみ、ナイフ、繃帶、肝創膏、藥四品、タカジアスターゼ、油紙四枚、草鞋三足宛、水呑、箸、安全ピン、楊枝、齒磨、扇、糸、紙、手拭、手帳、鉛筆。

白米、味噌、茄子、梅干、紅生姜、鮭、鮎、福神漬、海苔、佃煮、魚ノカス漬、ハゼ鑵詰、ドロップス、氷砂糖、ハッカ糖、檎（リンゴ）。

登りには右を十一人分負ひ、下りには上りに勝る重さよと、つぶやく迄に採集品を負ふ人夫の苦しみや如何に。

發途

八月七日朝三時出發の豫定なりしかば、起き出でしは一時半なりき。急ぎ食事し草鞋掛わらじなどと、初陣の用意なか〳〵時を過しぬ。同行の人人は來れど馬車來らず。まちて〳〵終に夜も明け行きてやう〳〵來る。何とてかくは待たすぞとにくし。細雨しきりに降れどきのふの例もあればと氣にする人もなし用意出來て庭に下り立ちし心地！これをこそ輕裝といふならめ。斯る輕き心地よきいでたちは、未だ經驗せざる所なりき。意氣既に壯に準備亦斯の如し。山も雨も何かあらんと馬車の整ふを待つ。荷馬車といふ事きゝたれど、斯る物ならんとは思ひ及ばざりき。都にても見る如き普通の荷車の上を板にて二方圍ひ、落ちぬ樣にしたるのみなり。中にむしろ敷き、毛布しきて荷物と共に積み込まるゝなり。餘りの事に呆れて物もいはず。をかしくもあり、恐ろしくもあり。老婦人と部より同伴せる娘と我と、三人これに乘るなりけり。たがひに小さくうづくまり、間々に荷物つめて、しつかりと積み込まれたる狀はをかしけれど、割合に心地よし。馬そろ〳〵と動き始めたるは午前四時半なりき。

下厨川（シモクリヤガハ）なる此家を出でゝ、青森に通ずる國道を北上川に沿ふて北へ上り行くなり、安部館（厨川柵跡）を右に見て、行けども〳〵松並樹の、そこ迄も道の平かな廣き間を、そろり〳〵がたり〳〵と進み行く。なか〳〵呑氣なものなり。同行中の步行者は、或は歌ひ或は笑ひ、車に前後して此馬とはよいあるき仲間たるなり。何時なりしか同じ途にも飽きたる頃、一本木の手前なりといふあたりより馬車漸く左に向けり。こは又途らしき途もなく、芝や草の上をめちや〳〵に馬追ひたてるなり。枯枝にても落ちたるにや、プチリ〳〵と音して、そこら八千くさの花盛りなるもかまはゞこそ、知らぬ顏して引つぱり行く。危しと思ふ事屢々なるも、果てはそれにも慣れて、兩傍の女郎花桔梗など、一面に咲き亂れ、餘りの美しさに、我も人も歡呼の外凡てを忘れたり。其又美しかりし事よ！行けども〳〵花は盡きず。或は廣く或は狹く、時には馬車にふれするゝと音して女郎花の去りゆくなど花見ん爲の此途行かと、喜び限りもなし。途は次第にわるく、或は高く或は低く、ひつくりかへらんとする事屢々なれど、去りとて一度も轉覆はせざるなり。やがて徒步者の鈴鹿といふ聲によく見れば、千草咲き亂れたる下は一面の鈴蘭なりき。自生など見たる事なき我には、非常なる喜。下りざるなり。

てと思へど左る我儘もいはれずと、其儘に車やりぬ。

時は次第にたち、雨はそぼ降りて、寒き事甚だし。誰いふとなく徒歩者としばし代らばやと、談はまとまり、見渡す限りの廣野のまん中に馬の足とどめて、荷物の積みかへをなしぬ。いざとて車より下りたち、ゴザに雨をよけて、ぶる〳〵とふるえながら、鈴蘭の野にたちし心持、壯とも快とも名狀すべからず。見れば足許には梅鉢草の當ふくらみたるが、至る所にあるなりけり。歩み出せば寒さ次第に薄らぎて、物事珍らしく、少し水ある所を草わくれば、モウセンゴケ一面にありて、花はなけれどミヽカキの、かのさゞやかな葉が一面に、名も知らぬ蘭科のものも一二種眼につきてこゝばかり採集しても、我には嬉しきものをと思ひつゝ、一つも得採らざりき。途もなく眼あてもなく、一歩あやまたば方角もわからぬばかりの廣き中に、あちこち馬の放たれて、親や子や水溜りに配置よく、われらの通るをいぶかしげに見やるさま眞に一幅の畫圖なりき。

柳澤へ着きしは九時半なりき。けさ食事せぬ人もあればと、ともかく荷物開き。宿の椽側に腰掛け食事す。其又不潔、なるべく遠くに眼をやりつつ我は結び二つたべぬ。雨未だ止まず。折柄下山せし二人の若者あり、偃松、當歸などの枝、かたへに置きて食事せり。山のさま如何にと問へば山は暴れて居れり、今日は登山を止めよといふ。我等若き者にて尚容易ならぬ雜義せり、婦人方の登らるべくも思はれずといふ。わが先導者はきのふの晴く晴るべしといふ。登らんか泊らんか、議更に決せず。我は心中茲に泊らんを願ひたりき。間もなく十數人の下山者前を通れり。何れも馬に乘れり。山の狀如何にぞと問へば、口々に山はいと靜なりとて過ぎ行く。こも亦餘りあてにはならぬなりとぞ、行狀惡しき人此聖山に登らば、必ず神の怒りに觸れんとの迷信ありて、山の靜なるを强ていはんとするの傾ありといふ。前の二人の若者は、女共の登山、一つをだし試みんとの考も加はり、しきりに山の危險を語る。何れを信ぜんも更にあてどなきを如何にせん。山靜なりとの一言が、まづ同行者の耳には嬉しくきこえて、きのふの如くやがては晴るべしといふ望にてとう〳〵登山と決す。

さらばとて荷物まとめ、又例の馬車に乘る。時に午前十時なりき。こゝより山麓迄は時々鳥居ありて其下を通り行くなり。上り途とて馬の疲れ甚だしく、打てどたゝけど行かずなる事屢々なり。人夫の一人常に馬をいたはり、馬の好める草にてもあらん、そこゝゝ探しては來り食はす。此來一つ助けやらばやとて、車上の大包一つ自ら背負ひて、馬の荷を輕うす。やさしき事するよと氣を付くれば、彼の眼は常に馬に注ぎて、同情にたへざるものゝ如く。馬歩まぬ時、馬子は怒りて只打つのみなるに、彼はやさしげに輕く舌打ちつゞけつゝ、或は草を與へ或は車のあと押しす。吾は此行を見て、必ずよき人なるべしと定めぬ。

柳澤より一時間行きて馬は止まる。こゝよりいよ〳〵徒歩なりといふ。雨尚降れり。人夫は荷を負い、吾等はゴザひきしめ、頭巾傾けて雨を避けこゝにて荷馬車を返して歩みを初む。

登山路

岩手登山の路は三路あり。一は即柳澤よりの途、表口にて山の東南の斜面を登るなり。二は沼宮内の方よりの途にて、北麓なる田頭村字平笠よりす。三は西山村字雫石村よりするもの、これは山の南面に通ずるものなり、此外山の西南にある網張（アミ）温泉より山頂に達する間道あり。記錄によれ

ば、二と三とは道急ならねども遠く、綱張よりの途は嶮惡なれども近く、一の道は最峻嶮なれども、巡禮行者等は主に此路をとり、路の手入最よく屆き居るといふ、わが路は即一の柳澤よりの表口なり。

いよ〳〵登山

廣漠たる原の中に荷車にわかれ、誰も無言に徒歩し始めしより、間もなく馬留といふに着きぬ。馬ならば茲迄は來るべしといふ。いざこれよりゲダイ坂なりといふ。登山者もし罪深ければ、此ゲダイ坂にて足すくみ、一歩も進むこと能はずといふ。地獄の底へでも引こまるゝ如き、陰氣なる暗き下りの急坂なりと兼てきかさる。罪深き吾は少なからずこゝを憂ひて、もしや足のすくみ人々に笑はれもやせんと、恐る〳〵坂にのぞめば、細き急なる坂の鎖にて昇降を助けられたるなり。雨降りをればすべりもやせんと、鎖につかまりて下りて行く。途中の兩側にはマセヅル草ばつ〳〵と見ゆ。もうこれにて罪のある事もつい忘れて、いつの間にやらゲダイ坂は無事に通り過ぎたりき。まづはめでたし。わが罪深きも、此聖山に對する熱心にて許されし事よと、嬉しさ限りもなし。熊笹などの茂れる間通りて、やがて受取坂に着きぬ。茲に水あり、これ以上九合目迄はもはや水なければ皆食事をとゝいふ、時に十二時前なり。餘りに早ければ吾は食せず。一口氷の如き水飲みたるまゝ、準備の調ふをまつ。こゝに荒れたる小屋あり。五月なりしか山にお祭ありて、山役錢の札をこゝにて受取るなりと。山役錢とは登山者の爲め道普請の費用として一人五錢を納むるなり。吾等は柳澤の遙拜所にて五錢を納めしなり。されど十一人の大勢なれば、半額程にまけてもらひし樣なりき。舊曆五月十五日には、山開きとて、途の惡しきを直し、鎖の切れたるをつなぎ、安全をはかるなりとぞ。此受取坂の下が眞の山麓なり。こゝより五勺目或は一勺目毎に石標を建てたり。食事終り出發せしは十二時なりき。これよりいよ〳〵登山なり。

受取坂といふは、大きな岩の上を登り行く坂の事なり。鎖ありてつかまつて登る苦なれど、先づ鎖なくても吾には登り得るなり。次にはコガノフチといふを通るなり。コガとは桶といふ事なりと、土音「コガノフヅ」と聞こゆ。左は底も知れぬ谷の、しかも一面の砂礫にて路巾二尺もあるかなきかの處、木の枝など路ばたにさして、恐ろしさをかくせど、足許見てあるけば左程に恐ろしとも思はず、又危險もなきなり。かゝる處五ケ處あり。上のフヅ、したのフヅといふ。こゝもこわいときかされたれど、まづ左したる事もなくて過ぎぬ。さればゲダイ坂も無事に過ぎ、コガノフヅもすみたれば、もはや恐ろしき事はなき事よと、まづ安心したるが、次にほんとうに恐ろしき時に、益々恐ろしと思はしめたる原因たりしか。此邊一面濶葉樹の林にて、新しき面白味もなく、やがてオナメといふ處を通る。名の如くこゝは砂の斜面にて、巾も廣く、長き間同し勾配に走れるなり。茲にも鎖あれど鎖の用は無きなり。ヅル〳〵とすべる處もあれど、斜面左迄急ならねば、恐ろしとも思はで先づこゝも通過す。それより三合目位迄は、不規律の高さ〳〵石段を、一歩づゝよぢ登るが如き路もあり。雨の爲路のすべる事もあれど、さしたる事もなく、面白い事も少く、あゝぎ〳〵ドロツプス屡々口に入れて、無言に只登るのみなりき。

三合目と覺ゆ、林の欝陶しさは終りて、一面の岩面なり。見渡す限り大小さま〴〵の形せる、隨分見事なるものなれども、登る者にはなか〳〵つらし。路と定つた處更になく、てんでによさそうなる路求めて、此岩如何にして登らんと考へる事も屢々。時には先に進める人の足踏みそこねて、

焼砂利のころ〳〵と落ちて來る事もありき。かゝる苦しみもいつの間にやら忘れて知らず〳〵登り得しは、此邊にある高山植物のお陰なり。其又嬉しかりし事よ、一株もらひても大喜し、一輪咲いたとて大騒ぎするさま〴〵の植物は、此天然の岩と岩との間に敷きつめたる様に、如何に植ゑしとて、斯く迄たくみに配置せられんとは、思ひもつかぬまでなる天然の配合。われは此邊より盛に採集し始めぬ。ムシトリスミレは岩の割目に、ぽつぽつと植ゑたらんやう、あるは岩影に種子にても落ちたるにや、無數の小さきがかたまりて芽を出せるあり。穴の中の様なる處のぞけば、中は一面の岩鏡。つやある葉のひとしほかゞやきて、何たる美しい事ぞや。梅鉢草は鈴蘭の野にありしよりは當大きく、白くなりて今にも咲き出でんばかり！、チングルマの古き幹、うねり〳〵として新しき葉繁り、白き花一面に咲き、既に花散りて翁草のやうな實のつきたるもあり。採らんとすれど株大きくてとても採れぬなり。ツルコケモヽ、チシマセキショウ、エゾツヾジ、など花なけれど何れもほしきものゝみ多く、吾知らぬよき物も嘸や多かるべきに、知識乏しき採集者には花も喜びしなるべし。

岩山過ぐれば次には焼砂利の山なり。茲は花もなく路はあぶなく、苦しさ多くて樂しみ少し。あへぎ〳〵六合五勺のお藏石といふに着きぬ。受取坂にて食事せざりし吾、少しく空腹を覺えて歩行益々困難を感じたれば、荷物下させお結び二つたべぬ。此時わが肩には採集の籠かゝれり。半ば以上既に滿ちて重き事限りなし。人足しきりに持たんといへど、重き荷負へる氣の毒さに、これのみは自分にてと強て自ら持ちぬ。チシマセキショウの大きな塊採りしが、餘りの重さにこゝにて捨てぬ。よく〳〵重かりし事ならんと、人に語る毎に笑はる。たゞに捨つるはをしく土堀りて植ゑて置きぬ。雨まだ止まず風も少しはあり、登るに從がひ風可なりに強うなれり。お藏石の嶮を吾はいふ、こゝは眞に恐ろしと思へり。大きなる山の如き岩の、右と左に路あり、辛うじて一人を通ずるのみ。しかも其一方は焼砂利の急坂にて、雲は四方を閉ざして、底の見ゆべくもあらず。石投ればとめどもなく、やがて岩にぶつかりては飛び上り、更にころ〳〵ところがりゆく。飛び上りてはころがり、ころがりては又とび上る。果ては遙然と地響して、無限の底に去り行く其恐ろしさ。右の路は新道にて鎖あれば皆此方を選びて進む。鎖につかまりて登らんとすれば、足はヅル〳〵とすべりて登る事能はず。採集用の籠と杖を片手にし、片手に鎖つかみて又登らうとすれば、首の採集籠は其重みに首よりぶら下り、前の方へまはつては此前頭にぶつかり、ゴザは風にあふりて、なか〳〵うるさく、かくして容易に登り得ず。男も女も鎖につかまりて、ずる〳〵すべりながらはい登るなり。辛うじてはひ登り、ふるえる足をふみしめて、頂に立てば、風は容捨もなく襲ひ來りて、息つく暇もあらばこそ、手早くゴザと帽子の中にすくまり、風のすぐるを待つてホット一息。こわかつた〳〵と獨り叫びぬ。人夫は如何にしたりしや人の上など見る暇更になく、一生懸命とは實にかかる時をいふなるらんと思ひぬ。お藏石のいはれさん〴〵きかされたれど、言語更に解せず終に要點をも止むる能はざりき。此上に土用入迄雪のあるといふ處ありしが、此時はもうなかりき、これより路益々急、左に右に狹き路はうねりて、只登るのみなり。八合目あたりよりいよ〳〵偃松現はる、きゝしばかりのはい松、鉢に植ゑられたるを見たるのみにては、とても想像はつかぬなり、其嬉しかりし事よ。此邊より九合目不動平の小屋迄は、殆んど平地にて、兩側の草は次第に高くなり、これ迄とは光景一變して、何ならん撒形科の大なる草、高さは一丈も或はそれ以上もあらんと思はれ、莖の太さ傘形花の大さ、又氣味惡き程にて、ぽつ〳〵とあらはれ、一種異樣の感を起す。其間にはツヽブキの花の如き黄色の花、澤山に咲き

て敢て美ならずといふにはあらねど、取り出でゝほめたつる程もあらじ。兼てきく不動平のお花畠とは、如何なるさまならん、容易くは登り得ざるため、或は登山者の誇張に過ぎざらんかと、わが心中密かに疑がひし事のありければ、人夫にこゝ不動平にやときけば、然りと答ふ。扨はお花畠とはこゝにやときけり、知らずといふ。途中馬をいたはりし人夫、豫想に違はず誠によき人なり。着實にしていふ事慥に、親切にして注意周密。多くを語らずして知らざるを知らずといふ。彼近き頃或採集家に伴して、知る處多きなり。如何なる植物のどの邊にあるといふ事よく知れるなり。扨ここをしもお花畠といふなりとせば、吾失望は如何なりしか。草餘りに深くして凡ての植物大きく、蛇にても出そうなる草むらなれば、寧ろ不快に感じつゝ、小屋に着くが樂しみに只歩みぬ。

小屋

一面朦朧としてあたり少しも見えず、頂上よく見ゆる處なりといへど、頂上どころの話にあらず。まだか〳〵と歩める内、そこが小屋なりといはれし時の嬉しさ。いはれても容易くは見出し得ず。かしこにと指されて、眼すゑて漸く見出しぬ。雲中四方のながめなしと雖も、とにかく壯大なる山の岩石に慣れし眼には、其小屋なるもの餘りに見すぼらしさに、まづ驚きぬ。されど小屋といふ事の嬉しさと、珍しさに、先づ入らんとて、入口なりといふむしろ引き上ぐれば、内はまつくらにて、何も見えぬに、むせかへる樣な烟はついて出で、瞬時もたへられず。物をもいはでわれは飛び退きぬ。内よりはいざ入り給へ、坐すれば左程にはあらじと先着の人々のいふて、さらばとてゴザぬぎ、帽子とりて、きものゝ裾をしぼり、腰かゞめて中に入る。中には火盛んにもえて何よりもありがたく。まづ火の傍に腰かくれば、ホット一息、よくも無事に來りし事よと、安心と喜と希望と好奇心とに、未だかつて經驗せざる心持なり。時に午後五時半、受取坂より五時間半を費しぬ。心身共に稍落ち付きて、人々見やれば、口にこそ出さね疲れし跡あり〳〵と顏に現はれ。ぬれたる袴とりたるあとは、あやしげなる裾模樣、亂れたる髮にはちまきせるもあり。てんでに鞋草脚絆ぬぎて足許に置き、火を取り卷きてむしろ敷の坐に腰掛けたるさま、滑稽とも何とも形容すべからず。しばしあたゝまる内わが眼も暗黑に慣れ、辛ふじて室内のさまうかゞふを得るに至りたれば、物珍らしさにあたりそろ〳〵と見始めぬ。われは吾後ろふりかへりたる時に、髮も髭も蓬とはえ、處柄アイノの子孫にもあらんかと思はるゝ男の、端坐してわれらをながめ居るを見出したる時は、好奇心よりも寧ろ稍恐ろしさを感じき、されど其瞬時こゝの主人たる事知りたれば、われは輕く會釋して、こゝのあるじにてありしか、大勢女共來りて今宵はこゝを騷がすなりといへば、重げなる太き聲して、ヲーと答へたるまゝ。ニコリともせず。ます〳〵吾等を觀察するなり。小屋は一間半に五間ときゝしが、只一つ三尺の入口の外、光線の入るべき口もなく、焚火の互の顏を辨ゆる位なれば、よくは見えず。たゞ三方は石がけにて一方のみ板圍なるを知りしのみ。室の隅には棚でもあるらしく桶の樣なものもあり。何やらん上の方より下がつて居るものもあり、ムックリ高い處もあり。暗さとけむさに何が何やら更にわからぬが、誠にありがたき惠もしもランプの光、煌々と此室内を照したらんには、わが食は半に減じ、睡眠も亦易からざりしならんに見ねざるが何よりの幸。焚火暖かく雨あたらぬ此室は、一夜のわが疲れを休むる處ぞと思へば、下界の御殿にも勝りて、如何にありがたかりしよ。男連はしきりにはひ松の枝加へて、火をもやすに務む。吾は稍寒きを忘れ元氣充實したれば、今しばし採集せんとて、例の男一人連れ、小屋を出づ。時に雨は本降りとなり風亦强し。數歩

出づれば岩桔梗の其姿、先づ吾眼につきぬ。吾庭にてもよく咲きしが、それとこれとは別の花ならずやと屢々疑ひぬ。千島桔梗の花かと思はるゝばかりに、色濃くて大きく。しかも其莖の短かきこと一寸内外。散きつめたる様なこけむしたる石の間に、雨帶びて頭重げにうなだるゝさま、そこもこゝもぼつ〳〵と、莖はよくも見えで、紫色のみ濃く、其姿何とも形容すべき言葉を知らず。連れし男いふ、コマクサのあるも程近し、今少しなりとて誘ふ。されど此時の雨は盛に降りて、手はこゞえんばかりにつめたし。風强くして行歩自由ならず、十歩も離るれば小屋は直に見えずなりて、如何に慣れたらん路にても迷はゞ大事なり、先づ明朝を待つに如かじと、遂にコマクサの顔見ずして小屋に歸る。歸れば焚火の上には鍋つるされて何かしきりに煮えつゝありき。一人の蓋あくるを見れば御飯なりき。もうよからんまだ早しと、評議とりぐ〳〵なりしに、例の山男はわがうしろより、ノソリとあらはれ、無言の儘鍋の蓋とりてかきまぜぬ。人々驚きて御飯たくに斯る事する人ありやとなじれば、山にてはかくせざれよくは出來ぬなりと彼の答辯し得たり。人夫等時々彼と語れど、何をいふやらん我には少しも解せず。やがて御飯も出來ぬ。さらばとて鑵詰のさま〴〵とりいでて、いよ〳〵夕飯の席もうけられぬ。否銘々は初より板の上に腰かけたる儘なり。さすがにこゝは宿屋なり、菜碗などありしと見え、温かき御飯山の如く盛りて進められたる時は、をかしくも亦嬉しかりき。もたらせし鮎、鮭、などは欲しくなし。紅平姜、佃煮、福神漬等は味よかりき。一碗未だ半ばなるに、人夫の一人は給仕せんとて出で來る、見ればビスケットの鑵の蓋なるべし、ブキリの平たきを無骨なる兩手に捧げ、うや〳〵しく腰かゞめてさし出す。其又面白さ。よいお給仕盆よと、われはからかひつゝ獨り打ち興ぜり。若き娘等常によく語りよく笑ふなるに、茲に來りてはいとまじめなり。彼等餘程疲れたりと見ゆ。われは又きのふをとゝいの、彼等の娘姿を思ひては、此又取亂したる様に比べ、をかしき事限りなく、しかも其焚火をとり巻きて食事せる狀に至りては、宛然山賊の集か、火事のやけ出され見る如しとて、漸く一同を笑はせぬ。食事終れば用事もなく、前夜眠らざりし人もあればと、早く眠に就かんとす。先づ同行十一人を男女の二組に分ち、女組は焚火の傍なる板の間三疊ときに、男組は反對の側なる新しき三疊ときにと、司令官は命令す。山男も今宵は男組に加はり、常の座離れてと交渉すれば、さすがに快く承諾を與へ、何やらん隅の方よりヅル〳〵と引出して又押し込みなどす。何せるにやときけば、かくしてこゝ枕にし給はゞよからんとて。何かうづ高きもの造れるなりき。暗きが何よりと此時も思ひぬ、扨女組六人三疊にとはさすがにたへられじ。二人は焚火の周圍に渡せる腰かけ用の板の上と定まる、わが席は上席にて、むしろの上更にむしろ敷きくれたり。其上に厚き毛布敷き、のみよけ一カンを一面にふりまき、山男のいふがまゝうづ高きを枕とし、更にもたらせし浴衣枕を其上に、而して灰燼二つを腹部と背部に、脚絆草鞋ぬぎ、大ショールにクル〳〵とまかれて、體を横にす。着以來吾は衣服を乾かさんと務めしも、下着が終に全く乾かず、ためら〳〵としたるまゝ眠に就く、外は大風にて雨風の音すさまじ。されど終日の疲れに間もなく眠はいと安かりき。夢か現か咽の乾きたるまゝ、冷たき水のポトリ〳〵と口に入るを心地よしと、ふと眠さむれば、安らかにと托せし一夜の此宿も、餘り安からで、雨の漏りてわが顔に滴るなりき。好詩材、面白しと又眠る。寒い〳〵といふ聲、誰やらん起き出でゝはひ松の枝折る音など、耳に入りし様なれど起きも出でず。眼さむれば人々既に起きて五時なりき。今より食前にお粥めぐりすといふ。急ぎ起き出でゝ一碗の水に口すゝぎ、手拭のはしぬらして顔ふき髪かき上げたるまゝ、草鞋新にして立ちいづ。

お鉢めぐり

八月八日午前五時半一同小屋を出づ。雨止みたれど晴模様更になし。寒さ烈しければ人々赤毛布に身を包む。われは又例の大ショール二つ折としそこらにありし何かの蔓を通して、人の如くし、其上よりゴザを着る。暖かくて工合よし、これよりいよ〳〵コマクサなりといふに嬉しくて、岩桔梗は採らず。登る事しばし、ぼつ〳〵とコマクサ現はる。其色！其姿！これもわが庭にて見たる事あれど、同しものとも思へぬ迄なり。採集は今少し上にてといはるゝままながめつゝ登る。お鉢めぐりとは噴火口の周圍山の背をめぐる事にて、周圍一里ありといふ。普通一時間にて小屋に歸るといふなり。いよ〳〵山の背につきて歩を進むれば、見ゆるものは雲とコマクサとのみ。岩ブクロ高根スミレあれど、スミレは花既に過ぎて葉と實のみ殘れり。岩ブクロは處々敷きたる樣にかたまりあれど、最多くて最美しきはコマクサなり。わが歩める右は即噴火口にして、左は即外側なり。一面火山の燒砂利にて、赤黒き色したる粗雜なる惡々しげなる其上に、斜面の急なる到底人間の達し得ざる所などもありて、光景壯大。そが足許には綠青色したる愛らしき葉を、いた〳〵しき砂利の上に辛うじて現はし、更に一層愛らしき桃色の色よきが、勢よく咲き出でたる、株と株とは不規則ながら或距離を保ち、恰も砂の畑に一面に植えたらん樣といへば、稍此さまを想像しうべきか、眼を細くして遠く迄見やれば、一面にポツと桃色に見ゆ、花の揃ひ居る爲なるべし。岩手山はコマクサの名所とかねてきゝたれど、かく迄に美くしくかく迄に多からんとは實に思ひもかけず。座しては一輪の美にすひこまれ、立ちては雲と花との對照に恍惚として、我自ら我あるを忘れ、獨り天界に仙化したりき。土地にてはこれを仙人草と稱し聖山最高の地にのみ生じ、汚れをきらふとて此あたり一面を御殿と稱し、不淨をさくるといふ。あゝ仙人草よき名なり。人界遠きかゝる地に、特に此花あるに何が故ぞとわれは考へき。はるゞ〳〵人界に携へられ、見るかげもなき姿人に示さんより、此儘果てんこと嘸や花の望なるべきにと思ひつゝ、無殘にもわれは採集し始めぬ。根深く砂利いたくして、無難に採るは容易の事にあらず。かゝる場合には手袋はめてと、注意されし事も打忘れ、夢中になりて只堀とり、あとにて見れば十指皆さくれて痛き事甚し、わが人足は餘りに時を費すと思ひてや、獨り止まりて堀らんといふ。さらば輕まん、なるべく多くをといへば、百株も採らばよきにや、高根スミレも此下に多し、五十株も採るべしといふ。凡てを任せて歩を進む。行けども行けども此さま更にかわらず。やがて藥師嶽といふに着く、岩手山最高の地海拔六千七百餘尺なりといふ陸軍の檜あり、藥師の石像あり。頂狹く八方雲に閉されて、さながら雲中に立てるが如し。壯嚴いふべからず。時に天の一方に雲稍開きたれば、せめては諸高山の頂にても見ゆるを待たんと、暫し憩ふ。天氣よくば早池峰、岩木、月山、など見ゆといふをしき限りなり。まてど〳〵晴れゆく見込もなければ、進みて一たび下り更に妙高嶽に登る。こゝにて岩手ハタザヲの實の長くつきたるが多く見出されたり。こゝにも何か祭られたり、岩を積みて堂とし、其間に岩ブクロ高根スミレなど、天然の飾りいはれぬ趣して配置されぬ。こゝ下りて何やらのお宮へ參り、コマクサの畑の中歩みつゝしきりに種子を採れり。始には花の古きをと一輪毎に選みて採りしが、左る面倒の事なしうべくもあらず。終に古きも新しきもかまはばこそ、恰も蓮花草畠に座りて蓮花草を摘む如く、座つてはポツ〳〵と摘み始め、終には花の束出來ぬ。コマクサの花束！部の人に見せたらんには何といふらん。

妙高嶽の下、谷底には土用迄雪あるといふ。いまは漸く雪消えて、高根スミレの春色得もいはれぬ樣に、丈低く地にひつつきたる樣、しかも花の

勢よく、濃き黄色に咲きいでたる、始めてのわれには喜限りなし。そこ採集して山一つ登れば、最初に登りし所へ歸りしなりき。同行者はいつの間にやら別れて、われら二三殘りしのみ。急ぎ小屋に歸れば、人々は久しき前に歸りて、われを待ちたりき。わがお鉢めぐりは三時間半を過したりき。これより食事す、食後鬼が城を見せんとて伴はる。朧朦たる中に鬼が城の輪廓をのみ見とめ、採集しつゝ歸る。岩梅の一面にひろがり今しも花の落ちたる跡、あり〳〵ととゞめたる、岩高蘭、ツルコケモヽなど何れも敷きたる如し。はひ松の一面にはひ居るさまも、なか〳〵に見事なり、岩カヾミ、梅鉢草、白山千鳥、白根ニンジン、何トカシホガマ、それから名を知らぬ黄色や、紫や、恰も敷きつめたる樣に、足を容るゝ所もなき庭の、如何に美しかりしか。われはこゝを庭といふ。せめては一坪にても、このまゝ部に移したらんにはと、こゝ又去るに忍びざりき。雨いたく降らば、人足を下山せしめて、食糧取りよせ、我等は今一夜泊らんといふ事なりしも、天候は左迄悪しからず。此儘下山の餘りにをしくて、名殘は盡きざれど、雨降らぬまゝ終に下山と決し、其準備す。同行者ありしこそ幸なれ。もしわれ一人なりせば、幾日たちしとて、下山の決心は出來ぬものをとわれは思ひぬ。扨宿料をと問へば、一人前五錢、水代凡てにて十錢なりといふ、何とてかくは廉なるにや。今少し多くを得て、せめては疊にても敷きたらんにはといへば、否とよ、多くを取れば此石がけ直に崩るゝなりといふ、面白し。七千尺に足らずといへども、天上の社會はかくも異なるなり。貴人も勞働者も、等しく五錢を拂ふて、竝に一夜を借らざるべからず。お結びに梅干をかく迄ありがたく思はせらるゝなり、而して此社會の人には惡念更に起らぬが特徴なりとぞ。山男には更に殘りし米を與へて、用意調ひたれば、いよ〳〵下山にかゝる、時に午前十一時半。

下山

雲の中にありし小屋も、雨晴るれば大きなる岩の側にある事わかり、つゞいて高き山の連りて、はひ松の一面にはへたるなど見出さる。殘りをしげに見かへりつゝ、きのふの路下る。登りよりも困難を感ず。七合めの頃十人ばかりの登山者に逢ふ。若き男のみなりき。勢よくかけ聲して登れり。やがて心配せしお藏石に來る。如何にして下らんかと先づ憂ひて、人足の下るを見れば、いと容易げなり。さらばとて舊道の鎖なきに向ふ。見れば左迄に恐ろしからず。そろ〳〵と下りて、いよ〳〵砂ばかりの所に至れば、鎖なき恐ろしさは又格別、どうしても立ちて歩むの勇氣なく、砂の上にしやがみては、兩手つきつゝ、一歩々々とすべり行く。すぐの下は千仞の谷、見まい〳〵と足許のみに眼をつけて、どう〳〵下迄下りつきし時、足はぶる〳〵とふるへたりき。あとより下り來る人見やれば、其又こわさは一段強く、とても正視し得ずして、お藏石のかげにかくれたりき。こゝにて休息中、うぬ置きしチシマセキショウを又かごに入れぬ。三四合目の頃、空は次第に晴れて、前面遙かに見ゆるを山かときけば、盛岡あたり一面に現はるゝなりき。雲の足早く或は右よりし、或は左よりし、見ゆるかと思へば忽ちかくし、かくれたるかと思へば俄に開かれ、千變萬化の狀、壯快いはん方なし。山の裾の方に虹あらはれて、雲の動くまゝ虹の移り行くなど、面白さ限りなく。北上川よ盛岡よと、口々に評しあふて時の移るを知らず。頂上にて若し此景に接したらんにはと、限りなき恨なりけり。下りの困難は又上りと異り、ふみすべりて一人の轉べば、又次の人も轉びあやまりて燒石すべらせば下の人にぶつかるなど、一足も油斷はならず。一歩々々注意して下り行く事、なか〳〵の疲れを覺えたりき。二合目の頃さきの登山者の下りてわれらと過ぎ行くにあふ。如何に我等の遲き事よ。途中に彼等の荷物置きたるなど、惡人なき證據よと嬉し。受取坂に着きし

は、四時半にて、正に五時間を費し、登山時と殆んど時を同じうす。しかも此日は雨は降らぬなり。氣のゆるみしと、下山の歩みにくさとなるべし。受取坂にて晝食す。人夫等の作りしお結び餘りに大きくて、われは二本の指にてもたんとすれば、重くて叶はず、三本の指、力の限りひろげて漸くにもちたり。しかも左の手には梅干もてり、如何にして口にせんかと、考へてもをかし。人々皆同じ姿に、まじめにたべ居る事の又なくをかしく、寫眞器もたざりしとしみ〴〵と悔ひぬ。きのふの荷馬車は柳澤に待ち居る筈なりければ、馬子は迄迄迎ひに來れり。人夫は荷物をかけて、一同鈴蘭の野を歩む事きのふの如く、柳澤に着きぬ。宿にては食事の用意出來居りしかば、急ぎ食事し、六時半柳澤をいづ。又荷馬車にゆられて、行きとは異なれる恐ろしき迄あしき路を、ゆられ〳〵て歸る。空全く晴れて、月明らかに、ふりか〳〵れば南部富士の姿、あり〳〵と手に取る如く見ゆ悔しさ限りもなし。きけばわが登りし前夜は頂上月よかりしといふ。此夜は頂上の景や如何ならん。げに女人の登山、山の神のたゝりし事よと自らあきらめぬ。

厨川（着きしは夜の十時なりき。

費用　荷馬車一日壹圓（賄付）　二日　貳圓
人夫　一日二十五錢（賄付）　二日　壹圓
これは二人分を拂ふ

宿料　五錢十一人分水十錢　六十五錢
夕飯（柳澤にて）米の殘りを與へて無代とす
人夫の名　岩手縣岩手郡瀧澤村大字瀧澤　芳谷（ヨシヤ）津
駿河九十郎



○初登山　野口



余の日本アルプス登山談

（ツバクロ岩、大天井岳、常念嶽、南蝶ヶ岳）

小島烏水

日本高山の精粋を抜いて、之を二列の屏風となし、本州の中央に蜿蜒並張せしめたるもの、之を日本アルプスの偉觀となす、本年は日本アルプスを縦斷せんと企てたる人もある由にて、從來前人未踏と稱せられたる、この高山地方も、是より秘密の鍵を人間の手に附與すべきか、余はさる大望を抱けるものにあらざれど、ともかくも、その一角を踏破して來らむと、本年八月一日を以て、東京を發し、同夕上諏訪に一泊し、翌二日朝同地を出立して、明科停車場に下車したり。途中桔梗ヶ原より松本を出で、明科に到るまで、僅に信飛山脈の前山（フロントヒル）を觀るのみ、一概に信飛山脈を、豪壯跌岩の大山とのみおもひゐたる我には、案外のおもひあり、併し一は雲多かりしためにて、秋霽の日はかくはあらざるならむ、この邊にて、望みたる飛騨山脈は、愛鷹や箱根を隔てゝ、不二を見る如くなれど、彼が如く著るしく挺ん出ず、山頸を前山の肩に載せたるくらゐなり、明科にて下車し、左折して犀川の長橋を渡る、凡そ松本平附近にて、日本アルプスの壯大景を仰ぐに、こゝより宜しきところは、多からざるべしといふ、當日は恠雲城廓の如く、突兀としてこれらの大山脈を視ること能はざりしが、後に土人に聞くに、有明山と蝶が岳の間尾根の平より、常念ヶ岳の圓き肩を出だすあり、ツバクラ岩、及び二ノ俣の天上（方言テンショ）はその北に峙ち、その南に槍ヶ岳や、穗高山をも仰ぎ見るべしと、橋を渡り三四丁にして木標あり、左穗高街道、北穗高へ十町、有明町へ二十五丁と榜示しあり、左折して高瀨川に架せる一橋を渡り、狐島を過ぎて、

青木花見に到り、友人清澤氏(山岳會員)嚴父の宅に投宿し、常念岳に登る希望を述べ、導者の斡旋を依賴したるに、意外にも、土地の人は常念の名を知らず、穗高嶽のことならむなど言ひて埒明かず、幸ひに常念を知れる人あり、蝶ヶ岳の北の山を「ジョウチンボウ」といふが、それならむ、乘鞍岳に似て、圓き山なりといふ、余は常念の形を知らざれど、位置の似たるより、無論それならむと肯く。

清澤氏嚴父の周旋にて、一老獵師と會見す、この獵師は有明村竹の巢高地(宛テ字)の人、橫澤類藏といひその語る所を聞くに、頗る日本アルプス通なるが如し、殊にアルプスの南半に詳しきは、懇々としてその言肯くべし、彼はアルプス征服の五案を提出して曰く(一)中房温泉を基點として五六岳(ゴロー)に出で、立山裏山に到る(二)南蝶ヶ岳を上り、常念岳に到り、二ノ俣、御天上(オテンジョウ)に出で、切通し、ゲーロ岩、ツバクロ岩を經て、中房温泉に下る(三)中房温泉より御天上(オテンジョー)、及び常念ヶ岳に上り、又御天上に近き二俣の小舍に引き返へし、フデバミアタマといふに出で、槍ヶ岳に上りて、上高地に下る(四)槍ヶ岳の裏より、笠ヶ岳に到る、笠ヶ岳には大笠小笠の二峰あり、飛驒方面にては、大笠を笠ヶ岳の全體なるが如く通稱し、北安曇郡にては、大笠を屛風ヶ岳ともいふ、件の大笠より赤岳を越え、鷲ヶ岳、シノハチ山、カマクラ岳を經て、五六岳に到るべしと(以上は彼の語る所を記したるなれど地圖と對照して謂ふ所の山の所在を質すに、一も確かなる觀念を得ず、自ら到りたるにもあらねば、文章にも、明白に書きやうなし)余は何を措いても先づ常念に登らんと欲し、翌三日の朝、彼の家を訪ね、有明村を發足點として、常念に上らんとしたるに、雨のために中途より登山を斷念し、根曲り竹のトンチルと薙の崖の中を漂泊して、中房温泉に轉じ、こゝに一泊したり、中房温泉は、日本アルプスをきはむるには、雙六の振り出しともいふべきところにて、ともかくも輕視する能はざる地なれば、こゝに少しく、その里程を說かむに、烏川村岩原より四里半、松本よりは九里、西穗高栗尾よりは四里の山道、明科停車場よりは、五里なり(二里にして宮城(ミヤシロ)に到り、宮城より三里の山道にて達す)宮城の內山大一といふ人に依賴すれば、附近山岳の導者を得べしと、併し日本アルプスに登らんとするものは、先づ中房温泉宿(宿舍は只一軒あるのみ)に折簡して、豫じめ導者、その他の準備を命じ置くを可とせむ。

余が唯一の頼みとせる、類藏爺は中房山越えのため、足を痛めたるを以て、この爺の眼鏡にかなへる、温泉宿の若い者、畠山善作を嚮導とし、大天井岳及び常念ケ岳の兩一萬尺を踏破し、南蝶ケ岳に到り、上高地に下りたるまで、彼叮嚀に嚮導の勞を取れり、他の路はあまり精しからぬやうなれど、常念や大天井は、この男にて充分なり、至つて正直にして、爭氣毫毛もなく、先づ會員諸君に向つて、紹介の出來る男なり。

左に余が日本アルプス南半の、登山時間、及び道程を簡單に語る。

中房温泉宿舍後の濁澤(ニゴリサハ)溪流を渉りて、直ちに山に入り、「濁澤の頭(カシラ)」といふ山に出づ、こゝまで同伴の參謀本部測量員の計算に據れば、一里半といふことなりしも、約二時間半を要せり、途中烏帽子ケ岳を東に、摺鉢山を北に見、山上にて御天上(オンテンジョウ)の危峰、及立せるを仰ぐ、偃松帶や高山植物の間を經て、ツバクロ岩に達す、岩といへど立派なる高山にして、一萬尺に垂んとすと思はる。

「ツバクロ岩」より「ゲーロ岩」まで、約十町と稱すれども、登り多く一時間を費やす(眺望絶佳)ゲーロ岩より「中川の切り通し」まで、約半里、上りもあり下りもあれど、總じて上り多きは、無論にて、急歩するもこの間一時間半はかゝるべし、中川の切り通しより、御天上(オテンジョウ)まで約七町なれど、急峻を登りにして、且つこの邊まで來れば、空氣も大分に稀薄なれば、休み々々半時間ぐらゐは費やせしならむか、御天上には、三角測量標あり、こゝは御天照か、天上か、文字解らず、然れども多年余のために、不可思議なる「謎」として、その存在をだに疑はれたりし大天井岳が、こゝならむとは夢にも想はず、余の登山後、約二十日ばかりを經たるとき、會員高頭式志村寛氏等、又中房よりこゝに上り、この山を大天井岳と判斷せられたり。

高頭氏が余に答へられたる書狀に曰く。

大天井に就いての御疑問は、御尤と存じ候、元來同山は、農商務省豫察四十萬分一圖と、十萬分一地性圖に記載されたれども、信濃出版の十萬分一圖には、單に米突のみ記され、大天井の名無之候、小子は中房温泉より一萬尺ありと稱せらるゝ、燕(ツバクラ)嶽に上り、峰續きにて、此山に上り候、西穗高にては、テンシヤウダケと申居候、然れ共小子が烏川村役場(照會せし書狀の、返辭には、單に大天井、常念、蝶の三岳へは、當村より登路あり、云々と、記されたり、因つて想ふ、此山は烏川方面より、大天井と申し、西穗高方面にては、テンシヤウと申すに無之候哉、小子は烏川を過ぎて、實地問合せ度しと思ひ居候なり。只西穗高より登り候て、テンシヤウと申候故、大天井ならむと(其位置より推測して)申上候なり。

とて圖を添へられたるを閲するに、同氏はオテンシヤ

ウ則大天井岳と推せられたるなり。常念といふ大敵を前に控へて、路順なればとて、上りたるテンシャウが、果して大天井岳ならむには、拾ひ首が大將のそれなりしにも似たる偶然の功名とや言はまし。

大天井を下れば、二ノ俣の小舍あり、半時間にして達す、日本アルプスの南半中、この小舍ほど善き小舍はなし、假枩と石壁との間、石を疊みて築きたるものにして、陸地測量部員の御定宿なり、小舍の附近には地圖に謂ふところの、東大天井ならむとおもはるゝ危峰聳ゆ、二ノ俣の小舍附近に、七八町もつゞきたりとおぼゆる、大雪田、丘の如く堆かりしには、吃驚したり、白馬岳の雪田は知らぬど、よもこれよりは壯觀なるまじとおもはる。

二ノ俣の小舍を出で、假枩を截り破りて、路を作り、一山一山又一山と登り行く（必ずしも頂を行かず、横腹を行くところ多し）に横尾鳥山（宛字なり、横を行く故「横を通り」と書くのかも知れず）の三大山塊、駱駝の脊の如く高低起伏し、その雄大なるに欺かれて、常念と誤認し、一生懸命手帖に寫生して、拍子抜けの氣味をしたり、横尾鳥を過ぐれば、奥常念の大岳、天半に聳え、儼然屹立、この山脈中の王位を占めて、大天井などは之に較ぶれば、恭やしく臣禮を執れるに過ぎずとおもはれたり、前常念岳といへるは、遙かに離れて、松本平原を俯瞰すべく、一支を派されたるものなるが、低きこと奥常念の六合目程度以下ならむ、一等三角測量標はこゝに立てり、横尾鳥と常念岳とは、相距ること約十町に過ぎざれど、横尾鳥の山側を下ること急峻に、亦常念に上ること、正比例に急峻なるを以て、その間一時間を費やす（二ノ俣の小舍より横尾鳥まで一時間）常念ヶ岳の絶頂は、遠望するとき、椀を伏せたるやうなれど、上りて見れば、切截錘形をなし、石に拳あり、岩に鋩あり、稜々として破軍星の隕ちて寒劍となり、空を截り、風を截り、空水十萬里の流れも遏め敢ゆるばかりにて、殊にこゝより眺めたる槍ヶ岳と穗高山の壯嚴は、竟に地上の物ならず、日本の地圖より切り拔きて、天界の星宿に奉ずるに足りなむ。常念には、高頭氏の手紙によれば「常念には凍死者の骸骨、其儘に相成居る由、案内者より聞き申候、御覽になりたるや如何」と言はれたれど、余は幸ひに件の骸骨に見參せざりし。

要するに、日本アルプスを五六岳邊より中斷して、南北に別つとすれば、北は立山の外を知らざる我に、

何とも言ひやうなけれど、南には二列の大山脈並走し西なるは穗高山と槍ヶ岳とを其盟主とし、東なるは、常念ヶ岳を以て大帝となし、横尾烏之が宰相となり、大天井やダーロ岩や、ツバクロ岩の諸山、之が輔弼の亞相となりて、威容を整へたるものにして、槍ヶ岳、穗高山、常念岳、大天井岳は、この大山系の高低不揃ひなる四本柱なり、高低不揃ひといふも、五百尺以上の差違は、おそらくあらざるべきか。常念ヶ岳より蝶ヶ岳に下る路の嶮絶なる、南半日本アルプス中、斷じて無比と言ふを憚らず、高頭志村の二氏が、槍ヶ岳上りのために、常念ヶ岳又一歩を踏み入れずして終りたるは、南半日本アルプスをきはむる點より言へば、佛作りて魂を入れざるものにて、實に這個好チヤムピヲンのために遺憾のきはみといふべし。

上記四本柱の中、大天井は槍ヶ岳と對峙するに近く、常念は穗高山と拮抗するに似たり（位置を言ふ）一萬尺の天上、空氣稀薄にして、碧霄を洗ふが如くなりしため、兩箇の大山脈は、呼べば應へむばかりになりて、肩々相摩のやうに、一寸見は見ゆれども、これでも直徑二千米突の距離あるべしとは、測量部員の余に語りしところなり。

余は常念ヶ嶽より南蝶ヶ岳に入り、草莽林樾の中を、灘聲石に咽ぶところへと下り、無慮數萬疋の惡蚋のために、咽せかへるばかりの攻撃を被ふり、從來の登山中、未だ曾て一回も經驗せざる苦痛を喫せしめられ、短澤（ミジカサハ）を上高地へと下り、穗高山登りを、雨のため失敗して歸東したり。

南半日本アルプスに就きて、余が感じたるところを言へば（一）壯嚴無比の大觀斷じて是れ日本一（二）燕岩よりダーロ、中川の切通より大天井に到るまでの路は、山稜又山稜を傳ひ行くものにして、存外安樂なり、おもふに日本アルプス中、斯の如く氣骨の折れずして、サツサと進行し得るところは、他に類多かるまじき事尤も大天井丈けは流石に齒ごたへのするところあり（三）二列の大山脈並行の間を、急駛せる高瀨川の、大なる意味あること（四）常念ヶ嶽の尖り具合の、槍ヶ岳とはおもむきを異にして、別色あること（五）假りにツバクロ岩や、大天井岳を、一萬尺附近の山とすれば、この並行山脈に一萬尺以上の山を十座や二十座列擧し得るは容易なること（六）不二山や筑波や又は何々不二と稱する類の孤立的山形を見馴れて、山とのみおもへる人は、この波濤亂立の大山脈を見ずして、眞個の山の特色を

語り能はざること(七)高山植物の濫採は、未だこの地方に、甚だしく及ばざる事(八)二ノ俣を除いて、小舍らしき小舍なし、ツバクロ岳に一、奥常念の下に一あれど、いづれも、偃松を編みたるものにて、僅に兩人の膝を容るのみ、蝶ヶ岳前山の下にも、五六人を容るゝ偃松小舍あるも、今潰廢せる等是なり。

以上は余が登山談の一般のみ、もし夫れ、日本アルプスの雲を描き風を描き、山容水色を描き、天象を描き、アルプスが吾人の骨頭に、鐵槌の如く打ち入れたる大感情大印象に至りては、舌焦がれ唇燥くまで、語るとも、如何ともする能はず。余が數十枚の手帖、一枚としてその强烈なる光線を浴びざるは無かりしを以ても、之を知るべし乞ふ筆硯を洗ひて、次號改卷の本誌に

南半日本アルプス縱斷記

を載せむ。

附記す、余は中房温泉を午前六時過ぎに出發し、ツバクロ岩に十一時に着し、大天井には二時、二ノ俣の小屋へ三時少し前に着したり、常念岳に小舍なきため、二ノ俣泊りと決したれど、野宿の覺悟あらば、一日に常念岳までは往き得べし、但し山上いづこにも絶えて水なし、雪を溶かして用ゆるを以て、雪多き二ノ俣小舍は、この點に於ても、便利なりとす。

日本アルプスと其登路に就きて

近來日本アルプスの語山癖者間に噪がるれども、日本アルプスとは那邊より那邊までを指せるものたるやを明にせるものあるを聞かず、猶ほ日本の地理地文の書が某々山系、某々火山脈等を說明する所に曖昧たるもの多きが如し、蓋し日本アルプスの名は洋人チムバーレイン氏等創めて唱道し、ウエストン氏の著書『日本アルプス』出づるに及んで、邦人亦盛に之に和するに到りたるものなるべし、今『日本アルプス』記する所の山名を擧げんに、余は不學にして洋書を讀む能はざるを以て、友人小島烏水氏の『日本山水論』に據る、曰く「即ち南の方木曾の寢覺の床及び駒ヶ嶽より起り、北の方姫川及び富山灣に終る、東經百三十七度より百三十八度までの間なり」云々、書中淺間山、槍ヶ嶽、信州駒ヶ嶽、乘鞍ヶ嶽、笠ヶ嶽、赤石山、針木峠、立山、穗高山、惠那山、富士山、大蓮華山(オホレンゲ)、燒山、常念嶽、

御嶽の十五嶽の登躋記事を掲載せり、內淺間、富士、赤石の三山は東經百三十八度以外にあり、惠那山は山水論に「こは中央大山系の踏査と關係なし」と記されたれば之を除きて、他の十一嶽が蜿蜒起伏巍峩崔嵬たる數條の山系をなすもの、是れ即らウエストン氏が日本アルプスと稱せられたるものなるを知らん、志賀重昂氏は鄙編『日本山嶽志』の山嶽諸說に於て、「日本アルプス山は越後、越中の境上より飛驒、信濃の間に延綿せる、日本本島の中央に盤踞せる大山塊にして、南北三十五里、東西二十里」云々と說かれたり、南北三十五里とは日本海岸の糸魚川町より乘鞍ヶ嶽の間なりとす、故に氏は乘鞍ヶ嶽、阿房峠、硫黃嶽、穗高嶽、槍ヶ嶽、笠ヶ嶽、獅子ヶ嶽、針木峠、鹿島鑓ヶ嶽、大黑嶽、鑓ヶ嶽、白馬嶽、立山等の山名を列せられたり。

元來此の兩越、信、飛、濃國界を劃せる群巒は、信、駿、甲、遠に凸立せる赤石山系と倶に、高峻雄拔を極め日本無雙の深山幽谿の地にして、何れも登攀者なく、絕えて山容を知る能はざるのみならず、山の位置、稱呼さへ判然せざるもの少からず、例へば日本アルプス中最も官道に近き蓮華群峰の如き、舊越後にては蓮華山一名朝日嶽と總稱し、越中にては大蓮華、小蓮華、朝日等皆な別山となし、信濃にて白馬と呼べるものゝ如し、近年信濃人士が好植物採取地として世に照介せしより、登攀者頓に加はり白馬の名同好者間に喧傳せられ、信州方面より登れば案內者其他の便利多けれども、(山岳第一號雜錄參照)越後方面より登るときは、最高即ち三角點のある所を、朝日嶽なりといふものあり、大蓮華なりといふものあり、槍ヶ嶽なりといふものあり、何れを信ずべきやに迷はせらる、登山に經驗なきものは一二案內者の言を確信して他を究めざるものあれども、今日我邦の案內者の如き決して根據あり責任あるの言語をなすものにあらず、蓮華群山の如きも越中方面を探りて然る後考證するにあらざれば、未だ容易に速斷すべからざるに似たり、此の如く前後(越中、信濃の如く)稱呼を異にせるもの、村落と隔絕して分明ならざるもの、兩方面より登山せる人なきを以て、信州某山と越中若しくば飛驒の某山は、同山異名なるものなるか將た異名別山なるやを審にせざるもの等、過半を占むるが故に一々蹈査するにあらざれば到底識る能はず、現時日本アルプスと赤石山系の世に著はれざること前陳の如し、余は此兩山系には全力を盡してセメテ其位置稱呼にても確知せんと欲すれども容易の業

にあらず、目下陸地測量部日本アルプスの觀測は、髣髴其歩を進めつゝあれば、吾人は數年を出でずして正確たる良地圖に接するを得ん。

余は以下余が大膽なる盲目蛇に怖ぢず的愚見を掲げて以て碩學の明教を待ち、以て日本アルプス登攀者に詢らんとす、余が所謂日本アルプスと臆斷するものは、越後糸魚川(イトヒガハ)町より姫川を泝りて信濃に入り、青木、中綱、木崎の三湖を經て大町を過ぎ、高瀬川に順ひて松本に出で、夫れより奈良井川に從ひ、鳥井峠を踰え、木曾川に沿ふて美濃に降り、太田町より轉じて飛驒川を溯りて飛驒に進み、高山より船津を貫き神通川を下りて越中に入り、更に富山より國道を取り親不知の險を過ぐて糸魚川に歸へる、此間の連嶺重疊を指すものにして、故原田博士の飛驒山脈となせるもの即ち是なり、余が主張する所は志賀氏の日本アルプスに御嶽を加へ、ウエストン氏のより信州駒ヶ嶽を除かんといふにあり、御嶽は年々二萬許の賽拜者ありて、白衣の登者路に滿ち、大に俗化されたる慨なき能はざれども、雄偉壯大古より信陽第一の高山と賛せられ、且つ山勢乘鞍に連續するを以て之を分割するが如きは不當の觀なき能はず、駒ヶ嶽は木曾川の上流によりて明に飛驒山脈と截斷せられたれば、順道駒ヶ嶽に登るは余の希望する所なれども、之を日本アルプスに混同するが如きは、余の點頭し難き所以なり、今は猶ほ余の所謂日本アルプスに屬して二千米突以上の標高ありと想はるゝものゝ山嶽名を掲げ、之れが研究の端緒となす、余は越中、信濃界に斯く多數の山嶽ありとも思はれざれども、諸地圖記する所一ならず、且つ土地の人と雖ども眞の山名を識るもの極めて稀なるを以て、稱呼の異なるものは悉く錄して以て參考に資す、其正確ならざるは勿論なり、今山名を記するに當り便宜上一主系、三支脈に分つ左の如し。

○主系　糸魚川の西南なる黒姫山に起り、南走して越中、信、飛の國境をなし、美濃の加美郡に盡く。

○支脈

横嶽山塊　越中、飛驒國界を西走し、高原(タカラ)川の東岸に至りて盡く。

立山群峰　越中東部に蔓延す、主系と黒姫部川を隔てゝ南走し、藥師ヶ嶽に至り横嶽山塊に合し主系に連なる。

常念山塊　信濃の西部にあり、高瀬、梓の二川に截

られて主系と分たる。

○○主系に屬するもの（北より掲ぐ）

雪倉ヶ嶽	越後、越中	二四八五米突
鉢ヶ嶽	同、同	二四〇〇？
乘鞍嶽	同、同	二四〇〇？
朝日嶽	越中	二四〇〇？
上駒ヶ嶽	越後、越中	二四九一
小蓮華山	同、同、信濃	二七二一
大蓮華山一名白馬嶽	越中、信濃	二九三四
簸嶽	越後、信濃	二三五一
横前倉嶽	同、同	二五〇九
杓子嶽	信濃、越中	二九二三
鏈ヶ嶽	同、同	二八七八
不歸嶽	同、同	二八〇〇？
大黒嶽	同、同	二八〇〇？
鹿島鎗ヶ嶽	同、同	二五〇〇？
錫杖ヶ嶽	同、同	二五〇〇？
上犬ヶ嶽	同、同	二五〇〇？
赤鬼ヶ嶽	同、同	二五〇〇？
餓鬼ヶ嶽	同、同	二五〇〇？
東叡山	同、同	二四〇〇？
乘鞍嶽	信濃、越中	二七三〇
布引嶽	信濃	二四〇〇？
祖父ヶ嶽	信濃、越中	二四〇〇？
鹿島大嶽	同、同	二四〇〇？
祖母嶽（祖父と同山か）	同、同	二二〇〇？
屏風嶽（後立山と同山か）	同、同	二〇〇〇？
後立山	同、同	二〇〇〇？
栂山	同、同	二一〇〇？
雙嶺山	越中	不明
針木峠	越中、信濃	二四九三
蓮華嶽	同、同	二四〇〇？
針木嶽（蓮華と同山か）	同、同	二五〇〇？
扇嶽	同、同	二五〇〇？
小白澤嶽	同、同	二五〇〇？
烏帽子嶽	同、同	二五〇〇？
折嶽	同、同	二五〇〇？
眞砂ヶ嶽	同、同	二五〇〇？
五六ヶ嶽	同、同	二五〇〇？
火打ヶ嶽	同、同	二四〇〇？
中嶽	同、同	二四〇〇？
獅子ヶ嶽	同、同	二四〇〇？

黒●●●嶽	同、同	二八八八
鷲羽●●ケ嶽	同、同	二八九六
中劒嶽	越中	不明
カヘキ嶽	同	不明
有明山	信濃	不明
東谷●●山	信濃、越中、飛驒	二六〇〇？
笠●●●ケ嶽	飛驒、	二一〇〇？
笠戸嶽	同	不明
中俣嶽	同、信濃	二四〇〇？
北俣嶽	同、同	二四〇〇？
烏帽子嶽	同、同	二七〇〇？
抜●戸嶽	同、同	二四〇〇？
穂●●●ケ嶽	同、同	三〇九二
穂高●●山	同、同	三一〇〇？
焼山	同、同	二二〇〇？
硫黄嶽	同、同	二〇五三
銀山	同、同	二六〇〇？
安●●山	同、同	二七〇〇？
乗●●●ケ嶽	同、同	三一六六
木谷山	同、同	二〇〇〇？
栃洞山	同、同	二〇〇〇？

川浦山	信濃	二〇〇〇？
道貫山	同	二二〇〇？
繼●子●山	信濃、飛驒	二〇〇〇？
御●●嶽	同、同	三一八五
三笠山	信濃	二二九七
繼母嶽	信濃、飛驒	二六〇〇？
三浦山	同、同	二五〇〇？
槍谷山	飛驒	二五〇〇？
東俣嶽	信濃、飛驒	二一〇〇？
三國山	同、同、美濃	二一〇〇？
小●子嶽	信濃、美濃	二〇〇〇？
○支脈横嶽山塊に屬するもの（東より掲ぐ）		
五郎嶽	越中、飛驒	二五〇〇？
赤城山	同、同	二二〇〇？
三ツ又嶽	同、同	二二〇〇？
鍋ケ嶽	同、同	二二〇〇？
上ノ嶽	同、同	二六五六
高辻山	同、同	二二〇〇？
横嶽	同、同	二二〇〇？
桑ケ崎山	越中	二五〇〇？
山吹山	飛驒	二一〇〇？

立山群峰に屬するもの（北より掲ぐ）

瀧倉嶽	二〇〇〇？
赤兀山	二二〇〇？
白兀山・劍ヶ嶽	二四〇〇？
大日嶽	二九〇〇？
早乙女嶽	二六六七
丸山	二〇〇〇？
大辻山	二〇〇〇？
別山	二〇〇〇？
眞砂峰	二九六〇
富士ノ折立	二九〇〇？
大汝峰・立山	二九〇〇？
	二九三六
淨土山	二四〇〇？
鎗ヶ嶽	二三〇〇？
天狗平	二三〇〇？
國見山	二三〇〇？
龍王嶽	二四〇〇？
佐良峠	二三四九
大鷲山	二四〇〇？
大鳶山	二二三〇
鯉鮒山	二六〇〇？
鬼ヶ嶽	二四〇〇？
赤牛嶽・薬師ヶ嶽	二三〇〇？
	二九九二

常念山塊に屬するもの（北より掲ぐ）

鍵嶽	二〇〇〇？
屏風山	二五〇〇？
有明山	二四四七
燕嶽	三〇〇〇？
大天井山	三一八五
東天井山	二九〇〇？
常念嶽	三一二四
蝶ヶ嶽	二九六七
鍋冠山	二四四〇
德合峠	二五二二
霞ヶ嶽	二八四三

以上列記せる山嶽は略ぼ日本アルプス二千米突以上の全體にして、而して黑點を施せる十五山を其主要なるものとす、劍ヶ嶽は未だ登攀せるものなく、前年陸地測量部員が半途より斷念して下山せりといふを聞け

り、然れども富山灣より此山を瞻望せるに、殆んど頂上まで達せる一條の殘雪を觀たり、抑も雪は屢々急峻なる所に堆積するが如くなれども、凡四十度の角を越えざるものとす、又『日本地誌提要』に「ツルギガタケ、立山の北にあり、其脈連續す、同郡伊折村より凡五里」とあれば、伊折方面より登攀を企てなば或は絶巓を極むるを得べきか、祖父ヶ嶽は險峻なるを以て著名なれども、姑く此二山を省略して他の十三山に登りなば、普通日本アルプスを蹈破せりと誇稱するに餘りあらん、今其登路を記さんに、天候、案内者を得ざる等の爲めに實行に難からんも、余をして試に理想的案内を談らしめよ、東京方面よりするものは、第一日飯田町より瀧車に乘じ約十時間にて鹽尻に宿す、第二日馬車又は人力車を走らして奈良井に至り、(鹽尻より約五里二十六町、馬車賃五十五錢にして四時間餘を費す)徒歩鳥井峠を踰えて藪原に降れば名物お六櫛を鬻ぐ、峠は馬車、人力車を通ずれども、時間に大差なきを以て歩行するを可とす、登降一里半にして二時間を要す、藪原より福島まで四里二丁、馬車賃三十二錢、約三時間を要す、福島は木曾山中第一の都邑にして木曾川を挾んで連檐櫛比し、郡役所、警察所、郵便局等あり、旅店はタハラ屋を可とす、他は皆御嶽講社の多數に旅宿するを以て雜沓を極む、福島より中仙道に別れ先づ御嶽に登るべし、御嶽は登路最も容易にして諸般の設備充分なれば都人士の足馴らしには適當の場所なればなり、福島を發して合戸峠を越え、御嶽表口の黑澤に下る二里半或は三里と稱す、鹽尻を八時頃(松本上り一番瀧車通過時刻)出立すれば九時ならでは黑澤に着し難からん、故に福島に宿し翌日早發するも可ならん、黑澤には武居重知、田中新兵衞の二旅店あり。

御嶽　第三日　黑澤を發して絶頂に近き二ノ池の小屋に宿すべし、此間小屋十數軒皆菓子、酒、鑵詰、藥草等を鬻ぐ、七合目の小屋には据風呂の設けあり、此れより以上は樹木稀疎なるを以て薪木を惜しむ、絶頂にも小屋二あり、黑澤より山巓まで六里餘にして、十一時間許を要す、第四日早朝絶巓に登り(二ノ池の小屋より三十分餘を費す)夫れより約八町王瀧口を下り日野權現及び奥ノ院を極め、(古來黑澤口の頂上は今の三角點ある處をいひ、裏口王瀧よりの頂上は日野權現なりしといふ、而して奥ノ院と稱するものは日野權現より王瀧に向つて右方に崔嵬連續せる巉岩をいふ、ここに日ノ門、月ノ門あり、月ノ門崩壞してなし、諸書

絶頂三角點ある處を奥ノ院と記すれども余は疑を存して後考を待つ）再び二ノ池の小屋に戻り、三ノ池、四ノ池を過ぎ繼母嶽を跼えて飛驒の日和田に宿す、（二ノ池より日和田に至るの記事『山岳』第二號川崎義令氏の御嶽採集記に據る、案内者路に熟さざれば二ノ池と三ノ池の間なるタカマガハラ俗稱ヒロガハラより左折し、二里或は三里にして飛驒の濁川温泉俗稱タケノヨに下り、高山街達に出づるを安全とす）第五日　日和田を發して野麥に宿す。

或は中央線辰野驛より馬車又は人力車を賃し、約五里にして伊那町に出で、更に二里餘にして宮田に宿す、翌日信州駒ヶ嶽に登る、里數約七里未だ記文を見ず、頂上には寶劍ヶ嶽と地藏ヶ嶽の間に駒飼小屋あれども、近年合主登らず無人の廢屋となれり、絶頂三角點より木曾方面へ八町許下れば玉ノ久保の小屋あり、舍主は舊暦六月十五日より八月十五日か下旬まで常住するを以て宿すべし、次日は木曾の上松又は寢覺に下り著名なる寢覺ノ床及び小野ノ瀧を一覽して上松のサカ重事萬翠館堺屋重次郎に宿す、絶頂より上松まで四里二十町、寢覺までは約五里なりといふ、上松より寢覺ノ床まで約十一町、夫れより小野ノ瀧まで約十町許あり て馬車を通ず、駒ヶ嶽は水なきを以て要意するを可とす、次日は徒歩して棧橋を舟し王瀧川の左岸（水源に向つて）に沿ひ、常盤橋を右にして澤戸峠（一名王瀧峠）を跼え鞍馬橋を迂回して王瀧村の瀧に宿す、是れ舊道にして六里餘とす、若し新道を取り棧橋を渉らざれば半里遠し、常盤橋にて舊道と合す、次日は新瀧、清瀧を看て八海山を過ぎ三笠山に登り田ノ原の小屋に休憩す、（コノ小屋以上日野櫨現まで二里の間小屋なく水なし、御嶽山中旅客を冷遇すること田ノ原の小屋を以て第一となす）夫れより巉岩を踏んで絶巓に達すべし、王瀧より五里と稱すれども困難なること黒澤口に勝る。

御嶽、駒ヶ嶽の二山は木曾山中に在るにも係はらず、案内者が非常に贅澤にして腑甲斐なく不快に堪えず、二山及び乘鞍ヶ嶽は高山としては頗る容易なるものなれども、案内者は其險道なるを說き賃金を貪ること他に越ゆ、余は御嶽にては一日一圓二十錢（食料案内者持ち）を拂ひ、僅か四貫目の荷物に猶ほ不平を聞かされたりき、駒ヶ嶽は伊那へ跼ゆる目算なりしも盂蘭盆なりとて應ずるものなく、止むなく寢覺より一日にて登降するに決し、荷物なしにて一圓七十錢を貪られた

り、福島より濁川温泉に赴くならば家高長次郎（三十三才）など相當の案内者ならん。

乘鞍ヶ嶽　第六日野麥を發して登躋し平湯方面の無人の小舍に至る行程三里といふ、第七日白骨温泉に下るべし行程五里。（乘鞍ヶ嶽は『山岳』第一號に川崎氏及び拙文あり）

霞ヶ嶽（霞澤山）　以上揭載せる御嶽、駒ヶ嶽、乘鞍ヶ嶽は、筑波、富士、淺間に登ると大差なかるべけれども、コレより眞個に日本アルプス險峻に入るものにて、山馴れざるものは到底通路をさへ識る能はず、第八日白骨温泉を發して梓川に沿ひ、或は河原に下り、或は崖を攀ぢ、急流を徒渉する十數、或は懸瀑を横絶し、獨活木人より高き間を潜り、遂に霞ヶ嶽の絶頂に達し、上高地の温泉場に下る。（此山は小島烏水氏の『山水無盡藏』に據る、但し上高地には當時温泉場の設けありて野宿を要せず）

穗高嶽　第九日上高地より登るを得、未だ記文を見ざれども一日にて登降するは稍困難なるもの〻如し。

槍ヶ嶽　第十日早朝上高地を出發し林道を取り行くこと約一里にして粗末なる牧場監督所あり、コ〻より左折溪流を涉りて細徑を辿れば穗高山麓に宮川ノ池あり、池中小嶼點々として石楠、ツガ等を生じ樹は六七尺に滿たざれども、深山なるを以てサルオカゼ垂れ風色絶佳なり、池中岩魚多し、牧場監督所まで往復一時間にして足る、監督所より梓川の激流を徒渉すること數回、行くこと約二里にして横尾に至れば川分岐して二となる、左に沿ひ（右に沿ひば常念、大天井に登るの難道あり後に記す）熊笹、イタドリ、シ〻ウド、イラクサ等を排して赤阪ノ岩小屋を過ぐれば、深林絶え、雪田現はれ、巨岩磊々たり、既にして坊主小屋と稱する岩窟に着す、上高地よりコ〻まで十一時間（宮川ノ池に迂回せずとするも）餘を要す、此小屋は僅松、殘雪多き處にありて十四五人を容るべく宿するに便なり、坊主小屋より登ること二三十分にして殺生小屋あり、亦岩窟にして五六人を容るゝといふ、第十一日坊主小屋を發して登路險峻を極め一時半にして絶巓劍ヶ峰に達すべし、夫れより飛騨の蒲田温泉に下る、路は大森林、熊笹に妨げられ歩行困難なり、七時間餘の道程なりといふ。

笠ヶ嶽　第十二日蒲田温泉より登る、（中尾よりも登り得）一日にて上下する能はざるに似たり、第十三日蒲田滯在。

燒ヶ嶽　蒲田又は中尾（ナカヲ）より上高地に至るの間に横たはる、險阻なれども一日にして踰ゆるを得といふ、是れ第十四日の課程なり。

常念嶽　上高地より八千尺の德合峠（トクガウ）を踰えて島々に到る五里の道程にして六時間を費す、島々より又五里許に烏川村あり、村より登り二ノ又の小屋に降り宿するまで、別に一夜の野宿をなさゞるべからず、他に一路あり即ち第十五日上高地を發し、槍ヶ嶽に登るの路を取り再び横尾に至り、槍の登路に別れ左の溪水（二ノ又川？）を登れば二時間餘にして溪二分す、右なる溪に沿ひ人跡絶えてなき喬木帶を攀ぢ、更に急峻なる山間の細溪を下れば一川流る、即ち梓川の一源にして一ノ又川なり、川に從ひて左すれば溪二分す、左を辿りて登れば二ノ又の小屋に達すべし、此の路なき路は獵夫と雖ども知るもの稀にして、且つ日本アルプスの中央部に當るを以て、若し一歩を謬らば生還到底不可能なり、確實なる案内者を得ざれば試むべからず二ノ又の小屋は岩石礧砢たる間に在りて、薪木、飲料水に乏し、第十六日常念嶽を探りて此小屋に下るを得、未だ記文なければ審にする能はず。

大天井山　大天井とは烏川（カラスカハ）の稱なるべく、西穗高にてはテンシャウタケと呼べり、第十七日二ノ又の小屋より登るには極めて容易なり、二時間餘を要す。

燕嶽　大天井を降りて（頗る險絶なり、余は燕嶽より此山に登りたるを以て、槍ヶ嶽の比較的容易なるを感せり）燕嶽に至るの間は、偃松だに稀疎にして一滴の水を得る能はず、兩側岩壁斷絶屏風の縁を傳ふが如し、然れども上、信界の連峰と日本アルプスの殆んど全體を仰ぐを以て、壯觀譬へんに物なく、殊に鷲羽、槍、穗高の三大嶽は眼前に峭立して一躍達する覺ゆ、二ノ又の小屋より燕嶽の小屋まで七時間餘を費やす、小屋より燕嶽の絶頂三角點まで往復一時間半にて充分ならん、頂上は雪白の花崗岩にして滿山白礫を敷き、形狀甲州駒ヶ嶽の絶巓に酷似せり、小屋は粗にして雨露を凌ぎ難く、薪木に乏しく、數町下の山側より殘雪を運ぶ等不使少なからざれば、成る可く中房温泉に降るべし六時間を要せず、常念山塊を踏まんとすれば（常念より燕又は槍に至り、若しくば燕より常念又は槍に至る）其日數を量りて米を淘ぎ乾燥せしめて携帶せざるべからず。

有明山　第十八日中房（ナカブサ）温泉より此山に登る三里と稱せられ四時間にして足る、絶頂より宮城口（ミヤシロ）を取り、宮

城の有明神社に下る亦三里なりといふ、宮城より大町街道の池田まで僅に二里許なれば池田に宿するを可とす、有明山は信濃富士と稱せられ古來より著名の山なれども、頂上まで針葉樹の喬木帶に蔽はれ路容易なり。

大蓮華山即ち白馬嶽　第十九日四谷の旅店山木に宿す、池田より大町を過ぎて北城村字四谷まで約九里にして馬車、人力車を通ず、第二十日絶巓の小屋に宿す、第二十一日四谷宿、第二十二日大町の對山館に投じ針木踰えの準備をなす。（白馬の案内は志村、武田、河田の諸氏詳細に記されたれば略す）

針木峠　第二十三日大町を發して野口を過ぎて籠川（一に加賀川に作る）を渡るまで約三里の間は路極めて可なり、夫れよりイタドリ、アザミ、イラクサ等の間を潜りて、籠川の激流に沿ひ、大町より十一時間餘にしてマルイシと稱する岩小屋に宿す、野口より道程二里半とす、第二十四日雪田一里許を蹈みて針木の嶺頭に達し、更に黒部川に至るまで殆んど總て急湍を下らざるべからず、道程五六里と稱すれども、健脚者にして猶ほ十二時を費すべし、黒部川には籠渡しの設けあれども、平常は川水膝に達せざるを以て徒渉するを得べし、川幅は五十間位なり、川を渉れば完全なる岩魚釣りの小屋二ありて、雨露を凌ぐには充分なり。

佐良峠（更々越）　第二十五日黒部ノ小屋を發し暖谷峠を過ぎて溪流に下り、佐々成政によりて有名なる佐良峠に登る、峠を下れば立山温泉なり、黒部より温泉まで六七里なれども十一時間餘を要す、針木及び佐良峠は、峠の稱あるを以て、登山に經驗なきものは、箱根、足柄の如く容易なるものと聯想し、靴、草履にて踰えらるべきものとなすものあり、殊に知らず洋客チエムバーレイン、ウエストン兩氏の如き山嶽通さへ日本全國中最も惡絶險絶をきはむと嗟嘆せることを、富士、御嶽などに登攀して得々たるもの〻夢想だにする能はざる險所なり、立山温泉は多枝原温泉とも呼ばれ有峰村に屬し、夏期浴客は二三百人を出入し、ビール、酒、鑵詰等ありて不便を感せず、コ〻に滯在して日本アルプス中の諸峰に登るを得、曰く火打ヶ嶽一里、曰く三ツ又嶽一里、曰く鍋嶽一里十八町、曰く眞砂ヶ嶽一里十八町、曰く鷲羽嶽二里、曰く寺地山三里、曰く赤牛嶽三里、曰く水晶山三里、曰く上ヶ嶽五里、曰く中嶽五里、曰く藥師嶽七里八町等なりとす、因にいふ此温泉は、輯製二十萬分一圖立山と有峰の二ヶ所に温泉の符號を施したるに誤られて『帝國地名大辭典』の

如きは、鑛泉八頁アの部に「有峰鑛泉、富山縣越中國「新川郡」にあり」と載せ、九十七頁のタの部に「立山鑛泉、富山縣越中國中新川郡立山村なる立山の麓にあり」と記して兩泉を別物となせり、二十萬分一圖は又針木峠より淨土山と立山の間へ通ずる如く記し、立山の標高を1,5270となせるが如き悉く失當となす、地質調査所の豫査四十萬分一圖に比して劣ること遠し。

立山　立山温泉より直ちに急阪を登れば阿彌陀ヶ原に至り芦峅寺（アシクラジ）登山路と合し、夫れより容易に室堂に達す、其日絶巓雄山神社に賽するを得、温泉より室堂まで六時間餘、室堂より絶頂まで二時間なり、室堂は舊加賀侯の建築に係り、完全なる小舍にして優に三四百人を容るべし、夏期は神官二人出張してコ、に宿し、毎朝交代に絶巓に登り以て賽拜者を遇す、頂上の大觀を欲し若しくば別山、淨土山を探らんには、室堂に一二宿するを可とす、コレにて日本アルプス傑物の登攀を終りたるを以て歸京せんと欲すれば、室堂より芦峅寺まで八里なれども、五里の間は泥濘足を沒らし、急行すべからず、芦峅寺より担道二里歩すれば、上瀧町にして人力車の便あり、四里富山市街に入る、次日は富山より北方二里なる岩瀬より瀉船に乘じ直江津に宿す、直江津、上野間亦た一日の行程なりとす、即ち約一ヶ月にして日本アルプスを五大横斷して東京に歸るを得るなり。

京都、大阪方面よりするものは、名古屋より東海道線に分れ、美濃中津にて汽車を下り、馬車又は人力車を走らし、約十二里にして上松に着するを得、上松以下前文の如し。

糸魚川（直江津より約十一里、馬車、人力車を通ず、富山より約十一里、人力車を通ず）を起點として日本アルプスの主系を履まんとせば、糸魚川より約四里山ノ坊までは人力車に乘じコ、にて案内者を賃し、大所（オホドコロ）、木地（キヂ）（又キヂヤとも呼ぶ）の二村を過ぎ喬木帶となり、山ノ坊より約四里歩行十時間餘にして蓮華温泉に着す、温泉より五時間許にして蓮華鑛山あり、夫れより大雪田を蹈んで登り巉岩を攀ぢて大蓮華即ち白馬の絶巓に達し、少しく下りて小屋に入るまで又五時間を要す、白馬は單に展望を欲するものは信州方面より上下するも可なるべけれども、植物採取に熱心なる者は越より信に踰ゆるを可とす喬木帶の壯觀は到底信州方面にて看るべからざればなり、大蓮華より信濃大町に降り、針木峠を越えて立山温泉に出で、立山を極めて復

た温泉に戻り、更に槍ヶ嶽に登るべし、立山温泉より槍に至るまで、野宿二夜を覺悟せざるべからず、夫れより飛驒の蒲田温泉に下り、笠ヶ嶽に攀ぢ、燒山を踰えて信州の上高地に宿し、穗高山に登り、霞ヶ嶽を蹈みて白骨温泉を過ぎり、乘鞍ヶ嶽を經て野麥に投ず、最後は御嶽にして福島又は上松に下るべし此の如くせば日本アルプスを七大横斷するを得て、我等山癖者にあらざるものも亦終身の絶快事たるべし、然れども一年間に登臨を縱にせんとするも、天候は兎に角到底良案內者を得るに難かるべし、島々の上條嘉門治、西穗高の小林喜作等ならば、路案內だけは安全なるものと信ずれども、面識なきもの、遠方より招聘するが如きは出來難き事に屬す、二三年にて攀躋するの容易なるに如かず、今夏常念嶽へは小島烏水氏、笠、穗高の二嶽へは林並木氏登臨を試みられたれば、此三嶽は兩氏の敎示を乞ふを得ん、其他「槍ヶ嶽より鷲羽ヶ嶽へは一宿して到るべし」「黑ヶ嶽と烏帽子嶽に登らんと欲せば、信州大町に近き葛ノ湯より、ニゴリを經て水晶小屋に宿し、コ、より黑又は烏帽子に達するを得」の二談片の外、未だ聞知するところなし、余は日本アルプス登攀全圖の一日も速成せられんことを希望するの念に耐えざるを以て、玆に冗文を草して讀者に負くの罪大なり。(式)

日本アルプスに一萬尺の高峰果して幾座かある

余等が生れざる以前に「富士に筑波に淺間山、まだに高いが米相場」といふ俗謠の流行せることありと聞けり、いかさま當時は富士、筑波、淺間を以て日本の三名山と稱せるよし、富士は申さずもがな、淺間は恕すとしても、筑波こそ如何にしても余輩の解する能はざるものなり、古き歷史に現はれたるよりすれば、霧島山、白山、立山を始めとし降て伊吹山、葛城山、比良山、伊駒山等筑波より高くして且つ形のよきものいくらもあるべし、單に見た眼にても白山と筑波は較べものになつたものにあらず、假令古人が斯道に眼識がなければとて、大厦高樓と破れ小屋位は解るべし、富士に筑波に淺間山とは江戶全盛時代に唱ひられて、江戶附近にのみ採られ、殊に富士、筑波は江戶城を狹んで對立せるより名づけられたるは勿論なべけれども、第一の理由は富士は十三州より瞻望することが出來るか

ら天下絶無にして、筑波は關八州から仰ぐことが出來るから之に次ぎ、淺間は五州（信、上、野、武、下總をいふか）より見ることが出來るが、他の山嶽は四州以上から望むことが出來ぬ故、三山に劣るといふ說が基礎にして、天保年間に富士見十三州輿地全圖まで出版せられあり、近江、山城、河內、攝津の四ヶ國を流るるとて、僅か十九里の淀川が、百里足らずの信濃、北上以上の大川を以て目されたる時代なれば、無理ならぬことゝいふべし、橘南谿が百十數年前に名山論を章し「山の高きもの富士を第一とす、又餘論なし、其次は加賀の白山なるべし、其次越中の立山、其次日向の霧島山、肥前の雲仙嶽、信濃の駒ヶ嶽、出羽の鳥海山、月山、奥州の岩城山、岩鷲山なり」云々といへるが如きは、卓見といはざるを得ず、今日にても「御嶽は一萬三千尺にして富士よりは高し」とは御嶽行者の確信する所にして、一層甚だしきは、伊香人が榛名富士を富士より一尺高しと生眞目に爭ふことなり、此等の愚夫愚婦は論外なれども、明治二十年出版文部省檢定濟の『小學校用地誌』には北見國の羽奈別嶽を一萬二千九百六十尺と記し、（同書富士山を一萬二千三百七十尺と載せたり）明治三十三年刊行の『三重縣地理敎科書』には大和、伊勢界の大臺原、國見の兩山を一萬尺以上と誌せるが如きあり、現今北海道廳刊行の五萬分一、二十萬分一圖を視るに羽奈別嶽の名なく、其所在地と想はるゝところには千二十一米突の藻琴山、千六十七米突のサマツケヌプリの二低山あるのみにて、三千米突に過ぐる高山も亦絶えてなし、大臺原山は地質調査所の二十萬分一圖出でて千七百三十二米突に定まり、國見山は同圖に記載されざれども、其位置より考ふるに大臺原と伯仲するもの〻如し、余は山嶽標高の減ずるは、旅行日數が酒量を減せらるゝが如く心淋しく、輕侮漫罵せらるる如く嵩高雄大を缺くの感に耐えざれども、詳細に調査せらるゝに隨ひて、諸山嶽の標高を減ずるは蓋し已むを得ざるの事實ならん、余が山嶽志編纂の際、始め山嶽の標高を地質調査所の二十萬、四十萬に據り、陸地測量部の二萬、五萬分一地形圖を見る毎に、比較訂正せしに、一二の異例はありたれども、常に標高の減少するのみ、故に長々しき前提を揭げて以て本題に入る、何れの地圖地理にも、日本アルプスは兩越、信、飛の境界に三千米突の連嶂を蜿らすが如く記すれども、陸地測量部の切圖出版せられなば、羽奈別、大臺原、國見の如く酷しからざるも、或は千米突近くの高

さを減殺せられて、其高峯と稱せらるゝものも亦大に宏壯を缺くに至らざるなきか、余は今年槍ヶ嶽の頂上に於て陸地測量部員と談り、槍の二千七百米突即ち八千九百尺許なるを知れり、又信飛界にて三千米突なるは御嶽のみならんとの想像説も、八ヶ嶽、立科皆七八千尺位なるべきをも聞けり、余は日本アルプスに攀づること極めて少なく、且つ氣温の訂正をなさゞれば確實といふにはあらざれども、余が空盒晴雨計推測と前條「日本アルプスと登路に就きて」の日本尺とを併載して讀者の參考に資す、余は爾後更に他の方法を以て益々諸嶽の標高を究めんとす、測量部員と余に謬算ありたるものとせば、余の幸之に過ぎず。

	今の地圖	余の推測
大蓮華即ち白馬嶽	九千六百八十二尺	八月五日六日 九千五百二十一尺
針木峠	八千二百二十七尺	九日 七千九百八十六尺
佐良峠	七千七百五十二尺	十日 七千五百二十四尺
淨土山	（八千九百尺）	十二日 八千七百七十八尺
有明山	八千七十六尺	二十日 七千二十九尺
燕嶽一萬尺		二十一日 七千七百八十八尺

大天井山	一萬五百十一尺	二十二日	八千五十二尺
槍ヶ嶽	一萬二百四尺	二十四日	八千八百四十四尺
德合峠	八千二十三尺	二十五日	七千五百五十七尺
乘鞍ヶ嶽	一萬四百四十八尺	昨年十月十八日	一萬三百四十九尺
鳥居峠	四千二百五十四尺	今年八月廿六日九月一日	四千六百三十七尺
御嶽	一萬五百十一尺	二十八日	八千六百四十六尺
三笠山	七千五百八十尺	二十八日	七千六百五十六尺
八海山	五千四百六十二尺	二十八日	五千九百四十尺
千瀧峠一名澤戸峠	三千八百二十一尺	二十九日	四千二百九十尺
附記		三十一日	
信州駒ヶ嶽	九千五百四尺		八千五百十四尺

富士登山と明石女子師範學校職員の責任

城數馬

近年又特に本年に於ける富士登山の隆盛は予輩の大に主義の爲めに賀する所であるが、騎馬登山、自轉車登山などに至ては予輩未だ俄に趣味と利益とを解し兼ぬる所である。まして七八歳の少女が登山したとて鬼

○富士登山と明石女子師範學校職員の責任

の首でも取つた如くに囃されたり、二歳の乳兒を登山せしめたとて自慢らしい話が世間に傳はるのは、何やら滑稽じみて居るではないか。猫も杓子もの譬へに泄れず、大阪の歌妓が三絃を携へて富士山頂に俗曲を奏したといふに至ては沙汰の限りである。

元來予輩から觀れば富士山は實に登山者の爲めの「いろは」である、内地第一の高山で、天下無双の名山であるが、登攀の容易なことは日本の高山中で第一であるとも決して二とは下らぬ程に十分開けても居るし、又設備も出來て居る。であるから、相當の注意準備をすれば老人でも小兒でも婦人でも何の困難もなく登山し得らるゝのである。決して富士登山は探險でもなければ、冒險でもない。

併し、富士に登るには富士山を高山否な今一層進んで靈山と承知しての事にして欲しい。山の趣味、高山の壯大、特に富士の秀麗にして且崇高なる所を解して欲しい、いや少なくとも之を解する事に注意を拂つて欲しい。左もなくば富士登山は何の洒落にもなるものではない。予輩は斯かる意味を以て世人の登山を勸むるのである。青年の人々に向ては一層盛に登山の風を養はん事を望むので、それも男子のみでなく、女子にも等しく登岳の趣味を解せられん事を切望する。

女子の富士登山も數年前より次第に其數を增し、昨年以來本年に至て益〻しく、其間或は數十人の團體を爲して登山を試むるものあるに至りては、實に予輩の大に滿足を表する所なれども、本年八月初旬に於ける兵庫縣明石女子師範校の女子團の登山の如く、監督たる校長の責任を云云する者ある如き事態を生ぜしめたるは、予輩の甚だ女子登山の將來の爲めに幾多の阻害を與へんことを憂ふるのである。此機會を利用して一言するは決して無益であるまいと思ふ。先づ新聞紙の報道に基て事實の大要を述べて見よう。

八月三日の東京の時事新報は富士登山の女學生と題して男子二人女子二十七人の寫眞を揭げ、其說明には、兵庫縣立明石女子師範學校々長藤堂忠次郎氏、教諭梅村喜一郎氏、女教員及び同校二、三年學生中の有志卒業生一行の肖像にして二日午前六時東京出發「愈今三日曉天鈴川を發して大宮口に向ひ天候の支障さへなくば夕刻迄に富士五六合目迄登り着く豫定なり」と記してある。數日後の東京の諸新聞は殆ど一聲に此一行の成功を報道し、監督者に對して讃辭を列ねるを否まない新聞が少なくなかつた。それに數通の女生徒の端書を揭げた新聞もあつたが、いづれも一行意氣旺盛なりしと、弱はつた者も格別なかつた樣な事を書いてあつて、大々的成功としか思はれない手紙である。報知新聞の記事の一節を左に揭げて見やう。

八月八日の報知新聞には「女學生の登山感想」と題して此一行が同月二日東京を發足した事を記して其次に、

同一行は三日午前九時大宮を發し五合目にて一泊し四日午前九時頃上に達し首尾好く目的を遂げ下山せしが途中落伍者五名を出せしもこは數日來不眠の結果と腹痛を起せし爲にて眞に登山に堪へざりし者は只二名ありしのみ先十分の成功を見たるは今後婦人登山を促すに足るべく各女生徒が登山感想は又後の登山婦人の參考に資すべきもの少なからず今銘々より寄せたる端書を左に揭げん。

と述べて居るが、其端書の内二三を左に示さう。

(一)睡眠不足　登山前には充分睡眠するの必要なることを感じました私共は出發致しましてから七八日になりまして非常に睡眠不足いたして居りました故に山上日が暮れましてからは月を見る目もなく無論山上よりして脚下の下界の夜景を瞰下ろすことが出來ませんでした是れは是非に御婦人方に(一女生徒)

(二)頭痛と渴水　前に函嶺の嶮を踏み破りし私共は登山の途中頻りに前者の夫を想ひ申候、登り詰むるに隨て空氣稀薄となるを以て大變に頭痛を覺ゆと承り居りしかど私共一行中には斯る人を出し申さゞりしは幸に候(一女學生)

(三)一行の旅裝　汽車や電車で廣い所も少しの時間で見物して居りました私共昨日と變る今日の旅裝、靴は草鞋と變り靴下は足袋と脚絆を代用し袴短かき袴は一層短かく裹げられ腰には辨當と穿き換への草鞋のみ吊り下げ洋傘は菅笠となり葛籠を背負ひて頑丈な金剛杖を力と恃みて險路を登り往く態は實に今昔旅行の好對比であると思ひました云々(旅行生の一人より)

まづ斯樣な調子で、何人も一行の大々的成功を信じて居た。所が數日に

して全然反對の事實が東京の諸新聞に記載せられ、監督者たる校長等の責任を痛論するものが生じて來た、同じく報知新聞の記事を左に轉載しやう。

女學生登山の失敗

（監督者たる校長の無責任）（八月十三日）

兵庫縣赤石女子師範學校長藤堂忠次郎氏は外二名の職員と共に同校女生徒二十六名を引率して函根の嶮路を踏破して上京し更に去る四日を以て首尾克く富士登山の目的を達し且つ十數名の女生徒所感を投稿のまゝ前後兩三回に報じたるが意外にも右登山一行の婦人團體は大なる失敗を以て終り其の失敗談は方に後の婦人登山者の爲に大いに警告す可き價あるを以て一行が登山及下山當時の模樣を微細に記して大に世に注意する處あらんとす當日恰かも某々醫學士連の團體の登山あり左に記さんとするものは即ち實際當時の實況を目擊したる二醫學士の實話なり蓋し藤堂校長は強いて是れを大成功と僞り而して後の婦人登山者をして大いに過らしめんとする其罪や大なり醫學士等の談に曰く

余等が赤石師範學校生徒の一行を淺間神社の前に見たのは四日の午前十一時ごろである此時既に數名の落伍者を出したのである一同は大に疲勞の態で且つ山上の寒さに堪へかねて焚火にあたつて居るものもあつた。

▲頂上二人の女學生　下山の時頂上と八合目との間に二人の落伍者があつた一人は非常の頭痛と非常の疲勞との爲に一歩も進めぬ夫れを一人が介抱して居るのである他の一行既に數里も下に下山して居る、折柄密雲四方に鎖して四顧闇憺、自分の命が大事と云ふので通行者中誰れ一人顧みる者もなかつた二人の女學生の心や奈何であつたらうか。

▲校長は居眠り　余等一行は僅に件の女學生を勞はつたまゝ五合目に下りた時、師範の一行は此處の石室に横はつて居つた校長は頻に居眠りをして居る余等は件の哀れむ可き二名の女學生の事を注意したけれども誰一人應ずる者は無い勿論迎ひに行うとする者は一人もなかつた多分今晩は此の石室に泊つて二人の女學生を待つのであろうと思つたが意外々時は既に午後の四時を餘ほど過ぎて居るのである。

▲眞の闇夜に唯一女生　余等は更に下山の途上女學生の一行は若し五合目に泊らぬのなら必ず四合目に泊るのであらうと思ふて又泊るのが至當であらうと思ふて段々と下りて行く五合目から一合目までは實なほ暗き深林四里の間を立ち籠めて淘に淋しい處である日は最早とつぷりと暮れて折柄は恰度月蝕の當夜とて鼻をつまゝれても明らぬほどな林の中を二人三人一組となつて前を行くあれば唯一人跛を引きつゝやつて來るのもあり貴嬢方は今晩何處まで行くのですと問へば三里さきの大宮までと云ふ聞けば時間に制限があるから泊つて居れぬと云ふ一行はと折返せば最早大宮に着いた者もあるし五合目に泊つた者もあるだらうと云ふ余等は此等女學生に對して實に氣の毒に堪へなかつた。

▲一行の散亂　翌日聞けば一行は案の如く五合目に泊まつたもあり大宮に着いたもあり一行の引率者たる揮指官藤堂氏は何處に泊まつたか無論知れぬとの事である。

▲不注意極る數々　さて監督者の不注意なる點を擧ぐれば一行三十名もありて途中病者を生ずることもある可しとの豫想準備を缺きたるを第一殊に婦人には月經等の關係より身體に異狀を來すこと第二醫者まで同道せよとは言はざるも強力の四五人を連れて落伍者の收容につとむる用意を缺きしこと第三シカモ強力一人もなし高山に上るに暴風強雨を豫想せざりしこと第四即ち旅行期日に限りありとて無闇に引ツぱり廻せしこと其の第五更らに不都合の點を擧げやうなら一行を散々離々にせしこと、一行を少しも監督せざりしこと、恐怖、寂寞、危險を感ぜしめて精神を非常に刺戟せしめしこと等にて更に今後登山の女性に對しては左の注意を要する。

▲登山の注意　第一に三人につき一名の強力を伴れる事、天候の怖ある時は石室に泊る事、時日に制限ある者は斷然上らざる事、不時の費用を用意する事、團體は可成繋がる事、山中二泊の事、馬のある處では馬背による事等にて此度の一行の如きは全然大失敗に終りしものなり云々と語れり。

四月十五日の報知にも再び次の記事があつて、

雜錄

○富士登山と明石女子師範學校職員の責任

女學生登山の慘況

（再び監督者の無責任に就て）

更にその實況を詳かにせる一登山者（一合目に一泊せる人）よりして報道し來れる事實によれば目擊者なる右の登山者は八月四日小供を携へ大宮口より出發行程里餘の處にて一名の女學生が見るも氣の毒なるまでに疲れ果て喘ぎながら下山するに逢ひたれば其の樣子を尋ねしに氣分惡しき儘一行に別れて下山せるなりといふ次に一合目の室に到れるに午後六時より急雨甚だしく天候の險惡なるを恐れて此處に一泊せり然るに兩三名の女學生下山し大宮差して急ぐものあり元氣稍や旺んなる樣子なりしが次に一行の監督者と覺しき校長職員等が十八九名の女生徒を引率しつゝ下山せり此の一隊は疲勞の色著しく足引ずりて自ら進むのか退くのか知らぬ程にて中には白木綿にて向鉢卷せる女生徒あり此の有樣を見たる室の主人は一行に對して大宮までの下山は困難なれば一泊せらるべしと云ふを校長は之に應ぜず尙ほも此の一行を率ゐて行程を續けんとするを同室に泊り合せの客九州の老人が見るに見兼ね長々しく說得せる結果左らばとて泊る事となりたり斯と聞きたる女生徒等は蘇生の思ひして打喜びしが不都合なる校長は身に責任のあるをも顧みず如何に疲れたりとは言へ他人の姉妹を預りて幷を監督の務めも果さざるに室に入りて橫はるを見し間に忽ち高鼾き而も氣の毒なる生徒等は未だ足さへ洗はざるものあり或は衣服を着換るものなどありて寢に就くまでに至らざりしなり此の光景を目擊せる他の同宿者も齊しく校長の無頓着なるに一驚を喫したり左らぬだに大雨なる當夜は月蝕の頃とて山中の夜景凄じく荒れ男さへ慄然たるほどなるに頓て十時半頃に至り山上より風に傳ふて婦人の泣聲を聞き私語く聲などの聞ゆるより起上りて樣子を覗ふに乾坤只だ眞暗なる中を聲次第に近寄りて斯くする中に燈も無き儘びしよ濡れの女生徒二人此の室の前を通過せんとしたれば餘りの冒險に打驚き右の兩人を呼止めて一行の者已に此の室に泊れる由を告げたるに兩名は校長の叱咐なりとて是非にも大宮まで下山せんとの決心あり校長等の此室に泊る筈なりと却々に信ぜざるを室は未だ燈を消ざりしより其の灯影にて漸く一行の此處に泊れるを認めホッと安心せる樣子にて紫の袴は腰より下は泥と雨とに塗れたるまゝ實に憐れなる姿となりて室に入り互に「先生く」と搖り起したれど校長は目覺むればこそ頓て漸やくウンと云ひ出したれば兩人は詰るやう「先生私は五合目から日が暮れまして雨中に燈火も消え道には迷ふ漸くにして草原の中を脫け此まで着きました」と涙まじりに話したるに校長はムニヤ〳〵ばかり再び寢入りたり兩人は泣く泣く足を洗ひ着物を脫ぎ食事をなすなど約一時間餘も費やして寢所にさへ窮せるを同宿の老人は氣の毒に思ひ起き上り席を讓りて自分は土間へ莚を敷きて眠りたる位なり雨は頻りに降り出でゝ小獸なしを當夜の光景の如何に慘憺なるかゞ想像し得らるゝと共に校長の不始末益々怨す可らざるものあり此事實を耳にせる人の校長を非難せざるものなしとは勿論左もある可き事なり。

若し此非難の聲が事實を傳ふるものとせば、予輩は將來の女子登山の爲めに少なからぬ影響を與ふる恐ある出來事であると思ふ。然かして、一は醫學士の實見談といへば信用するに足るのみでない、他の一登山者の言にしても、不實の事を構造して傳說しても何の利得も興味もある筈でないのに、如何にも其事實が緻密である所を考へると、之も嘘とは思はれない。それにしても所謂ゆる片言を以て事を斷ずるは予輩の爲し能はぬ所であるから、本號では事實の如何を記するでなく、將來の女子登山、特に富嶽登山に關しての一言の注意を述べやうと思ふて居た。然るに校長の藤堂忠次郎氏であらう、藤堂梅軒の名を署して「女學生の富士登山」といふ一篇を本年九月と十月の「女學世界」に連載して、其冒頭に「鳥渡ぐらいの之を見た人は非常に其冒險否其橫着さに呆れて了つて、或は之を惡口凌辱するに至るかも知れない。果然々々余の此の擧に於ては正しく此樣な目に出逢つたのである。……余の今回の企ては世之を壯擧と目して噴々喧傳して吳れたかと見る間に早頭ごなしに叩き潰さうとする者もありました。……ィデ一筆を呵し事の實相を詳記して黑白を世の眼ある人に訴へ見ん」と說き起して、一種の辨解的登山記を公にせられた。長文であるから其全編を示すことが出來ないが、予は三回迄反覆して熟讀して後卷を閉ぢて吁と歎息した。數千萬言の藤堂氏の辯解は予輩をして却て前に揭げた非難の決して誣妄にあらざるを證明するに過ぎなかつたのである。けれども新聞の記事は全然別物として、先づ藤堂

氏の記述せる事實に就て予輩の所感を記して、一面には將來の參考ともなるべき注意を掲ぐることは無益であるまいと思ふ。

元來藤堂氏が如何なる確信からして此女子團體登山を企てられたかが根本的疑問である。「抑〻女子の團體が一萬二千尺の絶頂を極めんとすることは聞くさへ其の大膽無謀を驚かざるを得ません」。「有體にいへば多數の女子團體が此の樣なことを突然決行するは、どうしても大膽無謀冒險突飛といはれても仕方がない」。といふのが校長自身の自白であるが、それほど聞くも恐ろしき大膽無謀冒險と確信せる富士登山を、何故に妙齡なる他人の子女を誘ふて決行せられたか〻了解し難い。予輩は前にいふ如く決して富士登山を探險の冒險のと思はぬ。登山中の最も容易なものと思ふて居る。甚だ失禮の言であるが藤堂氏は高山の登攀に必要なる經驗を有して居られぬであらう、それで斯樣な考ももつて居られるので、且又斯樣な考のある人が多人數の少女を監督して富士登山を爲されたのは、それこそ餘りに大膽餘りに突飛ではあるまいか。予輩の言は隨分酷であることを自ら信じて居る。併し將來の婦人團體の登山に對する障害を排除する爲めには、藤堂氏には氣の毒であるが、今日に於て十分此一行の大失敗の原因を明にして置く必要がある。

富士登山には經驗に富んだ人に從つての時ならば格別、多人數を監督して登山する人は富士登山に關する諸種の事項を詳知せねばならぬ。場合によりては先づ山麓の旅店等と豫め協議の必要もある。而藤堂氏は此點に於て根本的不注意を免かれない。

第一は大宮、須山、御殿場、須走、吉田の孰れより登るを可とするやに就て一向研究がしてない。同氏は大宮口の新道から登山して、「此新道といふは本年始めて開けたといふから我〻は御殿場より昇降すべかりしを更めて之に轉じたのである……行程二里半ばかりの間晝も尙闇い程である其間の道路の惡きこと實に言語に絶し泥濘膝を沒す」と記して、又最終に「所感」と題して大宮口の道を取るは不得策なりとの斷案を下されて居る。今日でも各人多少の意見は違ふが、御殿場、須走の二路を可とする人が最も多くて、其次が吉田の樣である。大宮口は或る特別の趣味を以て登山する人の外には、概して歡迎されない。新道と聞て輕々しく豫定を變更するは猶更不注意である、藤堂氏は其地位から考へても、必ず大宮と御殿場と須走と海拔に著しい差のある事は承知して居らるゝ筈である、左すれば高い場所から出發すれば同じ山頂までの高距は最も短かい事も勿論であるから大宮口に改むることは容易に爲されない譯である、まして初夏の新聞には大宮口の登道が登りが樂で道程が三里も近いやうな事を掲げて居たけれど、二階の梯子で考へれば直に解かることだ、梯子を短くすれば勾配が急になるし、急でない樣にすればどうしても梯子が長くなる。登りが樂で三里も近い新道のある筈がない。まさかこんな小供だましの記事を信じて登路を變更せられたのではあるまいが、兎に角登路の研究をしないのが明かである。

單に一日の運動會とか、遠足會位で、山と言ふても藤堂氏が其校の女生徒に「近傍の山といふ山は大抵登らせてあり」と言はるゝ位の、明石近傍にある程のものならば、何もいふ事もないが、富士山は少しそれと山が違ふので、登山は容易であるが相當の準備がいる。女子の團體となれば男子に比して又一層である。天候を見定めて登るは最も宜しいが。それが一日の內に變更する事があるので、登山中に一日や二日は小屋の內に籠らねばならぬ事が出來るもしれぬ。であるから平地の旅行の樣に毎日の日程を一定不變に豫め定めることは宜しくない。又それでなくても時間を定めて必ず何の地に着せねばならぬといふ如き事は決して爲すべきことでない。「一行が頂上を離るゝときは午前十時半であつた。令を傳へて曰く今日夜は日程の通り鈴川驛より夜行列車にて歸西する筈であるから夕方六時半までに大宮に着き馬車の時間に遲れざるを要す」。と是が藤堂氏の自記である富士山を知る者は前日來の疲勞と、前々夜よりの睡眠不足を感ぜる少女に向て斯かる命令を下すものでない。若し夫れ程の切詰の時間ならば富士登山は當初より斷念することが最宜しい。

登山の服裝はいづれにもせよ、又山上の小屋に多少の設備あるにもせよ、防寒服を携ふる必要がある、夜間ばかりでなく、天候不眞の時は晝間でも綿入を着て急坂を登る場合がある。「揃ひの浴衣地の筒袖に古代紫の袴を濶短かに穿ち」と記し、「銘〻に菅笠と莚とを購はせ之に金剛杖をつかせ……一枚の衣更へと二食分の麵包と二食分の握飯と外に……諸種の藥品と氷砂糖と生卵子とを各自に用意させた」と言へるを見れば毛の物も綿のものも更に防寒服は無い、頂上で一行が寒さに堪へ兼て居

雜錄　○富士登山と明石女子師範學校職員の責任

○富士登山と明石女子師範學校職員の責任

たといふ事が「報知」に記してあるが眞に尤の事實と思はる。

總て團體登山の時は其幹旋者は各自の準備又は携帶以外に團體に對しての藥品、多少の副食物、菓子等の準備を爲すは當然である、よしそれが無くとも、少なくも相當の「強力（ゴウリキ）」を雇ふて第一には一行を身輕ならしめ、第二には之か監護庇保の任を行はせねばならぬ。女子には猶更である。先づ四人に付て一人の強力は必要である左すれば防寒服も、十分の食物も、多くの草鞋も之に持たせて、高く登るに從て風の爲に邪魔になり易き菅笠、蓬も皆之に持たせて、其上に受持を定めて四人位宛の庇護を爲さしむる事も出來れば、落伍者の出來た時も、置き去りにしなくて強力を附する事も出來る。然るに最も驚くのは一行三十一人の登山者に強力は僅かに三人のみとのことである。「強力に右の握飯を持たせて生徒は出來るだけ身輕にさせた」との事であるが、それでもまだ損じ易い生卵子を數箇宛各自腰にさげて居るとの事だ。是では全然富士登山の準備を知らぬ遣り方といふの外はない。落伍者の出來た時は如何する積りであつたか。又一行の內三名の婦人は頂上で別かれる筈であつたので、無論其時は一人の強力を其三人に附して、殘りの二十八人に對して二人の強力となるも一向構はぬ考とは、此多數の女子を監督して一萬二千尺の絕嶺を究むる人の考としては予輩には呑み込めない程である。

「二合目に着き……半時間休みたる後又出發せんとするに方り一生徒は寸歩も叶はぬとて此處に止まつた。よりて舍主に慇懃に乞ひ猶此邊に工夫の數多く居るを氣遣ひ今夜此舍主の家族の間に泊め呉れんことを托して出發した。」此の如き心配ある場合に一少女を殘しても藤堂氏は尙登山する必要ありしやは疑問ではないか、若し他の生徒の方が心配であるからとなら、先づ其本に立戻りて、彼樣な場合に相當の處置の出來ない程の不完全の準備にて此登山を企てた者は誰であるかを考へれば問題は直ちに解決が出來る。

睡眠不足は非常の疲勞を來たすのに、一行の少女は登山初日の書頃にも「二日以來の睡眠不足の爲めに睡りつゝ歩んだものが多數あつた」程であるに、如何に山不案內で、適當の宿舍を早く求め得なかつたにせよ夜の八時半頃まで登らせて漸く五合目に着したとは亂暴の極である。

一體普通の旅行でも朝は早く立ちて、夕は早く宿るといふのは昔からいふ事で、富士山では團體などの登山に最此事が適切である。近年は登山者が多いから猶更で、時刻が遲くなれば石室は滿員といふ有樣だ。三十人の一行が八時半までもついて居るのは、全く富士山を知らないし調査をしないからの事で、五合目に着した時「無殘や先頭に立つ強力は大聲疾呼して駄目だ今夜は此處に泊めてくれないと、一行は落膽した……」とあるが、是も其結果に過ぎないのである。誰の責任であるか。

已に睡眠不足で苦んで居るものを、其夜は又一時から喚起こして三時半から歩ませたのも、隨分思ひ切つた遣り方ではあるまいか、僅かに數十歩を進みて二人までの落伍者を生じた。しかも屈強な生徒である、……又六合目に往つて一人の落伍者を生じた。其れ〳〵宿舍に置て休息させて一行は尙も前進を續けた。と自記して藤堂氏は何等の感があるであらうか。予輩は將來此の如き登山を企つる人に向て大に熟考を望むと同時に、富士登山は苦痛を目的とするものでもなく、又困難に耐ゆるを唯一の主旨とするものでもないことを注意する必要がある。

「藤堂氏の言の如く強力社會の人柄も惡るいであらうし、又石室の主人も同樣であらうけれども、登山に必要なる準備を忘るは、其責明かに監督者にあるので、若し準備の仕方を知らないとなれば、知らずして監督者となつたのが大膽である。草鞋を僅かに二三足宛しか携えずして下りには人の捨てたるを拾ふて生徒に穿かしむるの不始末となり、又頂上で三人の強力を全く失ふて、下り道に落伍者を生ずるも更に施こす途なき有樣となつたのは實に驚く外はない。登りの時の五人の落伍者は如何に收容せられたか藤堂氏の記事には其模樣が見えないが「一行全員二十八名打揃ひ下山の途に就いた」とあるかと思ふと「唯少しく遺憾なりしは落伍者の五名が頂上に近く來ながら登ることを許されざりしことのみであつた、之も時間の不足より公衆の犧牲になつたのである。」と記してある隨分呑氣な記事でいづれが事實であるか頓と判じ難い。

一體多數の登嶽には、箇々分離しても一切構はぬ程の獨立した經驗ある者のみならば格別。左なくば分離した時の準備がなければならぬ、男子なら殆ど強力だけで宜いが、妙齡の女子には其場合に保護が必要であ

る。左程ならぬ時でも成る可く健脚の人と、さうでない人と前後に分つか、其準備が出來ねば一番弱い人を標準にして一行を制せねばならぬ、速力の違ふた艦隊が運動と同じ道理である。然るに此女子登山にはそれが皆滅茶である。上りはまた幾分の秩序があつたらしいが、下りはまるで別派である、藤堂氏は一行の先頭で「足の健なる者はともすると逸出先行せんとするから勉めて其前頭を壓しつゝ下つた」との事であるが「午後一時に五合目に着いた運れたものも二時までには皆着いた」と記してあるから後殿を受持つた他の一人の男職員も此時已に五合目に着したに違ひないであろう。然るに驚くのは「三時までも俟つたに彼の女職員が生徒一名に助けられたまゝ未だに着かない」との事である。後殿の役目も忘れて女子二人を置き去りにして、校長男職員は中心全く平かであつたらうか。それのみでない、五合目で之を俟ち合はせないで一同進發したのは益々驚くべきである。

藤堂氏の辯解には。「一方から考へるとこんなことして時間を空過して居る譯にはゆかない、六時半までに大宮に下り着かねばならぬ、加之全員が此處でおくれればそれだけ途中の森林で日が暮れて終ふであらう。全員を救はんか少數を救はんか言ふまでもないことである」といふのである。是が此場の辯解として合點せらるゝであらうか、落伍者を收容するために、一行の進發を止るは此時に必要の錯置で時間を空過するなどゝ言ふべきことでない。「六時半までに大宮に着かねばならぬ」とは何等の亂暴ぞ。頂上を發する時藤堂氏の下したといふ日程通りの命令のやうに此夜鈴川から西行の瀛車に乘る爲であらうか？若し左る譯ならば、落伍者の二人は瀾と置去りになる譯ではないか。大宮で俟ち合はする事が出來る程ならば何故にせめては校長なり教諭なり男子の一人が跡に殘りて二人の落伍者を收容することを力めなかつたか？「全員を救はんか少數を救はんか言ふまでもないことである」の一言は之に對して何の辯解にもならない。

其上に此落伍者を除いても、尚ほ頂上を午前十時半に出發して五合目が二時であるから、其間に三時間半を要して居る、上りには午前三時半に五合目を出發して頂上が十時前であるから約九時間を要したのを、下りにも尚ほ其十分の四を費した割合である。それから考へて、且一同の足が午後になりて疲れて居るのとを斟酌すると、前日登る時に大宮を午前九時に立ち、午後の八時半に五合目に着して十一時間半を費して居る此間の道は、下りにも其十分の五乃至六位の時間を要する事は豫想せねばならぬ、即ち六時間乃至七時間以上は如何にしてもかゝるべき思ふのは相當である。それを、大宮まで着せねばならぬといふ六時半までには僅かに三時間餘の切り詰めた時間しかない午後三時過に、前述の理由を押立てゝ、落伍者の二女子を捨てゝ大宮へ向ひ五合目を出發したのは、何の思慮もない遣方である。

まだ不可思議なのは、藤堂氏は二人の落伍者が遲くも五合目迄は來るものと信じて「名刺の上に二人今夜此の五合に假泊し明早朝下り來れ如何にかして下に俟ち受けん云々の旨を認めて之を舍主に托し」たとの事である。此一言は藤堂氏が百方試みた辯解を根底から打破する結果となるではないか。即ち此夜鈴川から瀛車に乘る事の日程が變更せられたのが明かである、左すれば此夜六時半までに大宮まで下り着かねばならぬ理由が消滅したので、落伍者を俟つゝ時間を空過する譯にいかないといふ筈も無くなつたのである。して見るとなぜ今一夜此五合目の小屋に宿して二女子を俟たなかつたのであるか。如何にも女子團の監督者として無責任の樣である。

五合目から下は益々亂脈で、先頭と自分定めた任務を藤堂氏自身が忘つて、他の男職員も之に代はつて居ない、女子は勝手に足にまかせて下り行き、男子は二名とも殿をなしたとの事だ。是に至ては何とも取締の出來やう筈がない。それに一合目には休まないでカケスバタに息ふといふ命令であるから、足の遲者な一部の女子は、ドシ〳〵〳〵一合目を過ぎて下つた。六時半迄に大宮に着せねばならぬとの日程もある譯だから尚更だ。處が一合目に男職員が着して疲れて居る女子一部と暫時休息してイザ出發といふ時は已に六時半であつた。日程やら命令に八釜敷い大宮に着せねばならぬ六時半であつた。實に滑稽の極ではないか。藤堂氏の此時の懺悔を聞かう。「……時は已に六時半で蒸瀛の石炭の盡きたる

○富士登山と明石女子師範學校職員の責任

が如く空腹を訴へて止まない先づ食事を命じた。熟思ふに今夜大宮に、行つたところで馬車は既に出まい、到底一泊せざるを得ない。それならば今夜此處に一泊するがよろしからん。……一同謀つたが誰も異論がない、それでいよ〳〵此に宿泊と決した……」との事であるが、日程を振廻はしたり、兎角命令する事が得意氣な藤堂氏が、此時に限りて一同に謀つたのは、如何にも同氏の究狀が察せられるのであるが、此境遇に在る監督者は斯かる事こそ自ら決して命令すべきであつて、保護を受くる者に相談すべき事柄でない「無理な命令を發したり、相當の決斷を爲し得ない人は斷じて斯の如き監督の地位に立つべきものでない、若し前に掲げた或登山者の談話と對照すると此時の事實が大分違ふて居るけれども、新聞の記事を以て藤堂氏の處置を是非するは予輩の好まない所である。

予輩は尚ほ藤堂氏の懺悔を聞かねばならぬ、「實に我々は時間の豫算を誤つたのである。十時半頂上を去れば午後の六時半まで八時間には無論大宮に達し得らるゝならん、余は曾て御殿場口へ降りしに僅々三時間ばかりであつた、是は砂走りといふがあつたからでもあるが、たとひ大宮口は此砂走りのなきものにしても、一時間一里半は無論下り得らるゝものと信じて居つた今やはや豫算がすべて外れてしまつたのである」との事である、此最後の自白を聞いては、予輩は最早此以上を言ふ勇氣が無くなつた、却て同情に堪へない心地がする、唯如何にも殘念なのは五合目に着する前に於て藤堂氏が此點に氣付かざりし事で、兎に角山を知らず登山の法に明ならず、多數の無經驗者の監督となりて登山を企つる者の宜しく鑑むべき事柄である。

彌一合目泊りとなつたので、命令を守りてカケスバタに先着して居る一部の女子には、強力を特に雇ふて其處に泊るべく命を傳へしめたとのことだ。予輩は藤堂氏が落伍者の收容に強力を雇はざるを怪まねばならぬ、男職員自らも爲さず、強力も雇はず、而して落伍者を其儘にしたる無頓着は予輩到底之を了解することが出來ぬ。

明石女子師範校一團の登山の事實と之に對する予輩の所感は以上の如くである、生徒各自は先づ〳〵成功と思ふて居るも知らぬが、監督者としては、大々的失敗である、大病人のないのと、大部分が兎に角頂上に登つたといふだけで、監督者の能事了るものでもなく、成功と云ふべきものではない。藤堂氏には不幸にも此事理が解からぬらしいのである。それであるから「富士山は生涯一遍は登るべし、然し必ずしも再びするには及ばない」との愚痴らしい所感も生ずるのである。予輩は更に同氏が富士山を研究して十分の準備と注意を以て第二回の登山を計畫せられんことを切望するのである。今回の失敗に對して世の非難あるは予輩も亦其至當なるを認むるの外はない。それに藤堂氏が「所感」と題して記文を結べる其最終に至て「○下山の際或男子の一團がいやに我々を嘲弄した、もしやそれが……(完)」と擱筆して居られるのは紳士として餘り立派な文字ではないやうである。若し新聞の記事が不實ならば辯明すればよろしい、まして正々堂々と述べて「事の實相を詳記して黒白を世の眼ある人に訴へ見ん」とて登山記を書きながら、斯かる謎の様な文字を以て全編を結ぶ必要はないでないか。

要するに予輩は將來に向つて左の如き注意を述ぶる事を得るのである、勿論多人數を監督して登山する人に對していふのである。

一、富士山に關する總ての事項を研究し置くべきは勿論であるが、中に就て登山路の選擇は最も十分な調査を爲す必要がある。

一、切り詰めの日數や時間で登山するのは不可である、二日や三日は豫定よりも長く懸りて差支ないだけの餘裕を必要とする。費用も多少之と同樣の用意がなければならぬ。

一、前以て登山口の旅店と交渉して準備を爲す必要を認めねばならぬ。

一、強力は四名に一人位の割合に雇ふて、上下共に一切の荷を負擔させ、又一行の登攀を監督もし、保護もさせる樣にせねばならぬ。

一、防寒衣、食物、草鞋其他は成るべく十分に準備して、強力に負擔させるを必要とするのである。

一、多人數なれば猶更。其一行の部署、監督、又特に落伍者の處置を豫め講じて置かねばならぬ。

一、山上の石室には豫め宿泊の交渉を爲して置くか、又は少なくとも五時頃迄には石室に泊る樣にせねばならぬ。

富士山表口新道案内

靄溪子

亭々たる松柏、蓑々たる青苔、予に於て異なるなし、只是共に自然の衣のみ。突兀たる峭嶂、曠漠たる綠野、均しく之れ自然の庭園造化の宮殿のみ、草木の性、岩石の質余が研究する所にあらず、唯一片煙霞の癖身を七寸の笻一枝の節に托して雲水の間に放浪するのみ。其の觀や極めて非科學的なり。其の記や極めて平凡なり。所々時と物と予の所感とを羅列するに過ぎず。道路案内の用をなさば幸甚耳。

○發端　余の此の途を取りて登山せしは三十九年六月一日にして、朝六時田子の浦村を發足せり。田子の浦村はかの赤人の詠をもて名ある處なるは皆人の知る如く、東海島沼より西富士河口邊に至る一帶の沙岸の總稱なり。今此の地を田子の浦村と云ふ。予の此地より發足せし理由は一は暑を此の地に避けて魚介と侶たりしによると雖、一は又、水面より歩して一萬二千三百七十尺の高さに至らんとの好奇心なり。田畦を縫ひて此行約一里吉原町に至る。

○吉原町　富士郡中第一の都會なり。人口約四千はあるべし。東海道の一驛にして、鈴川停車場より大宮町に至る鐵道馬車の通路なり。鈴川停車場より約半里餘、頃者東海道鐵道新停車場を加島村に設くるの議あり。加島村は吉原町の西南に位し、鈴川より近し。又吉原町民相謀りて別に富士登山新道を開鑿し、吉原町より直ちに登山する途即ち吉原口設置の計畫ありと。吉原町繁盛の程度はこの地にて小間物、西洋食料品等價値も一通りなし得らる。唯風俗は淫靡なり。娼樓軒を列ね、普通の旅館と雖、質朴の風に乏しく宿泊には適せず。七時鐵道馬車に賃して吉原町を發す。鐵道馬車は鈴川より大宮に通ずる賃錢二十錢、吉原より大宮迄は十六錢なり但富士登山者は二割引とす此の鐵道馬車も例の如く極めて小さく且つ遲し。吉原町より大宮町に至る約上り三里の途を二時間半を要す。歩するも差なし。尤も下りは稍々早しと知るべし。

○大宮町　ノロ馬車に御して凡そ一里半を行けば入山瀬と云ふ停留所あり。此の地に富士製紙會社の第一工場あり。最も大なる工場なるが如し。此の地より大宮に至る途次諸所に同會社の工場を見る凡て六なり。九時二十分辛うじて大宮町に達す。大宮町とは云ひながら馬車の終る所は其の入口にして尚數町を行かざれば其の中央に出でず。大宮町は人口八九千ありと云ふ、町は廣けれども殷盛ならず。旅館は中村樓を始とし十數軒あれども皆知れたものなり。こゝにて登山の用意を調ふること他の登山口と異なることなし。以前は此の地にて諸品購入券を出し、之れを以て山上にて買物をなさゞれば不廉と云ふ奇妙なる方法を取りしが、今は新舊二道となりて旅館の目が屆かぬ爲め之れを廢せり。

金剛杖は一本十錢なり。其他の相場も他と大差なきが如し、然れども草鞋に麻入りのものなし。又辨當に吉田の如く餅を用意せず。凡て設備不完全なり。強力も吉田の如く多からず、又皆四十前後にして容貌狡猾、布子を負はず、不平を口に人氣良しとはいひがたし。賃錢は他と同じ。

大宮町の出離れに右に石標を見る、刻して官幣大社淺間神社と云ふ。堂宇宏壯ならずと雖、又瀟洒專門家の言に由れば其の建築は極めて眞きものなりと云ふ。素人眼を以てしては森も小さく森嚴の度吉田の富士岳神社に及ばざること遠し、十時淺間神社を拜して愈登山に就く。淺間神社迄は新道も舊道も同樣なり。舊道は之れより社殿の裏より右に折れて粟倉、村山を經て行くものなり。新道は之より社殿の右側乃ち向て左に折れ森を過ぎて田甫の間に出で北行す。道は極めて廣く一本道にして迷ひ樣なし。時に籬落に接すと雖、村と云ふ程のものなし。傾斜は爪先上りと云ふよりも稍々急なり。時に顧れば身の漸く高まれるを知るに足る。則ち之れ裾野なれども開墾甚だ屆きて兩側皆陸田なり、時に灌木林に會するに過ぎず、已にして又未墾荒蕪の地に入る純然たる裾野となりては他と異なるなし。其勾配は急にして普通の山路嶺路と云て可なり。一里半程にして嶺の上に出づ、眺望稍豁大、草葺小屋あり湯を鬻ぐ、篠阪の茶屋と云ふ、十一時こゝに行厨を開く。之れより十町程にして又茶屋あり。かけすばたと云ふ、此間道路平坦なり。之れを過ぎて行くこと約半里

一坂を得、佛坂と云ふ、坂巓又一茶店あり、これより後十町にして近く一合目に達す。小屋あり。尚草屋にして假小屋に過ぎず。佛坂を過ぎれば漸く樹林を見、一合目以上は純然たる森林帶となり、勾配頓に急に樹根を踏み岩角を頼りて上る。縦の大木亭々として茂り。朽木道を掩して蹲虎に似、雲烟青杉を拂ふて衣袂盡く濕ふ。又一里餘にして二合半に達す、小屋あり。之れを馬返しとなす。然れども馬をこゝに致すは稍〻困難に失するやの恐あり。此の小屋清泉に沿ふ、冷冽玉晶を欺く。一人に付き茶代必ず三錢づゝを徴するは暴と云ふべし。

こゝより四合半に至る迄一帶森林なり。此の間勾配急に眺望なし且つ雲深くして倦むこと甚し。

四合半に至れば沙山となり、已に雲の上に出で青空を見る、こゝに舊道と合す、新道と舊道との差はつまり淺間神社とこゝに至る間の差なり。而して新道に於て、森林帶の間一里程近しと云ふに過ぎず。勾配は舊道の方寛なり。

尚上ること數丁五合目に達す、始めて一の石室あり。二合半よりこゝに至る迄一の小屋なし、所は寶永山の西麓に位す。時に三時を稍〻過ぐ、それより上沙を踏んで上ること別に奇なし、六合目に一の石室あれども今度は開かざりき。七合目にも亦唯一、八合目にも亦唯一なり七合目最も廣き如し、午後七時半八合目の石室に投ず、此の日八合目の石室尚開かず、戸をたゝけども中に人の氣ありて而も音なし、戸隙より伺へば、十數名杖を幷べて明し、爐火已に滅し、孤燈明滅夜氣陰々たり。或は戸を叩き、或は大聲して辛く呼起して中に入りて聽けば、こゝに宿れるは道者の一隊にして室番は下の七合の室にあり。今宵尚此の室を開かず明日を待て之れを開く計畫なり、且七合の石室滿員にて入りがたきを以て此の一隊こゝに宿るなりと、中に入りて爐火を起さんとすれどマッチはアヤニク一本よりなし、進退谷まりの氣味にて暫時を過せし時、下より又他の一隊の樣望にて、室主食料を背負ひて其の一隊と共に上り來りこゝに命も無事なりき。

八合より上頂上に至る迄又他道と異なるなし、只右に雪渓を見て沿うて行くのみ。されば之れより以下御鉢廻りの如き説くの要なし、大宮口の登山道は一言にして之れを云へば、他に比して極めて不完全なり（須山口を除く、須山口は已に廢道となり、只一道の通ずるのみにして中畑口と合する迄は小屋等の設備一もなし）

小屋石室等の不備にして其の數少き如き、吉田口の夥然一市をなせるに比すべくもあらず、加之上下山道共一にして、沙走なき如きは大に不便とする所なり。且つ其の距離比較的に長し、尤も予の大宮を出でしは十時に近かりしかば七合目に宿するの已むを得ざりしが、早朝大宮を出づれば優に一日にして頂上に達すべし。現に予等が一行の一人は卒先して頂上に達したるもありたり。

要之此の道を取るは決して得策にあらず、表口の稱あるも登山者の少き、宜なりと云ふべし。近來登山者、御殿場口と吉田口最も多く、殊に道者は殆んど凡て吉田口を取る。聞説文保年間僧賴尊の登臨せし後人々多く登りしが往々危害に逢うて歸來せず。角行眞人大宮口を開きてより後危險のことなしと、之れより先達此の途を取る。其後六代目の眞人彌勤（ミロク）（當字）と云ふもの吉田口を開きて凡人登攀の途となすと、此の事より富士講は多く吉田口を取るものなるべしと雖、又行路の便否蓋大に故あるなり。

之れを室主等に聞くに新道は只稍其の距離近きのみ、難易を比すれば舊道に若かずと。先きに云ふ如く、吉原町民の舊道を修して吉原口登山道を開通せんとの議又偶然にあらず。要之新道は尚成功せず。之れを稱揚するものは大宮の旅館と新聞記者とのみ。

○大宮口近邊名所　稍餘事に亘れども二三を紹介すべし。

○曾我兄弟の墓　鷹岡村大字久澤の福泉寺境内にあり、地は鐵道馬車、入山瀬、稻岡兩停留場の中間に位し、其の東方數町の處にあり。寺は曹洞宗の草庵に過ぎざれども眺望頗るよく。夏は納涼に可なり。兄弟の墓は其の庭内にあり、二墓相幷び小龍を以て掩ふ、香花常に絕えず。但し作は素より知らざる所。故事來歴は管々しければ略す。

○風穴　山宮にあり、大宮の北凡そ一里餘なりと云ふ。今や道路潰れ荊蕀繁りて入り試むるものなしと、余も亦道を過ちて何時か之れを通り過ぎしかば又格別に試みざりき。

○大石寺　大宮の北二里上條にあり。日蓮宗富士派（又興門派と云ふ）の大本山にして日興上人の開基なり。總門より山門に至る間數丁、山門より二天門迄又數丁、其の間左右併せて數十の支院あり。石磴を上れば本堂あり、鐘樓あり。又左に本坊あり。本堂の背後に經堂あり、其の他七堂伽藍甍を列ね實に近郷稀に見る大寺なり、經藏の前を右折して行く凡一丁溪流を渡りて又上る數百歩老杉森たるの間に五層塔あり。山門の甍と共に遠く富士登山新道より望見すべし邸内又櫻樹多し。

○井出舘跡　白糸村大字狩宿の地は建久四年源頼朝富士の牧狩の折の舘趾なりと云ふ。舊家井出氏の門前に一老櫻あり、幹の大さ徑凡そ一丈、高さ七間餘枝葉數畝附近を蓋ふ。傳へ云ふ源頼朝の駒を繋ぐ所と。されば駒止櫻又下馬櫻と云ふ。近郷上井出村に又老櫻あり老幹已に朽ちて辛うじてヒコバへを餘すのみ。之れ又牧狩の時幕を張る所と云ひ其の名あり。

○白絲の瀧　人口に膾炙する所。今更喋々の要なし上井出村の附近にあり。且其の側らに又別に一大飛瀑を懸く、大瀧と云ふ白絲の如き莊景なしと雖、水勢却て之れに勝る、又、見るべきもの、往々白絲の水聲に掩はれて此の瀧あるを知らず。見落すもの多きを以てこゝに一言す。上井出村には旅舍あり宿すべし。

○工藤祐經の墓　上井出村より白絲瀧に至る小路の左側にあり、田甫の中に立つ、高凡そ二尺餘、巾五寸に過ぎず極めて小なり。刻して工藤左衞門尉祐經墓と云ふ、眞僞未だ知るべからずと雖蓋し信すべきか。

○人穴　上井出の北一里餘字人穴にあり。道路の右側に石標あり。富士人穴淨土門と刻す。其れより右折して行く數十歩、危磴を得て上れば乃ち洞口に達す。堂宇あり兒童に二錢を與ふれば、堂宇の中なる松明を賣り且つ案内す。洞内水を湛ふ、清潔比なし、傳へて此の水に浸せば富士登山の勞苦を醫し、創痍忽ち癒ゆと。二丁餘にして奥に達す仁田四郎の故事は解く要なかるべし。

人穴に舊家赤池善左衞門あり。もと三百石を賜ふ、德川家康の御朱印あり。御師を業とし。宿すべし。

雜錄　○富士山表口新道案内

此の地に至らんとするものは富士八湖を廻りてこゝに宿するを便とす。これ道者の取る所なり。これより南下して白絲、狩宿、大石寺を歷覽して大宮に出で馬車にて鈴川に至る最も便なり。

○實相寺　大宮よりは稍〻離れたれども、富士河の左岸岩本村にあり。舊東海道松岡村より右折凡十町、又馬車鐵道入山瀨停留場へ約十四丁なり。本派日蓮宗四十五本山の一なり。

久安年中（今を距る凡そ七百六十三年）鳥羽帝の勅願にて建立せらる。始め天台宗なりき。此の寺所藏の智證大師所齎と稱する唐本一切經あり。日蓮上人之を此の寺に讀破して立正安國論を著す舊跡なり。之れより當時の學頭、日蓮上人に歸依し遂に寺宗を改めて開祖となる、日源之れなり。總門に安國靈場の額を掲ぐ、之れを入れば、寺中常在院眞乘院跡あり。石橋を渡れば二王門あり。本堂宏壯其の側の石磴を拾ふ數十級祖師堂あり。又其の左側を上れば一切經藏あり。宗祖日蓮、開祖日源の遺骨及木像を安す。かの宗祖の讀破せし一切經は已に兵燹にかゝりて只數卷を餘すのみ、今藏する所は大部分は其の後新に納むるものなり。三度左側を上り、常經堂の前を過ぎ、右折して急阪を攀づれば、囑目頓に豁大、左に富士を見、右に駿遠の諸山を望み前に田子の浦灣一帶白帆ノヘたり、殊に富士河を看るに適す。尚上れば頂上に七面堂及八州權堂あり。身延山に擬す、尚境内に知足院跡、日朗上人米研水。開基廟、宗祖手植櫻、安國論著述硯水等の舊跡あり。

富士八湖廻り

八月三日午前五時、吉田の宿を出づ、先達栗原彦八に尾して行く。同勢余を入れて二十一人。

富士山嶺笠雲を見る風やゝ出づ。

六時半船津に達す、右に河口湖に沿うて行く、河口湖は八湖の内最も大なるものなり、風色甚だ佳、沿岸岬角あり、湖中辨天島あり。細波岩に碎け水色透明宛海洋の如し。勝山を經、長濱に至る七時半なり。小嶺を越ゆれば、忽ち西湖を見る。西湖村に船を雇ふ一人八錢宛なり。一艘四十人を乘せ得と稱すれどもかくては稍〻危險なるべし、二十有餘名にて十分なり。已にて風稍〻強し、雨時に至る、船の行くこと遲々なり。凡そ四十分、弘法投筆の奇蹟あり。斷崖の中腹に面平なる一岩あり其の面

に朧ながら鐘馗の像を出す、傳へ云ふ弘法大師巡錫の時、前山に鬼栖みて人を害ふ。大師乃ち舟してこゝに至り筆を岩に投じて之れを藷き以て惡鬼退散すと。之れを過ぐれば間もなく彼岸に達す。

それより道惡し。山間少許の田甫を見る。行くこと半里青木ヶ原に入る。時十一時に近し其の入口に龍宮と稱する所あり。俚俗土用寒と云ふ即自然氷室なり。蓋し熔岩の塊り堆積して其の間空隙を生じ洞をなす。其の内に水を滴るもの日遠く且つ夜寒きを以て凝て自然の氷室をなす。亦一奇なり、多行眞人の發見する所と云ふ。

此より精進湖に至る迄凡三里を青木ヶ原と云ふ。道極めてわるく加之羊腸崎嶇東西を辨ぜず通ずるものにあらざれば得て行くべからず。熔岩堆積せる上に、水苔を生じ其の上に直ちて樹木繁茂し、泥土を見ず、至る所洞穴あり、甚だ奇なり。嶂煙日を通ぜず、濕氣甚し。途中一帶水苔を鋪く所あり。從て樹木なし。只大なる地衣類熔岩を掩ひ恰も海中の白波雪を吐くものに似たり。之れを青木ヶ原の浪間石と云ふ、最も奇勝となす。蓋し雪解の水流の途に中り水苔を洗ひ去るものか。

精神湖は最も淺しと云ふ。風光亦佳なり。其の緣を沿うて行く一里本栖湖畔に出づ。こゝに、甲州右左口（ウバグチ）より女阪峠を越え精神村を經て來る道に會す。三時半。本栖湖は其の景色稍々廣きに失す。奇なし。一里半根原に抵る、それより人穴に至る二里餘富士の裾野にして劍峰の下なり而も甚だ富士山岳に近し、夕陽入衆に映じて明に其の披麻を見正に山上の人と指呼せんとの概あり。

六時人穴に達す。詳細は別項にあり。

富士八湖とは、山中、明見、河口、西、精進、本栖、ヒビレ、浮島沼となす。而して明見は小にして且つ吉田の附近にありシビレは本栖の西北一嶺の彼方にあり、更に一日を費さゞれば至りがたし、されば富士八湖廻り道と稱するもの眞實吉田より人穴に至る四湖廻を指すなり。而して此の道西湖より本栖に至る間人跡絶えたる所を行き、只人家は龍宮に番小屋あるのみ、道路險惡加之迷ひ易し、導者なくんば得て通じがたし。加之此の道にも亦數條あり。先達導者によりて其途を異にすと。而して吉田の强力にして屢〻此の途を案内せずと云ふことなけれども、一般に强力は深くそれに通ぜず。

されば此の道を修行せんとするものは富士講の眞先達を選びて之れに從ふを以て最も可とすと云ふ。（最も通じたりと稱する强力にても眞先達に及ばずと云ふ。）もしそれ講中に尾して行けば無料にて案内せらるゝと云ふべし最も妙なり。

高天ヶ原の入浴

予元來所謂湯治なるものを好まず、身に病なくして必要なきの故のみにもあらず、蟄居的單調の生活を嫌ふ故のことにもあらず、見よ多くの温泉場なるものは、概ね掌大の狹隘地に僻在して窮屈甚だしく、加ふるに不活潑なる病人、若くば敵本主義なる惰眠者の占領地なれば、陰氣限りなし、酷評を下さば、繁昌なる温泉場は決して靜養の地にあらずして、寧ろ情死の場たり。現に熱海は肺結核菌の巢窟にして、草津は癩黴毒の媒介所たるの觀あるにあらずや、唯高山崇嶺の上、滾々涌出せる温泉こそ、眞に入浴の効を收むべく、浩然の氣を養ふべし、予は謹で玆に、蓮華峯頭鑓温泉壺、立山頂上地獄の湯壺を紹介せん、夏季暑を天界に避け、神の御花畑に逍遙し、高天ヶ原の岩造湯槽に浴しつゝ眸子を雪峯に放たんか、六根忽ち清淨ならん、（越後大平生）

日本一の三大瀑布

予曾て岩毛の諸山を探り、日光に於て華嚴瀧を觀る、時は八月十五日の薄暮驟雨一過の後に屬し、雲霧去來凉氣肌に泌み、轉た寂寥たり、加ふるに本瀑は溪崖黝暗色を呈し、雜樹蓊鬱として頭上を蔽ひ、瀧壺は深藍色を呈し、岩根に抉り込み、水烟濛々、凄きこと云はん方なし、殊に溪間綠樹の枝に電燈數點、暮色を破りて閃々たるに於ては、一種異樣の感なくんばあらず、本年林並木氏の紀行に據りて、立山の稱名瀧を探り、主馬專之助氏の厚意に因りて、白山の白水瀧を觀る、稱名は越人以て天下第一と稱し、高百二十丈と號す、されど本瀑は直下するものにはあらずして、四段をなし、第四瀑は直ちに藍色湛へる徑約二十間の瀧壺に注下するも其勢頗る穩然肅然、崖壁は赭褐色を呈し毫も樹木の衣裳を有せず、林氏の所謂赤裸々とは眞を穿てり、加ふるに溪間割合に廣く開き居ることゝて、稍森嚴を缺くの感あり、白水瀧は加人亦天下第一と稱し、高二百丈幅七間と號す、瀑壁削立概して横裂理を呈せる暗灰色の粘板岩にして、是亦殆ど樹木を生ぜず、瀑水は甚だ淺き瀧壺に直下し、巨岩に衝き當りて、飛沫四散し、餘風數十間に吹き及べるは、勇壯無比なれど、甚だ凄味を感ぜず。

華嚴は關東人稱して天下第一となし、直下七十五丈幅八間と號す、されど實測に據れば高約三十五丈なりと云ふ、是れ瀧に於ては寧ろ其掛値の甚だ少きものなり、稱名は慥にそれ以上の掛値あり、殊に本瀑を直下百何十丈などと記せる書あるに至りては、高さと形狀と皆誤れるものなり、白水に至りては、直下は實に直下なるも、高さに於ては其掛値最も甚だしく、如何に優に見積るも、到底四十丈を超えざるべし、予は玆に日本一と自稱せる三大瀑布を實檢し、各其特色を認むると同時に、世間其高さを傳ふるもの〻、餘りに支那的なるに驚かざるを得ず、唯土人の誇張のみに止らば尚可なり、學者亦漫然之を梓上に載するに至りては、更に其無責任を惜まざるを得ず、これ跋渉に怯なるの致す所にして、所謂壘水練の徒たるを免れず、されど瀧を評せんもの〻、玆に注意を要すべきあり、季節、時刻、氣象等の外界事狀及び觀者自らの心身關係即ち內界事情是れなり、華嚴は春季殆ど水量減絶することあり、稱名、白水は六月末水量の多大なること正に八月の二三倍なりと云へり。

等しく水なり、而して其微球浮揚するや、雲となり

靄となり、輕きこと鴻毛にも勝り、其湛ふるや、淵となり湖となり海となり、靜穩死するが如く、其落つるや、湍となり瀑となり、猛烈嚴をも劈かんとす、三大瀑下に呆然凝視せしこと多時。（同）

▲八ヶ嶽の登路

八ヶ嶽の登路に就ては、高頭氏の山嶽志にも大分詳記しあるのみならず、前號及び前々號の紙上に武田氏及び河田氏の紀行を掲載しあるを以て、已に盡くしたるに似たれども、種々の方面より探究し、又種々の事實を調査し來れば登山の便否も次第に推移變更するを免れず。予は本年七月中旬に於て八ヶ嶽第三回の登攀を試み、其結果として登路の選擇に就ては從來と多少異なりたる意見を有するが故に、紀行は暫く之を措きて單に登路に關する事項を述べて先づ同志の參考に供すべし。

然れども第一に注意を要するは、八ヶ嶽の諸峰を殘らず踏破して探究せんと欲する人には殆ど登路選擇の必要あらざる事是なり。言ふまでもなく八ヶ嶽は大小十箇内外の峰巒あるが故に、其總てを探究するには諸方面より登り又諸般の山徑をたどる外なければ、殆ど路の便否を言ふべき遑なく唯其研究の目的に從て唯前後の順序を定むるの必要あるべきのみ。第二には單に八ヶ嶽の登攀に滿足せずして、特に其中の一峰を指定して登攀せんとする人に在ても多くは其目的なる一峰に最近の登路をたどるの外なきは勿論ならん。例へば權現岳に登る人は甲州より登るの外なく、阿彌陀ケ嶽を目的とするは無論信州諏訪郡よりするを可とするの類にて、是等は殆ど茲に述ぶる所の外に屬す。

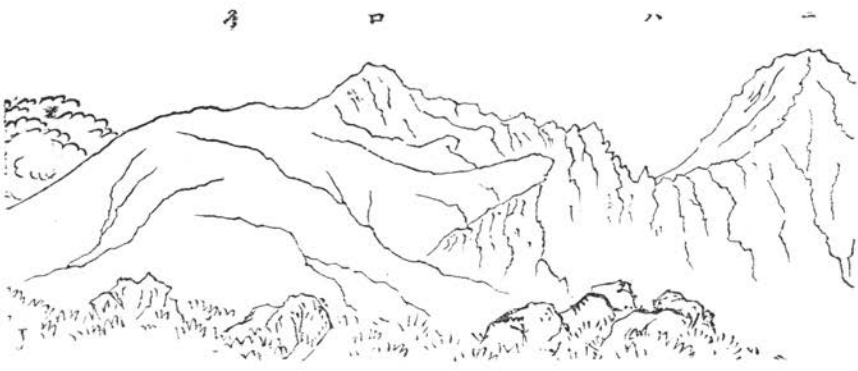
予は今八ヶ嶽の最高峰たる赤嶽に登るを目的とし、若くは之に亞ぐべき高峰を附從の目的として登攀する人を標準として、茲に登路の事を述ぶ可し。而して予は劈頭第一に甲州方面に便利の登路を求め得ざることを明言し、第二に登山の選擇は八ヶ嶽の東面なる南佐久郡よりするか或は其西面なる諏訪郡よりするかの一點に歸着することを豫告す可し。



予の知れる範圍に於て最も早く八ヶ嶽の植物採集を試みて其登路を紹介せられたる矢島米三郎氏は諏訪郡より發足せられ、其登路は阿彌陀ヶ嶽を越えて赤嶽に達するものにして、最後の人家より赤嶽の絶巓迄約五里、往復十里の山路を一日に踏破するに非ざれば、山中露宿の覺悟を要すとの事なりし、是已に最も便利の登山といふ能はず。予は明治三十四年の九月矢澤氏の跡を踏まんと欲して、氏を長野に訪ふたれども、氏の旅行中なりし爲め其教を受くる事能はざりし結果、却て意外なる登路を世に紹介するを得たりし。南佐久郡の馬流（マナガシ）より松原及び稻子を經て本澤（ホンザハ）溫泉に到り、同處を宿泊處と定めて赤嶽及び横嶽等に登るの順路是なり。此登路に依れば、御代田驛に汽車を降りて後、馬流迄約八里の間、人力を通ずるのみならず、乘合馬車あり。馬流より本澤迄は約四里半にして、傾斜甚だしく急ならず。又決して狹からざれば優に駄馬を通すべく、歩して登るを厭ふ人は之に乘じて本澤に到るを得べし。本澤溫泉の地は專門の學者の說に從ふ時は、八ヶ嶽の中腹にあらずして、八ヶ嶽の北に連接せる箕冠（ミカブリ）嶽（或は硫黃山）の中腹なり。海拔約六千七百尺にして、彼信飛境上の高山の間に點在する中房、神河內、白骨等の如きに比して尙高く、實に本邦最高の溫泉と稱するを得べし、此溫泉より赤嶽に到る登路は約二里半にして、健脚の人は四時間にして達し、三時間にして還るを得べく、普通の人にても六時乃至七時間を費さば容易に頂點に到るべく而して行くゝゝ植物採集或は寫眞撮影等の餘裕ある可し。

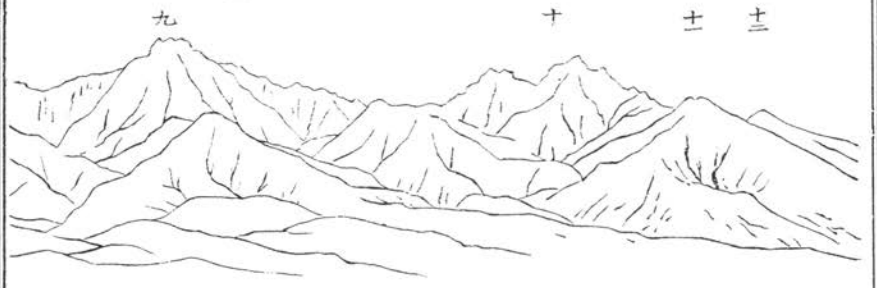
斯の如く本澤に至る交通の便利と、本澤より赤嶽に登るの容易なるとは、爾來幾多の登山者をして此登路を選擇せしめたりと雖も、予は今年に至りて、二箇の事實を發見せり。今逐次左に其次第を記述せんに第一の事實は、從來の如く本澤溫泉を根據地として赤嶽に登るとするも、今日迄多くの人の爲せる如く南佐久郡馬流より本澤に到るは、寧ろ諏訪郡方面より夏澤峠を越えて本澤溫泉に出るの勝れるに如かずと斷定し得べき事是なり。

夏澤峠を越えてと云へば山越しの惡路の如く思はるれども、高山に登る勇氣ある人の惡路と爲すべき道路に非ず。此夏澤峠は南佐久郡と諏訪郡との連絡の爲めに明治十一二年頃開鑿せられたる里道にして、其主た



ニ　赤嶽
ハ　横嶽二十三夜
ロ　横嶽最高點
イ　横嶽

諏訪郡泉野村より東方に八ヶ嶽及び「ニィシ」岳を望む



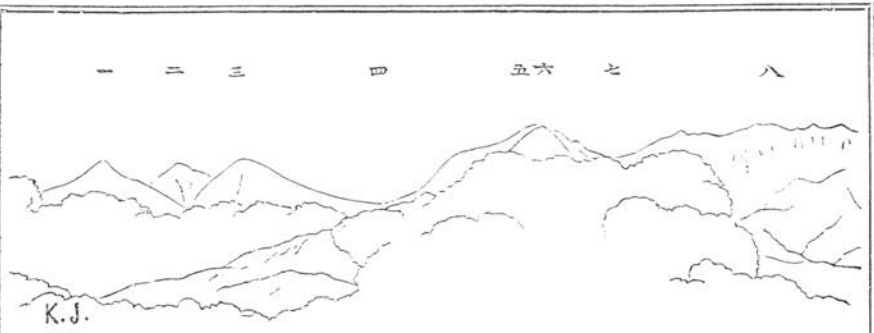
十二　編笠岳
十一　西岳
十　權現岳
九　阿彌陀岳

る目的は諏訪郡の米を南佐久郡に輸出する爲なるが故に、今日と雖も駄馬は容易に通行する程度の山路にして、毫も惡路にあらず、先づ此注意を爲して後、予が南佐久郡を捨てゝ此新路を主張する點を指摘せん。

一　南佐久郡より登るには御代田驛にて鐵道と緣を切り、本澤温泉迄約十二里の間隔あり而して御代田馬流間には、人車馬車自由なれども、尚且御代田より本澤迄一日にして到着せんとは至難なり。若し諏訪郡方面よりする時は、フヂ中央東線の富士ミ見或は茅野等の驛にて下車し、夏澤越にて本澤温泉まで僅かに六里乃至七里許に過ぎざれば、此間を一日にして達せん事は容易なり。唯馬車人車は殆ど其便なしと稱すべく、駄馬に跨がるの外は、膝栗毛に鞭つの決心を要す。兎に角汽車を降りて後の距離の點に於て右の如き相違あるは、諏訪郡の方を可とするに足る一事項なりとす。故に南佐久郡よりする時は、先づ東京の人なりせば、第一日の上野の一番列車にて發足し、正午前後御代田に下車し、馬車又は人車にて當日の薄暮或は夜に入りて馬流の寒村に宿を求め、第二日早朝同處を出發して、正午或は午後一二時頃に僅に本澤に着すべし。若し諏訪郡よりせん歟、東京の人は第一日の早朝に發足の必要なし、正午頃の飯田町發の汽車にて、其夜富士見又は茅野チノに下車して投宿し、第二日早朝同處を出發せば、如何に遲くとも午後二時乃至三時には本澤温泉に着すべし。此比較に於ては兩路は正に時間に於て半日の損得ありといふを得べし。予は本年七月中他の事情よりして已むなく諏訪郡より登りしが、初め正確なる里程を知る能はず、諸人に質せば其教ゆる所區々にして益疑を生じ、終に夏澤峠の麓なる泉野村上槻木ツキノキに於て一泊の豫定を以て出發し、上諏訪町より上りの一番列車にて次驛の茅野迄逆行し、同處より擔夫を賃して先づ上槻木に向ひしに、道程存外近く九時頃到着したるにより、一泊の必要もなく、即日夏澤を越えて温泉に着したり。部人にして此道を採らん歟、第二日の早朝一驛を逆行する積にて、第一日は茅野を通過し上諏訪の町に投宿することは一擧兩得ならんかとも思はる、名勝の地にて特に無臭透明の温泉ある地なればなり。

二　山に登るに先つて、完全に山容を觀、且つ山巓を仰ぐことを得るは、單に趣味ありといふのみに止まらずして、種々の研究にも最も便宜なることは勿論なり。然るに南佐久郡より本澤に掛りての登山路は、僅かに横嶽の中腹以下の一部を、或る地點より瞥見し得るに止り、先づ概言すれば本澤に到るまも八ヶ嶽を觀る能はずといふも不可なし。兎に角八ヶ嶽の一部分なりと信じ易きは前にも言へる箕冠山にて、專門の學者は八ヶ嶽の隣山なりと訊けり。此登路に依りて眞に八ヶ嶽を望見し得るは本澤より夏澤峠に登り、左に折れて箕冠山に登り、其頂上に達したる時にして、東京より此路を登り來る人は第三日に初めて八ヶ嶽を望むべく、

雜錄 ○八ヶ嶽の登路



一、二 ニイシ岳
三 夏澤峠
四 ミカブリ岳
五 峰ノ松目
六 大ダルミ
七 横岳
八

しかも、九千尺の高峰の上に立て八ヶ嶽の中腹以上を觀るのみなりとす。

諏訪部よりする時は、富士見より發足するも、茅野より出發するも、共に西南面の裾野より八ヶ嶽を双眸の裡に收むるを得べし、若し東京よりする人なれば、富士見に遙せざる以前、甲州なる小淵澤附近に於て已に車中より八ヶ嶽の南面を十分に觀望し得べし。南面より望み、西南面より觀、更に進で富士見又は茅野より泉野村に到れば、八ヶ嶽は正東に當て一帶に隧壁を連ねたる如く、裾野より初まりて編笠嶽、西嶽、權現嶽、阿彌陀ヶ嶽、横嶽を初めとして峰の松目、御柱山等に至るまで一目に仰がるゝのみならず。此八ヶ嶽の火山彙に屬する他の諸火山も亦之より北に連なりて、箕祝山、ニイシ嶽、ツメタ山、茶臼山、横嶽及立科山も亦悉く觀望するを得べし。此の如く、種々の方面より觀、又同火山塊の諸火山をも合せて同時に望みつゝ、次第に登攀するは、最も趣味あり最も利益あること勿論なれば、此點に於ても南佐久郡よりするに優れりと言ふを憚からず。

予が本年の登山によりて發見したる第二の事實は、諏訪郡よりの登路は必ずしも夏澤峠と本澤温泉とを經るを要せずして、阿彌陀ヶ嶽、中ノ嶽、横嶽及び赤嶽の間なる溪谷にある小屋に宿泊して諸峰に登躋するを得べき事是なり。

本澤は兎に角温泉宿あり。如何に不便なりとも衣食住共に其設備ありて旅人の宿泊を營業の目的と爲せば、此處に根據を定めての登山は其便利なること言ふまでもなし。然れども斯の如き贅澤を不必要とし、氷鹽以て飢を凌ぎ、番人なき深山の小屋に枯枝を焚き、登山の深味を恣まゝにせんとする人には、此小屋に根據を定め或は然らずとも、此小屋に一泊するも亦興ある事なる可し。此小屋は一兩年前始めて構造したるものゝ由にて、前に述べたる泉野村の槻木（ツキノキ）或は中道（ナカミチ）小屋場（コヤバ）など稱する部落より人家を離れて此處に至る道あり。里數は三里内外なる可しと聞きたるのみにして、予は未だ踏査したる事あらず。

此小屋の位置は、前にも言へる諸峰の中間の低地とのみにて、予は其以上を詳説する能はず。本年赤嶽に到るの途、赤嶽と横嶽の間なる最低地の二十六夜岩より南の方數町、漸く赤嶽に向て足指仰がんとする邊、黒岩大天狗及び帝釋天等の文字を刻みたる石ある處に、中道よりの登路を認め得たり、且此邊より遙かに針葉樹林中の小屋を望む。思ふに小屋より赤嶽の最高點迄、一里内外なる可し、阿彌陀ヶ嶽、横嶽に到るも亦格別の差異あらざる可し。

諏訪郡の登路を紹介すると同時に、予は南佐久郡の登路と比較して一二の事實を補ひ以て此編を結ぶ可し。

一 馬流には兎に角旅店二戸あれども、夏澤峠の麓なる槻木には此營業者なし。止む無くんば、温泉と稱する一戸の飲食店に投宿するの一事

あるのみ。

二　馬流よりは本澤迄唯登る一方なり諏訪郡よりすれば夏澤峠を越て十五町の降りあり。即ち一見して十五町の上下無用の感を爲せども、其割合に槻木よりの登り遠からず。

三　馬流よりの登路には溪流に沿ふ所なし。槻木よりすれば多く夏澤の溪流に沿ふて遡る。

四　佐久郡の方面は針葉樹林鬱蒼として喬木枝を交ゆれども、諏訪郡方面は風の爲にや、針葉樹皆小にして痩たるを覺ゆ。

五　南佐久の方面には、イブキジヤコウサウ、キミカゲサウ最も多く、諏訪郡方面には、テガタチドリ、シラタマノキ、エゾアリドウシ甚だ夥し。(城)

八ヶ嶽小荒間口に就て

甲州北巨摩郡小泉村小荒間は八ヶ嶽南麓なる裾野中にありて海拔千〇七十一メートルの高距に位し、小淵澤停車場を去ること凡そ一里にあり、甲州方面より登山するには距離最も短き利ありと聞き、余は此地より登山せんと欲し、八月十五日、同處に至りしに、思ひしよりも寒村なる上、唯一の旅店坂本某方（普通農家にして素より旅店らしき體裁だもなし）にては養蠶多忙の爲め謝絶せられ、劈頭先づ迷惑せり、止むを得ずんば、谷戸まで引き返さんかと思ひしが、漸く清水保明と云ふ獵夫の家に請ひて一宿することを得、且つ同人に案内を依頼したり、素人家の事なる故、不便は少なからざりしが、朴直なる待遇を受けたるは嬉しかりき、此地は八ヶ嶽に近けれども山中の樣子を知るもの少く案内者を得るに苦むことあるを忘る可らず。

登山の途に就くや、先づ村端より北を指して傾斜緩徐なる裾野を登ること凡そ一時間にして路傍に觀音の石像ある處に至り、更に三十分にしてフルソマ川（古柚川？）に出づ、武田氏が甲州八ヶ嶽の紀行中に記されたるサヾラ尾根の西なる溪は之れなるべし（前號、第五十五頁）、川と云へど平時は水流なく河床には岩石の磊々たるを見るのみ、前面には秀麗なる截頭圓錐形を成して海拔二千五百二十八メートルに聳立せる編笠嶽の高峰、目睫の間に迫り來り、山巓の三角標歷々指示すべし、是より路はフルソマ川に沿ひ溪間を登る、左は編笠嶽の裾にして、右は所謂サヾクラ尾根なり、左右山にて遮られたれば豁大なる眺望を缺けども、後方絶へず甲州駒ヶ嶽の全容を仰ぎ得べく、路傍は多數の植物に富むを以て採集を行ふに可なり、川に出てより約一時間にして馬止めに至り、更らに一時間にして屏風岩に達す、右方は矗立せる斷崖にして、壯とするに足らざるも、其側面にはムシトリスミレ盛に着生せり、此邊、河中に少量の水あり、飲用に供すべく、又た突

出せる岩石多く野宿するに適す、余は此日早朝小荒間を發し、赤嶽を極めたる後、此附近に下りて一泊せり。

屏風岩邊より道路は甚だ草深と成り困難なる故、河床に下り岩より岩に飛び移りて前進し、終に川に離れて左方の崖上に登る、此場所は稍や紛らはしく、案内者無くば見誤る處あり、村より此の處までは概して緩斜にして困難の個所なし、又た此以上全く水を得可らず。

是より傾斜俄に急となり、針葉樹林中なる、熔岩流の固りし跡と覺しき處を驀直に登攀す、此間凡そ一時間なり、已にして森林を離れ岩壞れの急斜面を攀ぢ、偃松を頼りに山巓なる一凸所に達すれば路は谷戸より來るものと合す、中の三ッ頭は此附近なるべし、是に於て始めて壯大なる展望に接す編笠嶽は遙かに脚下に來り其右側を超て木曾の御嶽を望み、權現嶽は近く我が頭上に聳立す、眺中、本山の盟主なる赤嶽は巍々たる赭膚を露出して、兀突天に攅し、其光景最も豪壯なりとす、小荒間より此處まで凡そ五時間餘權現嶽まで總計六時間とせば充分なり。

以上小荒間口に就き余の經驗せる處を列記すれば（一）同村は頂上迄里程近き利あるも旅舍及案内者を得るに困却す（二）權現岳頂下一里許の處まで傾斜大ならず、途中草深の處あれどもフルソマ川の河床を歩めば大部分之れを避け得べし（三）道路は溪間を登るを以て眺望の大を缺く、然れども植物には豐富なる故採集するに可なり（四）途中飲水を得べく、野宿に適する場所多し（五）編笠嶽を經て登山するに便なり（六）小淵澤停車場に近し。

近來小淵澤停車場附近は漸次繁盛に赴き、旅店も數軒あり、故に適當なる案内者を得ば必ずしも不便なる小荒間まで至るを要せず、同地を早發し、結局前記と同一路に依り登山するを可なりと思考す。

權現岳より赤岳を望むに其巨離は甚だ近く一擧して至り得べきが如きも、一度急峻なる火口壁に沿ふて甚だ降り（愚考にては權現岳頂上より、少くも直立三百メートル位は下れるならんと思ふ）更に赤岳の頂上目がけて攀ぢ登るものにして、此間は殊に嶮峻を極め、絶巓の三角標頭上にありて我を招く如くなるも、足は中々果敢取らず、余は權現岳より二時間を費せり、權現岳に戻るには先に降れる處を反對に登り之又時間を要すること前に大差なし、即ち權現岳より赤岳に往復するは前者を起點として新に八百メートル許（海拔）の山

雜錄　○八ヶ嶽小荒間口に就て

に上下すると略ぼ同一の勞力に當る、余は兩岳間を左迄と思はざりし故、フルソマ川にて水を飲用せる後、飲水を携へず、且つ食料も充分持參せざりしが、赤岳に登り河畔の野營地に下りし迄、略ぼ八時間に亘る烈しき勞動の間一滴の水も口にすること能はず、饑渴交も至りて頗る困憊せり、是れ主として權現、赤岳間を侮りし失敗にして後遊人士の爲め婆心までに此處に附記す。

（辻本）

大江山登山記

佐武正一

暑中休暇歸省の途次、但馬、丹後の山川を踏破し、天橋の佳景を賞して文珠に宿せし余は、之れより丹波の西北境に聳ゆる大江山を究めんと欲す。

目的は昆蟲採集にあり、敢て酒呑童子の舊蹟を探るに非ず、只斯山附近の最高峰なるが故に是れを撰びしのみ。

六月三十日　文珠より三十町舟行して懸の水上てふ宮津に至りて福知山街道を取る、上宮津村を經て一里半普甲峠（一名千歳峠）に達す、幾曲折山峽を縫ひて峠の頂に近き所、重疊せる山の間より後遙に與謝の海を望む、昔部上りせしもの故郷の見納めせし所此所なりとか、程なく鬼の茶屋と云ふなる、其昔源賴光、酒呑童子討伐の際、悲いせし所と言ひ傳へける所、今猶は鬼退治の畵ける襖を珍藏せりと云ふ家に着く。

此邊山も次第に深く、動植物も山地的のもの見ゆ、彼の鬼の嶽窟（イハヤ）は之れより五十町の廻り山腹荊棘の間にありと。

穴口小に漸く人の這ひ入るに足り、一二間にして三四疊敷の廣き所あり、岩清水滴下し循行けば七八寸の小流あり、牛の背の如き岩橋あり、之れを越ゆれば又穴あれど息苦しくて之より進みしものなきが如し、行程の部合により訪ふを見合せしが之れに依るに到底人の住むべき所とも見へず、只彼酒顚童子（平將門の餘類ならん）が掠奪せし財寶を貯へし所たるに止るべきが。

峠を下りきる所、鳥居あり鬼嶽社と額す、鳥居を潛り一軒家に至りて行手を尋ね、小石混らの路を辿りて登るに、左は大江山右は名も知らぬ山なり、其谷間の稍廣き所には積み重ねしが如く夥畑を作れり、右手に小溪あり時々其畔りに出づ、之れ彼の官女が血に染みし衣服を洗ひし二瀨川とか、其岩角滴赤きハヤカワトンボの群をなすさへ昔偲ぶ種にこそ、十數丁にして數軒人家の集へる所に出で道絶へければ、間ひて左の狹谷を登る、初夏の候參詣者多しと聞くに人の影だに見へず、人跡絶へて道もせに雜草茂り谷の上部（フタヘ）には樹林鬱蔥たり、此所と言ひ其他普甲嶺搖津の六甲、摩耶、再度山、一として余が登攀せし關山の山の登り路、溪谷峽間に通ぜざるなし、余嘗て關東の山川を諸所跋渉せしが、峰傳ひに登降せし事、一再にして止まらざりしを覺ゆ、若し幾分か關の東西登山路に此差ありとせば、是れ兩地方人士の性情を表はすものにて、面白き現象なりと云ふべし。

峠に達すれば眼界左方に開けし廣谷あり、左方山腹をめぐりて行くに、シロシジミ群飛せり、此れを得んと勉むれど、彼等の巧滑絶壁を高く飛びて捕へんすべもなし、辛ふじて數疋を得るに暇ぎりて稻荷社に着きしは、早や日も暮れなんとする頃なり。（鳥居より一里半）

大江山は一名千丈ケ嶽と稱し、此所に鬼嶽稻荷を祀る茶屋に入るに食物とては、干物のちらし壽子のみ、之れに腹を充して行く、已に時遲く、天の岩戸、池が成（イケナル）等の古跡を訪ふに暇なく、御守を得て下山の途につく、數丁にして小溪に出で、之れに沿ひてひた下りに下る、道は登山口と同じく山の溪間なり、二里許にして、內宮村に着す時に七時、此所には有名なる神社あり、爲めに人家稠密又大江山好登山口なり、宮津並びに福知山より四里、坂神より來るものは坂鶴線にて福知山に下車、俥して當地に到るべし、余も即ち之れを遂に福知山に出で汽車にて神戸に歸る。

高山植物研究の材料

『山岳』發刊と共に高山植物に趣味を有せらるゝ人より高山植物に就きて參考となるべき書籍雜誌等無きやと問ひ合はさるゝ向きあり本會とは同胞の關係ある日本博物學同志會が年六回發行せる『博物之友』には高山植物及び山嶽に關係せる記事論說頗る多くこれらの人人のため有益なる材料を供給することならむと信ず左に參考のためその目次を掲示す內に△印あるものは直接植物に關係なきものなり（日本博物學同志會は事務所を東京市下谷區練塀町十番地市河三喜氏方に置く規則は本誌第一號に載せたり。U、K、生記）

△山岳地の名稱に就きて　第三十三號
飯豐山の植物　第三十一號
御嶽山採集紀行　第二十一號
鐘乳洞採集隊記事（御嶽山大嶽山登山記）第十四號
武州御岳山に於けるイハナンテンとヒル井エフボタンとの所生地の位置に就て　第二十六、三十二號
春の高尾　第二十一號
秋の高尾山　第二十二號
四月上旬の高尾山　第二十五號
高尾山採集遠足の記　第二十七號
秩父植物採集の記　第二十一號
清澄道中案內記　第十九號
△赤城山採集記　第二十一號
△淺間產蝶類の一部　第二十五、二十七號
藏王山植物採集記　第二十八號
甲州金峰山　第二十五、二十六、二十七、二十八、二十九號
戶隱山及び妙高山植物採集記　第三十號
尾瀨採集の植物を記す　第三十四號
日光町より檜枝岐を經て尾瀨沼に至るの記　第二十四、二十五、二十六、三十、三十一號
八ケ嶽の高山帶植物に就て　第二十一、二十二、二十三號
八ケ嶽採集記　第三十二號
八ケ岳甲州方面の植物に就いて　第三十四號
△大江山採集記　第一號
伊豆國の大島（三原山の記事あり）　第三、四號
△英彥山紀行　第三十四號
英彥山昆蟲雜記　第三、四號
富士採集隊記事　第三十三號
富士山を越ゆるの記　第五號
金峰山植物採集（九州）　第十八號
關の落葉（箱根山植物採集記）　第五號
秋期箱根の昆蟲　第三十四號
箱根の植物採集　第六號
那須岳紀行　第七、八、九號
五葉山　第九、十二號
△火山に就て　第八、九號
日光山植物採集記事　第十一、第十二、十三號
早春の日光山　第十二號
修學旅行の一節（日光方面）　第十七號
暑中休暇（日光女峰、太郎登山記）　第二十五、二十六、第二十九號
日光山のラン科植物に就て　第三十三號
△日光のミヤマハンメウ　第十四、十九號
△伊香保產蝶類　第十號
△秋の榛名山　第三十三號
△筑波山の地質



雜報

富士山登山の新道

本年の夏は、登山旅行者の數、各地に次第に加はり來りたる如くなるが、殊に富士山の繁昌は、未曾有にして、山中各道幾處の石室は、登山者を以て塡咽するばかりに充溢し、中には普通の登山にては、人の視聽を惹くに足らずとおもひたるためにや、騎馬にて登山したるもあり、九歲の少女とやらむ、各新聞に肖像入りの提燈持ちを賴みて、前景氣すばらしく登山したるもあり、女子の登山などは、當然（あたりまへ）のやうになりて、人も奇らしからず、幼童幼女の登山は前記「九歲」女の外にも隨分と目擊せられたり、二三丁の外出にすら、馬車に召すものと心得たる大臣（おとゞ）の中にても、牧野文相と聞えたるは、八月下旬を以て、絕頂の氣象測候所を見舞はれたるなど、獨逸聯邦あたりには珍らしからねど日本にては大臣職務上の一萬尺登山は、神武開闢以來の事として、永く年代記に傳はりさふらふべし。

閑話休題、こゝに富士登山新道といふもの、出で來りて、盛に登山客の吸收をはじめたり、この觸れ込みに曰く、從來富士登山表口道路は、大宮町より村山村を經て、登りしものなるが、此方の道筋は、峻阪嶮路多くて、困難一方ならざるより、東海道の汽車開通以來は、御殿場口より登る者、次第に多きを加へたるが、此道筋さへ、足弱者にとりて、中々に困難なれば、土地の有志者は、他に一の良好なる道筋を發見し、五月初旬より、工事に着手し、略ぼ竣工したれば、その道筋數個所へ、休泊室、建築の設計をなしたり、此數道路は、大宮より正北なる、山宮村に出で、草野木立を經て、四合目の石室に達するものにして、此間の里程四里十七丁五十間、舊道に比すれば、幾んど二里餘を短縮し、且つ舊道の如く、峻阪嶮路なく、爪先登りなれば、三合目邊までは、馬匹の往來自由なり、今新舊道路の比較を示せば、

舊道　大宮町より村山迄一里半、村山より八幡堂馬返まで三里、八幡堂より一合目室まで二十三丁。

新道　大宮町より山宮村迄一里、山宮村より篠坂迄十六町、篠坂よりカケスバタ迄十七丁、カケスバタより茗荷ヶ岳まで一里半、茗荷ヶ岳より四合目まで一里二丁五十間。

なりといふに在り。こゝに注意すべきは、新道は舊來の大宮登山口に比して、三里餘近しといふのみにして、大宮登山口は、人も知る如く、富士登山口中、最長距離且つ困難の道なれば、これより三里近しといふことが、必ずしも他の諸登山口に比して、短距離なり安樂道なりと言ふを得ず、然るに、關西地方より來る者は、道順なればともかくも、東京方面の人々までが、吉田、御殿場、須走の如き便利なる登山口を捨て、遙かに迂して、鈴川停車場に下り、この所謂新道を取るもの多かりしは、一は新奇を好む人情にも基づくべけれど、大半は地理に昧きため、只だ近い路、樂な路をと、心がけて、この道に引つかゝりたるに似たるは、この新道に、女子登山者の、最も多かりしにても知るべし、然れども、この新道は、成るほど大宮口に比してこそ、近距離なれ、御殿場、須走、吉田に比べては、遙かに登山の道程長く、且つこゝに峻阪嶮路なしと言へば、前記の三口にも、亦是れ無しと言ふを得べく、こゝに特色として擧ぐべきは、二合目の室の清潔にして、廣濶に、室を別にし、湯殿を設けあること是れのみ、新開路なるを以て、雨少しく降れば、泥濘脛を沒し、あたら女子のたしなみ、夏も涼しき水色の脚絆がどす玄くなりて、量目（メカタ）二三貫目の增加に、脚氣病みたる如き足のひきずり、おそろしく、木曾殿が粟津の最期もおもはれて、笑止なり。且つ長距離なるを以て、大宮を朝發するとするも、足弱ならば二合目、もしくは四合目に一泊し、翌日絶頂に上るのが關の山なるべし、他の三道の如き、はじめから二合目か四合目に泊まるつもりにて、この新道を歩く程度と、同一歩調と、勞力とを費やせば、六七合目に達し得ること易し、要するに新道は「大宮口に比して」を除く外、いかなる登山道に比べても、決して短からず、安易ならず、余は一段足弱人士に向つて、この點を、留意せむことを勸告するものなり。（K、K）

富士山下の本栖湖及白糸瀧乾涸せんとす

英人ハーバート、ジー、ポンテング氏は寫眞術に巧みにして兩三年來日本に來りて各勝地を寫し取り歐米に送りて出版の用に供し居れり特に富士山麓なる本栖湖の勝景を愛し此湖邊一帶の地は氏の撮影に入らざる所なしと然るに近來水力電氣の計畫各地に起りて此の本栖湖の水も亦電氣發生に利用さるべしと聞きたる氏は其事の風光を損する大ならんことを憂へて頻りに計畫の中止を希望し或は我當局者に書を送り或は知人を說きて只管景勝保存の事に熱心盡力しつゝありと蓋し湖面一部の水を放流する時は大に湖岸の勝景を損ずるは勿論、湖水より流出する上井出川並に白糸瀧は遂に涸渴して愛すべき山麓の風光は復た見る可らざるに至らん些少の水力を得んが爲め此種の大犧牲を供するは忍ぶ可からざる所なりとは氏の常に人に向て說く所にして日本山水の地多しと雖も本栖湖邊の勝景に若くものなしと言ひ居るよし（七月二十八日「日本」）

新高山一部の大森林伐らる

臺灣新高山の一部阿里山は海拔七千尺にして、氣候は內地と等しく、檜樹鬱蒼し、其質內地產同樣に頗る良好の由なるが、今回藤田組は三百萬圓の豫算を以て、該山に運材鐵道を敷設し、盛に採伐せんと計畫し、此程東京の某工學博士實地調查の爲め渡臺せりといふ、大阪電報を六月の新聞紙上にて見たりしが、右は愈よ實行せられ、目下濫伐の最中なりといふ『人間斧斤日瘡痍』噫。

阿蘇の新噴火口

六月七日午後二時頃阿蘇山麓にては俄然凄じき鳴動を發し續て山巓に白煙渦卷き起り後黑煙と變じ常に日光を遮り附近は地震絕へず灰燼及び土砂を飛ばし往々尺餘の大石を數丈の高きに噴出し凄絕なる有樣は平常火口の荒れとも思はれず曩に投身者ありし爲め山神の怒に觸れしにはあらずや抔評し居りしが稍〻噴烟の靜まるに連れ火口附近を觀測し見れば舊火口より約三丁を隔てゝ千里濱と稱する沙漠樣の箇所に直徑九尺餘の楕圓形の新噴火口を噴出し居るを發見し今尙盛に煙焰を噴出し時々轟然たる鳴動を聞くと。

五百城文哉氏の逝去

高山植物を描きて、獨特の手腕を示せる、五百城文哉氏、六月七日を以て逝く、同月二十日の「報知新聞」は「日光山の奇人」と題して、同氏に就き左の如く報道せり。

古き洋畫家の高山植物採集家として日光山の一奇人として世に多少名を知られたる五百城文哉氏は去る七日腦神經にて日光山中萩垣面の自宅にて死去す年四十四氏は水戸藩士にして夙に洋畫を學びしが二十六歳の時日光の山色を愛して此に居を占め爾來山中を出でず專ら畫の研究に盡せしが後高山植物採集の趣味を感じ日光山は云ふまでもなく海内のあらゆる高山峻嶺を跋渉して寫生と植物採集とを唯一の娯樂として他意なかりしが多年の苦心は高山の寫生帖百數十冊、高山植物八百鉢に上るに至り畫名よりも植物採集の奇癖家として名を知らるゝ程なりき其臨終の際にも左手に坐布團の卷きたるを抱き右手に懸崖を攀ぢつゝ頻りに植物を採收するが如き手つきをなしつゝ息を引取りしと以て其趣味のいかに深かりしかを察すべし。

雪先づ白し高山の一角

（平年より早し）

九月二十七日午前五時三十分頃、富士山の東部に最も僅少なる降雪ありしが、これ本年の初雪にて、平年より二日、前年より五日早く、十月六日には、二合目までに及びし由、北海道後志山にも、二十七日の朝初雪あり、十月一日、青森八甲田山にも亦雪あり、同四日午後、淺間山連山、一帶の雪にて、昨年より十日早く、吾妻山にも同日の朝初雪あり、平年より早きこと三日、信飛境上の高山も、この日雪多かりし、岩手山は五日の夕にて、昨年より六日早し、同六日は、根室羅臼山に、七日は甲州白峰に初雪あり、殊に七日の朝は、日光中禪寺附近の諸山、一帶に雪白を見ると、又秋田測候所の報ずる所によれば、九月二十九日以來、時々秋田地方に大雨ありて、冷氣日に加はりしが、十月二日に至り、冷氣頓に劇しく、最低温度二度九に下りしが、遂に鳥海山嶺より、山腹に亘りて、雪の皓衣を被ふるに至れり、即ち同山昨年の初雪に比すれば、二日遲きも、平年よりは三日を早めたりと、又『陸奥』紙に據れば、九月末までは蒼翠沐するが如くなりし、岩

木山は、十月一日より白粧をはじめ、三日の降雪には、同山白更に一白を加へ、八甲田山の如きは、その數日前より、はや冬來にけらし白妙の衣をつけて、見るも眼醒むるばかりなりと、その他東北諸高山の雪を、一束に記すれば、福島縣の一切經山及び吾妻山は、十月四日朝降雪あり、例年に比すれば、平均十八日早く、昨年に比すれば三十二日程の早雪なり、山形縣の月山は、十月三日降雪あり、昨年に比して晩きこと三日なるも、平年よりは十一日早く、北海道の駒ヶ嶽は、十月二日朝、峰頭の白晃々たるを仰ぐ、昨年よりは五六日早しと、上州吾妻郡白根山の如きは、十月九日頃より、約二尺の積雪を見るに至り、信州に通ずる澁峠は、通行全く杜絶せりと。

白馬山通信

白馬銅山の主任技師なる、工學士佐藤通氏より、白馬登山の參考の爲めとて、書送せられたる事項を左に揭ぐ。（城）

一、白馬礦山の出張所は白馬尻よりも下流にあり、採掘も同じく下流にて爲す筈なれば、爲めに白馬山の風致も偉觀も更に損する事なし。但山上植物の濫採甚だしく、今にして何とか取締の方法を設けざれば、或は珍品の絶滅するものあるべきこと甚だ懸念に堪へず。

一、東京よりの登山には、是迄多く松本、明科又は池田に一泊し、翌日、北城に一泊し、第三日に登山すること普通の樣なれども、今後は登山の時期次第にては、初日に大町まで歩を進め、第二日には大町より白馬尻まで登り居るを便利とす。

一、白馬鑛山では、左記の家を定宿となせり、孰れも白馬登山の爲めに充分世話を爲すべく自分よりも懇々談じ置たり。

明科驛前　明科館　安藤テウ
大町　對山舘　百瀨金吾
北城村四ッ屋　傘　松澤貞逸

一、明科、大町、北城村四ッ屋間は馬車と人車と共に通ずべし、其賃錢は左の如し。

馬車　明科大町間　四十八錢。
　此間約六里、約四時間を要す。
　大町四ッ屋間　五十錢。
　此間約六里半、約五時間を要す。
人車　明科、大町間　八十錢、約二時間半。

大町四ッ屋間、約一圓、約三時間半。

一、馬車は一頭立六人乘と二頭立十人乘あり、孰れも圓太郎式なる事勿論なり。

一、山案内は細野の丸山常吉、同廣太郎、同嘉吉、同吉重等の内を指定して命せば、自分に差支ありて他人を周旋するとも決して不都合の事を爲さず。細野には丸山を名乘る者多きを以て注意を要す。

一、前記の内常吉の外は皆鑛山の定雇にて人夫頭なり、本年は測量の爲め皆出役したるにより。單に白馬、鑓ヶ岳のみならず、小蓮華、金山澤、奥乘鞍大池邊に至る迄、從來曾て人足の印せざる所を悉く跋渉せるを以て案内者として最適當と信ず。

一、鑛山にては目下白馬尻、乘鞍澤、ヲブカ平に小屋を建築せり。白馬の頂上は從來のものに修繕を加て之を使用せり。

本年降雪迄には沼池、猿倉の兩所に小屋を建築する計畫なり。

一、各小屋には多少の割烹具を設備したり。山岳會員諸君登山の時は、別に携帶せられずとも之を使用せられんことを望む。

一、白馬尻迄の道路は本年已に多少の改修を加へたれども尚ほ本年中には馬道を開く計畫を爲しつゝあり。

本年の登山凍死者

昨年乘鞍岳に、小牧氏一行の遭難ありて以來、登山者も警戒を加ふるところありしためか、本年は、七月中富士山須走口七合目の室にて、三人の凍死者ありとかいふ、訛傳を、まことしやかに新聞に書き立て、靜岡縣廳は、吏員を實地驗分に出張さする始末なりしが、全くの根無し事と知れたる外、先づ至つて無事なりしが、十月七日の『東京朝日』に、六日長野發電として『信州上伊那郡、赤穗村北澤廣吉なるもの、駒ヶ嶽(木曾駒ならん)へ植物採集に登りて凍死す』とあり、之を本年の最初にして、又最終なる不幸の犧牲となす。

赤石登山會

富士や、御嶽の登山會は珍らしからねど、赤石山のは初耳なり、荻野氏の通信によれば、本年八月二十日頃とか、赤石山麓大河原の青年等、赤嶽會なるものを設け、一人二圓づゝの會費を徴し、三十八人の大隊を

組みて、大擧登山を試みたりといふ、吾人は各地に、かゝる企畫の、續々行はれむことを望む。

書東一則

拜啓『山岳』第一號乘鞍岳採集記（川崎義令氏）中、第九十六頁、第三章に、御庭が池とあるは大丹生池の誤りには御座なく候哉、同氏の聞き誤りと察せられ候が、先日も某校の職員等、乘鞍岳に登り、オニハガィケは是れだゝゝと申せし滑稽談も御座候、一應御調査願ひたく候、又剛錄第三十二頁に稻核とあるは稻該（コキ）の誤りと被存候、（八月十七日飛騨國高山町、紅花生拜）

何曾（獨笑子）

山岳會員とかけて何と說く
峰の嵐と說く
こゝろは山でキをモム

會報

山岳熱漸く高からんとす



自然の氣運といふは、妙なものにて、日本人の登山を愛好するは、今日に始まりたることならねど、こは一部人士の迷信に基づける、禮拜登山を最とし、專門學者、必要上の登山之に次ぐる觀ありしが、近來は漸く一般的ならんとする傾向あり、是れ大に悅ぶべし、吾山岳會の起れるも、此機運に致すところとはいへ、登山趣味皷吹に力ある一機關となれるは、是れも又悅ぶべし、本年六月四日の『中央新聞』は、神東生の署名ある一段半の社說に『山岳の研究』といへるを載せ、十月二

日の『東京朝日新聞』は『高山植物園の必要』なる論說を揭げたる如き、都下最有力の新聞が、山岳に關する社說を寄草する如きは、從來絕へて耳にせざりし所なり『大阪每日』の如きは高山生活と稱し社員二名立山と御嶽に登りて、盛に雲烟の氣を吐けり單行本にては、三好理學博士、牧野富太郎二氏の『日本高山植物圖譜』第一卷(着色圖版三十五記載の植物二百種)本年九月を以て成美堂より發行せられ、會員、前田曙山氏主裁の『園藝の友』は、八月の臨時增刊として『高山植物の研究』なる一卷を發兌し、諸家の有益なる論說記事を收錄せり、この外に、小西氏の『日本の高山植物』といへる單行冊子も出でたり、本誌本號の如き、山岳研究者のためには、幾多前人未收の新材料を供給したりしこと〻信ず。

本會と文學家諸氏

外國にては知らず、日本にては學術の會に、詩人文士の自ら進んで、加入することいふことは、あまり聞かざるやうなり、本會は性質上、純正科學をのみ旨とするが如き、一方に偏したるものにあらざるためにも、因るべきが、詩人文士の入會せらる〻向き、甚だ多し、『帝國文學』記者として、詩人として、劇作家として、才名ある文學士小山內薰(撫子)氏の如き、前『新小說』記者として、小說家として、園藝家として、知られたる前田次郎(曙山)氏の如き、植物文藝に嗜好あり、造詣深き畔柳都太郎(芥舟)氏の如き、詩集『日蓮上人』及び脚本『七つ桔梗』の著を以て新進せる山崎小三(紫紅)氏の如き、年少早く文章家として頭角を露はし。今暫らく養蠶家として、隱れたる瀧澤彥太郎氏(秋曉)の如き、自然の愛好者にして特色ある、幾多紀行文集を公にし、盛んに世に行はる〻田山錄彌(花袋)氏の如き、『太陽』文藝評家として、高山樗牛氏死後の同誌を重からしむる長谷川誠也(天溪)氏の如き、詩集『孔雀船』の著者として注目せらる〻伊良子淸造(淸白)氏の如き、此頃は詩作の筆を絕たれたる如きも、詩人として令名あり、今は法官となれる柳田國男氏の如き、海洋趣味を鼓吹せられ、今現に『海國靑年』の主幹にして、文界の鬼才を以て目せらる〻伊藤銀二(銀月)氏の如き、渾厚玉の如き詩を以て、一派詩人の領袖として推さる〻『塔影』の著者河井幸三郎(醉茗)氏の如き、日出國新聞記者にして、ラボック氏『自然美論』の譯者なり、『しばゐ』の記者なり、勁健の筆を有せる正岡藝陽氏

の如き、『破戒』の一作、文壇を聳動し、信州の自然を活描して餘蘊なき島崎春樹（藤村）氏の如き青年漢學者の泰斗文學士久保得二（天隨）氏の如き（以上會員名簿の順序に從ふ）其他洩れたるも猶多かるべし、文學會にあらずして、かくの如く、多くの詩人文士を網羅したる會の、他にあるを知らず、是れ本會の榮とするところなり。

本會規則第四條

に「毎年五月十一月の兩度に集會を開く」とあるより、往々問ひ合せの向きもあれど、目下創業の際、何かにつけ不手廻り克ちなるより、今しばらく萬事整ふまで右兩度の會は、休會する旨、役員會議にて決したれば、御承知を乞ふ。

會費と會員名簿

本卷にて、第一年を終り候儀に就き、決算の都合も有之候へば、此際滯納の御方は、至急御送附の程願上候、なほ一箇年分御前納の方にて、本號にて會費の切れたるも、多く候間、右御留意願ひ候、又各會員、通信の便を計るため、次號には、會員の宿所氏名總覽を附錄と致す筈に候。

會員の本年登山報

記者の手許に受け取りたる諸報を一束して、左に出だす。

（一）會員靑木信光伊集院兼知の兩氏は、七月二十八日、信州諏訪郡より、本澤温泉にかゝり、八ヶ岳に登られたり。

（二）同安川尙三氏は、七月二十二日信州南佐久郡より前記の途を經て同山に登らる。

（三）同城數馬氏は、七月上旬を以て、信州戸隱山の表山及び裏山を窮められ、同月十七日、更に上諏訪方面より、本澤温泉に赴き、八ヶ岳に登らる。

（四）同矢澤米三郎河野齒藏二氏は七月二十二日同上の途より、同岳に登られ、二十八日白馬岳に登らる。

（五）同小川正直氏は、八月九日、白馬岳に登らる。

（六）同小川平吉氏は、八月上旬、南信探勝隊を組織し、東京諸新聞雜誌記者、文學家、畫家を招待し、木曾御岳に登られたり、右の紀行は雜誌『太陽』その他諸新聞に見ゆ。

（七）同野口幽香子孃は、八月九日陸中國岩手山に登らる。（本號の紀行文參照）

（八）同岡田昇齋氏は、越後方面より大蓮華山に登ら

れたり。

（九）同夏目新次氏は、守門岳に登らる。

（十）同小川操氏は、越後八海山を跋渉せれたり。

（十一）同渡邊六松、同渡邊藤吉、同清水常作の三氏は、木曾御岳百五十回登山建碑のため同山に赴むかれ紀念の茶碗を沿道の休み茶屋の、悉くへ寄附せられたりといふ。

（十二）同佐藤貞太郎氏は、不二山に登り、歸途信州戸隱の高妻山に登られたり。

（十三）同小島久太氏氏、八月一日より十日までの間に於て、信州のツバクラ山、大天井岳、常念ケ岳、蝶ケ岳、穗高山德本峠（トクゴー）及び甲州方面の不二山を登りて、駿州大宮の新道に下らる、但し上記の中穗高岳は、雨のため中途にして引き返へしたりと。（本號雜錄參照）

（十四）同高頭式、同志村寬、同大平幾三氏は、八月うち連れて、大蓮華山、針の木峠、越中立山をきはめ、大平氏はそれより加賀白山に登り、飛驒大白川へと下られ、高頭、志村二氏は、信州有明山、ツバクラ山、大天井、槍ケ岳等に登られ、高頭氏は更に、木曾の御嶽及び駒ケ岳に登れたり。（本號雜錄參照）

（十五）同河田默辻村伊助二氏は木曾駒ケ嶽及び御嶽に登り乘鞍岳を越へられたり。

（十六）同辻本滿丸氏は、八月中甲州小荒間口より八ケ岳に登られ（本號雜錄參照）甲州駒ケ岳をきはめ、同國鳳凰山及び地藏ケ岳に登られたり（本號「日本アルプスの卷」同氏の紀行參照）

（十七）同林並木氏は、槍ケ岳を飛驒蒲田へ裏山越しにし、笠ケ岳、燒岳を上りて、上高地に出で、穗高岳をきはめらる。（本號本欄同氏紀行參照）

（十八）同河邨白水氏も、亦槍ケ岳に攀ぢらる。（本號本欄同氏紀行參照）

（十九）同桑原源一氏は、越佐新聞擧行の苗場登山隊に加入して、苗場山に登らる。（本號本欄同氏紀行參照）

（二十）同荻野音松氏は、東海第一大井川の上流、田代川の水源をきはめられ、赤石山系橫斷の壯擧を遂げられたり。（本號卷頭の同氏紀行參照）

（二十一）同加藤泰秋氏は、本年夏北海道の後方羊蹄山（マッカリヌプリ）及び陸奥國岩木山（津輕富士）に登山せられたり。

（二十二）同牧野富太郎氏は、植物講習會に聘せられ、近江國伊吹山、伯耆國大山（ダイセン）及び豐後國英彥山に登らる。

（二十三）同中島元次郎氏は、報知新聞記者として、南信探勝隊に加はり、木曾御嶽に登らる。

（二十四）同坪谷善四郎氏は、上野國白根山に登られたり。

（二十五）同木下友三郎氏は、羽後國森吉山に登られたり。

本年の白馬山と佐藤工學士の厚意

信州北安曇郡の白馬山に就て本誌第一號以來本欄に雜錄に屢〻記載せしが、昨年に於ける登山者が天候と戰ふて困難せし上に、地元なる細野區民の爲めに人足の供給を杜絶せられて、非常に迷惑を被りたると正反對に、本年は意外の便宜を得て、昨年よりも甚だ多かりし登山者は、孰れも十分の滿足と成功とを以て一萬尺の峯頂を踏破したる由の快報が、續々として達したるは實に無上の慶事なり。然れども其次第を尋ぬれば、第一號に報じたる細野區民間の調停、圓滿の終局を見たる結果のみの爲めにあらずして、白馬銅山の發見せられたる爲めなりし。

昨年十一月頃某獵師が白馬の銅山を發見せりとて、東京の阿部泰輔其他の人々試掘の特許を得、本年の春より工學士佐藤通氏主任技師として細野の事務所に出張し、白馬尻の雪渓附近に出張所を置き、爾來數十名の人夫を使役して工事を督し、白馬尻迄の道路は大に改修を加へ、出張所には事務所、工夫小屋等數棟を建築し、登山者には、宿泊をも許されたれば、是迄の白馬尻露營の如き困難を免かれたる上に、其他の點に於て種々便宜を與へられたりとの事なり。

九月初佐藤工學士は本會事務所に來られ、將來本會員にして白馬に登る人には特に出來得る限りの便宜を與ふべき旨を告げられたり。茲に佐藤氏の厚意を會員諸君に紹介し、併せて諸君と共に深く同氏に謝意を表す。（一記者）

本號所載圖版

第一圖版　赤石山の絶嶺（本誌第一號小島烏水氏『赤石山の記』、及び本號荻野音松氏『駿州田代山奥横斷記』參照）

第二圖版（上）地藏岳より鳳凰山を望む（下）鳳凰山中の御室（辻本滿丸氏作、）本號『甲州鳳凰山及地藏岳』參照）

第三圖版　梓川に臨める燒岳（燒岳は林並木氏の本號紀行『笠ヶ岳燒岳穗高岳紀行』參照）

第四圖版　白馬尻より白馬岳を望む。
（共に第二號志村烏嶺氏の『白馬岳及鑓ヶ岳』第二號及第三號に亘りて連載されたる、河田默、武田久吉二氏の『白馬籠城記』參照）

第五圖版　杓子中腹より白馬岳及乘鞍岳を望む。

第六圖版　八ヶ岳の小天狗（八ヶ岳は第一、二、三號の「本欄」もしくは雜錄に記載多し）

お知らせ

本會の規則書をお求めになることや、入會申込や、會費の御納付は必ず

東京市日本橋區室町三丁目十一番地城數馬方、

山岳會事務所

へ宛て願ひます。

原稿の御寄送及び編輯上に關する通信文は、凡て

横濱西戸部町八百九十八番地　小島　久太

へ宛て願ひます、規則書發送等、事務に關することを、編輯者なる同人へ申し込まるゝ御方もございますが、勿論便宜上、御取次はいたしますが、遲延克ちになつて、雙方の勘からざる不便となりますから、御注意を願ひます。

本會への寄贈書籍

英國「アルパイン、クラブ」より
アルパイン雜誌　三冊

震災豫防調査會より
震災豫防調査會報告
第十七號　第十九號　第三十五號　第三十六號
第三十八號　第四十三號　第四十四號　第四十八號
第五十二號　計九冊

大橋圖書館より
大橋圖書館年報　一冊

會員訃音

帶川豐太郎氏逝去せらる、謹んで弔意を表す。

本號は十月中に發行すべかりしを、編輯主任の者病を得たると、印刷所の都合との爲め、遲延今日に至れり。幹事一同深く會員諸君に謝す。

明治三十九年十一月十日印刷
明治三十九年十一月十三日發行

定價金參拾五錢

新潟縣三島郡深才村大字深澤
發行兼編輯者　高頭仁兵衞

東京市日本橋區兜町二番地
印刷者　金澤求也

東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社

東京市日本橋區室町三丁目十一番地城方
發行所　山岳會事務所

發賣所

東京市神田區表神保町
東京堂

ALPINE PLANTS OF JAPAN.

帝國理科大學理學博士 三好學先生
帝國理科大學 牧野富太郎先生共撰

日本高山植物圖譜

ポツケット用頗美本
第一卷全一册
定價金貳圓參拾錢
小包料金拾錢

本書は五箇年有餘の歲月を費して漸く**第一卷**を公にする事を得たり。而して本書に載する植物は獨り**草本帶**のみならず。尙**灌木帶**の種類及び**喬木帶**の草本及び灌木等其數**貳百種實物寫生天然色**にして其**名稱・產地・特徵**及び**科名**等を和英兩文にて**記載**し加ふるに卷末に和名及び學名**索引表**を附し何人にも實物と對照して其名を知るを得。而して**製本優美高尙**ポツケット用携帶に便ならしめたれば**斯道愛觀者**は勿論**登攀者**は必ず**携帶**すべき**珍書**なり。

發行所

東京日本橋區通三丁目
電話本局二七七七番
振替貯金口座一七一九番

成美堂書店

島崎藤村序　丸山晩霞畫

小島烏水新著

山水無盡藏

（四六版三二〇頁　總クロース製美本　定價金七十錢　郵税八錢）

畫家丸山晩霞氏が太平洋畫會に出品したる二大傑作を三色版にし鮮麗原色を褫ふ外に歐羅巴アルプス及び日本アルプス全景二葉を寫眞版にして挿めり

本篇は日本の瑞西と呼ばれたる信濃飛驒越中越後等に延亘せる中央大山系を著者が跋渉して精細に寫生し來りたる紀行文集也槍ケ岳乘鞍岳の如きは本邦初めて著者を俟ちて世に紹介せられたる名山にして、本書は日本に於ける高山文學（アルパイン、リテレーチユーア）の先驅をなせるものなり左に新聞雜誌の批評を摘載す

新古文林評（自然の愛好者）自然の研究者たる小島烏水氏の近著なり「槍ケ岳」「淺間山」「木曾」「乘鞍岳」等信州の山岳及び「飛驒縱斷記」中飛州の諸川を研究紹介せり各篇共に雄渾壯快の氣紙面に溢ふる「槍ケ岳」の如き峻絶比なきもの眞に著者が快筆を俟つて初めて其光景を寫すに足る從來氏のものせられたる紀行文に比して爽快一層の峻烈（吾文壇斯くの如き）自然文學の快著に接したるは深く悅び且つ賀する所なり

日本新聞評（著者の山水癖あり且つ）山水の自然を畫くに一種の手腕あるは人の知る處殊に其詩趣に富めるは西人の紀行を讀むが如し此編重に信飛の名山を跋渉したる紀行にして槍ケ岳淺間山木曾街道乘鞍岳飛驒跋渉等皆この編中にあり譬喩の清新にして警拔に境に應じて形容と文字を行るの自在なるは驚くべし且つ地方の風俗を寫しても逸するなく人事自然相照映するところ最も精彩を見る

發兌元　東京市京橋區尾張町一丁目一番地　隆文館